

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第15集

観音山古墳群平石Ⅲ群

福岡県筑紫郡那珂川町所在古墳群の調査

2010

福岡県教育委員会

観音山古墳群平石Ⅲ群

福岡県筑紫郡那珂川町所在古墳群の調査



観音山古墳群平石Ⅲ群全景（上空から）

序

福岡県教育委員会では、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（旧日本鉄道建設公団）九州新幹線建設局の委託を受けて、平成13年度から九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査に着手し、同19年度に現場作業を終了したところです。

筑紫郡那珂川町内では九州新幹線本線と工事用道路の建設工事があり、本線を県教育委員会が、工事用道路については県教育委員会と那珂川町教育委員会が地区を分担して発掘調査を実施しました。本書は県教育委員会が実施した発掘調査のうち、観音山古墳群同平石Ⅲ群の報告を行うもので、これをもって那珂川町内の九州新幹線関係埋蔵文化財発掘調査事業は完了することとなります。

本書によって、新幹線建設工事の中で記録保存された埋蔵文化財の存在にわずかでも思いを馳せていただけるならば、また、本書が文化財愛護思想の普及および学術研究・生涯学習への一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から整理・報告書作成に至る間に御協力・御助言いただきました関係諸機関や地元をはじめとする多くの方々に対しまして、記して深甚の謝意を表します。

平成22年3月31日

福岡県教育委員会教育長

森 山 良 一

例 言

- 1 本書は、九州新幹線鹿児島ルート建設に伴って発掘調査を実施した福岡県筑紫郡那珂川町大字松木に所在する観音山古墳群平石Ⅲ群の記録で、九州新幹線関係埋蔵文化財報告の第15集である。
- 2 本遺跡群の発掘調査・整理報告は独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（旧日本鉄道建設公団）九州新幹線建設局の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
- 3 本遺跡は九州新幹線博多一船小屋間の埋蔵文化財調査地点のうち、第4地点にあたる。
- 4 本書に掲載した遺構写真は飛野が撮影し、空中写真は九州航空株式会社及び空中写真企画有限会社へ委託した。遺物写真は文化財保護課整理指導員北岡伸一が撮影したものである。
- 5 本書に掲載した遺構図は飛野・濱田・小川・秦・今井・一瀬の他、林知恵・坂口朝子・中山朱美・野北祐子・宮里好子・吉川孝子・渡辺廣子が作成した。
- 6 使用した方位は磁北を基本とし、それ以外の場合は明記した。
- 7 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館および文化財保護課太宰府事務所において、浜田信也および飛野の指導の下に行った。出土遺物の実測・製図は各担当者他に、木下修（石器）・坂本真一（玉類・鉄製品）・文化財保護課臨時職員 荻幸二（石器）・同海出淳平（縄文土器・石器）・平田春美・棚町陽子・久富美智子・田中典子・坂田順子・橋之口雅子・堀江圭子・若松三枝子・寺岡和子・中川真理子・中川陽子・中村洋子・栗林明美（土器実測）、豊福弥生・原カヨ子・江上佳子（製図）が行い、土山真弓美・安永啓子・山田智子・辻清子・藤美代子が補助した。
- 8 出土遺物・写真・図面はすべて九州歴史資料館および文化財保護課太宰府事務所に保管している。
- 9 本書の執筆は縄文土器を海出、石器等を荻が分担し、その他の執筆・編集を飛野が行った。

目 次

巻頭図版
序
例言
図版目次
表目次
挿図目次

	頁
I. はじめに	1
1. 調査の経緯	1
2. 調査の組織	3
II. 位置と環境	7
III. 発掘調査の記録	13
1. 平石Ⅲ-1号墳	13
2. 平石Ⅲ-2号墳	44
3. 平石Ⅲ-3号墳	49
4. 平石Ⅲ-4号墳	65
5. 平石Ⅲ-5号墳	73
6. 平石Ⅲ-6号墳	80
7. 平石Ⅲ-7号墳	83
8. 平石Ⅲ-8号墳	89
9. 平石Ⅲ-9号墳	91
10. 小石室	99
11. 古代の墳墓	109
12. その他の遺構と遺物	115
1) 石組炉	115
2) 土 坑	115
3) 溝状遺構	116
4) 集石遺構	119
5) 縄文土器	119
6) 石器・石製品	131
7) 弥生土器	140
IV. おわりに	146
1. 平石Ⅲ群の形成	146
2. 観音山古墳群について	147
V. 補 遺	149

図版目次

巻頭図版 観音山古墳群平石Ⅲ群全景（上空から）

- 図版 1 1. 観音山古墳群周辺航空写真
- 図版 2 1. 調査前全景（南上空から） 2. 本線部分古墳群全景（上空から）
- 図版 3 1. 本線部分南半古墳群（上空から） 2. 古代の墳墓群全景（東上空から）
- 図版 4 1. 1号墳全景（南西上空から） 2. 1号墳現況（西から）
3. 1号墳東畦北壁土層（北東から）
- 図版 5 1. 1号墳南畦西壁土層（南西から） 2. 1号墳北畦西壁土層（北西から）
3. 1号墳墳丘除去後主体部（西から）
- 図版 6 1. 1号墳列石東半（東から） 2. 1号墳列石北半（北から）
3. 1号墳列石南半（南東から）
- 図版 7 1. 1号墳墓道堆積状況（北西から） 2. 1号墳墓道周辺土器出土状況（西から）
3. 1号墳閉塞状況と墓道土器出土状況（西から）
- 図版 8 1. 1号墳墓道土器出土状況（南西から） 2. 1号墳入口南土器出土状況（北西から）
3. 1号墳羨道部（西から）
- 図版 9 1. 1号墳主体部奥壁（西から） 2. 1号墳主体部西半（東から）
3. 1号墳南西墳裾土器出土状況（南西から） 4. 1号墳周溝南辺土器出土状況（東から）
- 図版 10 1. 2号墳現況（南から） 2. 2号墳閉塞状況（南から）
3. 2号墳主体部全景（南から）
- 図版 11 1. 2号墳列石（北西から） 2. 2号墳北畦西壁土層（西から）
3. 2号墳東畦南壁土層（南から）
- 図版 12 1. 3号墳現況（西から） 2. 3号墳東畦北壁土層（北東から）
3. 3号墳南 Tr.土層（南西から）
- 図版 13 1. 3号墳閉塞と墓道土器出土状況（西から） 2. 3号墳墓道土器出土状況（南西から）
3. 3号墳前室土器出土状況（西から） 4. 3号墳前室鉄鉗出土状況（東から）
- 図版 14 1. 3号墳主体部（西から） 2. 3号墳主体部後室（西から）
3. 3号墳南西墳裾土器出土状況（南西から）
- 図版 15 1. 4・5号墳現況（南西から） 2. 4号墳西 Tr.土層（西から）
3. 4号墳北 Tr.土層（北から）
- 図版 16 1. 4号墳閉塞状況（南西から） 2. 4号墳墓道西壁（南から）
3. 4号墳主体部（南西から）
- 図版 17 1. 4・5号墳周溝土器出土状況と1号小石室の関係（北から）
2. 4号墳周溝西辺土器出土状況（南から） 3. 4号墳周溝北辺土器出土状況（北西から）
- 図版 18 1. 5号墳現況（南から） 2. 5号墳北 Tr.土層（北西から）
3. 5号墳東 Tr.土層（南東から）
- 図版 19 1. 5号墳墓道礫群検出状況（北から） 2. 同（南から）

- 図版19 3. 5号墳墓道前端付近土器出土状況(南から)
- 図版20 1. 5号墳墓道土器出土状況(南東から) 2. 5号墳閉塞と墓道(南から)
3. 5号墳墓道完掘後(南から)
- 図版21 1. 5号墳主体部(南から) 2. 5号墳周溝北東辺土器出土状況(東から)
3. 5号墳墳丘南東部祭祀土器(北から)
- 図版22 1. 6号墳主体部検出状況(東から) 2. 6号墳完掘後全景(南東から)
3. 6号墳玄室(北から)
- 図版23 1. 7号墳現況(南西から) 2. 7号墳北 Tr.土層(南東から)
3. 7号墳東 Tr.土層(南東から) 4. 7号墳西 Tr.土層(南西から)
- 図版24 1. 7号墳全景(南西から) 2. 7号墳閉塞状況(南西から)
3. 7号墳墓道土器出土状況(南東から)
- 図版25 1. 7号墳主体部全景(南西から) 2. 7号墳主体部全景(南から)
3. 7号墳主体部前半部(北東から)
- 図版26 1. 8号墳現況(南東から) 2. 8号墳西畦南壁土層(南西から)
3. 8号墳閉塞状況(南西から)
- 図版27 1. 8号墳閉塞除去後(南西から) 2. 8号墳主体部完掘後(南西から)
3. 8号墳主体部西壁(南東から)
- 図版28 1. 9号墳検出状況(北西から) 2. 9号墳墓道検出状況(南東から)
3. 9号墳北 Tr.土層(北東から)
- 図版29 1. 9号墳東 Tr.土層(南西から) 2. 9号墳西 Tr.土層(西から)
3. 9号墳墓道検出状況(南から)
- 図版30 1. 9号墳完掘後(南から) 2. 9号墳完掘後(北から)
3. 9号墳閉塞状況(南から)
- 図版31 1. 9号墳閉塞・土器出土状況1(北東から) 2. 9号墳閉塞・土器出土状況2(東から)
3. 9号墳閉塞・土器出土状況3(西から)
- 図版32 1. 9号墳墓道土器出土状況1(南から) 2. 9号墳墓道土器出土状況2(北東から)
3. 9号墳墓道土器出土状況3(北東から)
- 図版33 1. 1号小石室(北から) 2. 1号小石室(南から)
3. 1号小石室閉塞石除去後(南から)
- 図版34 1. 2号小石室検出状況(南西から) 2. 2号小石室完掘後(西から)
3. 3・4号小石室検出状況(南東から)
- 図版35 1. 3・4号小石室完掘後(南東から) 2. 3号小石室検出状況(北東から)
3. 3号小石室完掘後(南東から)
- 図版36 1. 4号小石室検出状況(南西から) 2. 4号小石室完掘後(南東から)
3. 4号小石室完掘後(南西から)
- 図版37 1. 5号小石室閉塞状況(南から) 2. 5号小石室閉塞状況(北から)
3. 5号小石室完掘後(南東から)
- 図版38 1. 1号墳墓全景(西から) 2. 1号墳墓全景(東から)
3. 1号墳墓主体部(南西から)

- 図版39 1. 1号墳墓周溝東辺土器出土状況(南東から) 2. 2号墳墓全景(南西から)
 3. 2号墳墓主体部(南西から)
- 図版40 1. 3号墳墓全景(北から) 2. 3号墳墓検出状況(南から)
 3. 3号墳墓内部の礫検出状況(南から)
- 図版41 1. 3号墳墓内部土器・礫検出状況(南から) 2. 3号墳墓完掘後(北から)
- 図版42 1. 縄文土器包含層発掘後(東から) 2. 1号集石炉検出状況(北から)
 3. 1号集石炉完掘後(北から)
- 図版43 1. 1号土坑土器等出土状況(南西から) 2. 1号土坑土器等出土状況(北西から)
 3. 1号土坑完掘後(南西から)
- 図版44 1. 7号墳北小溝土器出土状況(南東から) 2. 7号墳西小溝土器出土状況(北西から)
 3. 4号墳南谷部Tr.(西から)
- 図版45 1. 調査区南端集石全景(東から) 2. 調査区南端集石東半(西から)
 3. 集石南東部土器出土状況(北西から)
- 図版46 出土遺物1(1号墳出土遺物)
- 図版47 出土遺物2(1号墳出土遺物)
- 図版48 出土遺物3(1号墳出土遺物)
- 図版49 出土遺物4(1号墳出土遺物)
- 図版50 出土遺物5(1・2号墳出土遺物)
- 図版51 出土遺物6(2・3号墳出土遺物)
- 図版52 出土遺物7(3号墳出土遺物)
- 図版53 出土遺物8(3・4号墳出土遺物)
- 図版54 出土遺物9(4・5号墳出土遺物)
- 図版55 出土遺物10(5～7号墳出土遺物)
- 図版56 出土遺物11(9号墳出土遺物)
- 図版57 出土遺物12(9号墳ほか出土遺物・縄文土器)
- 図版58 出土遺物13(縄文土器)
- 図版59 出土遺物14(縄文土器)
- 図版60 出土遺物15(縄文土器・石器)
- 図版61 出土遺物16(石器)

挿図目次

		頁
第1図	九州新幹線路線図 (1/500,000)	2
第2図	那珂川町内九州新幹線関係工事位置図 (1/10,000)	4
第3図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	6
第4図	調査区位置図 (1/1,000)	14
第5図	現況地形測量図 (1/400)	折込
第6図	調査後(盛土除去後)地形測量図 (1/400)	17
第7図	Ⅲ-1号墳墳丘土層実測図 (1/80)	折込
第8図	Ⅲ-1号墳墳丘列石実測図 (1/120)	21
第9図	Ⅲ-1号墳主体部実測図1(平面・縦断面、1/60)	22
第10図	Ⅲ-1号墳主体部実測図2(横断面、1/60)	23
第11図	Ⅲ-1号墳閉塞状況実測図 (1/60)	24
第12図	Ⅲ-1号墳墓道遺物出土状況実測図 (1/30)	25
第13図	Ⅲ-1号墳出土玉類・金属製品等実測図 (1/1、1/2)	26
第14図	Ⅲ-1号墳出土土器実測図1(墓道1、1/3)	28
第15図	Ⅲ-1号墳出土土器実測図2(墓道2、1/3)	29
第16図	Ⅲ-1号墳出土土器実測図3(墓道3、1/3)	30
第17図	Ⅲ-1号墳出土土器実測図4(墓道4、1/3)	31
第18図	Ⅲ-1号墳出土土器実測図5(墓道5、1/3)	32
第19図	Ⅲ-1号墳出土土器実測図6(墓道6、1/3)	34
第20図	Ⅲ-1号墳出土土器実測図7(墓道7、1/3)	35
第21図	Ⅲ-1号墳出土土器実測図8(墳丘SW区1、1/3)	36
第22図	Ⅲ-1号墳出土土器実測図9(墳丘SW区2、1/3)	37
第23図	Ⅲ-1号墳出土土器実測図10(墳丘NE・NW区、1/3)	38
第24図	Ⅲ-1号墳出土土器実測図11(周溝ほか、1/3)	40
第25図	Ⅲ-1号墳出土土器実測図12(甕、1/3)	41
第26図	Ⅲ-1号墳出土土器実測図13(大型甕、1/6)	42
第27図	Ⅲ-2号墳墳丘土層実測図 (1/80)	44
第28図	Ⅲ-2号墳閉塞状況実測図 (1/60)	45
第29図	Ⅲ-2号墳主体部実測図1 (1/60)	45
第30図	Ⅲ-2号墳主体部実測図2 (1/60)	46
第31図	Ⅲ-2号墳墓道遺物出土状況実測図 (1/20)	47
第32図	Ⅲ-2号墳出土金属製品実測図 (1/2)	47
第33図	Ⅲ-2号墳出土土器実測図 (1/3)	48
第34図	Ⅲ-3号墳墳丘土層実測図 (1/80)	49
第35図	Ⅲ-3号墳主体部実測図1 (1/60)	50
第36図	Ⅲ-3号墳閉塞状況実測図 (1/60)	51

第37図	Ⅲ-3号墳前室遺物出土状況実測図(1/20)	51
第38図	Ⅲ-3号墳主体部実測図2(1/60)	52
第39図	Ⅲ-3号墳墓道土器出土状況実測図(1/20)	折込
第40図	Ⅲ-3号墳出土金属製品実測図(1/2)	55
第41図	Ⅲ-3号墳出土土器実測図1(前室、1/3)	55
第42図	Ⅲ-3号墳出土土器実測図2(墓道1、1/3)	56
第43図	Ⅲ-3号墳出土土器実測図3(墓道2、1/3)	58
第44図	Ⅲ-3号墳出土土器実測図4(墳丘、1/3)	59
第45図	Ⅲ-3号墳出土土器実測図5(4号墳周溝1、1/3)	60
第46図	Ⅲ-3号墳出土土器実測図6(4号墳周溝2、1/3)	61
第47図	Ⅲ-3号墳出土土器実測図7(4号墳周溝3、1/3)	62
第48図	Ⅲ-4号墳周溝北辺遺物出土状況実測図(1/20)	64
第49図	Ⅲ-4号墳墳丘土層実測図(1/80)	65
第50図	Ⅲ-4号墳主体部実測図(1/60)	66
第51図	Ⅲ-4号墳閉塞状況実測図(1/60)	67
第52図	Ⅲ-4~9号墳出土玉類・金属製品等実測図(1/1、1/2)	67
第53図	Ⅲ-4号墳周溝西辺遺物出土状況実測図(1/20)	68
第54図	Ⅲ-4号墳出土土器実測図1(1/3)	68
第55図	Ⅲ-4号墳出土土器実測図2(1/3)	69
第56図	Ⅲ-4号墳出土土器実測図3(1/3)	70
第57図	Ⅲ-5号墳主体部実測図(1/60)	72
第58図	Ⅲ-5号墳墳丘土層実測図(1/80)	73
第59図	Ⅲ-5号墳閉塞状況実測図(1/60)	74
第60図	Ⅲ-5号墳墳丘SE区遺物出土状況実測図(1/20)	75
第61図	Ⅲ-5号墳出土土器実測図1(1/3)	76
第62図	Ⅲ-5号墳出土土器実測図2(1/3)	77
第63図	Ⅲ-5号墳出土土器実測図3(1/6)	79
第64図	Ⅲ-6号墳墳丘土層実測図(1/80)	80
第65図	Ⅲ-6号墳主体部実測図(1/60)	81
第66図	Ⅲ-6号墳閉塞状況実測図(1/60)	81
第67図	Ⅲ-6号墳出土土器実測図(1/3)	82
第68図	Ⅲ-7号墳墳丘土層実測図(1/80)	83
第69図	Ⅲ-7号墳主体部実測図(1/60)	84
第70図	Ⅲ-7号墳閉塞状況実測図(1/60)	85
第71図	Ⅲ-7号墳墓道遺物出土状況実測図(1/20)	86
第72図	Ⅲ-7号墳出土土器実測図(1/3)	86
第73図	Ⅲ-8号墳主体部実測図(1/60)	88
第74図	Ⅲ-8号墳墳丘土層実測図(1/80)	89
第75図	Ⅲ-8号墳閉塞状況実測図(1/60)	90

第76図	Ⅲ-9号墳墳丘土層実測図(1/80)	91
第77図	Ⅲ-9号墳主体部実測図(1/60)	92
第78図	Ⅲ-9号墳閉塞状況実測図(1/60)	93
第79図	Ⅲ-9号墳出土土器実測図1(1/3)	94
第80図	Ⅲ-9号墳出土土器実測図2(1/3)	96
第81図	Ⅲ-9号墳出土土器実測図3(1/6)	97
第82図	Ⅲ-1号小石室閉塞状況実測図(1/20)	99
第83図	Ⅲ-1号小石室実測図(1/20)	100
第84図	Ⅲ-2号小石室実測図(1/20)	101
第85図	Ⅲ-3号小石室実測図(1/20)	102
第86図	小石室関連出土土器実測図(1/3)	104
第87図	Ⅲ-4号小石室実測図(1/20)	折込
第88図	Ⅲ-5号小石室実測図(1/40)	107
第89図	1号墳墓実測図(1/40)	108
第90図	1号墳墓主体部実測図(1/40)	109
第91図	墳墓出土土器実測図(1/3)	110
第92図	2号墳墓実測図(1/40)	111
第93図	2号墳墓周溝遺物出土状況実測図(1/20)	112
第94図	3号墳墓実測図(1/40)	113
第95図	3号墳墓主体部実測図(1/40)	114
第96図	石組炉実測図(1/30)	115
第97図	土坑実測図(1/30・1/40)	115
第98図	土坑出土土器実測図(1/3)	116
第99図	Ⅲ-7号墳北小溝土器出土状況(1/20)	116
第100図	Ⅲ-7号墳北・西小溝出土土器実測図(1/3)	117
第101図	集石個別実測図(1/40)	117
第102図	集石中出土土器実測図(1/3)	117
第103図	集石全体実測図(1/60)	118
第104図	縄文土器実測図1(1/3)	120
第105図	縄文土器実測図2(1/3)	122
第106図	縄文土器実測図3(1/3)	123
第107図	縄文土器実測図4(1/3)	124
第108図	縄文土器実測図5(1/3)	126
第109図	縄文土器実測図6(1/3)	127
第110図	縄文土器実測図7(1/3)	128
第111図	縄文土器実測図8(1/3、1/2)	129
第112図	石器等実測図1(1/1)	130
第113図	石器等実測図2(2/3、1/1)	132
第114図	石器等実測図3(1/2)	134

第115図	石器等実測図4(2/3).....	135
第116図	石器等実測図5(2/3、1/2、1/1).....	136
第117図	石器等実測図6(1/2、2/3).....	138
第118図	石器等実測図7(2/3).....	139
第119図	弥生土器実測図(1/3).....	140
第120図	追加報告の遺物実測図(1/1、1/2).....	149

表目次

表1	九州新幹線関係那珂川町内調査対象地点一覧表.....	1
表2-1	観音山古墳群調査古墳一覧表1.....	9
表2-2	観音山古墳群調査古墳一覧表2.....	10
表2-3	観音山古墳群調査古墳一覧表3.....	11
表2-4	観音山古墳群調査古墳一覧表4.....	12
表3-1	観音山古墳群平石Ⅲ群出土縄文土器観察表1.....	141
表3-2	観音山古墳群平石Ⅲ群出土縄文土器観察表2.....	142
表3-3	観音山古墳群平石Ⅲ群出土縄文土器観察表3.....	143
表4-1	観音山古墳群平石Ⅲ群出土石器等観察表1.....	144
表4-2	観音山古墳群平石Ⅲ群出土石器等観察表2.....	145
表4-3	観音山古墳群平石Ⅲ群出土石器組成表.....	145
表4-4	観音山古墳群瀬戸Ⅱ群出土石器等観察表.....	145



建設中の九州新幹線

I. はじめに

1. 調査の経緯

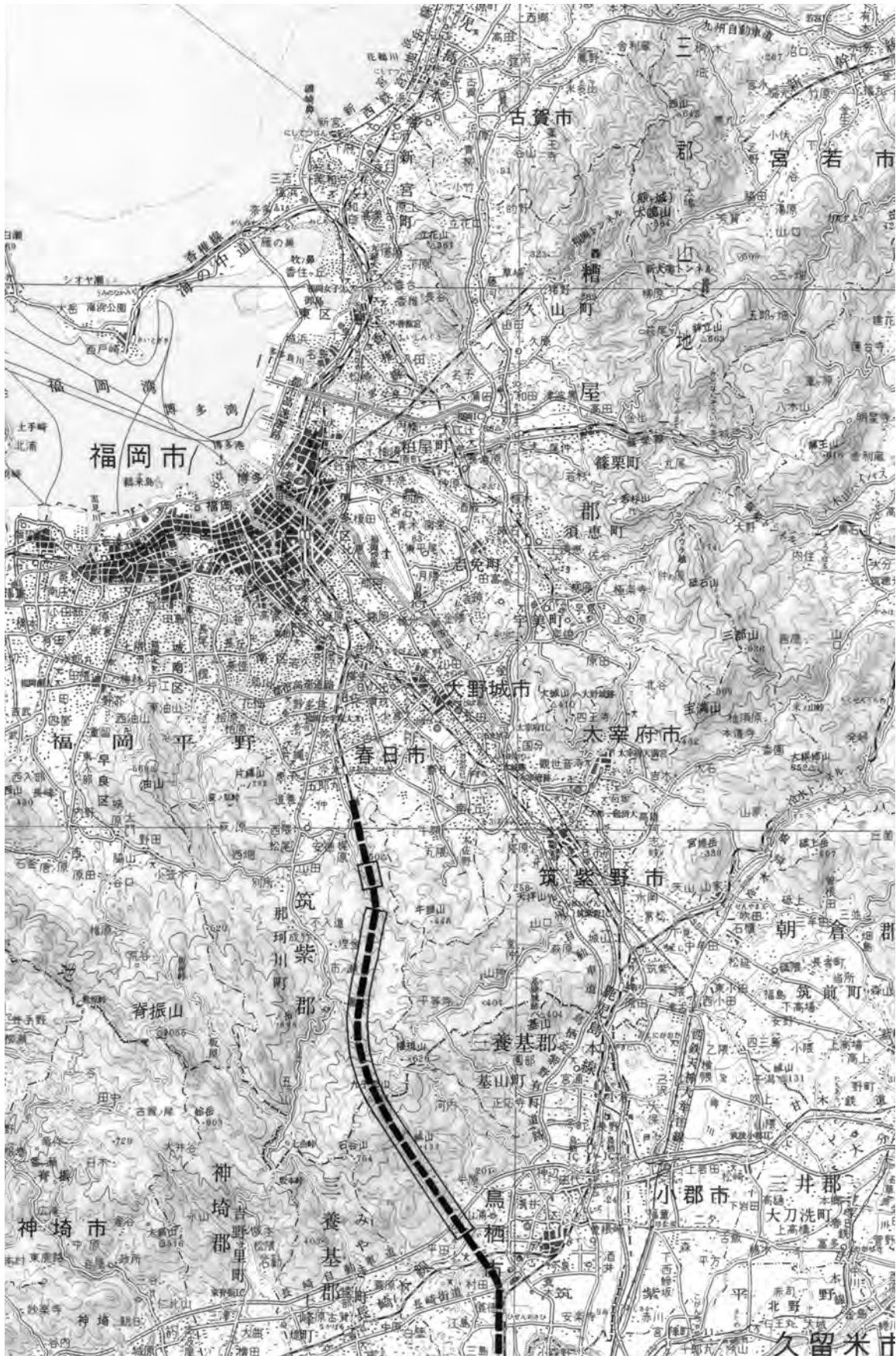
福岡・佐賀・熊本・鹿児島各県の主要都市を結ぶ全長256.82kmの九州新幹線鹿児島ルートは、昭和48年11月に整備計画が決定され、平成3年9月には熊本県八代－鹿児島県西鹿児島（現鹿児島中央）間が着工、16年3月に同区間が開業した。続いて平成10年3月に福岡県船小屋（筑後市）－新八代間が、13年6月には博多－船小屋間も着工され、22年度末の全線開業を目指して急ピッチで工事が進められている。福岡県内の埋蔵文化財発掘に至る経緯については既に詳述している（福岡県教育委員会『九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告』3, 2006、同『九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告』11, 2008）。ここでは、今回報告する観音山古墳群平石Ⅲ群の調査経緯を簡略に記す。

第11集で既述したように、九州新幹線建設に関わる那珂川町内での埋蔵文化財調査の分担は、福岡県教育委員会（以下、県教委という。）が本線及び本線と隣接する工事用道路を、那珂川町教育委員会（以下、町教委という。）がそれ以外の工事用道路をそれぞれ担当することで関係者は了解していた。工事用道路はやがて町道として町の管理となるためである。ここに報告する観音山古墳群平石Ⅲ群は本線・工事用道路が接していて、県教委の調査担当範囲であった。

発掘調査は、本線部分の立木伐開を待って平成17年6月28・29日に測量用杭打ちを実施、7月5日から現況地形の平板測量を開始した。比較的初心者に近い作業員2パーティが作成した図面は、レベル計算ミスによる取り直しを含めて5日ほどで終了し、同7月12日から作業員を投入した。丘陵上に位置する古墳群への作業道の整備や調査対象地の清掃などを実施後、7月22日には太宰府市浄覚院の高橋慎二住職（福岡県文化財保護指導委員を委嘱）による真言宗に則った鎮魂祭を行い、鍬入れに着手した。なお、平成18年1月17日～3月23日の間は同じく新幹線建設に伴う観音山古

地点	遺跡名	所在地	対象面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	調査年度	報告年度	備考
1	観音山古墳群中原Ⅲ群	那珂川町大字松木	1,600	1,200	H17	H19	
2	観音山古墳群平石Ⅰ群	那珂川町大字松木	4,300		—	—	なし
3	観音山古墳群平石Ⅱ群	那珂川町大字松木			—	—	なし
4	観音山古墳群平石Ⅲ群	那珂川町大字松木	3,900	2,700	H17・18	H21	
5	観音山古墳群平石Ⅳ群	那珂川町大字松木	5,600	300	H18・19	H20	
6	観音山古墳群平石Ⅴ群	那珂川町大字松木	2,800	600	H18	H20	
7	観音山古墳群平石Ⅵ群	那珂川町大字松木	4,000	4,000	H17	H20	那珂川町調査
8	観音山古墳群平石Ⅶ群	那珂川町大字松木			—	—	トンネル上のため調査不要
9	観音山古墳群瀬戸Ⅰ群	那珂川町大字下梶原	5,000	5,000	H17	H20	那珂川調査
10	観音山古墳群瀬戸Ⅱ群	那珂川町大字下梶原	500	300	H18	H20	
11	観音山古墳群瀬戸Ⅲ群	那珂川町大字下梶原	5,000	5,000	H17	H20	那珂川調査
11	観音山古墳群瀬戸Ⅳ群	那珂川町大字下梶原	2,400	380	H16	H19	
12	ヤンバラ池遺跡群	那珂川町大字上梶原			—	—	なし
13	猿田彦命	那珂川町大字松木			—	—	影響なし
14	見返り灯籠	那珂川町大字上梶原			—	—	解体保正中
15	内河遺跡群	那珂川町大字上梶原	450	350	H15	H19	
16	内河古墳群	那珂川町大字上梶原			—	—	なし
17	大行事	那珂川町大字上梶原			—	—	移設
18	遺物散布地	那珂川町大字上梶原			—	—	なし
19	楠木B遺跡	那珂川町大字上梶原			—	—	なし

表1 九州新幹線那珂川町内調査対象地点一覧



第1図 九州新幹線路線図 (1/500,000)

墳群中原Ⅲ群（当該調査対象地の北250mに位置する）の調査に主力を注いだが、この平石Ⅲ群の調査も細々ながら継続した。

翌18年度は本線西側に接して計画された工事用道路対象地の地形測量を4月20日から開始、作業員は5月23日から投入して本格的な調査を再開した。併せて、前年度に完了しなかった古墳の継続調査、古墳の空白地となる緩斜面の面的な掘削を行って弥生・縄文時代の遺構確認、そして当初予定になかった塩ビパイプを使用した用水路の付け替えに伴う掘削対象地の調査を追加的に実施し、9月25日まですべてを完了して次の調査地点観音山平石Ⅴ群へと移動した。

対象地は雑木・竹からなる山林で、樫類が多く、調査に際しては株の処理に手を取られ、特に古墳上の株については除去し得なかったものがかなりある。

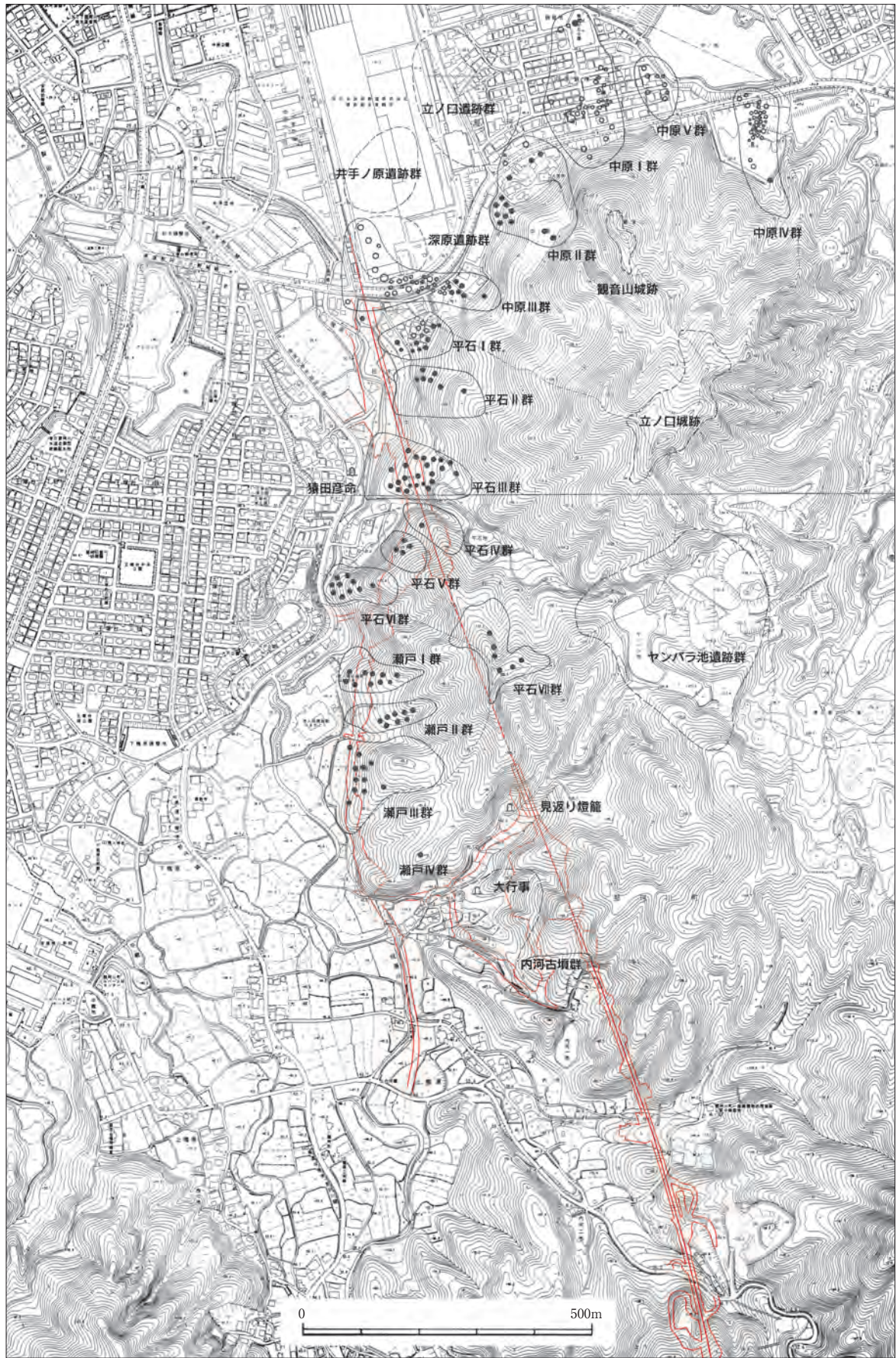
また、調査中、観音山古墳群中原Ⅲ群、同古墳群平石Ⅰ・Ⅱ群として登録された丘陵地や周知の文化財包蔵地外の低地など、今回の工事で地形改変される範囲の確認・試掘調査を実施したが、一昨年度報告の中原Ⅲ群を除いて遺構は確認できなかった。その際に採集した縄文土器をⅢ-12-5)で紹介している。

なお、1号墳西に陥没坑があり訝っていたが、8号墳西に設置された配水施設へと通じる素堀の隧道が掘削されていたことが後々に判明した。人が屈んで歩ける程度の規模のこの隧道の北端は埋没して確認していない。コンクリート造りの配水施設であったために気にしないまま、隧道の記録作成を怠ったが、今となっては残念であった。

2. 調査の組織

ここに報告する遺跡は平成17～18年度に発掘調査を行い、21年度に報告書作成作業を実施したものである。整理作業はその間にも複数年度に渡って実施しているが、煩雑となるために主要な事業を行った年度に限って、鉄道・運輸機構及び福岡県教育委員会の関係者を記す。

	独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構		鉄道建設本部		九州新幹線建設局	
	17年度		18年度		21年度	
局長	北川	隆	元木	洋	高橋	浩一
次長	関根	茂	関根	茂	有屋田	幸郎
用地第一課長	田中	等	高橋	秀幸	西岡	英郎
用地第一課長補佐	木佐一正和					
用地第一課担当係長	入江	万久	入江	万久	小川	秀平
			房野	和清		
工事第一課長	三浦	正宣	佐々木	幸一		
工事第二課長					吉野	美喜男
工事第一課課長補佐	松原	鉄雄	松原	鉄雄		
			三好	省三		
工事第二課課長補佐					三好	省三
工事第一課担当係長	後藤	敏之	後藤	敏之		
工事第二課担当係長					長野	利行



第2図 那珂川町内九州新幹線関係工事位置図 (1/10,000)

那珂川鉄道建設所長	坂元 茂	坂元 茂	村山 正巳
同担当副所長	寺田 修	寺田 修	佐藤 正志

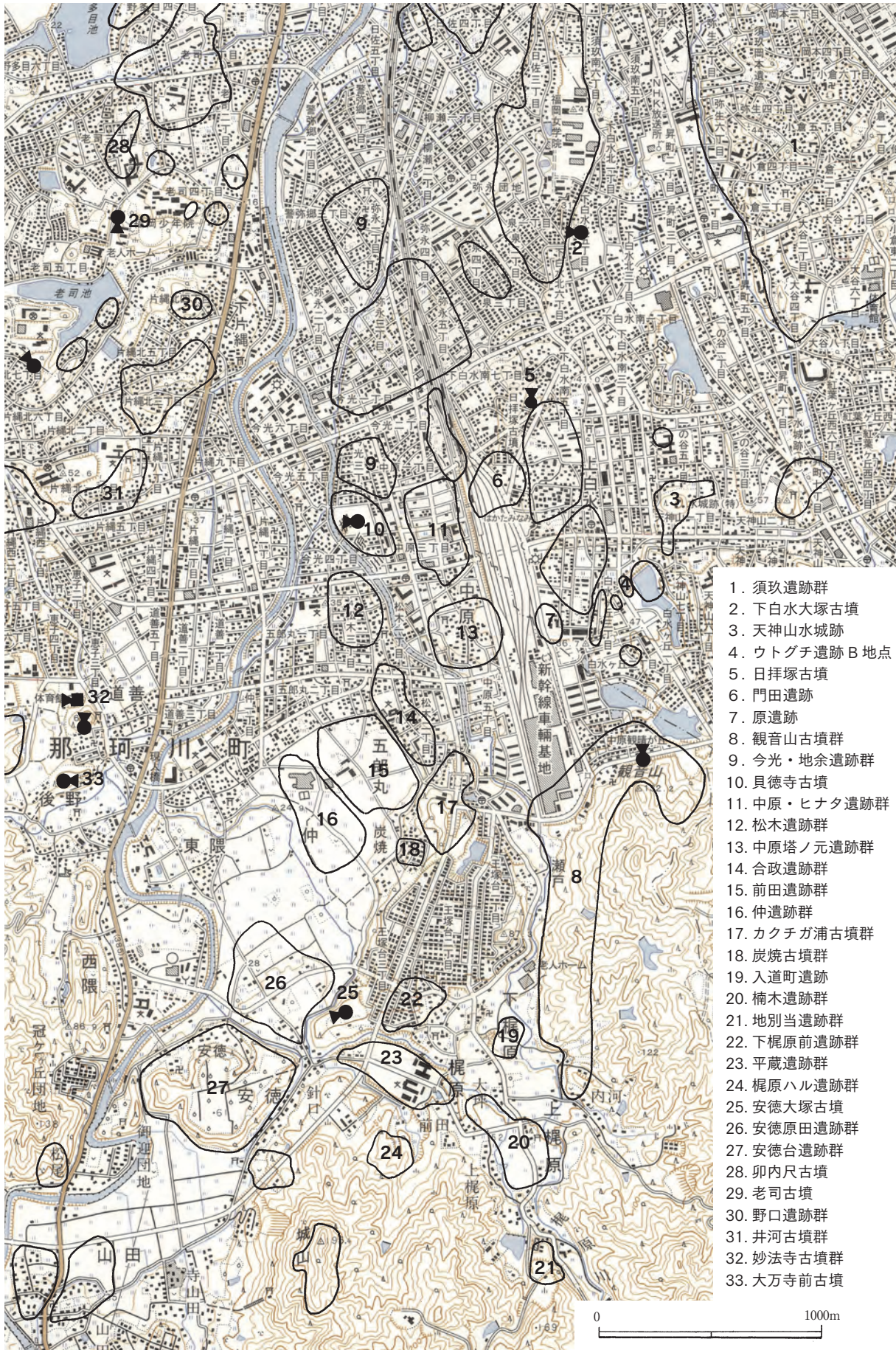
福岡県教育庁総務部文化財保護課

総 括	17年度	18年度	21年度
教育長	森山 良一	森山 良一	森山 良一
教育次長	清水 圭輔	清水 圭輔	亀岡 靖
総務部長	中原 一憲	大島 和寛	荒巻 俊彦
副理事兼文化財保護課長		磯村 幸男	
文化財保護課長	久芳 昭文		平川 昌弘
副課長	川述 昭人	佐々木隆彦	池邊 元明
参事兼課長技術補佐	木下 修	小池 史哲	小池 史哲
参事兼課長補佐	安川 正郷	安川 正郷	
課長補佐			前原 俊史
庶 務			
参事補佐兼管理係長	稲尾 茂		
管理係長		井手 優二	富永 育夫
事務主査	石橋 伸二	野中 顯	藤木 豊
主任主事	末竹 元	淵上 大輔	近藤 一崇
主任主事	淵上 大輔	柏村 正央	野田 雅
主任主事		小宮 辰之	仲野 洋輔
調査・報告			
参事補佐兼調査第二係長	飛野 博文	飛野 博文	飛野 博文
参事補佐	濱田 信也 <small>(整理担当)</small>	濱田 信也 <small>(整理担当)</small>	新原 正典 <small>(整理担当)</small>
主任技師	秦 憲二	秦 憲二	坂本 真一
同	大庭 孝夫	一瀬 智	
同	今井 涼子		
技 師	一瀬 智		城門 義廣

また、実際の発掘調査においては、那珂川町教育委員会をはじめ、工事用道路の大部分の工事主体者である同町五ヶ山ダム・九州新幹線対策室、りんかい日産・広成特定建設工事共同企業体九州新幹線建設工事関係者等から便宜を図っていただくとともに、炎暑や極寒の中で発掘調査に携わっていただいた那珂川町をはじめとする地元の方々のご協力を得て、無事に調査を完了することができた。あらためて関係者に謝意を表します。



調査前の鎮魂祭



第3図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

福岡市報 603 集「野多目 A 遺跡 5」1999、春日市第 39 集「ウトロ遺跡 B 地点」2004、那珂川町報 65 集「裂田溝」2005 より作成

Ⅱ. 位置と環境

本書は九州新幹線建設に伴い県教委が発掘調査を行った筑紫郡那珂川町内に所在する遺跡群の3冊目の報告である。過去の報告で那珂川町内の遺跡の概要、町内を貫流して博多湾へ注ぐ那珂川流域の古墳について紹介したが、今回は総数300基にも及ぶという観音山古墳群の概要を紹介したい。

観音山古墳群での最初の発掘調査は、1972(昭和47)年12月から翌年7月にかけて実施された山陽新幹線博多総合車輛基地建設に伴うものであった。その後、周辺の開発はめざましく、道路新設・区画整理・宅地造成等によって過去数次の調査が行われている。以下、県教委・町教委担当に分けて概要を記す。

〔観音山古墳群(中原Ⅲ群)〕(『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第5集、1978)

新幹線車輛基地の最南端付近で31基の古墳、土坑墓群などの調査を行った。調査対象地は山塊北麓の標高40m前後に位置する。調査区南端には西から東へ向かって小さな谷が入っていて、群はここで完結するが、この谷に面してもっとも集中している。

〔観音山古墳群中原Ⅲ群〕(『九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第11集、2008)

博多総合車輛基地の南を走る県道を挟んで南西、駐車場として使用されていた区画の一角にあり、今回の工事用道路建設によって調査を行った。腰石の一部を失うほどの大破した横穴式石室墳で、主体部は徹底的に攪乱を受け、閉塞石の中から若干の土器が出土している。なお、この報告書作成時、町報第8集の内容を確認しておらず、概報等を参考として「中原Ⅲ-33号墳」として報告したが、第8集で33~36号墳までの名称は既に使用されていた。町作成の『那珂川町文化財分布地図』1995にも記載されていて、報告者の手落ちであった。今回、改めて37号墳と名称変更したい。

〔観音山古墳群平石Ⅳ群〕(『九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第12集、2009)

これも九州新幹線工事用道路建設に伴って調査を行った。急峻な丘陵の西裾緩斜面に1基単独で存在する。素環鏡板を伴う轡が出土した。

〔観音山古墳群平石Ⅴ群〕(『九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第12集、2009)

九州新幹線工事用道路建設に伴い、やはり急峻な丘陵の下位斜面で3基を調査した。2号墳は閉塞付近の片袖を除いてすべての石材を抜き取られ、かつ、墳丘を3号墳が削り込んでいた。3号墳周溝床面からは2号墳に副葬されていたと思われる耳環・金銅製飾金具・鉄釘などが出土し、3号墳築造を契機として破壊されたのではないかと推測している。

〔観音山古墳群瀬戸Ⅱ群〕(『九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第12集、2009)

九州新幹線工事用道路建設に伴い調査。2基の古墳と周溝あるいは墓道の一部を調査した。1号墳は無袖単室の小古墳で、床面から土器が出土した。2号墳は奥壁付近を残して大破。

〔観音山古墳群瀬戸Ⅳ群〕(『九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第11集、2008)

これも九州新幹線工事用道路建設に伴って調査したものである。観音山古墳群としてはもっとも南に位置し、山塊はここで東へ後退する。調査の結果、一辺長約3mの墳丘に幅0.9m、深さ0.3~0.5mの溝を巡らせた方形周溝で、性格を推測させる遺構・遺物はないが中世墓と推測されている。

〔ツタカ尻遺跡(観音山32号古墳)〕(『那珂川町文化財調査報告書』第2集、1979)

駐車場造成に伴って調査された遺跡で、中原Ⅲ群の南西端に位置する。石室は大破していたが、小型単室の横穴式石室が想定されている。直刀2口が出土。

「観音山古墳群」(『那珂川町文化財調査報告書』第6・8集、1980・82)

新幹線車両基地の南を東西に走る県道現人橋乙金線建設に伴って調査された古墳群が第6集で概要報告されるが、第8集の本報告ではさらに中原Ⅲ群の4基が追加報告されている。調査対象は中原Ⅰ群1～8号墳、同Ⅱ群1・2号墳、同Ⅲ群33～36号墳、同Ⅳ群1～6号墳である。Ⅰ-1号墳は全長26mの観音山古墳群中唯一の前方後円墳で、6世紀後半の築造とされ、単室横穴式石室を主体部とする。前方部をほぼ北へ向けて築造されるが、主体部はその反対側、後円部南に墓道を配する。くびれ部付近に長方形土坑があって、馬歯とともに素環鏡板付轡が出土している。観音山古墳群中でもっとも東に位置するⅣ群は石棺や竪穴式石室、古式の横穴式石室を主体部とし、6世紀初め以前の築造とされる。本報告に記載されたⅢ群の古墳群は、新幹線建設によって調査された古墳群の南東、谷に沿って連続する群である。

「観音山古墳群Ⅱ」(『那珂川町文化財調査報告書』第14集、1986)

病院用地造成に伴って中原Ⅳ群7～37号墳の調査を行った。標高の低い北側に竪穴式石室や古式の横穴式石室が分布、南側では時期の下る横穴式石室墳が多くなり、6世紀初めに造墓が開始、後半から末葉にかけて墓域が南へ拡大したようである。

「観音山古墳群Ⅲ」(『那珂川町文化財調査報告書』第17集、1988)

区画整理事業に伴い、中原Ⅰ-9～36号墳、中原Ⅴ-1～8号墳が調査された。初現はやはり古式の横穴式石室を主体部とする6世紀前半の9号墳で、銅釧や鐙が出土している。盟主墳である前方後円墳のⅠ-1号墳の築造を契機に古墳数が増えるとされる。

「観音山古墳群Ⅳ」(『那珂川町文化財調査報告書』第30集、1992)

宅地造成に伴って平石Ⅰ-1～5号墳を調査。主体部は単室・複室の横穴式石室で、6世紀後葉に築造され、7世紀前葉まで追葬がなされたとされる。

「観音山古墳群Ⅴ」(『那珂川町文化財調査報告書』第50集、2000)

高層アンテナ建設工事に伴って、中原Ⅱ-12号墳の墓道・周溝の一部および無墳丘の小(竪穴)石室1基を調査した。

「観音山古墳群Ⅵ」(『那珂川町文化財調査報告書』第63集、2003)

寺院駐車場造成に伴って中原Ⅱ-5号墳の調査を行った。主体部の平面プランは単室両袖式横穴式石室となるが、玄門部と羨道部中程に框石を配し、その間に敷石を配して前室と同様の扱いをしていた。6世紀後葉の築造とされる。

「観音山古墳群Ⅶ」(『那珂川町文化財調査報告書』第74集、2009)

九州新幹線建設に伴う工事用道路用地のうち、那珂川町教育委員会が調査担当したものである。平石Ⅵ群、瀬戸Ⅰ・Ⅲ群などを調査対象とした。平石Ⅵ群では道路が古墳群の上位斜面に計画されていたために、土坑などを検出したが古墳そのものは保存された。瀬戸Ⅰ群では上端幅6.6m、深さ2.7mの大型溝を検出し、出土遺物から6世紀後半に比定される墓道と考えられている。瀬戸Ⅲ群では2・5・8号墳の3基が調査された。2号墳は周溝内径で19mに復原される3段築成の円墳で、主体部は複室横穴式石室である。前端部を破壊されるが、残存長13.5mの大型石室で、玄室規模は幅約2.5m、長さ3.2m、高さは3mを超える。墓道は幅広く、中央部に石組暗渠が付設されるなど、入念な配慮がなされていた。

以下に古墳群の一覧表を付すが、須恵器の時期は「牛頸窯跡群－総括報告書Ⅰ－」(『大野城市文化財調査報告書』第77集、2008)によるが、個別の時期比定は筆者の主観である。

古墳名	墳丘規模	主体部	玉類	金銅製品			鉄製品			須恵器	土師器	その他
				装身具	馬具	馬具	武器	武器	その他			
中原I-1	前方後円26	単室両袖	碧玉管玉・ガラス管玉・ガラス丸玉									
中原I-2	○10	単室両袖	碧玉管玉									馬土坑
中原I-3	○6	小型甃六式石室										
中原I-4	○11~12	単室両袖										
中原I-5	○9.4	単室両袖										
中原I-6	○8~9	単室両袖	碧玉管玉	耳環								
中原I-7	○6	小型無袖		耳環								
中原I-8	○12	単室両袖	ガラス玉	耳環	素環鏡板付轡							
中原I-9	○11	無羨道単室両袖	硬玉勾玉・碧玉管玉・ガラス玉	銅釧・鉄釧	鏡	鉄鎌・大刀2						
中原I-10	—	堅穴系小石室										
中原I-11	—	堅穴系小石室										
中原I-12	—	堅穴系小石室										
中原I-13	○6.5	無羨道単室両袖	碧玉管玉・ガラス玉・水晶切子玉									
中原I-14	○10~11	単室両袖										
中原I-15	○8	無羨道単室無袖		耳環								
中原I-16	○8~9	無羨道単室両袖										
中原I-17	○6	無羨道単室無袖(小型)										
中原I-18	○8	前半破壊	滑石管玉・ガラス小玉									
中原I-19	○11	無羨道単室両袖	碧玉管玉・土玉	耳環								
中原I-20	○6.5	無羨道単室無袖										
中原I-21	—	石蓋土壘墓										
中原I-22	○5.5	堅穴系小石室										
中原I-23	—	石蓋土壘墓										
中原I-24	○3	堅穴系小石室	ガラス玉									
中原I-25	○—	大破										
中原I-26	—	堅穴系小石室										
中原I-27	—	—										
中原I-28	—	小石室										
中原I-29	○9	無羨道単室両袖										
中原I-30	—	堅穴系小石室										
中原I-31	○4	堅穴系小石室										
中原I-32	○9	無羨道単室両袖										
中原I-33	○19~16.5	大破(単室両袖)	碧玉管玉	耳環								
中原I-34	○11.6	無羨道単室両袖										
中原I-35	○6.4	堅穴系小石室										
中原I-36	○19	単室両袖			鏡・帯金具	鉄鎌・刀装具						
中原II-1	○14	全壊										
中原II-2	○13	単室両袖、柩石2			青銅馬鈴	鉄鎌						

表2 観音山古墳群調査一覧表1

古墳名	墳丘規模	主体部	玉類	金銅製品			鉄製品			須臾器	土師器	その他	
				装身具	馬具	武器	武器	武器	その他				
中原Ⅱ-5 (H3)	○12	単室両袖(擬複室)								蓋杯・高杯・甕・提瓶・甕	高杯	墓道の調査	
中原Ⅱ-12	—	竪穴系小石室											
中原Ⅱ-16	○9	単室両袖	耳環							蓋杯・高杯	杯・甕	青磁	
中原Ⅲ-2	○1.2	単室両袖	耳環	帶金具						蓋杯・平瓶			
中原Ⅲ-3	—	T字形単室両袖								杯	杯		
中原Ⅲ-4	○9	—								蓋杯・平瓶	高杯・手捏ね		
中原Ⅲ-5	○7~10	単室両袖								蓋杯・平瓶	手捏ね・土製品		
中原Ⅲ-6	□11.5~18.5	T字形単室両袖	滑石勾玉・同管玉							蓋杯・平瓶・台付長頸壺		周溝内に木棺・釘・中世皿・甕	
中原Ⅲ-7	□9.5~11.5	単室両袖								蓋杯・高杯・甕	甕・碗		
中原Ⅲ-8	○9~10	単室両袖								蓋杯・甕	土翁		
中原Ⅲ-9	○6	無袖								蓋杯・平瓶			
中原Ⅲ-10	○8.5	単室両袖								蓋杯・高杯・長頸壺		中世皿・銅	
中原Ⅲ-11	○8~12	複室	耳環							蓋杯・平瓶・台付長頸壺・甕	ミニチュア		
中原Ⅲ-12	○13	複室	耳環	銅鞘尻・鉄地銀張足金具	壓金付引手金具・鉸具					蓋杯・平瓶・横瓶等		中世土器・陶磁器・石甕	
中原Ⅲ-13	□?8	単室両袖								蓋杯・高杯・甕等	碗・甕		
中原Ⅲ-14	○10	単室両袖								蓋杯・高杯・甕等	高杯・ミニチュア		
中原Ⅲ-15	—	横口小石室								平瓶			
中原Ⅲ-16	—	竪穴系小石室								蓋杯・高杯			
中原Ⅲ-17	?3	横口小石室								蓋杯			
中原Ⅲ-18	○5	竪穴系小石室								杯蓋			
中原Ⅲ-19	—	竪穴系小石室								杯蓋			
中原Ⅲ-20	○10	複室、一部無袖								蓋杯・高杯・鉄鉢・瓶子形	高杯・甕		
中原Ⅲ-21	六角?5	横口小石室								蓋杯・平瓶			
中原Ⅲ-22	○7.5	単室片袖								蓋杯・横瓶・甕	碗・甕等		
中原Ⅲ-23	○7.5	単室片袖?								蓋杯・高杯		中世皿	
中原Ⅲ-24	○6	単室片袖小型								蓋杯・高杯・台付長頸壺等	高杯		
中原Ⅲ-25	○10.5	単室両袖								蓋杯・甕		古代杯	
中原Ⅲ-26	○9	単室両袖	耳環							蓋杯・平瓶等		中世皿	
中原Ⅲ-27	○7	単室片袖	耳環							蓋杯・高杯・平瓶・甕			
中原Ⅲ-28	—	竪穴系小石室								杯蓋・甕		中世皿	
中原Ⅲ-29	—	単室両袖								杯蓋・甕片			
中原Ⅲ-30	○3	竪穴系小石室											
中原Ⅲ-31	—	竪穴系小石室?											
中原Ⅲ-32	○13	単室(大破)	碧玉管玉・ガラス小玉							蓋杯・瓶	II~III		
中原Ⅲ-33	○8?	複室両袖											
中原Ⅲ-34	○7.2	T字形単室両袖								蓋杯	IV~V	古代土師杯	
中原Ⅲ-35	○4	単室(無袖)											
中原Ⅲ-36	○9	単室両袖	耳環							蓋杯・高杯・甕	IV~V		
中原Ⅲ-37	○4.5	単室無袖								杯蓋	IV	番号変更	
中原Ⅳ-1	○5	小型竪穴式石室	滑石白玉									碗・高杯・甕	紡錘車

表2 観音山古墳群調査一覽表2

古墳名	墳丘規模	主体部	玉類	金銅製品		鉄製品			須恵器	土師器	その他	
				装身具	馬具	馬具	武器	武器				その他
中原Ⅳ-2	○9	単室両袖							蓋杯	I	碗・高坏・甕・ミ ニチャユア	
中原Ⅳ-3	○8~9	堅穴系横口							蓋杯・甕	I~III	碗・甕・甎	
中原Ⅳ-4		小形堅穴式石室										
中原Ⅳ-5	○4~5	堅穴式石室										
中原Ⅳ-6	○7.4	堅穴系横口										
中原Ⅳ-7	○6	小形石棺							蓋杯・甕・甎	I~III	碗	
中原Ⅳ-8	○6~7	小石室(石棺)										
中原Ⅳ-9	○4.5	小石室(石棺)										
中原Ⅳ-10	○5	小石室(石棺)										
中原Ⅳ-11	○5.5	小石室(石棺)							○			
中原Ⅳ-12	○7.5	横穴式石室?							蓋杯・甕・提瓶	I~III	碗・高坏	
中原Ⅳ-13	○9	堅穴系横口	小玉・白玉						蓋杯・甕	I~II	碗	
中原Ⅳ-14	○9.8	前半破壊							甕	I	碗・壺	
中原Ⅳ-15	○4.4	小形横穴式石室							蓋杯	I	碗・高坏・甕	
中原Ⅳ-16	楕円3~4	小石室(石棺)							蓋	I		
中原Ⅳ-17	○4	堅穴系小石室	滑石製装飾品、 ガラス玉									
中原Ⅳ-18	○4	堅穴系小石室										
中原Ⅳ-19	○7	大破										
中原Ⅳ-20	○4.5	小形横穴式石室 (T字)							杯身・蓋・短頸壺	III~IV		
中原Ⅳ-21	○10	複室両袖	ガラス小玉	鉄地金銅 張腕釧・ 耳環					蓋杯・高坏・甕・提瓶・ 甕など	III	碗・鉢・高坏・甕・ ミニニチャユア 甕	
中原Ⅳ-22	○9	単室両袖							蓋杯・甕・高坏・甕・甕	III		
中原Ⅳ-23	○8	前半破壊		耳環					蓋杯・高坏・平瓶・胸付 長頸壺など	III~VII		
中原Ⅳ-24	○8	単室両袖(T字)		耳環					蓋杯・高坏・平瓶・小壺 など	IV~V		
中原Ⅳ-25	○6.8	小型無袖		耳環					蓋・高坏・胸付長頸壺・ 甕	III~IV		
中原Ⅳ-26	—	堅穴系小石室										
中原Ⅳ-27	—	堅穴系小石室										
中原Ⅳ-28	○6.5	堅穴系小石室	碧玉管玉・ガラス 玉									
中原Ⅳ-29	○5	堅穴系小石室	ガラス玉									
中原Ⅳ-30	○6.6	堅穴系小石室							杯身・甕・高坏	IV		
中原Ⅳ-31	○4	小型単室両袖							蓋杯・高坏・甕・提瓶・ 平瓶ほか	III	異形碗 高坏	
中原Ⅳ-32	—	堅穴系小石室										
中原Ⅳ-33	□?5	堅穴系小石室										
中原Ⅳ-34	○?5	堅穴系小石室?										
中原Ⅳ-35	○?3.4	堅穴系小石室?大 破										
中原Ⅳ-36	○8	単室両袖(歪む)							蓋杯・高坏・平瓶など	IV~V	高坏・甕	
中原Ⅳ-37	○11	単室両袖		耳環					蓋杯・高坏	III	高坏	
中原Ⅴ-1	○5	堅穴系小石室							杯身・小壺	II		
中原Ⅴ-2	—	堅穴系小石室										
中原Ⅴ-3	○5~7	堅穴系小石室		耳環					高坏			

表2 観音山古墳群調査一覧表3

古墳名	墳丘規模	主体部	玉類	金銅製品		鉄製品			須恵器	土師器	その他
				装身具	馬具	馬具	武器	武器			
中原V-4	一	竪穴系小石室							蓋杯・脚付壺・長頸壺		
中原V-5	○7	単室無袖	滑石製小玉	耳環				釘	蓋杯・脚付長頸壺	ミニチュア椀	
中原V-6	○14	大破(横穴式)	碧玉管玉・ガラス玉	耳環		鎖			蓋杯・高杯・提瓶・横瓶	II~III	
中原V-7	○9~11.5	単室両袖(擬複室)		耳環		鉄鎌・刀装具・弓金具		刀子	蓋杯・高杯・壺・脚付壺 ほか 小壺蓋	甕	
中原V-8	一	大破(横穴式)									
中原V-9											
中原V-10											
平石I-1	○8(□?)	単室両袖(T字)							蓋杯・高杯・壺・平瓶・甕	III	
平石I-2	○9~11	複室両袖						刀子・鎌	蓋杯・高杯・壺・提瓶・平瓶・甕	III	高杯
平石I-3	○18~20	複室両袖							蓋杯・高杯・平瓶・壺・甕	IV~V	高杯
平石I-4	○5	単室片袖							蓋杯	III, VII	
平石I-5	○14	単室両袖	蛇紋岩勾玉・水晶 晶切子玉・ガラス玉			鉄鎌・刀装具		刀子	蓋杯・高杯・壺・長頸壺・甕	III	
平石III-1	○15	複室両袖	碧玉管玉・瑪瑙玉・滑石玉・ガラス玉	耳環		鉄鎌・刀装具		刀子・鉾留金具・弾金具・鉄滓	蓋杯・高台付腕・高杯・壺・直口壺・長頸壺・平瓶・甕	III~IV B	脚付壺・高杯・甕
平石III-2	○6	単室両袖				鉄鎌		刀子	蓋杯・壺・小型短頸壺	III	
平石III-3	○8	複室両袖		耳環		鉄鎌		刀子・鉄鉗・鉄槌	蓋杯・高杯・脚付直口壺・長頸壺・壺・横瓶・提瓶・甕	III~V	椀・甕
平石III-4	○6	単室両袖	滑石玉						杯・甕・脚付子持壺・壺	III	手捏
平石III-5	○5~6	単室両袖							蓋杯・高杯・平瓶・壺	IV	高杯・長頸壺
平石III-6	□?6	単室両袖							高杯		手捏
平石III-7	○5	単室無袖		耳環					蓋杯・壺・小型壺・横瓶・甕	IV	
平石III-8	○6	単室両袖						釘			
平石III-9	○10	単室片袖				鉄鎌		釘	蓋杯・高杯・長頸壺・平瓶・甕	IV~V	(椀)
平石IV-1	○10	単室両袖		耳環		鉄鎌・大刀・刀装具		刀子	蓋杯・甕・提瓶	IV~V	椀・皿
平石V-1	○6.5	単室両袖		耳環・飾金具				刀子	蓋杯・高杯・小壺	III~IV	椀
平石V-2	○11	大破				鉄鎌			蓋杯・高杯・壺・長頸壺・平瓶・甕	III	
平石V-3	○7~10	単室両袖	碧玉管玉			鉄鎌		刀子・鉄斧	蓋杯・高杯・壺・短頸壺・脚付壺・平瓶・横瓶・甕	III~IV	高杯・丹塗壺
瀬戸II-1	○6	前面破壊							蓋杯・平瓶・皿	V	椀
瀬戸II-2	○9	前面破壊							甕・平瓶		
瀬戸III-2	○19	複室両袖	ガラス玉	耳環		鉄鎌・刀装具		鉾留金具	蓋杯・高杯・壺・椀壺 (有脚有り)	III~IV	
瀬戸III-10	○9	単室両袖		耳環				刀子	蓋杯・甕	IV	中世?
瀬戸III-8	○11~14	単室両袖?		耳環					蓋杯・高杯・	IV	壺・椀・高杯

表2 観音山古墳群調査一覧表4

Ⅲ. 発掘調査の記録

平石Ⅲ群は南の小さな沢を挟んで同Ⅳ群と区別され、北は東へ後退する丘陵上の同Ⅱ群と区別されている。調査対象地はおおむね南北80m、東西40m前後の範囲である。調査対象地東端は約49mの等高線が用地境界に沿うように南北に走り、工事用道路西端付近では同じく約44mの等高線が西に向かって弧を描く。つまり、幅40mで5mの比高差となるが、数値以上に平坦な地形と感じられた。

調査対象地の東に林道があって、ほぼその付近から東へ向かって地形は急峻となるが、古墳群は林道の東まで広がり、町教委作製の分布地図では23基の古墳が記されている。現地ですべてを確認したものではないが、梶原川に面した山塊西麓に位置する古群中では北端の中原Ⅲ群に次ぐ規模を有している。

この平坦に近い地形は大量の二次堆積土に起因している。山塊は花崗岩からなり、調査対象地にバイラン土が流入していて、縄文早期・晩期土器を主体とする包含層が形成されている。古墳以前の遺構としては石組炉1基を検出しただけであるが、古墳調査中に所々で熱を受けて赤変した礫が見いだされていて、本来はなお多くの炉があったものと思われる。

二次堆積土の形成は長期にわたったようで、少ないながら弥生土器も出土している。また、古墳の調査に当たって、通常は必ずといってよい頻度で見られる灰褐色～黒褐色等を呈する「旧地表」と呼ばれる土層が、ここでは面的に安定した状態で観察できなかった。このため、盛土除去後の地形測量図にはいささか不安な部分もある。

1. 平石Ⅲ－1号墳

本古墳群調査区最北に位置し、調査した中で最大規模の古墳である。入口はすでに開口していたが、閉塞石は比較的よく残っていた。

なお、墳頂部に楠の巨木があり、除去しなかったために一部不完全な調査で終わった。

1) 墳丘 (図版4～6、第7・8図)

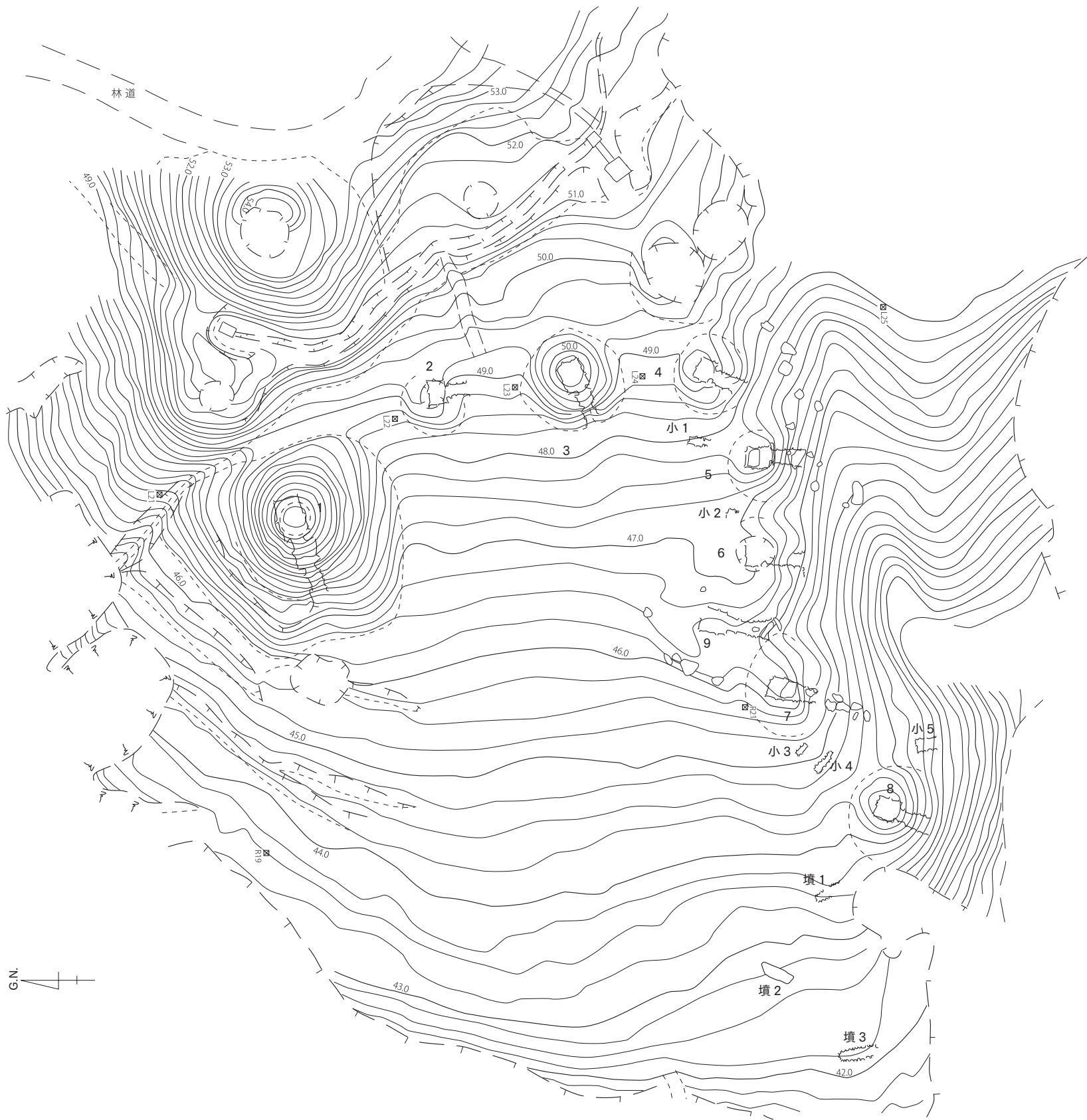
現状で墳丘裾部は正円を描かず、台形に近い形状となって、北側では一部に段が見える。背面(東側)には里道が掘削されていて墳裾は曖昧となるが、里道のすぐ東に頂部陥没の古墳が位置することから、本来の裾は里道の範囲に収まるのであろう。見かけの規模は東西16m、南北19mほどで、高さは北側で5m余、東側で2m余となる。

i) 北Tr.

墳丘北端は、石室中軸線から8.4mの位置にある比高0.6mの地山削り出しで、その北には1.8mほどの幅で黒色土が堆積していた。削り出しから0.8m南で地山直上に白色系の盛土が観察でき、それはいったん途切れながらも石室を楕円形に囲む石列の下位をくぐって、奥壁2段目の石材上端のレベルで石室背面にとりつく。白色系盛土の上には赤色系の盛土が乗り、これは列石上面から天井石下のレベルで石室にとりつく。この赤色系盛土は石室中心から4.6～6.5mの間は比較的水平に近く成形されていて現況で認めたテラス面に対応し、これは北方から見上げた古墳をより大きく見せ



第4図 調査区位置図 (1/1,000)



第5図 現況地形測量図 (1/400)



網かけ部は包含層掘削範囲

第6図 調査後（盛土除去後）地形測量図（1/400）

る視覚的効果を意図したものであろう。その上にも黒色系の二次堆積土が観察できる。

最終的な墳丘は赤色系盛土の上に置かれた黄褐色系盛土で完成となるが、この盛土は先の楕円形石列を覆っている。

ii) 南 Tr.

ここでは石室中心から6.8mの位置に比高0.8mの地山削り出しがあり、それは幅4～5mの周溝の北側の肩となる。周溝は南側のみ掘削され、墓道南で消える。東端は後世に開削された里道の存在と調査区境に当たるために十分な確認ができていない。

この土層では最下層に旧地表と思われる灰褐色土が薄く見られ、その上にはやはり白色系盛土が乗るものの、北 Tr.のように墳端まで及ばない。白色系盛土の上にはやはり赤色系盛土があり、北 Tr.同様に列石を境に不連続となっている。また列石直上の土層は二次堆積とは考えられないものであり、やはり列石は覆われていたようである。白色系・赤色系盛土が石室に取り付くレベルは南北両土層で同様の高さにある。この土層観察では明瞭な段築の痕跡は認められない。

iii) 東 Tr.

玄室奥壁から3.2mの位置で地山の削り出しが看取でき、さらに東側には黒色系の二次堆積土が見られた。地山直上には北 Tr.同様に白色系の盛土が施されている。列石内側の土層観察記録を失念しているが、奥壁2段目の石材上端付近に取り付く土層は堀形肩から積み上げられた土層となるが、南北両 Tr.の観察結果を援用すればあるいは墳端に積み上げられた土層がそのままほぼ水平に置かれていたのかも知れない。赤色系盛土は列石から始まって、他の Tr.同様に天井石下に取り付く。

以上の土層観察から、南北方向の盛土範囲は14.4m、北端の削り出し裾から南の周溝外までの総長は20mほどとなる。東西方向では盛土東端から墓道先端部までで約16mを測る。現況測量図、盛土除去後の測量図を見ても平面形は円形とも方形とも言い難いものであるが、南辺周溝が弧を描くことから直径15mほどの円墳としておきたい。

iv) 列石

各 Tr.の記述ですでに触れたが、南北7.6m、東西10.4mの規模で、ラグビーボール状に列石を配置し、それは盛土に覆われていた。主体部前面(西辺)では上下2段に分けて並べられる。南辺は石材の大きさが比較的揃い、2～3段に丁寧に積み上げるが、北辺は石材も多様で高さも1～5段と乱れている。形状も対称形とはなっていない。

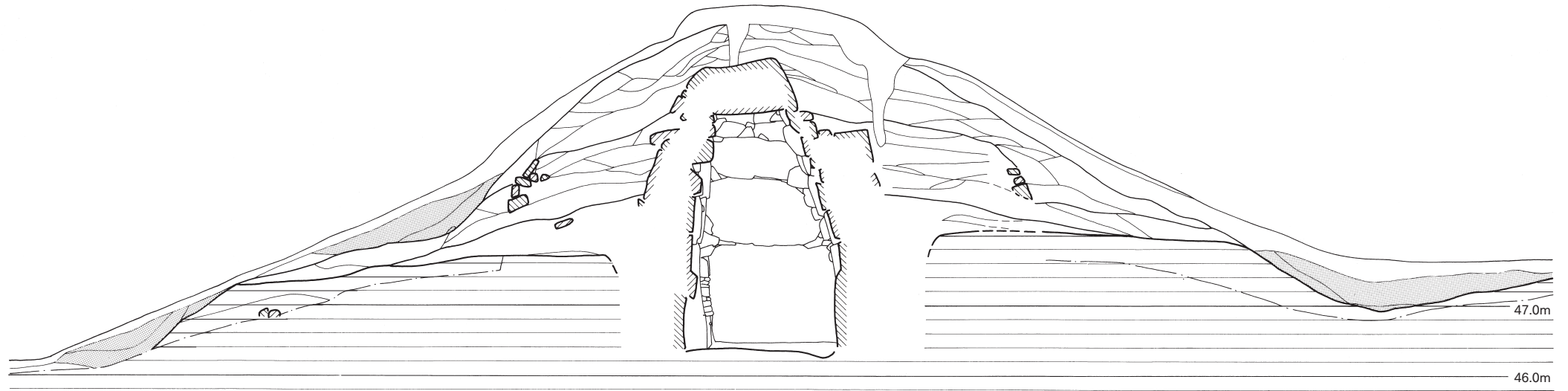
この列石は盛土中に構築されたもので、列石自体が強固であったとは思えないので、石室保護といった目的は想像しがたい。まして、主体部はほぼ平坦といってよい地形に造られているために保護施設が必要だとも思えない。また盛土に覆われることから装飾の意味も認められず、どのような目的で付設されたものか不明である。

2) 主体部 (図版7～9、第9～11図)

ほぼ西に開口する複室横穴式石室で、墳丘とともに本群中最大のものである。調査以前に開口していて、内部は敷石が散乱し(43頁スナップ)、調査に当たってはほぼすべてを除去した。

i) 閉塞

最上部付近が除かれて、腹這いで侵入できるくらいの隙間が開いていたが、前室框石を基点に積み上げられた塊石積みの閉塞が比較的よく残存していた。断面図で見ると、框石付近は比較的大型の石材を丁寧に積み上げ、その前面には小振りの石材を乱雑に重ねて塞いでいる。



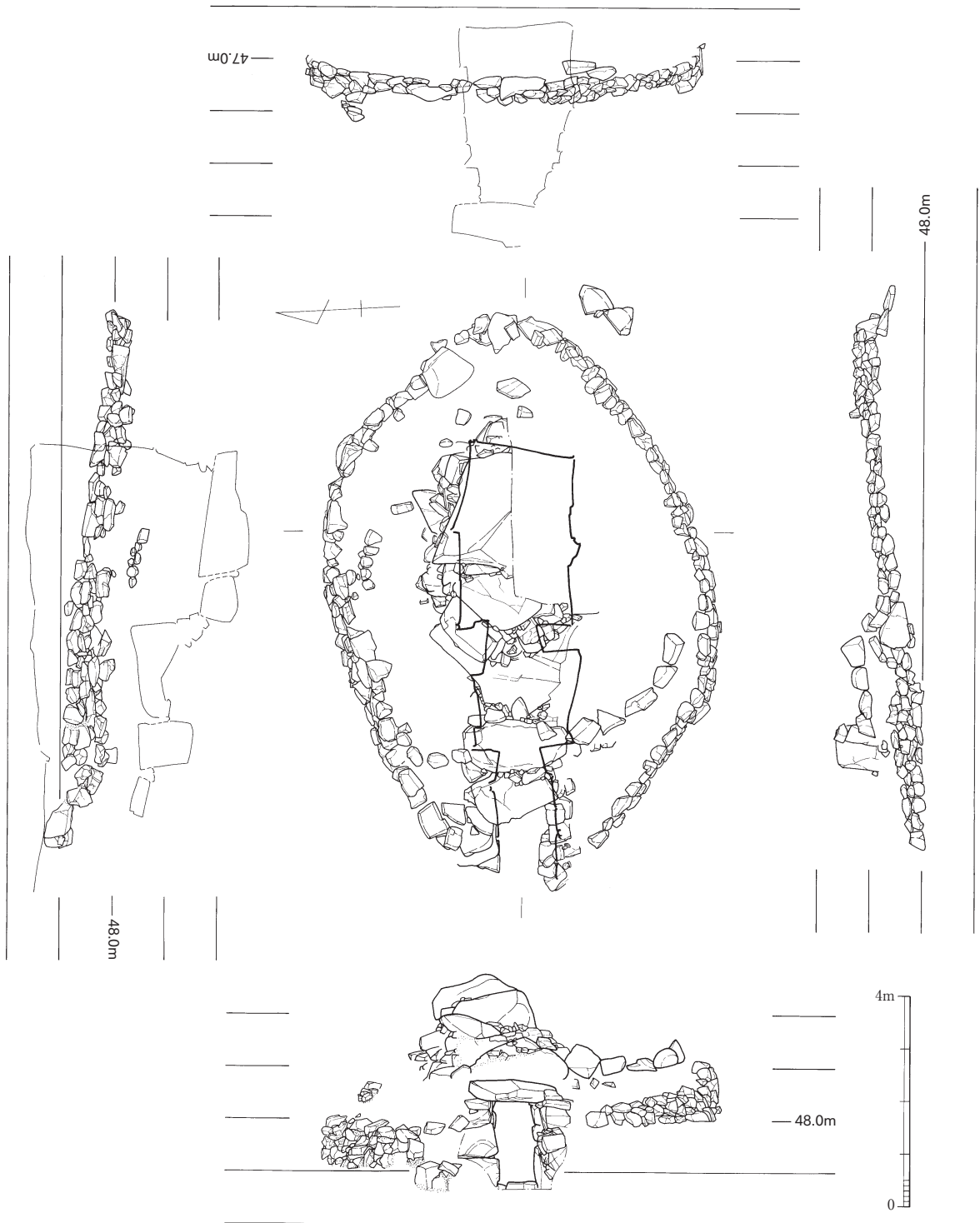
第 7 図 Ⅲ-1 号墳丘土層実測図 (1/80)

ii) 羨道・墓道

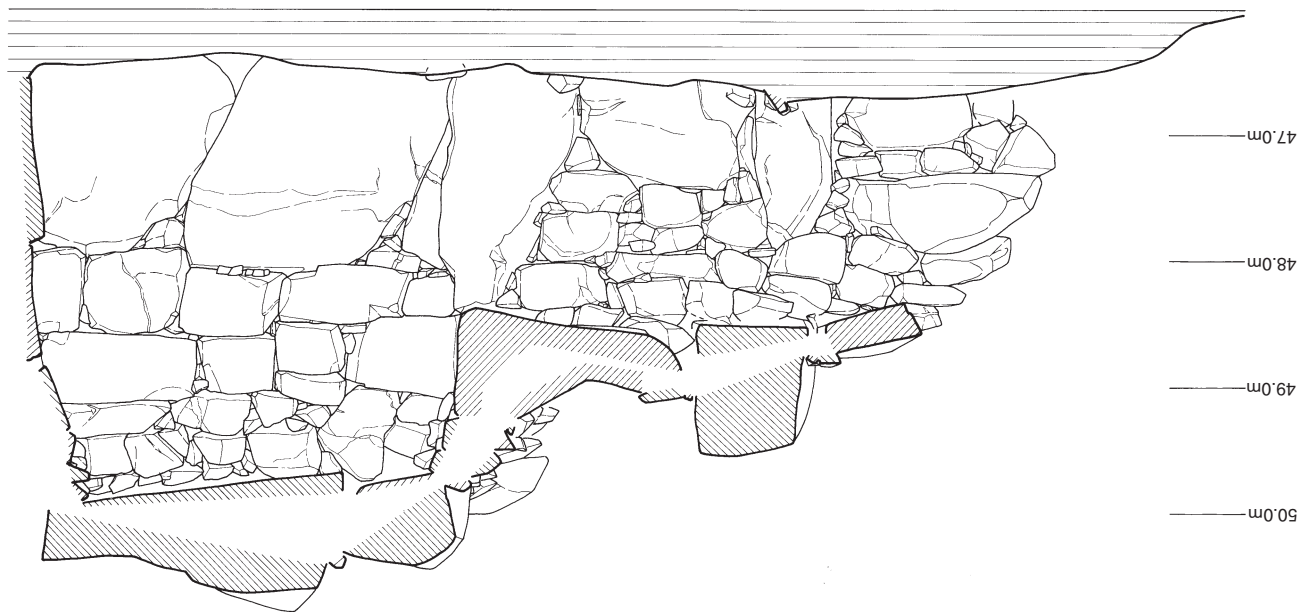
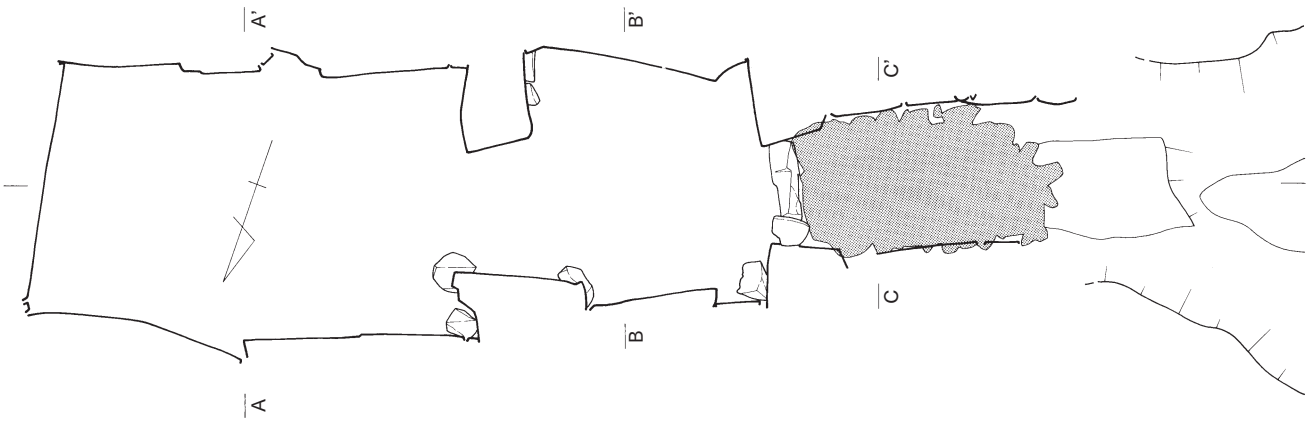
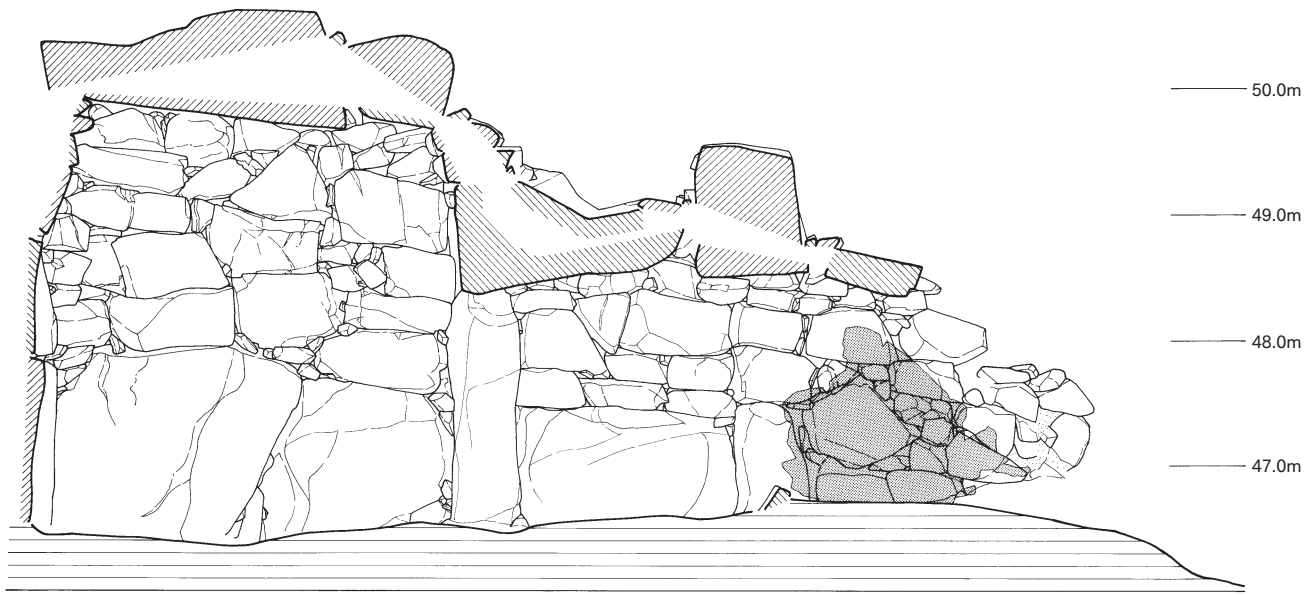
前室袖石の間には小振りの石材2個を使用して框石としている。その前面に幅1.1mの羨道が続くが、南側壁の状況から見て天井石は本来的に1個であったようである。石組側壁の西には素掘りの墓道が約4m延びる。

iii) 石室

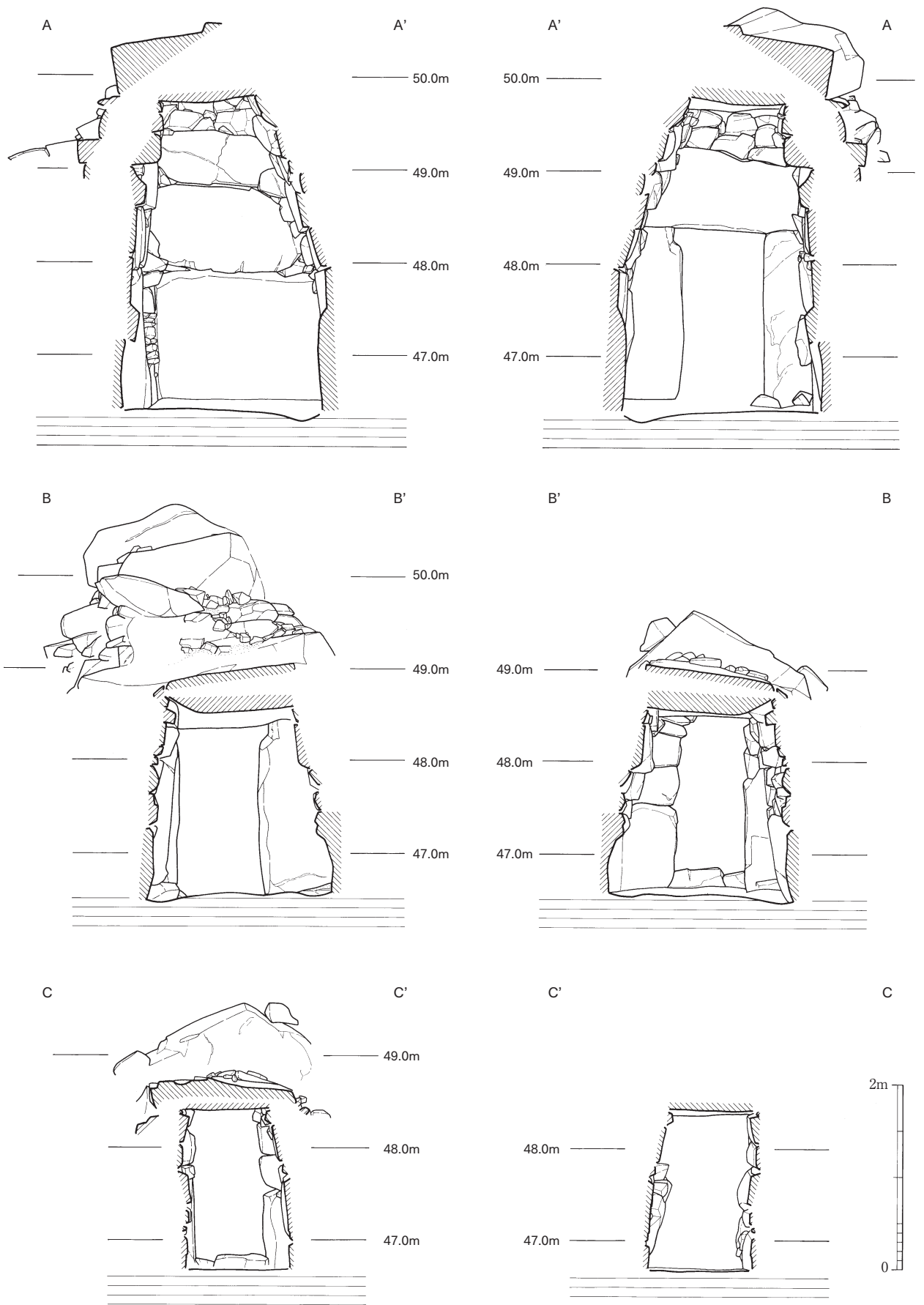
墓道前端の石組は南側がやや長くなっているが、奥壁が主軸に対して傾きをもっているために奥



第8図 Ⅲ-1号墳墳丘列石実測図 (1/120)



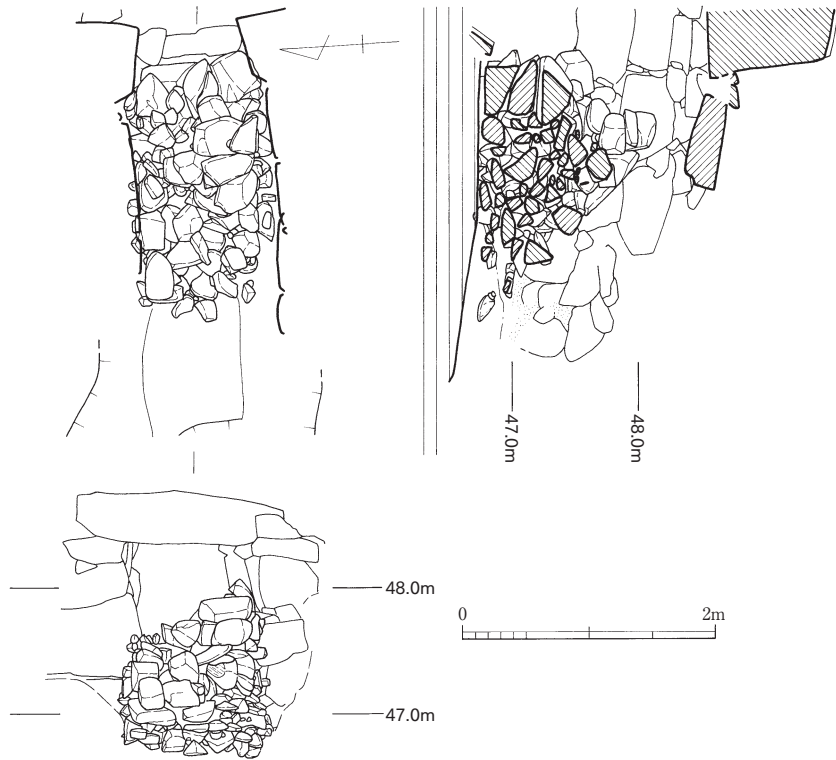
第9図 III-1号墳主体部実測図1 (平面・縦断面、1/60)



第10图 Ⅲ-1号坟主体部实测图2 (横断面、1/60)

壁から墓道側壁前端までの全長は南北両側壁ともに全長8.2mとなる。ただし、南側壁前端付近は石組が弛んで前にせり出すために、本来は若干短かったものと思われる。

後室は側壁腰石に幅1～2m、高さ1.5mほどの大型石材を各2個ずつ使用し、奥壁腰石は幅約2m、高さ約1.5mの大型石材1枚からなる。幅は奥壁で2m、袖石付近で2.1m、長さは左右で3.4～3.2mとほぼ長方形平面となる。高さは奥壁付近で3.4m、袖石付近では0.2mほど低くなる。



第11図 III-1号墳閉塞状況実測図(1/60)

左右両袖石は形状が大きく異なり、後室框石は痕跡も見られなかった。

前室は両側壁ともに1個の腰石を使用する。後室袖石の形状が大きく異なることから南壁で長さ1.8m、北壁では同1.4mとなる。腰石の形状が不整であるために幅も1.6～2mとなる。特徴的な点は天井が後室楣石と同一であるために、通常なら楣石より高くなる天井が同一レベルとなることである。したがって、主体部縦断面は単室の形状を呈する。

3) 出土遺物

主体部内は徹底的な攪乱を受けて良好な状態でなく、若干の玉類や金属製品残片が出土したのみであるが、墓道や墳丘各所から多くの土器が出土した。墓道出土土器については、床面付近からの出土品や完形に近い出土品は位置を記録して番号を付すように努めたが、徹底できず、また注記時の記載漏れもあるようである。墳丘や墳丘南から出土した土器は細片化したものが多く、出土状態を図化していない。なお、墳丘北西テラスから滑石製紡錘車出土したが、所在不明である。

玉類(図版46、第13図1～40)

原位置と思われるものはなく、「石室内」の注記があるが、ほとんどが排土を篩にかけて採取したものである。1～9は石製品、10～40はガラス製である。1はいわゆる碧玉製の管玉で、灰味帯びる青緑色を呈する。長さ7.5mm、直径3.5mmの小型品で両面から穿孔。2は濃淡のあるオレンジ色の地に濃い赤色の縞などが入る瑪瑙製品で、球形を意識したのであろうが材質が悪いのか表面は平滑化せず、凹凸が多い。直径12mm、高さ10mmの大きさである。図下面で孔の周縁がくぼんでいるのは穿孔作業を容易にするための細工であらう。3も同色系の瑪瑙を使用する。やや小振り、地色が濃い。表面が平滑化しないことや、一方の孔の周縁を大きくくぼませる点は共通する。これは



第12図 III-1号墳墓道遺物出土状況実測図(1/30)

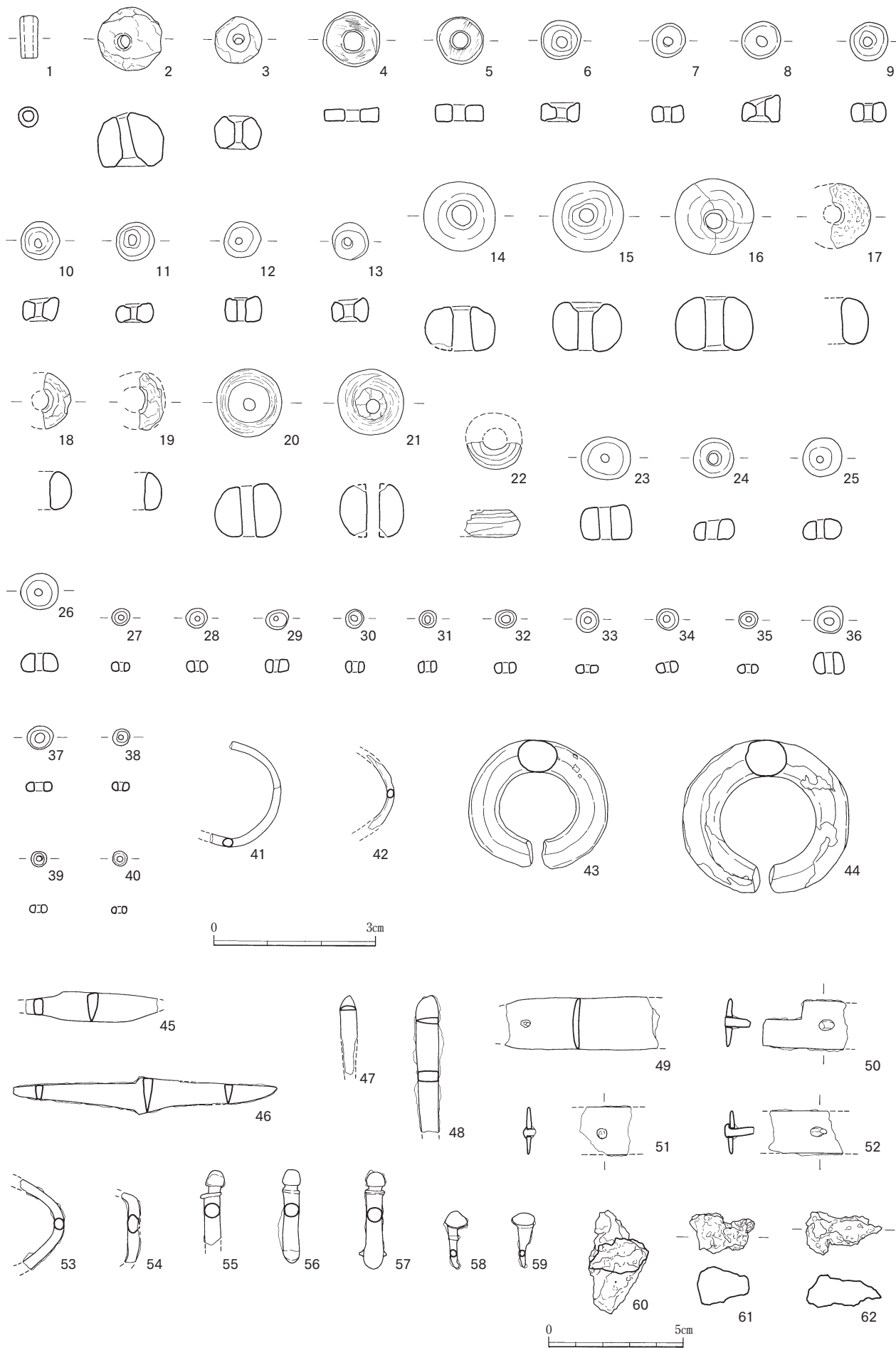
「前室出土」と注記がある。

4～13は滑石製。3は形状が整うが、4は図で見る以上に厚さにむらがあつて、断面位置によっては台形となる部分がある。6・8などのように孔周縁をくぼめるものは滑石製として良いのであるが、7・9は色合いが不鮮明でガラスの風化したもののようにも見える。

14～16は濃緑色半透明のガラス玉で、直径12～14mm、高さ8～10mmとなる。17～19は明緑色を呈し、器表がすべて剥がれたようになって非常に荒れている。20・21は17～19と同類の遺存状態の良いものと思われる。明緑色半透明で、本来的に器表がざらつく。22はやはり同類の欠損品か。これは孔を中心に皺が入り、部分的に銀化する。23～29は紺色、30～35は淡青色、36～40は水色となる。

金属製品(図版46、第13図41～59)

41は半欠の耳環であろう。錆による膨れ、緑青は見えず、灰白色となる。分析を行っていないが、銀環であろう。42も同様の形状で、これには緑青が見えるが錆による膨れはない。



第 13 图 Ⅲ - 1 号墳出土玉類・金属製品等実測図 (1/1、1/2)

43は重量感があり、全面に緑青が吹く。わずかに金色が覗き、表面の破れはない。44は表面の多くの部分が破れ、緑青が吹き出す。これも重量感がある。この2点の耳環は前室出土。

45以下は鉄製品である。45・46は刀子。45は切先と柄尻を欠く小型品。46は身がほぼ完存。全長9.7cm、刃部長5cmを図る。47・48は鉄鏃片。47は刃部と茎の境が不明瞭となる小型品で、片丸造りである。48も同様に境界が不明瞭で、これは片刃矢式となる。

49～52は幅2cmの鉄板を緩やかに曲げたもので、鋳をもつ残片が数点ある。馬具皮金具の一部か。

53は直径4mmほどの鉄棒を円形に曲げたもの、54は図上下両端で屈曲する鏃のような形状を思わせる小片で、いずれも用途は判らない。

55～57は両端を球状にし、その付け根を細くする弭金具。ほかに残欠が3点あって、6点を採取している。58・59は全長2cmほどの鋳で、頭部は本来円形を呈する。

60～62は墓道出土の鉄滓で、出土状況の詳細は確認できていない。60は茶褐色に錆びているが軽い。61・62は空隙が多く、さらに軽い。いずれも磁石には反応しない。

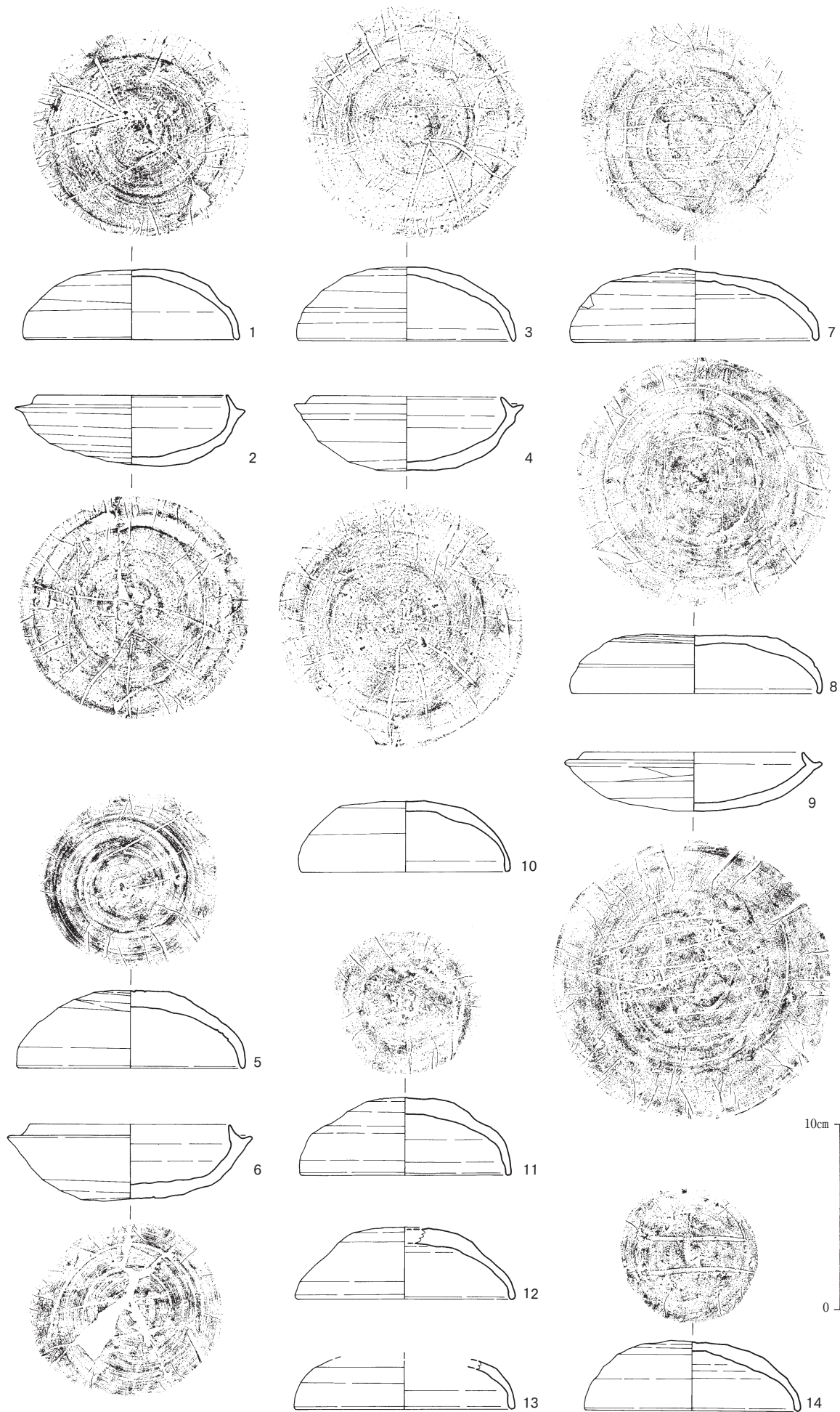
土器 (図版46～50、第12・14～26図)

墳丘各所から出土したので、出土地点ごとに報告する。

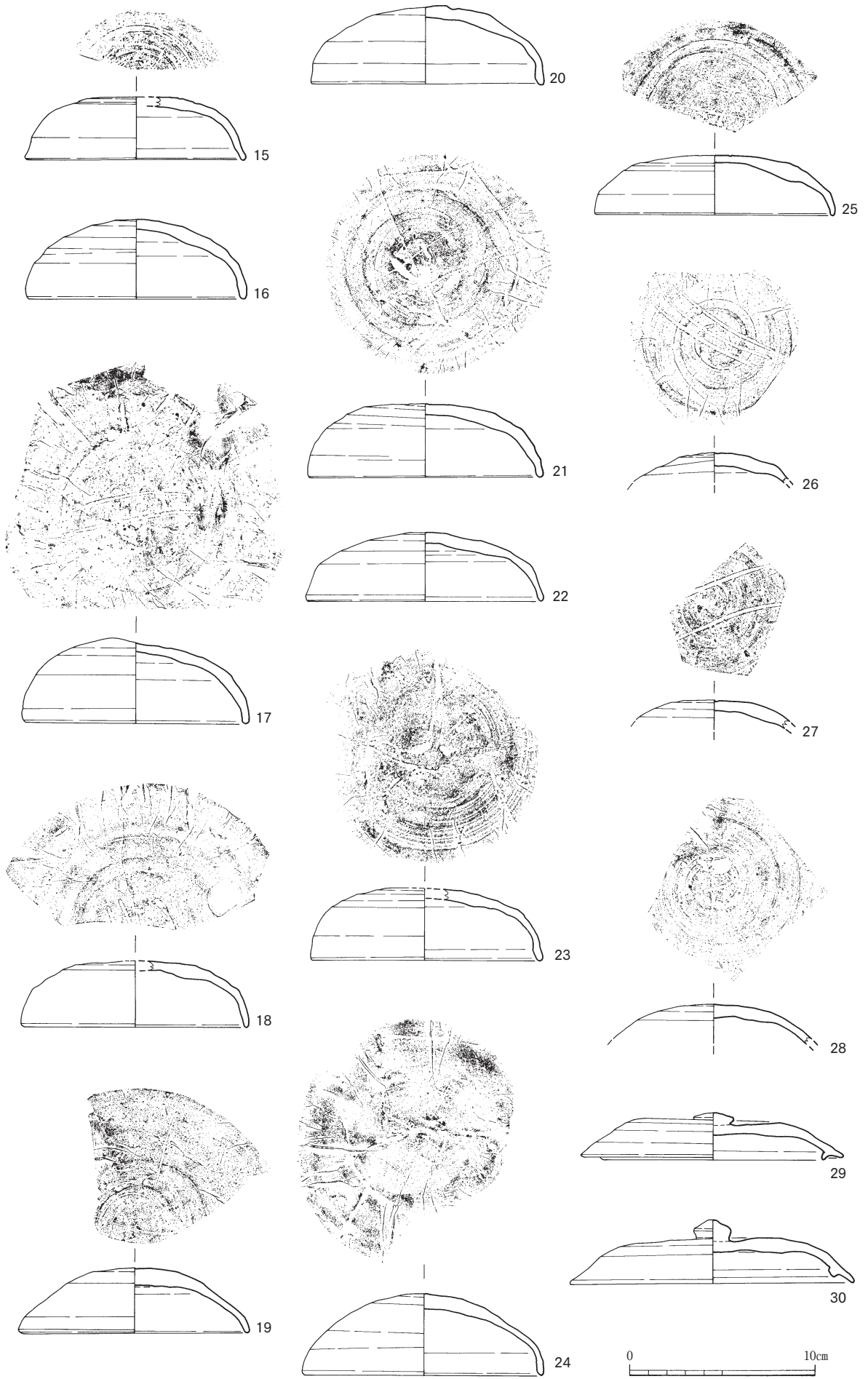
墓道 (第14図～第20図88・第25図130・第26図132) 大部分が須恵器の小型品で、蓋杯のうち1～4、5・6、7～9はそれぞれ共通する篋記号や特徴から見てセット関係にあるものと思われる。1～3はいずれも外面が灰被りのため黒色化し、原体に植物の柔らかい茎を使用したような内面の仕上げ撫での粗雑さに特徴がある。2の受け部に焼成時の熔着が見られるがそれは蓋と一致しない。4も篋記号や内面の仕上げ撫では共通するが、この外面は灰被りのために灰黄色に近い。法量もほぼ同じである。5・6は全体に肉厚となるが、外面の回転篋削りはとても丁寧になされる。焼成が甘く生焼けに近い。7～9は先の6点より口径が大きい、器高は同程度かもしくは低くなる。胎土は良好だが、作りは雑である。これらは7が口縁部付近の1/2を欠くほかはほぼ完形に近い。

10は口縁部の2/3が残存する。胎土良好で、丁寧な作りであるが生焼けて器表が摩滅する。11・12は天井部が盛り上がり、肉厚となる点で个性的である。11は胎土・作りとも良好で、口縁部の3/4が残存する。天井部外面にシャープな篋記号が刻まれる。12は天井部の1/2が残存するが、口縁部付近は小片となる。13は1/4の小片。14は口縁部の1/2強が残存する。天井部に幅広の浅い平行線を刻んでいる。ほとんどの杯蓋が口縁部を内彎させているが、15は1点のみ直線的に開いて終わる。砂粒が多く浮く点も特徴的で、外面は灰を被り、焼成時の弾けが見られる。天井部に細線の篋記号が一部残る。16の口縁部は小片で、丁寧に造作されている。17は内面が灰被りし、天井部の篋記号はとてもシャープである。18は1/3の残片。胎土は比較的精良であるが、器肉の膨れ、器表の弾けが見られる1/3の残片。19は11・12同様に天井が肉厚で、直線的に開いて端部を内彎させる。20は2/3が残存。胎土精良であるが、焼成が甘い。21は完存し、天井に浅い篋記号が刻まれる。これも焼成が甘い。22も焼成が甘く、天井部外面が赤変している。口縁部が直線的に開く個性的な形状を呈し、丁寧に造られた土器である。1/3が残存。23は天井部が完存、口縁部の1/4が残存する。胎土は比較的精良であるが、焼成甘く、天井部は摩滅する。24は1/2の残片で、これも胎土精良焼成不良。天井部に弱い線で篋記号を刻む。25は小片で、丁寧に造られた土器である。天井部に細線を刻む。26～28は篋記号を刻む土器片。以上の杯蓋は口径11.4～13.6cmの範囲に収まる。

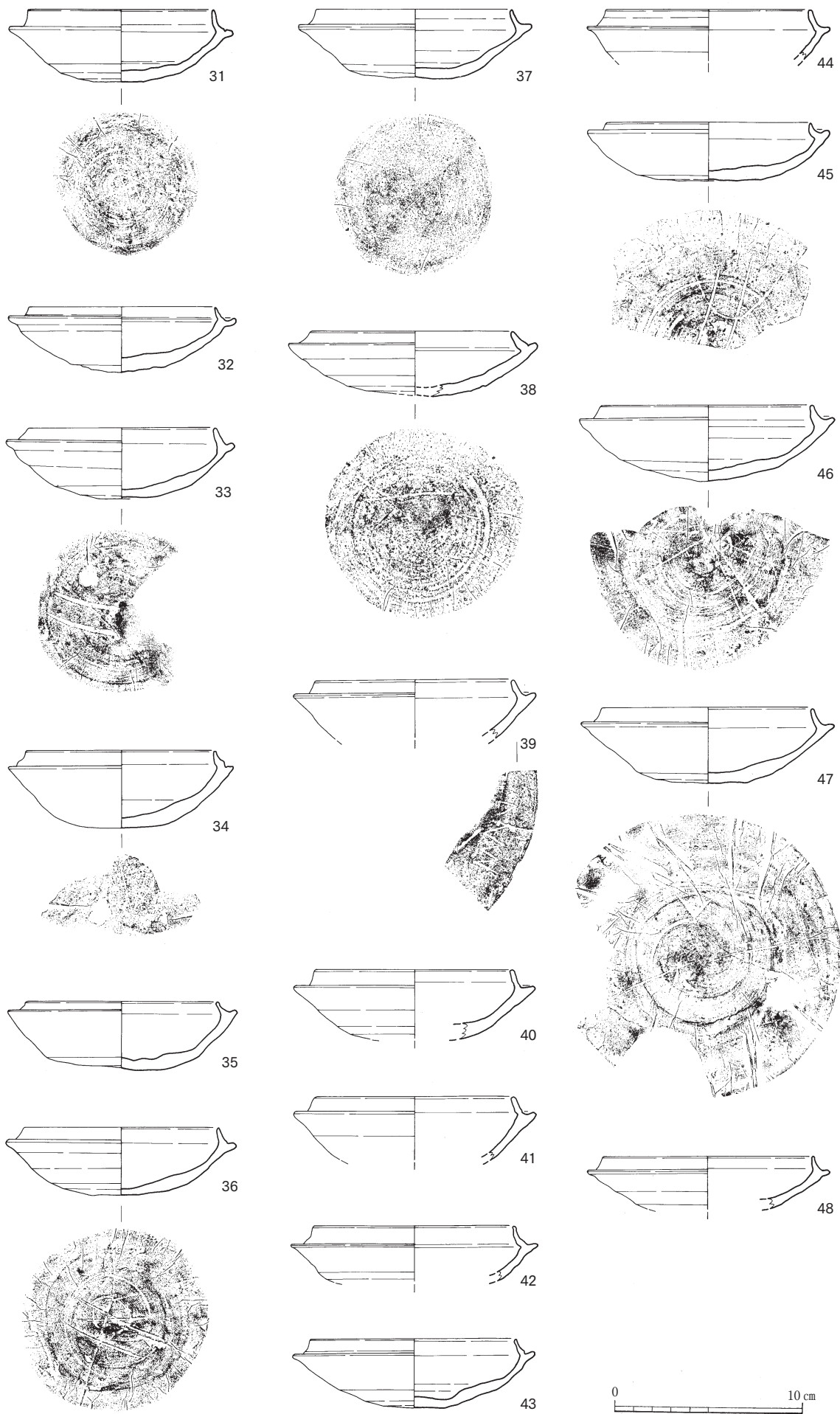
29・30はつまみと返りをもつ蓋。29は胎土粗い小片で、大きく焼け歪むために復原口径には不安がある。30は天井部の大部分が残存するが、口縁部付近は小片。これも胎土粗く、焼成も甘い。



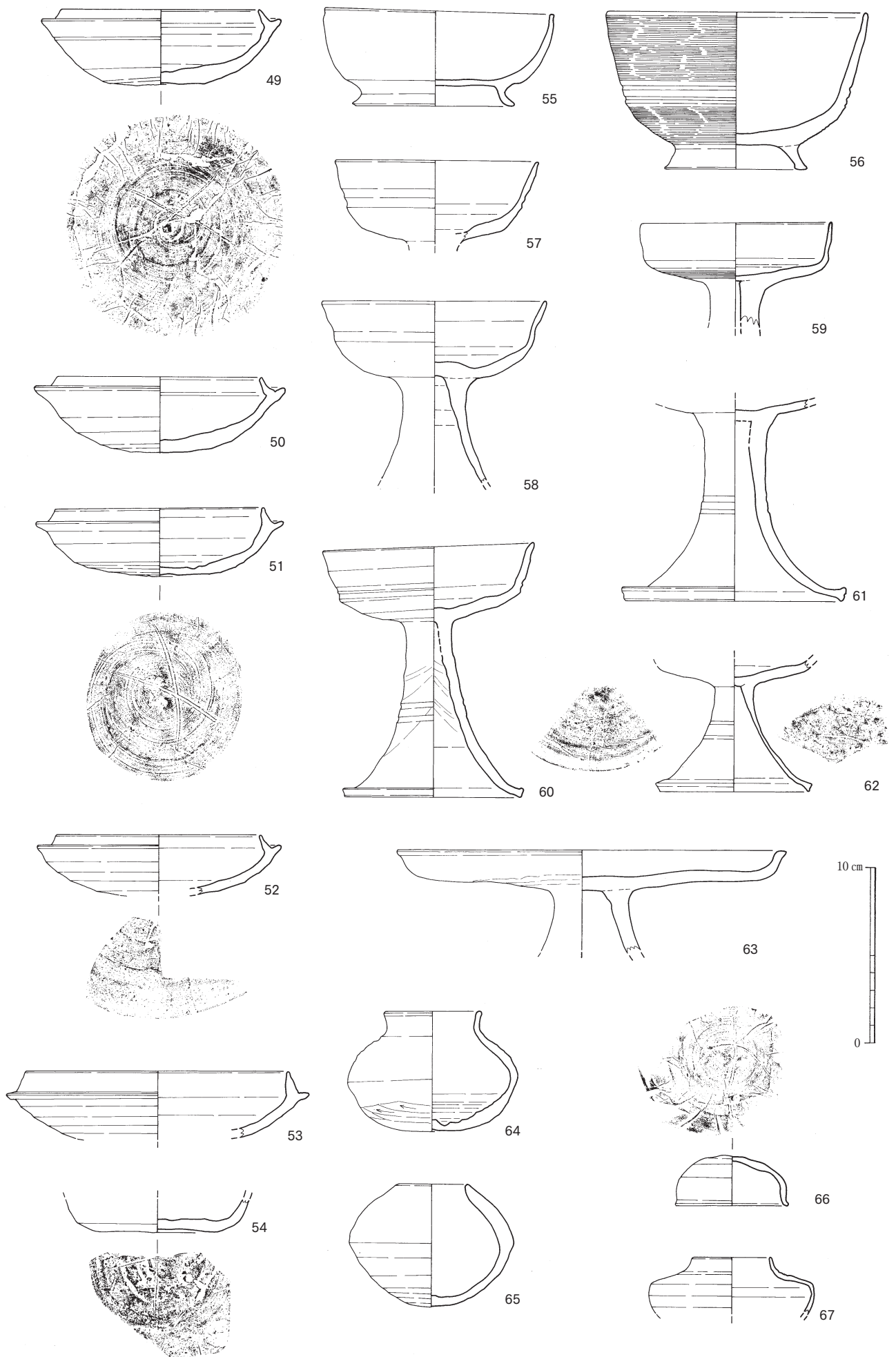
第 14 图 Ⅲ-1 号墳出土土器实测图 1 (墓道 1、1/3)



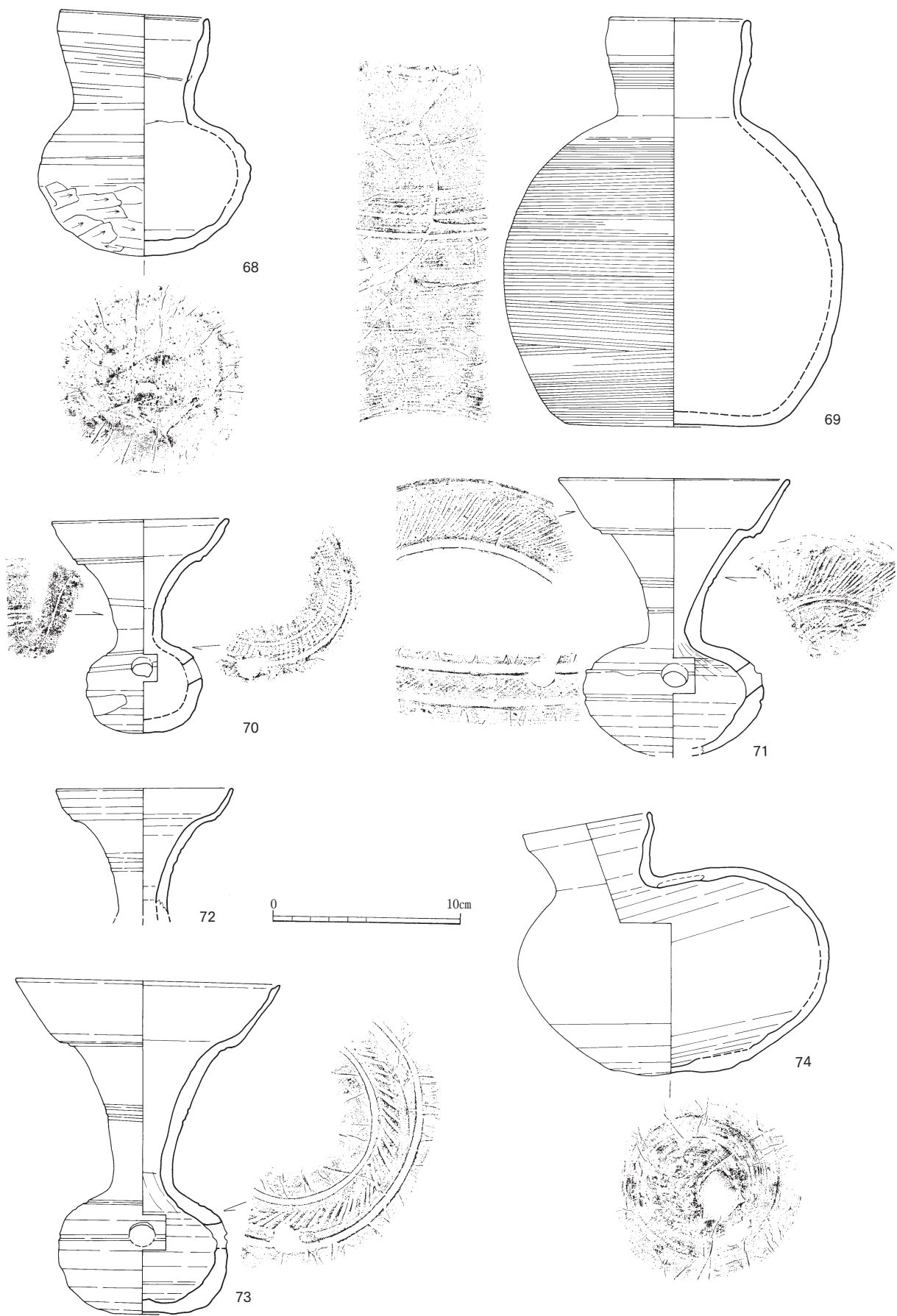
第 15 图 Ⅲ - 1 号墳出土土器実測图 2 (墓道 2、1/3)



第 16 图 Ⅲ-1 号墳出土土器实测图 3 (墓道 3、1/3)



第 17 图 Ⅲ - 1 号墳出土土器実測図 4 (墓道 4、1/3)



第 18 图 Ⅲ - 1 号墳出土土器実測图 5 (墓道 5、1/3)

31は完存し、調整は丁寧になされるが焼成甘く黄白色に近い。32もほぼ完存。外底面は篋切りの後に撫でたようで、回転篋削りではない。33は口縁部の1/4を欠く。外面は灰が飛んで表面が荒れる。34も灰が飛び、膨れや弾け、歪みが見られる。底部付近は良く残るが、口縁部は小片。35は1/3の残片で、焼け歪み、作りが雑である。36は丁寧に造られた土器で、完存。37は焼成が甘く、器表が摩滅する完存品。外底面に弱い線で篋記号を刻んでいる。38もほぼ完存し、焼け歪む。胎土に黒色粒が目立ち、外面に灰を被っている。39は小片で、受け部下に鋸歯文風の篋記号を刻む。40～42は小片。43は3/4が残存。器壁が薄く、胎土・作りともに良好である。44も小片。45は器壁が膨らみ、外面は灰を被って黒色化する。46はほぼ1/2が残存し、焼成は甘い。47は丁寧に作られた土器。48は大きく焼け歪む。49はほぼ完存。焼成甘いが、作りは丁寧である。シャープな篋記号を刻む。50もほぼ完存するが、これは作りが雑である。51もほぼ完存するとても丁寧に作られた土器であるが、焼成は甘い。52・53は小片。54は底部小片のため判然としないが、新しい形式の杯であろう。焼け歪む。これらの杯身は小片からの復原値を除外すれば、口径が10～12cmにほぼ収まる。

55・56は高台付椀。55はほぼ完存する。胎土良好であるが、調整は雑で焼成も不良である。体部下端は篋削りの後に横撫でで仕上げる。56はしっかりした高台をもつ。体部から口縁部にかけて直線的に開き、中位に凹線を二条刻んでアクセントをつけるが、全体に施文した細かいカキ目に埋もれたようになる。これも焼成は甘い。

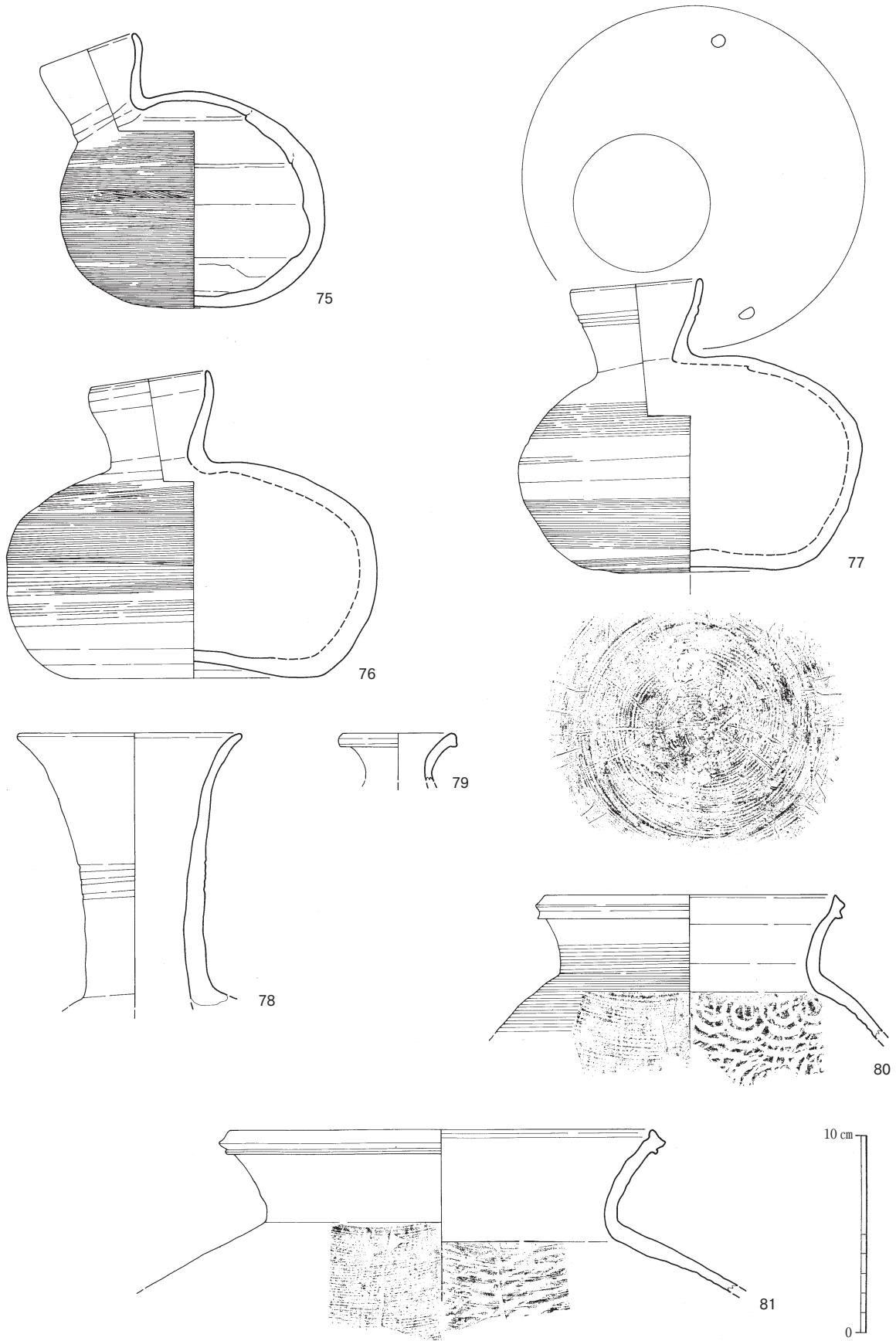
57～62は高杯。57は杯部外面中位に2条の凹線を刻むが不明瞭。全体に作りは丁寧である。58は雑な作りとなる。これも杯部中位に凹線を刻むようであるが、はっきりしない。脚部には絞り痕が見えるが、装飾はない。59は杯口縁部が直立する。これは丁寧に作られている。60は口縁部の一部を欠くが、全体を覗うことができる。杯部は外面下位に甘く幅広い凹線を2条刻み、屈曲部は稜線をもつ。脚部は絞り痕が残るが、中位にこれも不明瞭な凹線を2条刻み、端部はほぼ直立する面を作る。焼成は甘い。61は須恵器の技法で作られているが酸化炎焼成されたもので、脚端部はシャープに造作されている。62は短脚で、全体に灰を被る。中位の凹線は不明瞭なものである。脚部内面に「十」字状の弱い篋記号が2個刻まれ、その位置は相対するように180度ほどずれている。

63は浅く大きく開く杯部をもち、口端部は水平な面となる。焼成は甘い。54の短頸壺などとともに1号墳祭祀の最終を示しているのであろう。

64は直口縁の小型壺で、体部以下は完存、口頸部は大部分を欠く。胎土・作りともに粗雑である。65は無頸小型壺で、完存する。これも胎土・作りが雑である。66は小型壺の蓋だが、セット関係は不明である。天井部は篋削りの後に丁寧に横撫でを施すようである。67は器壁が薄く、胎土精良で丁寧に作られる。

68は直口縁の壺でほぼ完存する。図で見るように粗雑なものだが、窯土が付着するなど焼成時の歪みであろう。口縁部から体部上半はカキ目、肩部に2条の凹線を刻み、底部付近は不定方向の篋削りで仕上げる。69は長胴の直口壺で、これも大部分が残存する。口頸部は内彎気味に直立し、中位に凹線を1条刻む。体部は張りが弱く、最大径部の上方に2条の凹線を巡らせるが、全体をカキ目調整するために凹線は目立たない。また、この凹線は文様帯を意識したものであろうが、施文がなされていない。拓本で沈線状に見えるものは叩きの痕跡で、体部下端付近は篋削りの痕跡が見える。焼成甘く、暗灰色～灰黄色となり器表が荒れる。

70～73は甕。70はほぼ完存する。口頸部間の稜線はシャープに造作されるが、頸部の凹線は非常に甘い。反面、肩部のそれはしっかりしている。頸部に篋記号を刻み、文様帯は櫛描刺突文で埋



第19图 Ⅲ-1号墳出土土器実測図6 (墓道6、1/3)

める。胎土は粗く、作りも粗雑である。71は口縁部、頸部、体部文様帯を櫛描刺突文で飾る。体部文様帯を画する凹線はしっかりしたもので、それ以下は丁寧に篋削りを行う。器表に焼け弾けが目立つ。72は絞り痕が目立ち、頸部に甘い凹線を2条巡らせる。73は体部文様帯に篋描斜線文を配する。凹線はいずれもしっかりしている。

74～77は平瓶。74は口縁部を小さく内折するもので、全体に灰を被る。体部下半の篋削りは丁寧になされ、細線による篋記号が刻まれる。なお、この土器は大部分が墓道から出土するが、一部はNW区テラスや表土から出土していて、本来は墓道に置かれたものでないかも知れない。75は口端部を小さく内彎させ、体部は全体を細かいカキ目で覆う。胎土粗く、外面に灰を被る。76は口頸部の位置が通常とやや異なり、平底となるが、これも体部の全体を細かいカキ目で覆っている。胎土粗く、作りも粗雑である。77も平底で、これも全体をカキ目で覆う。なお、上面に小さなボタン状の装飾を2個付し、外底面には篋記号を刻む。

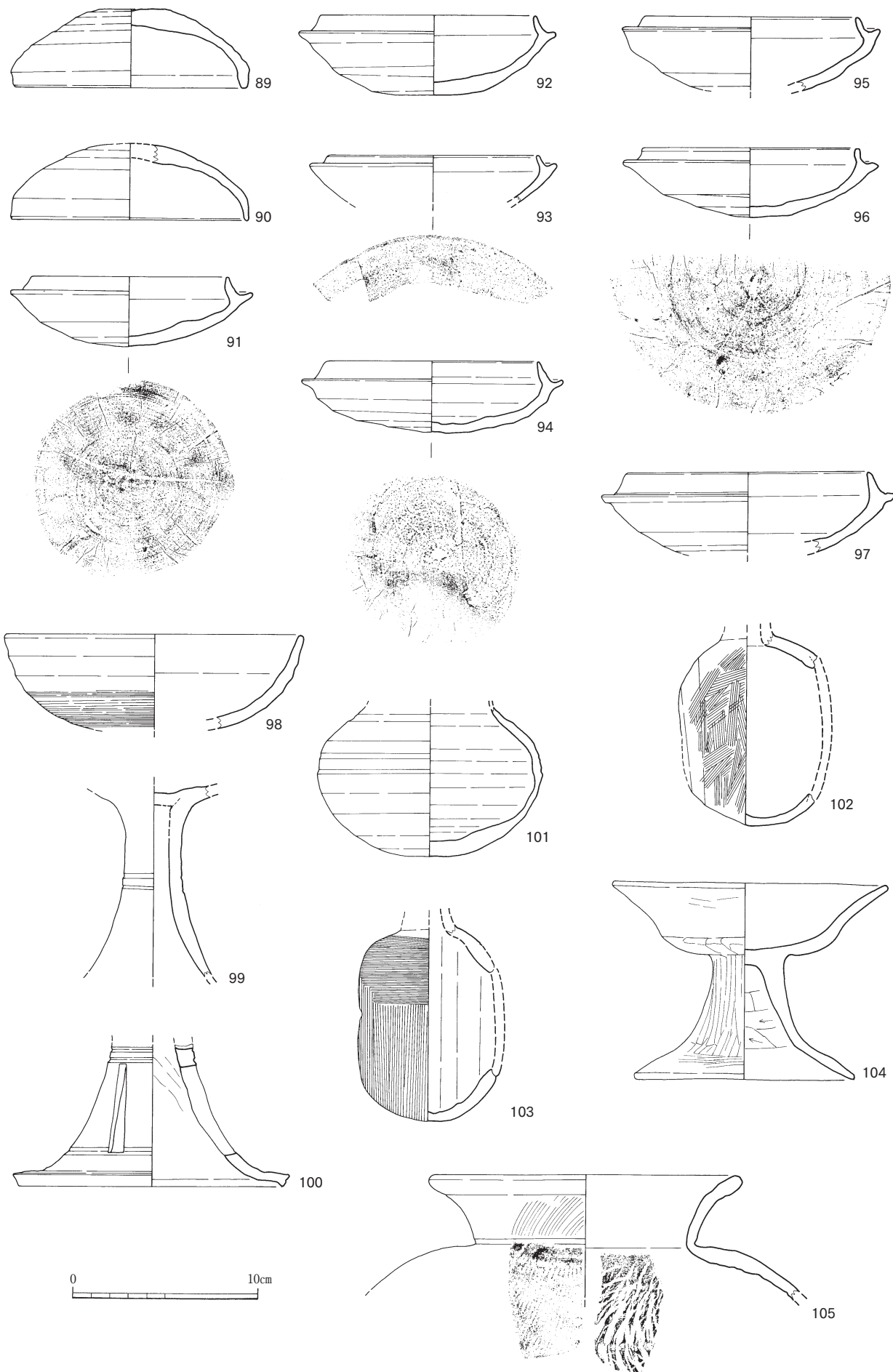
78は長頸壺の残片。中位に3条の凹線を巡らせ、口縁部は緩く開く。胎土精良だが、生焼けで黄白色～明灰赤色となって器表が摩滅する。79は小型壺あるいは提瓶の口縁部。

80～82は甕。いずれも口縁部の造作がシャープである。

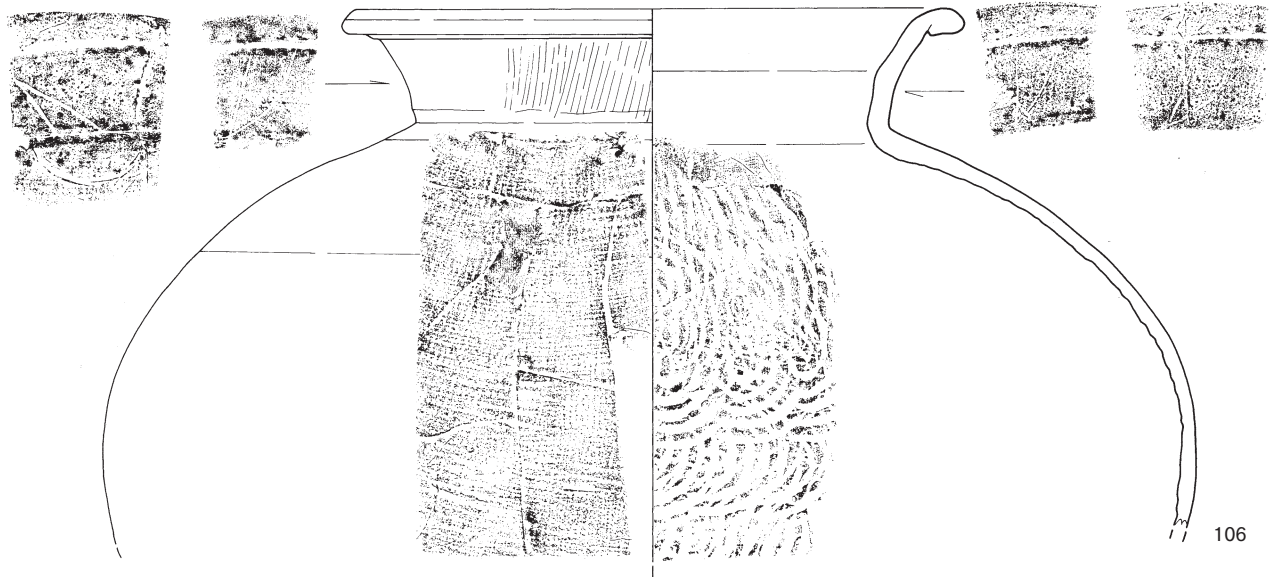
第25図130は口径17.8cm、器高25.2cmを測る。口縁部は小さく肥厚させて断面三角形とするが、



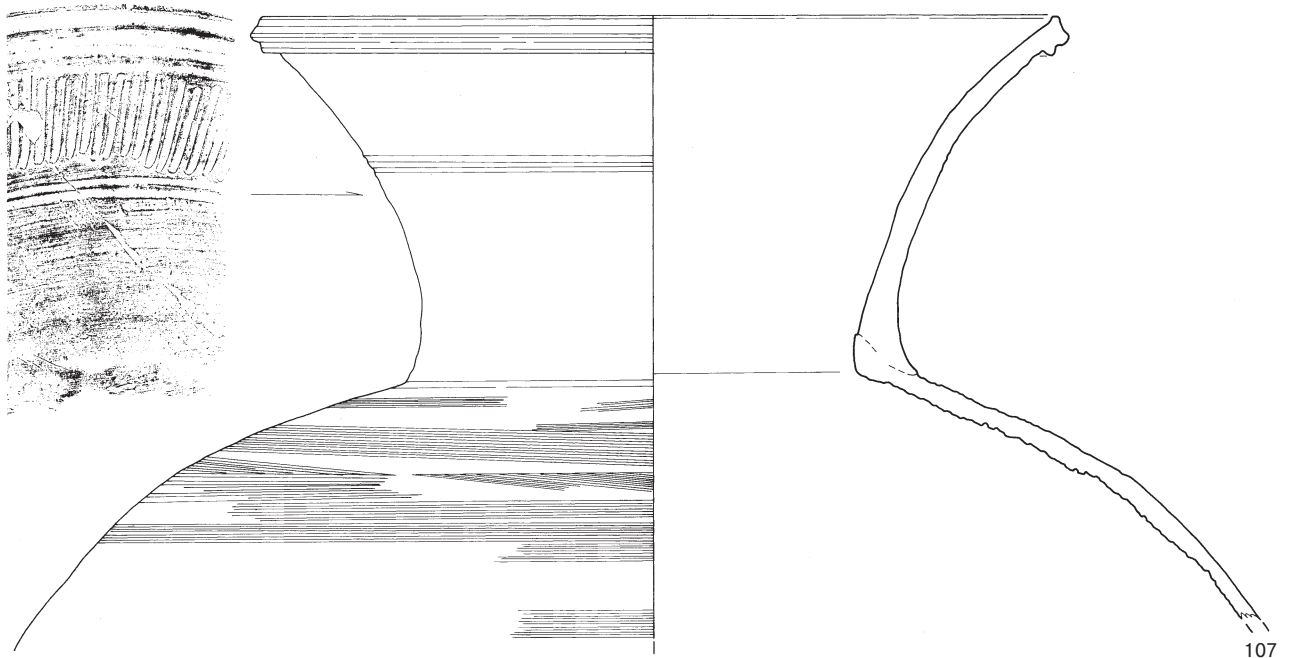
第20図 Ⅲ-1号墳出土土器実測図7(墓道7、1/3)



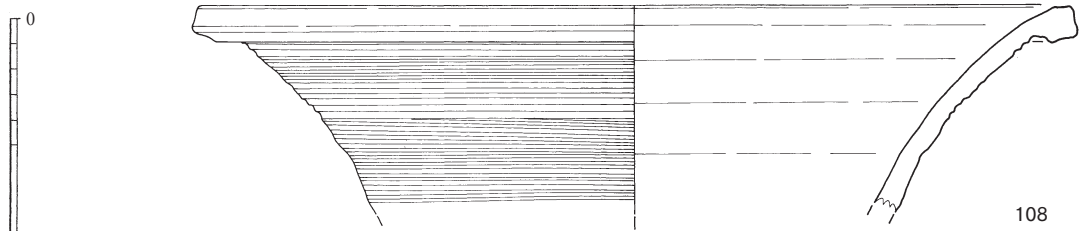
第 21 图 Ⅲ - 1 号墳出土土器実測図 8 (墳丘 SW 区 1、1/3)



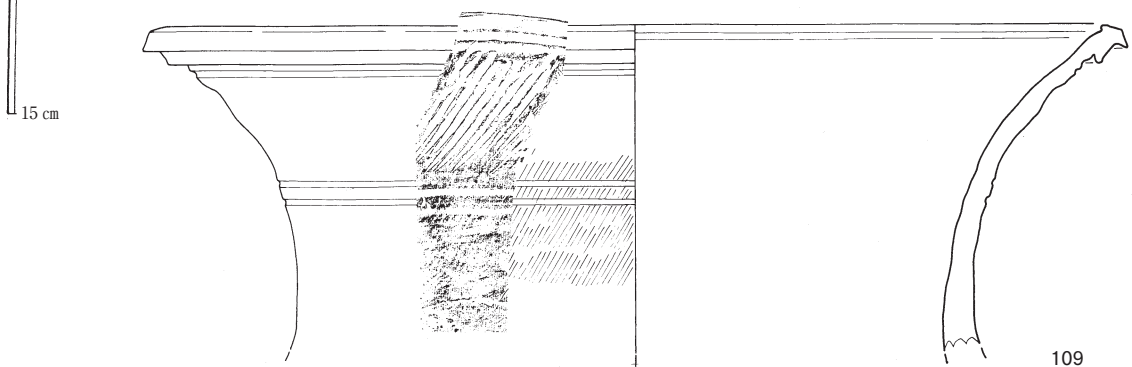
106



107



108

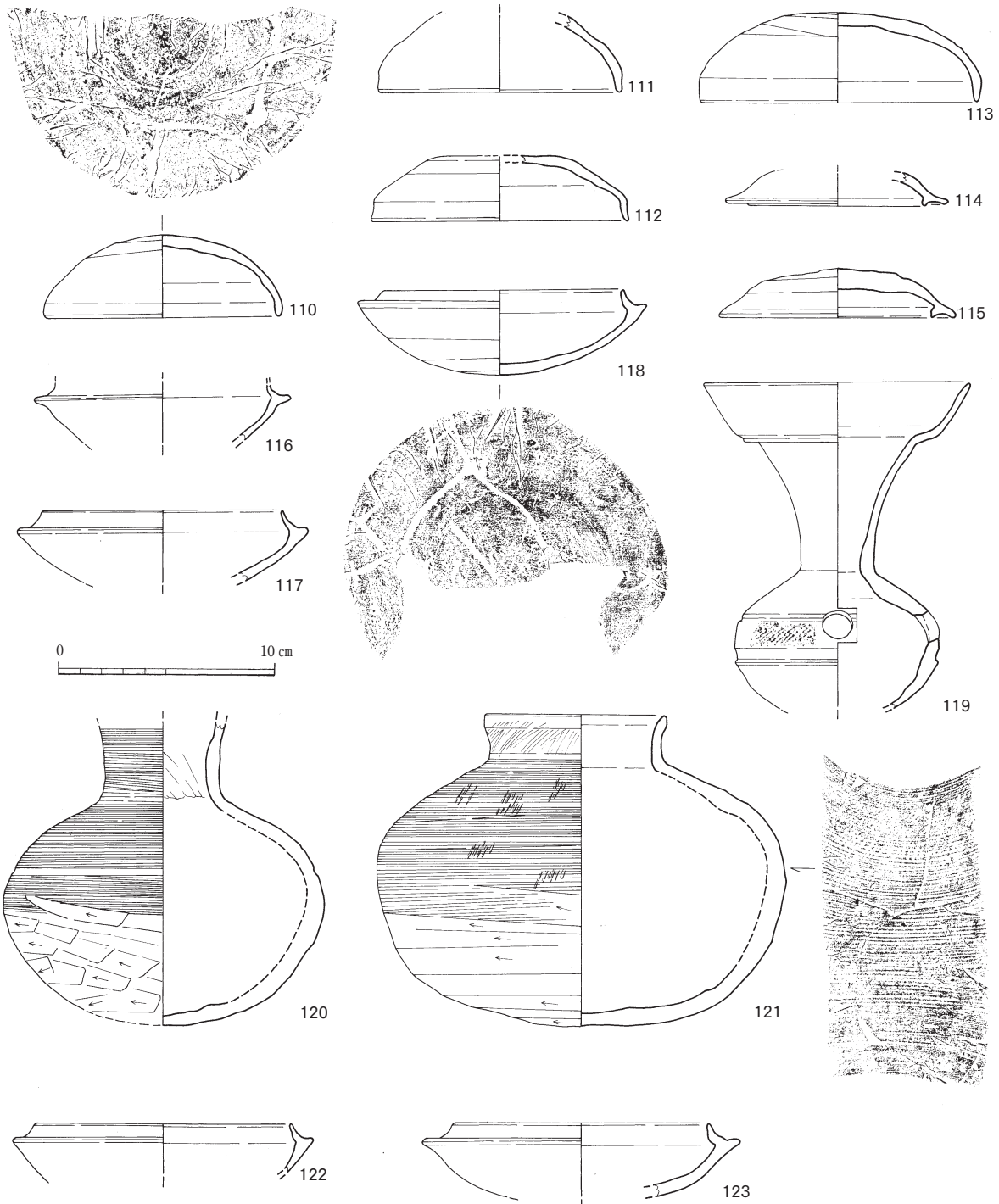


109

第 22 图 Ⅲ - 1 号墳出土土器実測図 9 (墳丘 SW 区 2、1/3)

後述する131によく似ている。焼成は甘い。第26図132は口径21.8cm、器高41.8cmを測る。テラス上および墓道から出土している。器表に膨らみや弾けが見え、頸部外面は黒色化、体部には自然釉が垂れた痕跡が残るが、自然釉そのものはほぼ飛んでいる。

83～88は土師器。83は脚付壺で、赤色顔料は使用されていないが赤く焼かれている。胎土は精良で、篋磨きを多用する。体部最大径部付近に黒斑がある。84は脚部は完存、杯部の1/2ほどが残る。杯部の屈曲は弱く、口端部はつまむように仕上げる。これも全体に篋磨きを多用するが、やや粗い。85は径が大きい脚部片で、胎土精良。



第23図 Ⅲ-1号墳出土土器実測図10(墳丘NE区・NW区、1/3)

墳丘SW区（第21図89～109・第25図129・131） 墳丘SW区の盛土除去に際して出土した土器群で、ほとんどが「表土」と注記がある。ただし、92は一部が墓道から、93・96・97・102・104・第25図131は同区墳裾から出土したものである。

89は焼成が甘く、口縁部付近の1/3を欠く。口端部が肥厚し、直立する。90は1/3が残存。胎土粗いわけではないが、器表に砂粒が浮いてざらざらする。口径はいずれも13cm弱である。

91は胎土精良で、丁寧な作られた土器。92は器表のざらざら感が90と共通することから、両者は本来セット関係にあったものであるかも知れない。これは仕上げが丁寧である。93は図示部の1/3が残存し、ごく繊細な篋記号の一部が残る。94は2/3が残存。胎土精良で、篋削りは丁寧になされる。95は1/2の残片で、これも胎土は良好である。96は肉厚で、細部のシャープさを欠くが、胎土・作りともに良好。外面に灰を被り、篋記号も不明瞭となる。97は小片。以上の杯身は小片の97を除けば、口径が10.8～11.9cmとなる。

98は高杯であろうか。造作は丁寧であるが、焼成が甘く灰黄褐色となる。外面下半はカキ目で仕上げる。99の脚部も焼成不良で灰黄褐色となり、部分的に赤みを帯びる。100は二段透孔の脚部片で、三方に配する。中位の凹線はしっかり刻まれるが、透孔下端の凹線は甘い。

101は小型壺であろう。最大径部付近に甘い凹線を2条巡らせる。胎土は良好であるが、作りは粗雑と言って良い。ただ、底部の篋削りは丁寧に施される。

102・103は小型提瓶。102は刷毛目を多用する。

104は土師器高杯で、脚部は完存するが、口縁部付近は小片となる。杯部上半は強く外彎し、下半との境に稜線はなく、丸く移行する。脚部も稜線は明瞭ではない。

105は口縁部をわずかに丸く肥厚させる甕で、頸部外面には叩き痕が見える。106は墳丘および南墳裾から出土。口頸部は短く、口縁部は大きく外反する。頸部の4箇所に同じようなモチーフの篋記号が刻まれ、外面は全体に灰を被る。107は墳丘・周溝・墓道から出土したものが接合し、本来は墳丘上に置かれていたものと思われる。口頸部が長く延びるもので、図示部はほぼ完存。細部の作りや施文は丁寧になされている。108は墳裾出土で、外面は黒色化、口縁部内面に灰を被る。109は墳丘・墳裾・周溝などから出土し、これも作りはシャープで、黒色化する。

第25図129は一部がテラス上、多くが墓道から出土した甕で、口径17.6cm、器高26.8cmを測る。口縁部は大きく外彎し、断面三角突帯を付すが、細部の作りは雑である。頸部に同種の篋記号を3個、ほぼ等間隔で刻む。同131は墳裾・墓道から出土していて、やはり墳丘上に置かれたものであろう。口径17.5cm、器高30.5cmを測る。口端部は肥厚させて断面三角形とし、これは細部がシャープである。焼成甘く、一部が黄白色となり土師質に近い。

墳丘NE・NW区（第23図110～123） 墳丘北側には墳丘を壮大に見せるテラスが付設されていたが、そこから出土したのが110・111・117・120・121であるが、120・121の大部分は墓道に転落していた。122・123はNE区出土である。そのほかはNW区盛土除去に際して出土したものである。

110は1/2が残存するが、焼成が甘く器表が摩滅している。111は外面が黒変する1/4の残片。112は器壁が薄く形状も特徴的で、胎土・調整など丁寧に作られている。これは小片。113は口縁部の1/4を欠く。胎土粗く、焼成も甘い。以上の杯蓋は口径11.1～13cmの大きさである。

114・115は返りをもつ蓋で、114は焼け歪む小片。胎土精良で丁寧に作られた土器である。115は1/3が残存する。胎土精良で焼成は甘い。天井部外面は撫でて仕上げるようである。

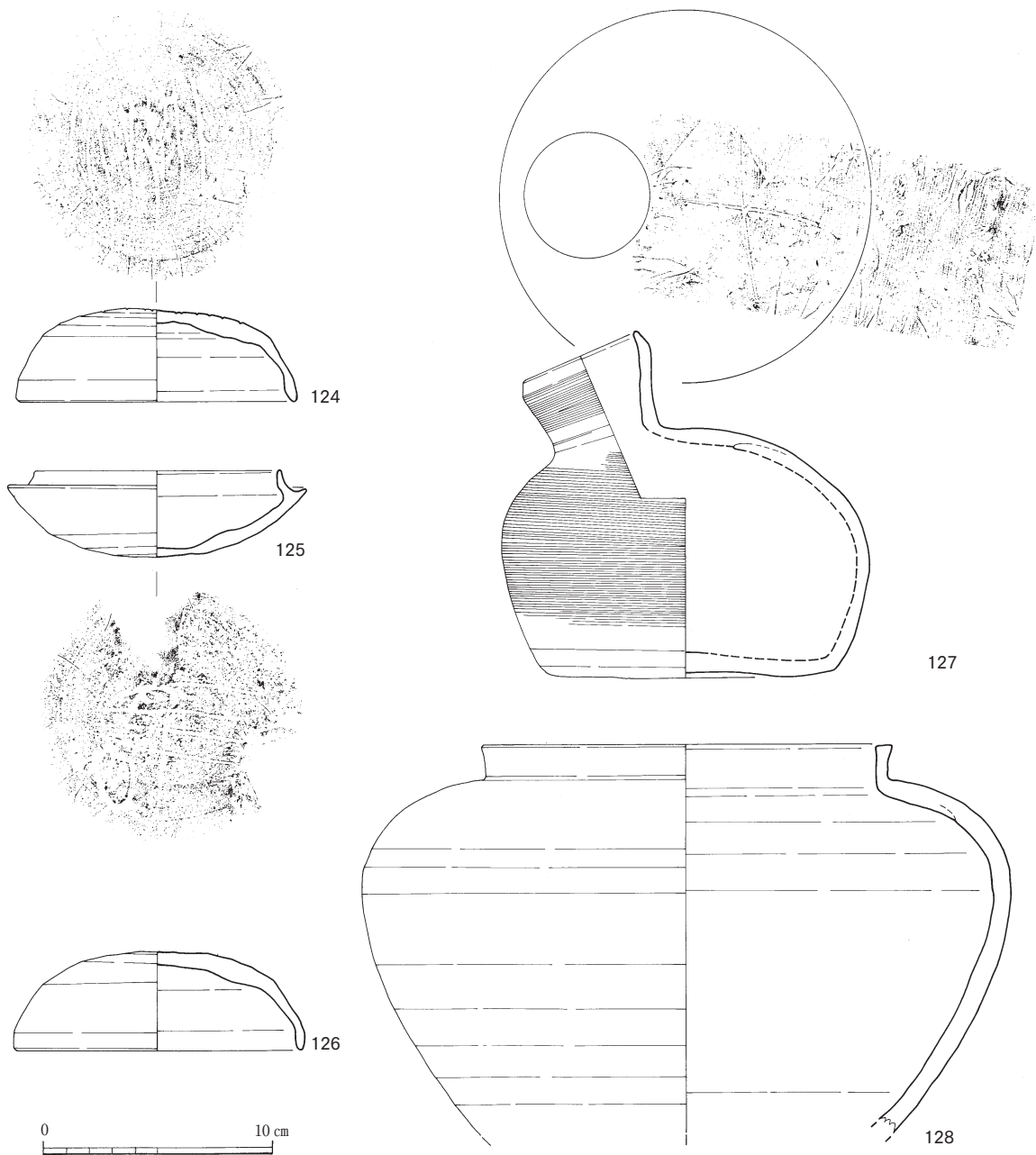
116は口端部を欠くほかは1/3が残存。丁寧に作られる。117は1/2の残片で、これも丁寧に作ら

れる。118は1/4を欠く。焼成が甘く、器表が荒れている。外底面に細く浅い篋記号が残る。

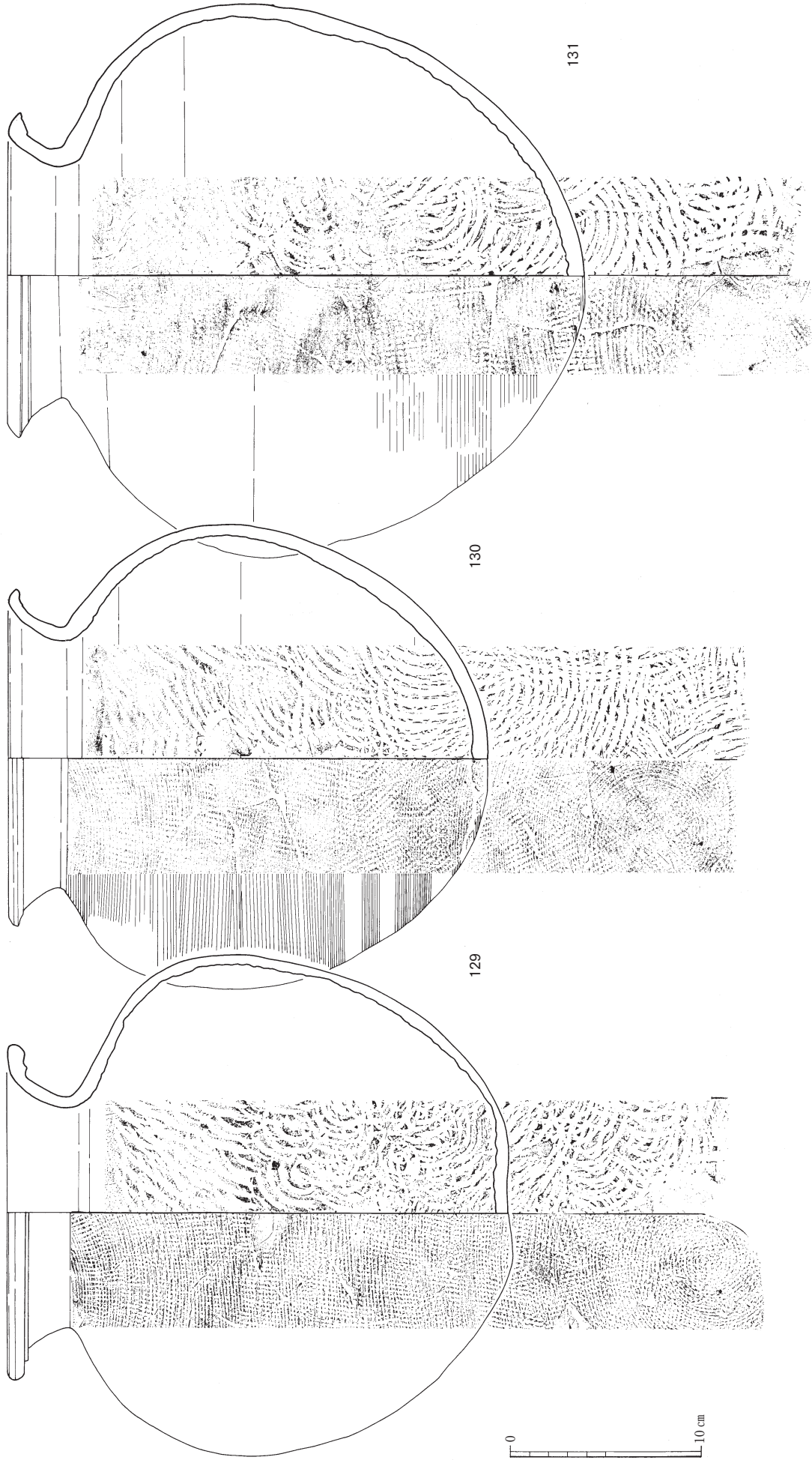
119は薄手の甗で、胎土は粗いが作りはとても丁寧である。凹線・稜はシャープで、体部最大径部付近に櫛描刺突文を巡らせる。頸部は無文で絞り痕が著しい。

120は球形丸底の体部をもち、長い直口縁をもつものである。体部下半は一見不定方向のようにも見える粗雑な回転篋削りを施し、以上をカキ目で仕上げる。肩部に2条の凹線を刻むが、カキ目で目立たないものとなっている。胎土粗く、図示部はほぼ完存する。121もほぼ完存する短頸壺で、これも胎土が粗い。頸部外面の調整痕は刷毛目のように見える。体部下半は丁寧に篋削りを行い、以上は叩きの後にカキ目を施す。

122は胎土精良で、丁寧に作られたものであるが小片。123も1/4ほどの残片である。墳丘背面に



第24図 III-1号墳出土土器実測図11（周溝ほか、1/3）

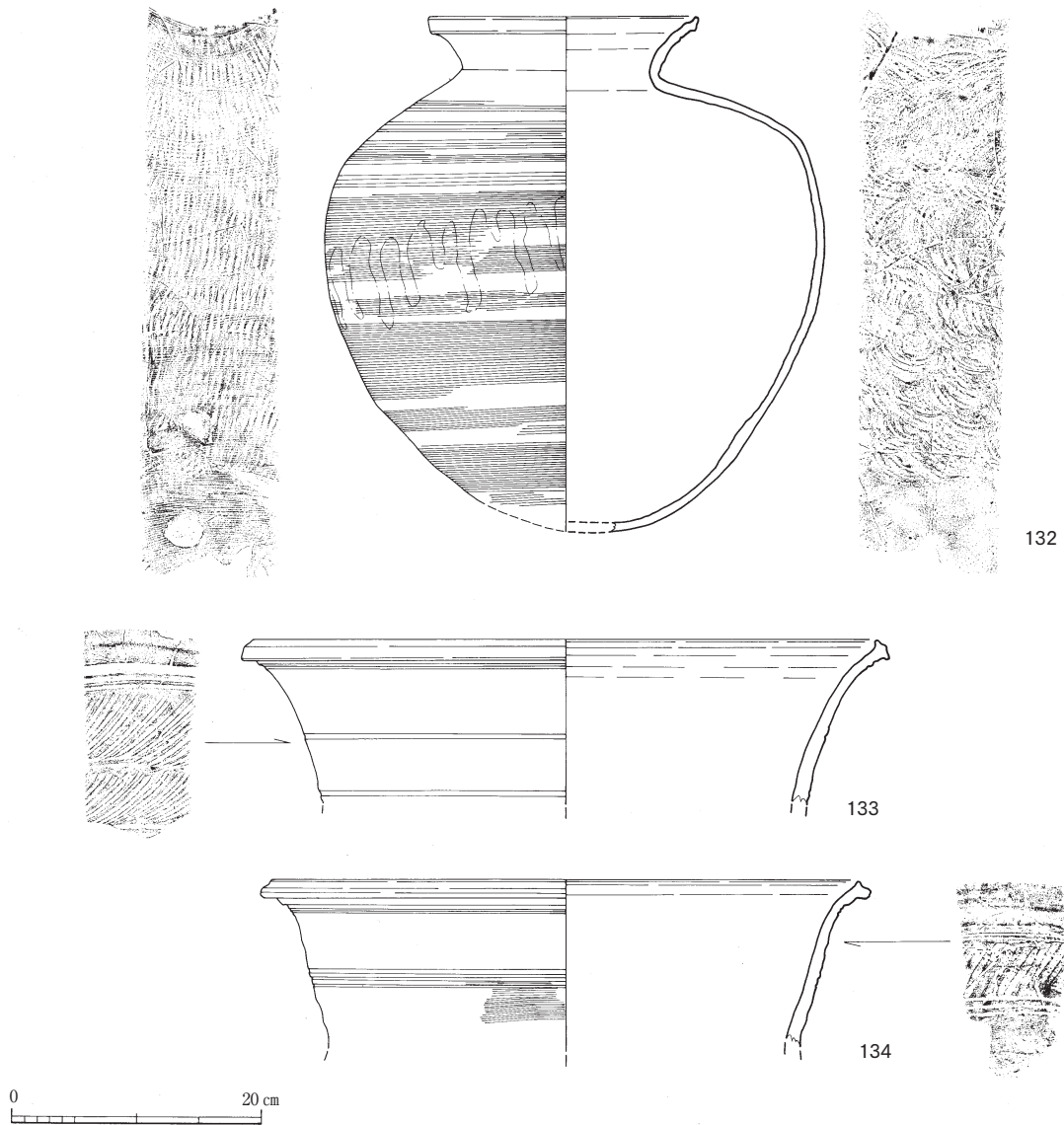


第 25 图 Ⅲ - 1 号墳出土土器実測図 12 (甕、1/3)

当たる西半では土器はほとんど出土していない。

主体部入口南側（第24図124・125） 天井石の脇に2枚が重ねて置かれた状態で出土したもので、主体部構築時の祭祀行為によるものと思われる。いずれも灰被りが顕著で、身にはほかの土器片が熔着している。天井部・底部外面にはしっかりした篋記号が刻まれていて、モチーフが共通する。蓋は口頸12.4cm、身は口径10.8cmを測る。

周溝南辺（第24図126～128・第26図133・134） 南Tr.付近の周溝から出土したものである。126は1/3の残片で、胎土精良、丁寧に作られている。胎土に溶融した黒色粒が多く含まれている。127は平底半球形の体部をもつ平瓶で、ほぼ完存する。体部下端付近から外底面にかけては篋削りで仕上げ、以上はカキ目で埋める。上面に小さなボタン状の装飾を2個付したようだが、剥落して痕跡を留める。その間にしっかりした篋記号を刻む。焼成は甘く、赤～茶系に発色する。128は短頸壺で、高台をもつものであろう。口縁部は短く直立し、端部は平坦な面となる。肩の張りが強く、最大径部から下位は丁寧に篋削り、以上は篋削りの後に撫でて仕上げる。胎土精良で、とても丁寧



第26図 III-1号墳出土土器実測図13（大型甕、1/6）

に作られた土器である。1/3が残存する。

第26図133は復原口径50cmの大甕で、1/6ほどの残片が周溝表層から出土した。口縁部を上下に肥厚させて加飾し、頸部を2段以上に分割する。施文の原体は幅広く、植物の茎のようなものであろうか。胎土は・作りは比較的良好である。134は周溝南西辺・南Tr・墓道などから出土した大甕片で、復原口径は49cmを測る。頸部は直線的に伸びて口縁部付近で大きく外反し、口端部はやや複雑に加飾する。比較的シャープな凹線を巡らして文様帯を画するが、文様は幅広く浅い斜線文である。全体に灰を被る。

4) 小 結

直径15mほどの円墳に復原でき、北側にはテラスを付して段築としていた。発掘調査を行っていないが、1号墳の東、林道に切られる古墳と並んで墳丘規模から見て本古墳群中の盟主的な位置を占めるといえる。このⅢ群が位置する丘陵から南は隘路となっており、現在では大型団地となっている山塊の間には全く平地がない地形が続く(第2図参照)ことから、ここを葬地とした人々は隘路の北側で生活したものと思われる。本古墳群の中でもっとも平野(生活域)を望める立地を占めるのが1号墳およびその東に連なる古墳であることから、盟主的な位置付けは占地の面からも推測できる。さらに、墳丘中の列石は観音山古墳群のみならず県下でもあまり例のない構造である。

主体部は徹底的な攪乱を受けていて、副葬品はわずかしかなかった。墓道出土の鉄滓小片は被葬者が鍛冶に関係していたことを暗示するものであろう。それ以外の出土品で特記すべき事項は乏しいが、被葬者が弓を使用していたらしいことは窺える。また、皮金具とした鋏を伴う板状鉄製品が馬具の一種であるならば、観音山古墳群中で馬具を副葬した古墳の例が少ないことから、集団内ではある程度上位の階層にランクされていたものと思われる。

古墳の築造時は、第24図124・125に図示した主体部入口南の天井石付近に置かれた蓋杯が示していると考えている。杯身は口径10.8cm、蓋は口径12.4cmで、いずれも外面中央付近を篋削りで仕上げている。ⅢB～ⅣA期に比定できるが、体部が扁平である点でⅢB期の特徴を残すと言える。本墳に伴うと考えられる土器群中には、返りをもつ杯蓋は出土しておらず、ⅣB期のある段階で使用が終了したものと思われる。その後、墓道出土の高杯(63)・長頸壺(78)や周溝出土の短頸壺(128)など8世紀代に比定できる一群があるが、これらは後述する古代墳墓造営に伴って供献されたものであろう。



Ⅲ - 1号墳主体部内現況

2. 平石Ⅲ - 2号墳

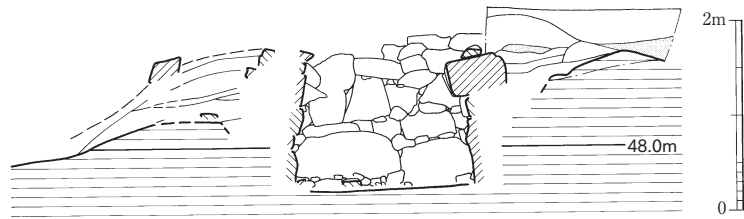
1号墳の南東に隣接する。すでに天井石は除かれて壁体が覗き、主体部を囲む列石が露出していた。厳密には主体部の大部分は用地外に位置するが、工事の影響を受ける可能性が高いことから主体部の調査を行ったが、墳丘の東半部は全面的な発掘調査を行っていない。

1) 墳丘 (図版10・11、第27図)

現況で直径5mほどの円墳を思わせたが、高さは1mほどに過ぎない。

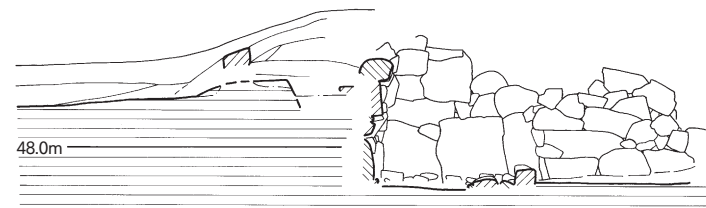
i) 北 Tr.

盛土は0.6mほどに過ぎず、列石の下位には白色系の締まった土を使用している。墳裾は不明瞭であるが、列石北0.6m付近から北側には黒色土が堆積していて、図に点線で示した付近を墳裾としてよからう。



ii) 東 Tr.

主体部中心から約3mの地点までトレンチを開けたところ、盛土は同2.5mの地点から始まり、その厚さはやはり最高



第27図 Ⅲ - 2号墳墳丘土層実測図 (1/80)

で0.6mほどであった。地山直上に白色系の締まった土を置き、上部に黒色系の土を使用している。なお、盛土の一部を覆う黒色土が堆積していて、墳丘の東側、上位斜面に周溝が掘削されていたものと思われる。

iii) 西 Tr.

盛土は主体部中心から3.3mの付近から始まり、地山直上および中位に白色系の緻密な土を使用している。厚さは最大で0.6mほどである。

以上の観察から、東西長5.8m、南北長は盛土北端から主体部前端までで5.6mほどとなり、5.7mほどの円墳としてよからう。東側の上位斜面のみに周溝を備えている。

iv) 列石

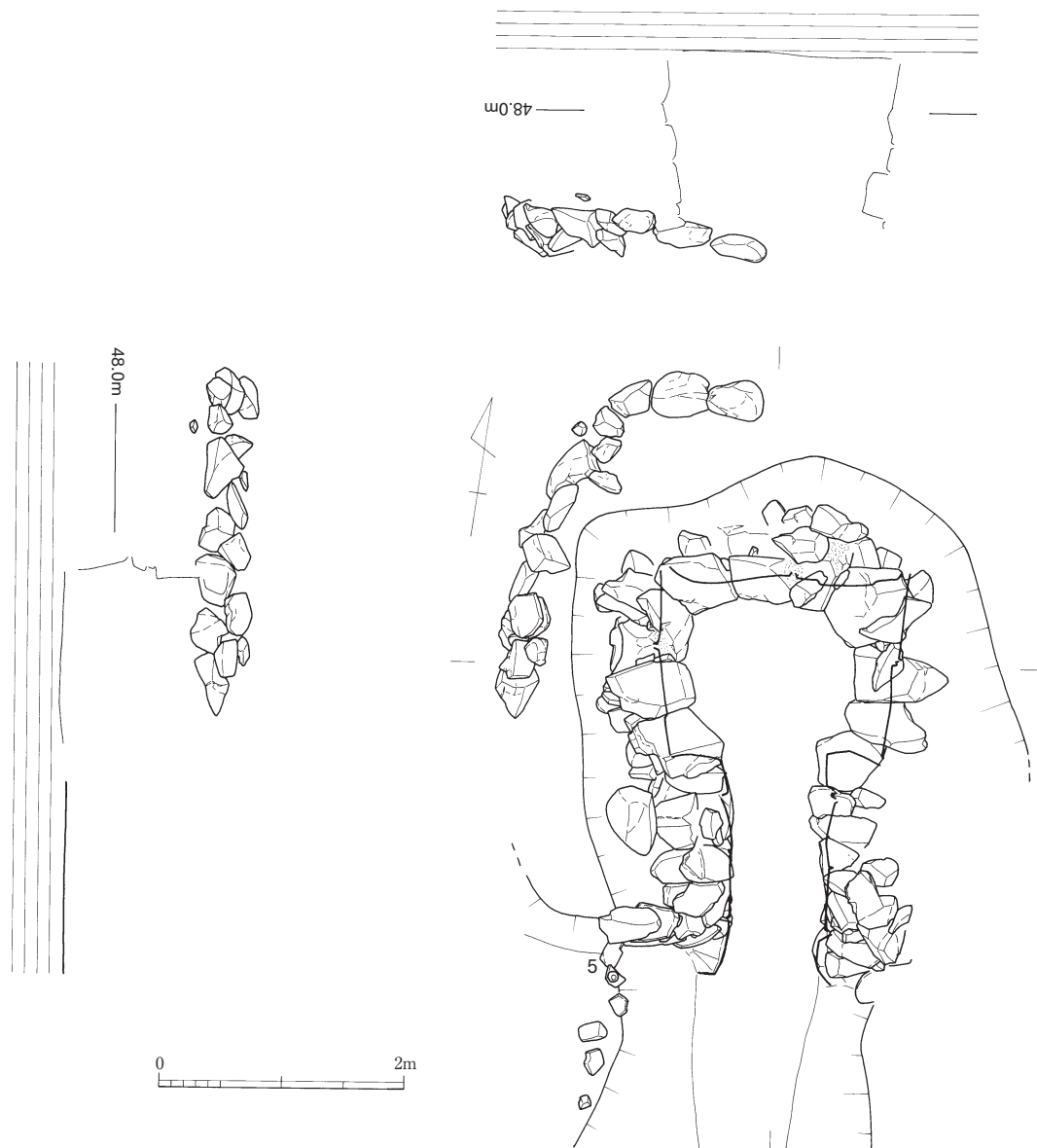
調査前から墳頂部に露出していたが、発掘調査の結果、それらは主体部堀形外周に沿うように置かれていたことがわかった。1号墳と異なって1段のみであるが、配列が乱れていないことは、これも本来は盛土中に構築されたものであったのかも知れない。

2) 主体部 (図版10・11、第28～30図)

主体部は単室横穴式石室で、天井石はすべて失われ、現況で敷石の散乱する様子を覗うことができた。



第 28 図 III - 2 号墳閉塞状況実測図 (1/60)



第 29 図 III - 2 号墳主体部実測図 1 (1/60)

i) 閉塞

玄門に置かれた框石から0.4mの距離を置いて塊石による閉塞がなされている。基底部の長さは1.1mを測り、図で見るようにこの範囲は当初の形状を保つようである。縦断面台形状に積み上げたようであるが、前面、南側の上部は崩落する。

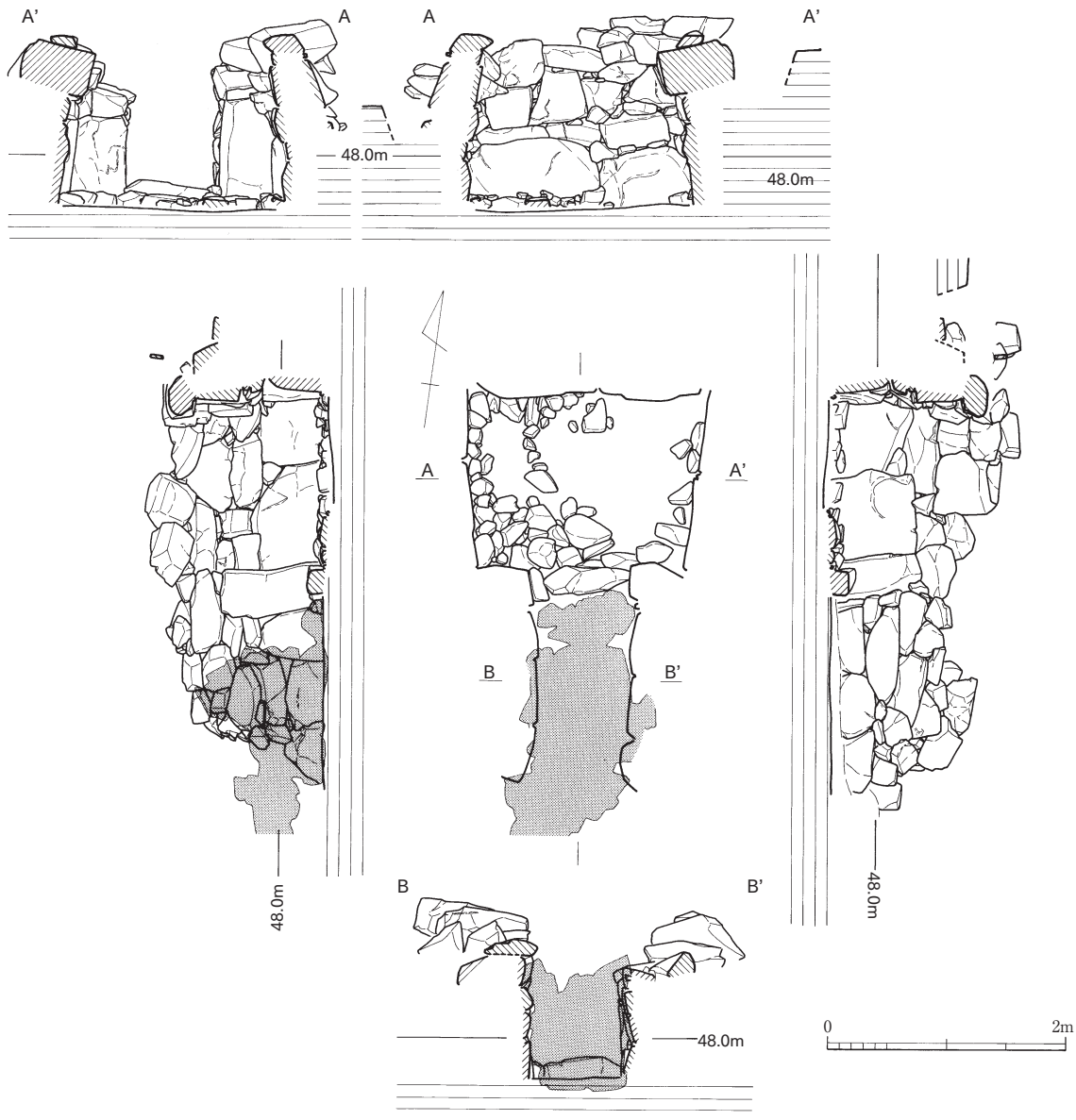
ii) 羨道・墓道

玄門袖石の間に框石を置いて玄室と画するが、入口から見れば玄門は突出せず、羨道と同じ幅となる。幅は0.7～0.8mで、框石からの長さは1.6mを測る。ただ、両側壁上方を見ると高さを維持する範囲は1mほどに過ぎないので、天井石1個を架構した程度であったものと思われる。

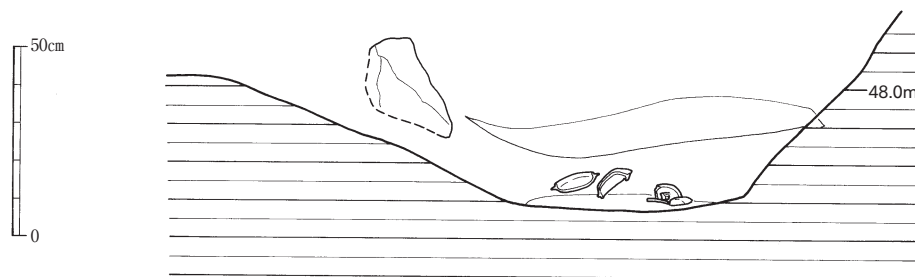
墓道は南に延び、3号墳墳丘を避けるかのようにほぼ直角に曲がっているが、両古墳の関係については最後に触れたい。

iii) 石室

玄室は幅2.0～1.8mで奥壁付近がやや幅広く、長さは1.4m前後と横長の平面形とる。腰石の配



第30図 Ⅲ-2号墳主体部実測図2 (1/60)



第31図 III-2号墳墓道遺物出土状況実測図 (1/20)

置は比較的整っている。各壁とも4段の石積み、1.5mの高さが残存する。

両側壁・奥壁ともに腰石は各2個の石材で構成される。敷石は多くが攪乱を受けていたために除去した。

3) 出土遺物

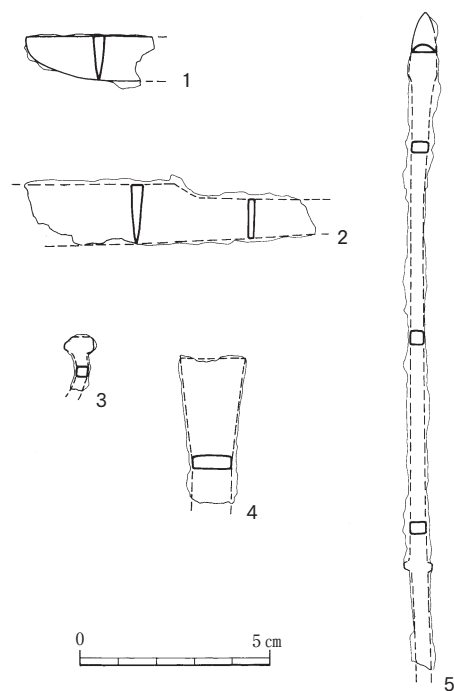
主体部は攪乱されていて、若干の金属製品が出土したが原位置を保つものではない。また、墓道の屈曲する付近から須恵器蓋杯がまとまって出土したほか、墓道と西側外護列石の交わる付近の地山上に小型壺が正置されていた。

金属製品 (図版50、第32図)

いずれも鉄製品である。1は錆びて膨らみ、2は刃部と柄部が振れた刀子残片。3は1号墳から出土した鋌に似る。頭部は本来円形であったようだが半欠。4は方頭式鉄鎌で先端を欠いている。5は細身で、関が判然としない。鎌身は片丸造りで、残存長は17.7cmを図る。

土器 (図版50・51、第33図)

いずれも須恵器で、1～4は墓道出土、5は墓道脇の地



第32図 III-2号墳出土金属製品実測図 (1/2)

山上に置かれたもの、6は墓道および周辺表土や墳丘から出土したもの。

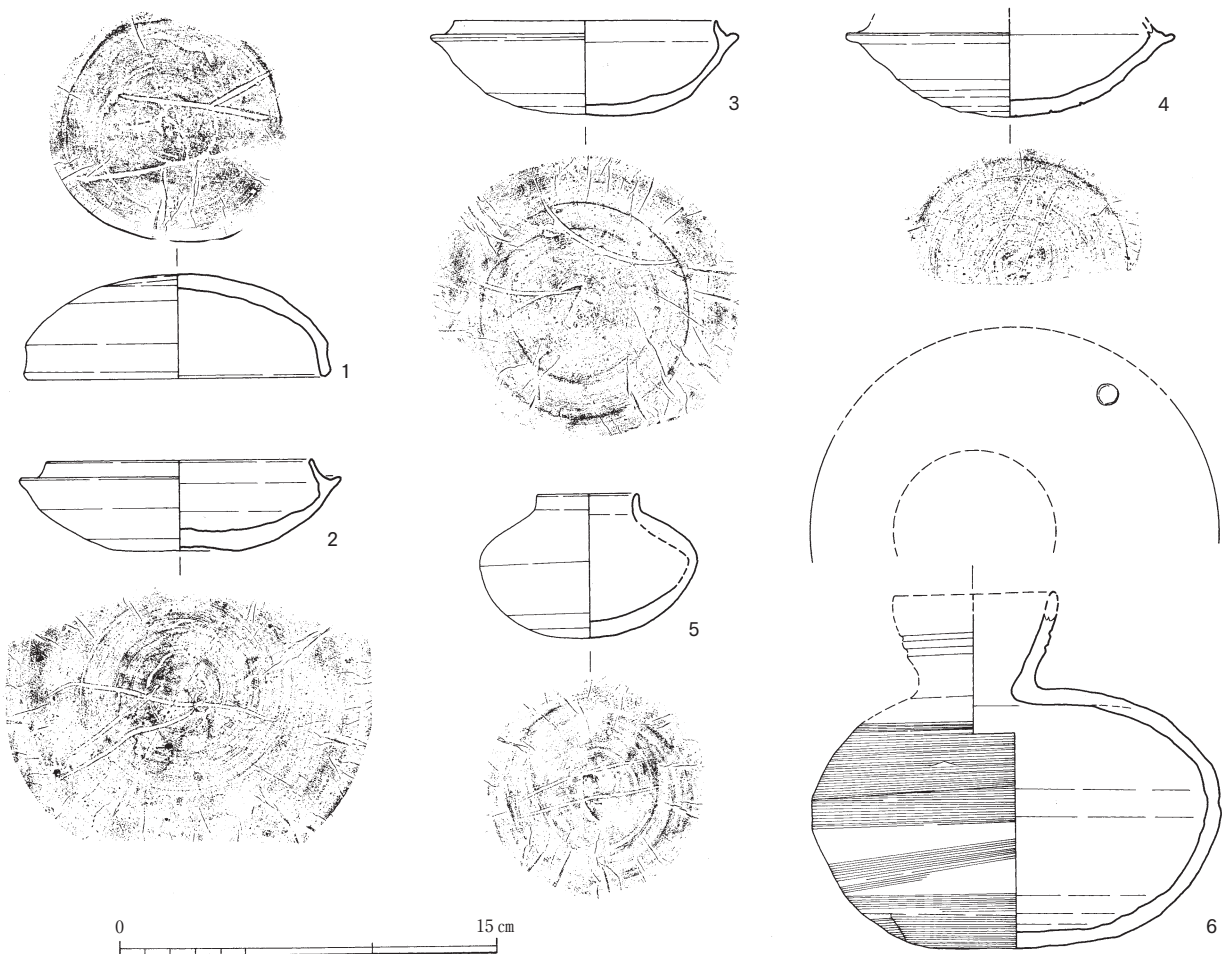
1は丸い天井部と直線的に小さく外彎する口縁部の境に明瞭な稜線をもつ。1/2ほどが残存し、胎土は比較的粗いが、作りは丁寧である。口径は12.1cmを測る。2は必ずしも1とセット関係にあると確信したものではない。口縁部の一部を欠くもののほぼ完存し、これも胎土は比較的粗く、作りは丁寧。3は3/4ほどが残存する。器壁が薄く、胎土精良で造作も丁寧である。4は一部が表土から採取されていて、口縁部は小片となる。これも作りの良い土器である。以上の杯身は口径11cm弱でほぼ同大の法量をもつ。

5は小型短頸壺で完存する。口縁部は短く直立し、体部の張りが強い。底部周辺は篋削りで仕上げられるが、全体に調整は丁寧になされ、胎土も良好である。

6は一部が近接する1号土坑からも出土している。口端部を欠いているが、頸部中位の2条の凹線はしっかりしたもので、体部はほとんどを繊細なカキ目で覆う。胎土・作りともに良好である。

4) 小 結

2号墳の造営時期を考える際には第33図5に示した小型壺が一級の資料であるが、この種の土器の時期比定は困難である。墓道出土の須恵器蓋杯は、蓋が口径12.1cm、身で口径10.3・10.6cmとなる。個体数が少ないが、法量は1号墳築造時期を示すと考えた土器と大差なく、器形や調整技法も



第33図 Ⅲ - 2号墳出土土器実測図 (1/3)

同様であることからⅢB期の造営を想定しておく。

3. 平石Ⅲ-3号墳

2号墳の南に隣接し、墳丘はほぼ完存するようで円錐形を呈していた。これも墳丘のほぼ半分が用地外となるが、2号墳と同様な理由で調査を行った。

1) 墳丘 (図版12、第34図)

現況では直径8m、西側で高さ2mほどの円墳と思われた。現況で周溝は認められなかった。

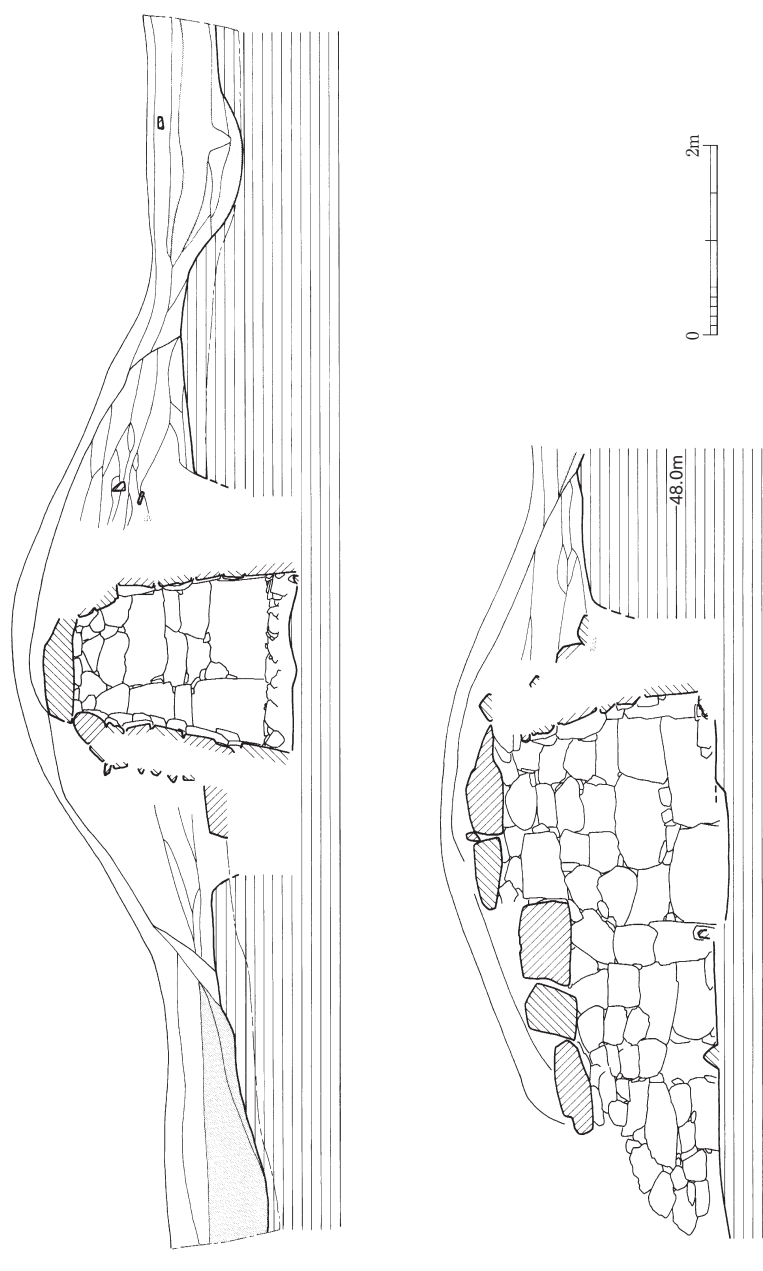
i) 北Tr.

ここでは地山成形の痕跡を主体部中心から3.7mの位置で確認したが、比高0.2mに満たない低いものであった。その端部に張り付くように堆積した土層は他の盛土と異なって濁っていて、二次堆積したものと思われる。この部分は犬走り状のテラスとなっていたようである。この削り出しの北は周溝状の堆積となるが、これは状況から推測して2号墳墓道の堆積である。

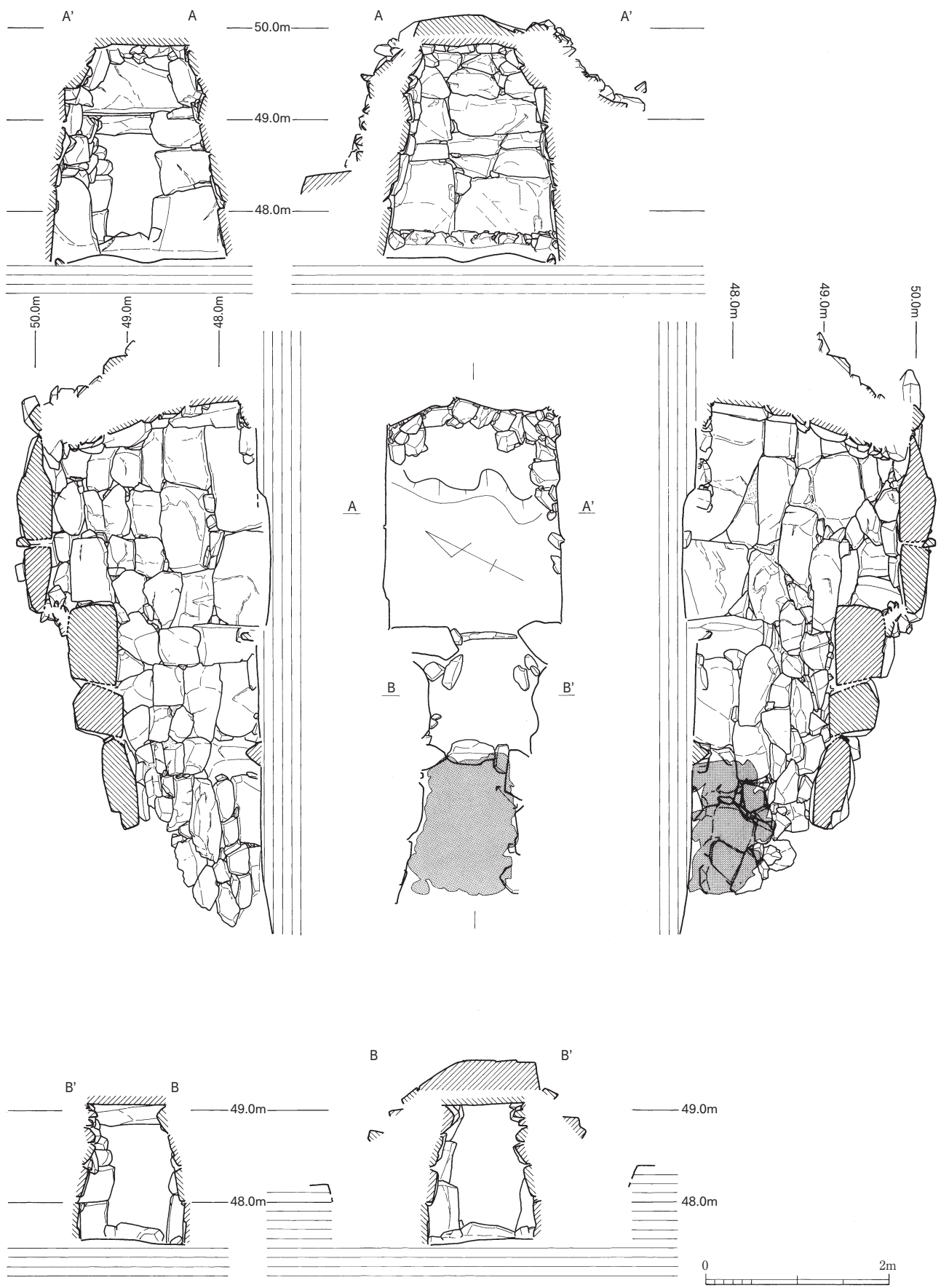
盛土は上半に混ざりのない鮮やかな明黄褐色土が乗り、下半には黒色土が混入した土を用いていて、2段階の工程が窺える。

ii) 南Tr.

地山削り出しは主体部中心から約4.2mの付近で認められ、盛土は同3.4mの位置から始まる。北Tr.では同3.3mであり、直径8m弱の墳丘を



第34図 Ⅲ-3号墳墳丘土層実測図 (1/80)



第 35 图 Ⅲ - 3 号墳主体部実測图 (1/60)

有していたことになる。周囲に地山を露出させたままの犬走り状のテラスを置いて周溝へと続くはずであるが、周溝は北東の一部でしか確認しておらず、主体部前面（墳丘西側）は掘削されていない。

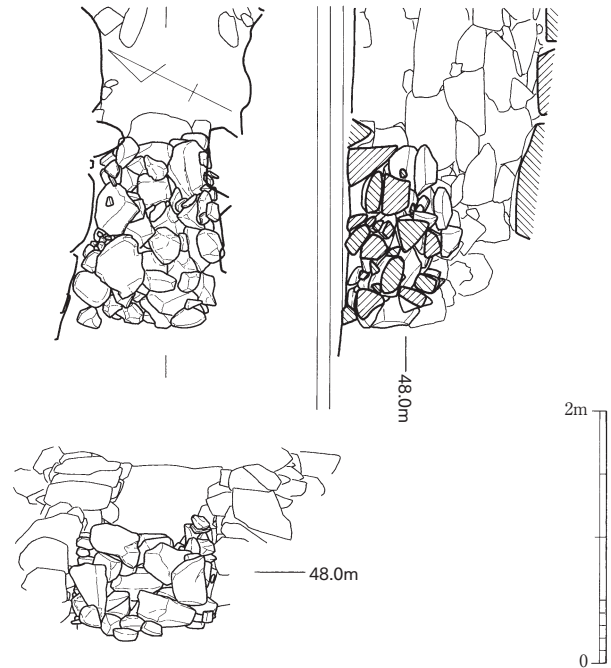
盛土は北Tr.の状況と異なって、全体に黒色土を混入した土層からなり、明黄褐色土層は見られない。周溝の土層が乱れるが、これは後述する4号墳の周溝が重複して掘削されたためである。この土層からは先後関係は不明であるが、平面的には4号墳周溝が3号墳の墳丘を一部切っているようである。

iii) 東Tr.

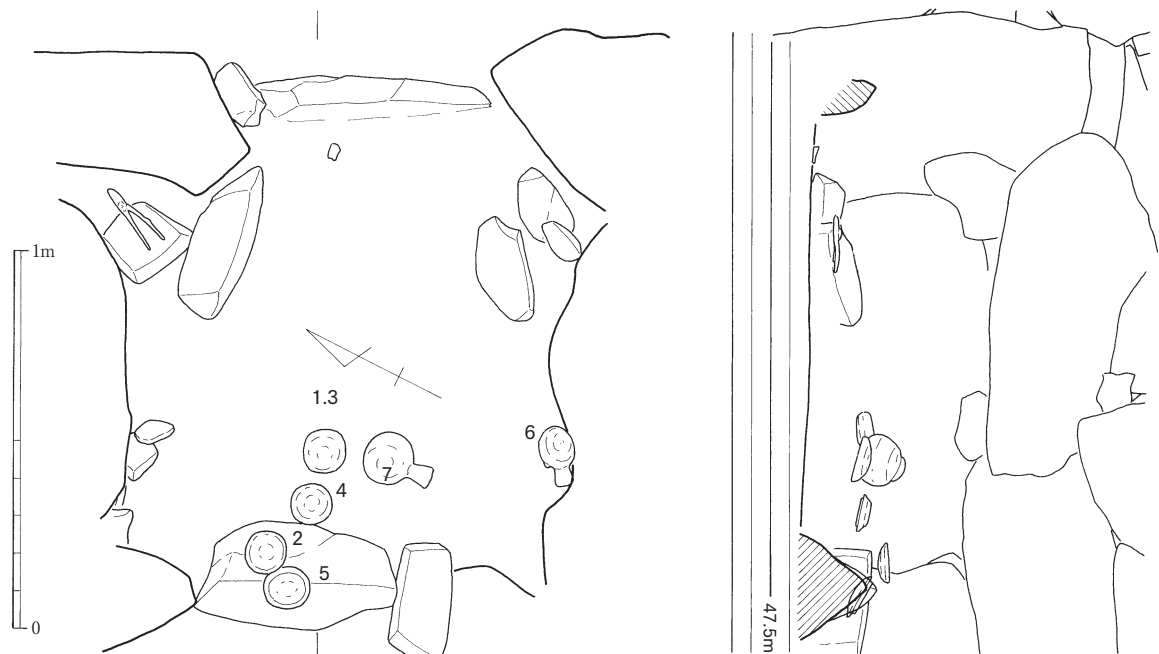
ここの盛土も南Tr.に似て黒色土が混ざる土を多用する。盛土端は石室前端から約8mの位置にあり、南北Tr.での観察とほぼ合致する。したがって、直径8mほどの円墳としてよかろう。北東部で一部検出した周溝は1.5mほどの幅を持つ。

iv) 列石

いずれも盛土中であって整然と列をなすものではないが、意図的に置かれたものと考えられる。主体部北側では2号墳同様に主体部掘形外周に並べられたようで、垂直的にもほぼ地山に接する位置にある。ただ、南側に孤立した石材は墳丘上位に位置していた。意味合いが違っているのであろう。



第36図 III-3号墳閉塞状況実測図 (1/60)



第37図 III-3号墳前室遺物出土状況実測図 (1/20)

2) 主体部 (図版13・14、第35～37図)

今回調査した中で、1号墳と3号墳のみが西側に向かって開口するとともに、複室構造をもつ。この古墳もすでに開口していた。

i) 閉塞

前室と羨道を隔てる框石に接して塊石が積み上げられていた。縦断面図に見るように、床面付近でも空隙があって粗雑な感を受ける。

ii) 羨道・墓道

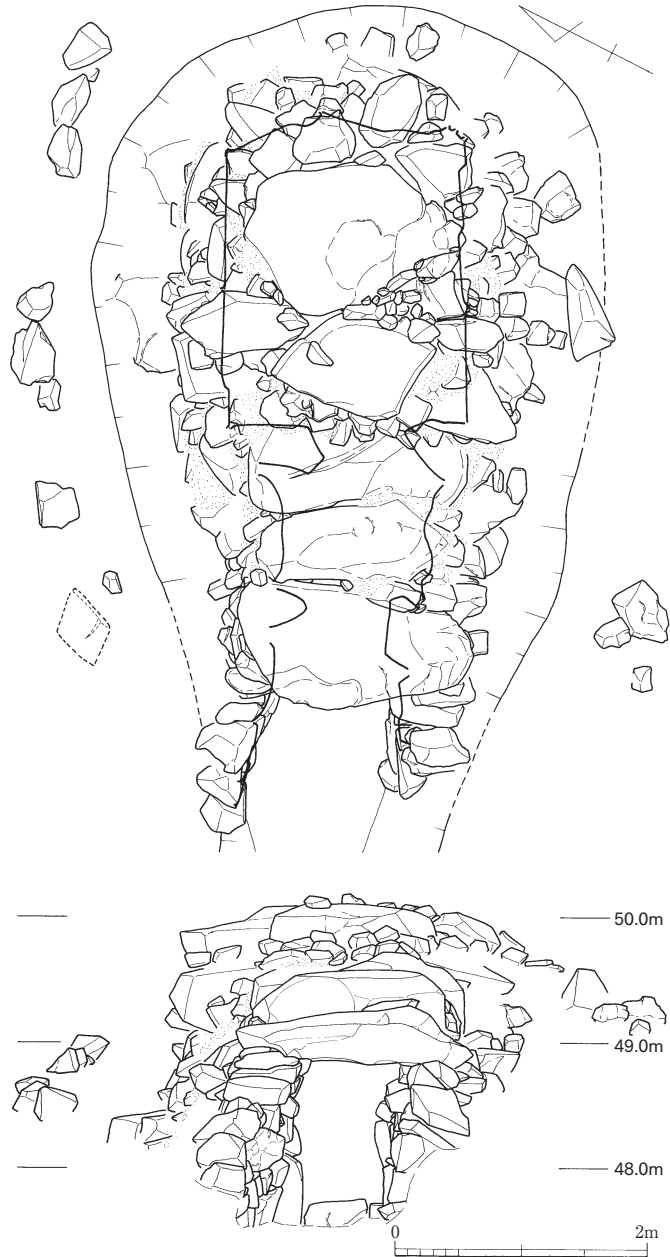
羨道は天井石1個分、長さ0.6mほどの長さで、さらに1mほどの貼石が施される。その前面に7m弱の浅い墓道が延びる。

iii) 石室

複室横穴式石室であるが、1号墳同様に前室天井高が後室・前室楣石に連続して、縦断面が単室のようになる特徴を持ち、全長5m強を測る。

後室床面は大きく攪乱されて奥壁付近で原状を残すのみである。幅1.9m、長さ2.2mの比較的整った平面プランとなる。両側壁および奥壁腰石はいずれも2個の石材で構成され、6～7段の石材を積んで高さ2mの石室を造る。

前室は腰石に形状不整の石材を使用するためにプランが乱れるが、幅・長さともに1mほどの方形に近い。



第38図 III-3号墳主体部実測図2 (1/60)

3) 出土遺物

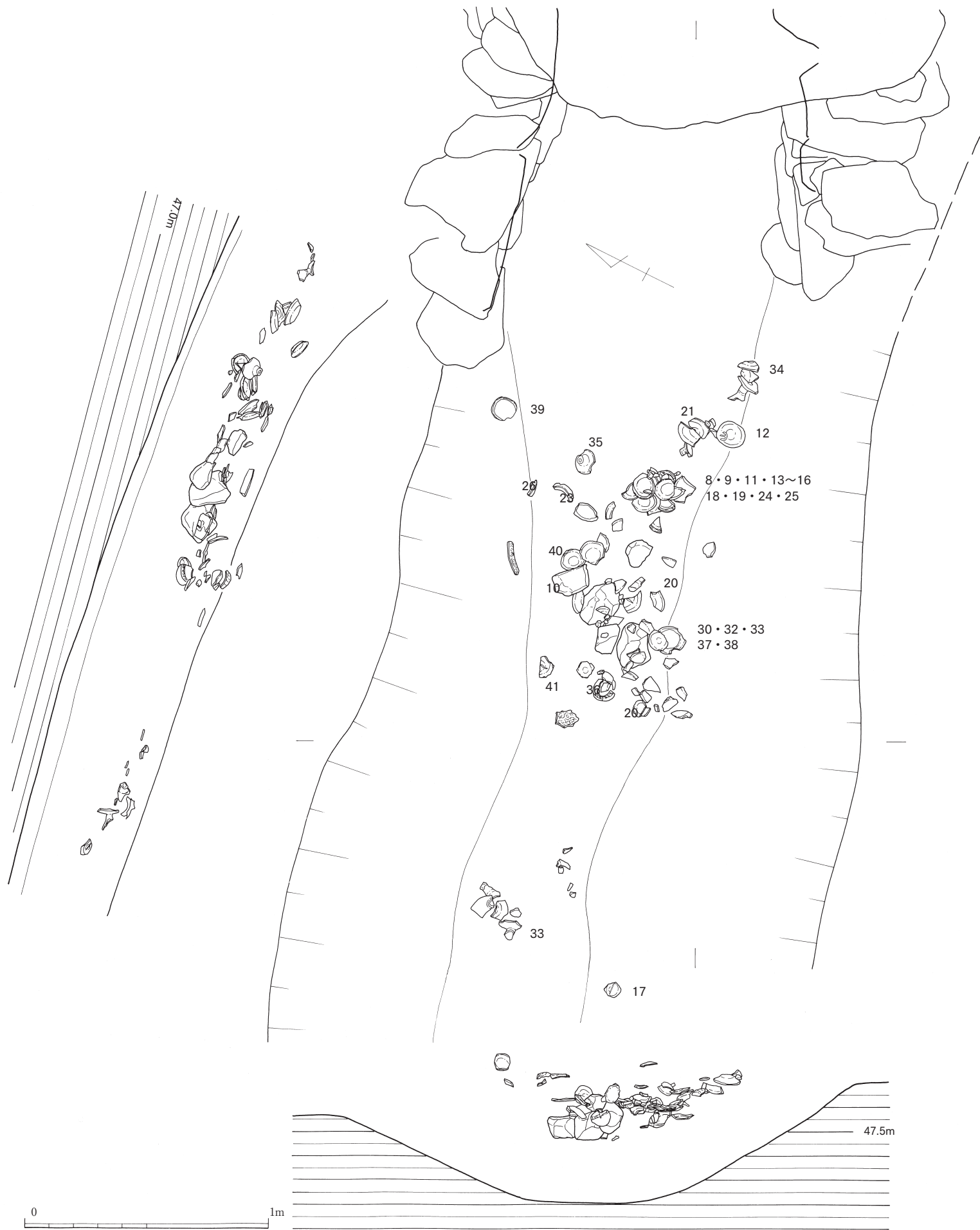
玄室は攪乱を受けていたが、前室および墓道から良好な状態で土器群が出土した。

また、4号墳周溝のうち、3号墳に近接する部分では周溝外縁(北辺)に3号墳から転落したような状況で土器群が出土し、これも3号墳に帰属するものと考えている。

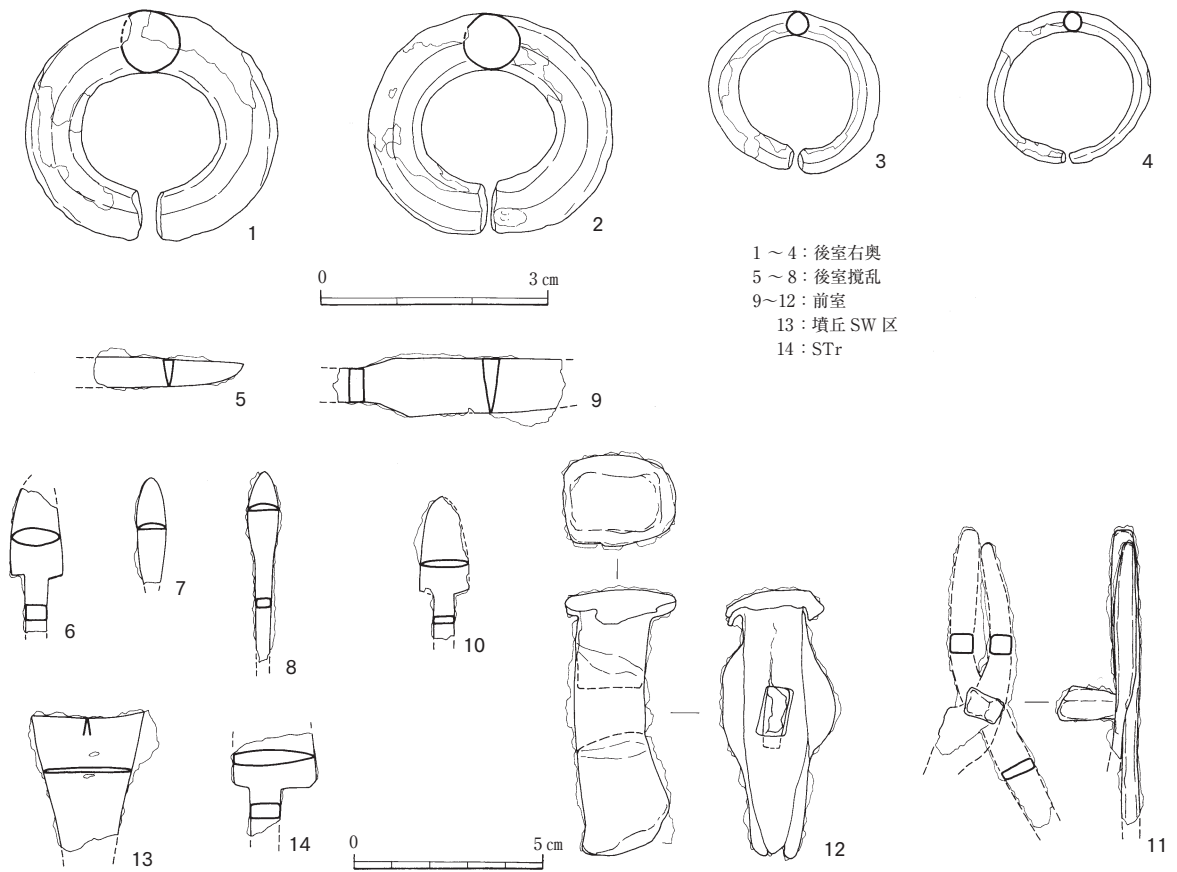
金属製品 (図版51、第32図)

1～4は金銅製耳環で、これらは後室右奥に偏って出土した。いずれも緑青が浮き、金色はあまり見えない。4は緑青もほとんどが落ちて鉄のような地肌が露出するが、磁石には反応しない。1・2は重量感がある。

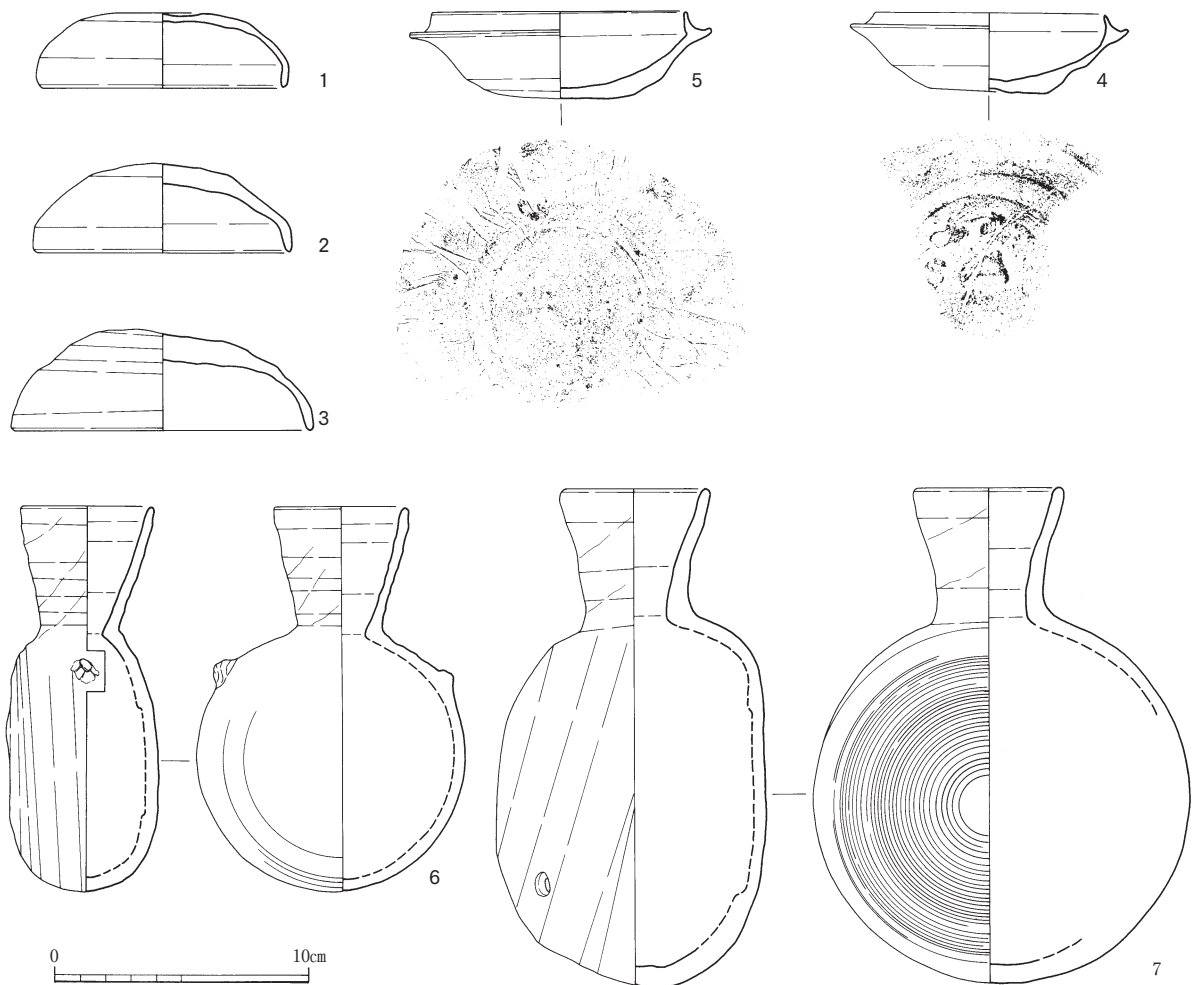
5～14は鉄製品で、5～8は後室、9～12は前室からの出土である。5は刀子小片。6は膨らんで断面形状がはっきりしない鉄鎌。7・8は関が不明瞭な片丸造り鉄鎌。



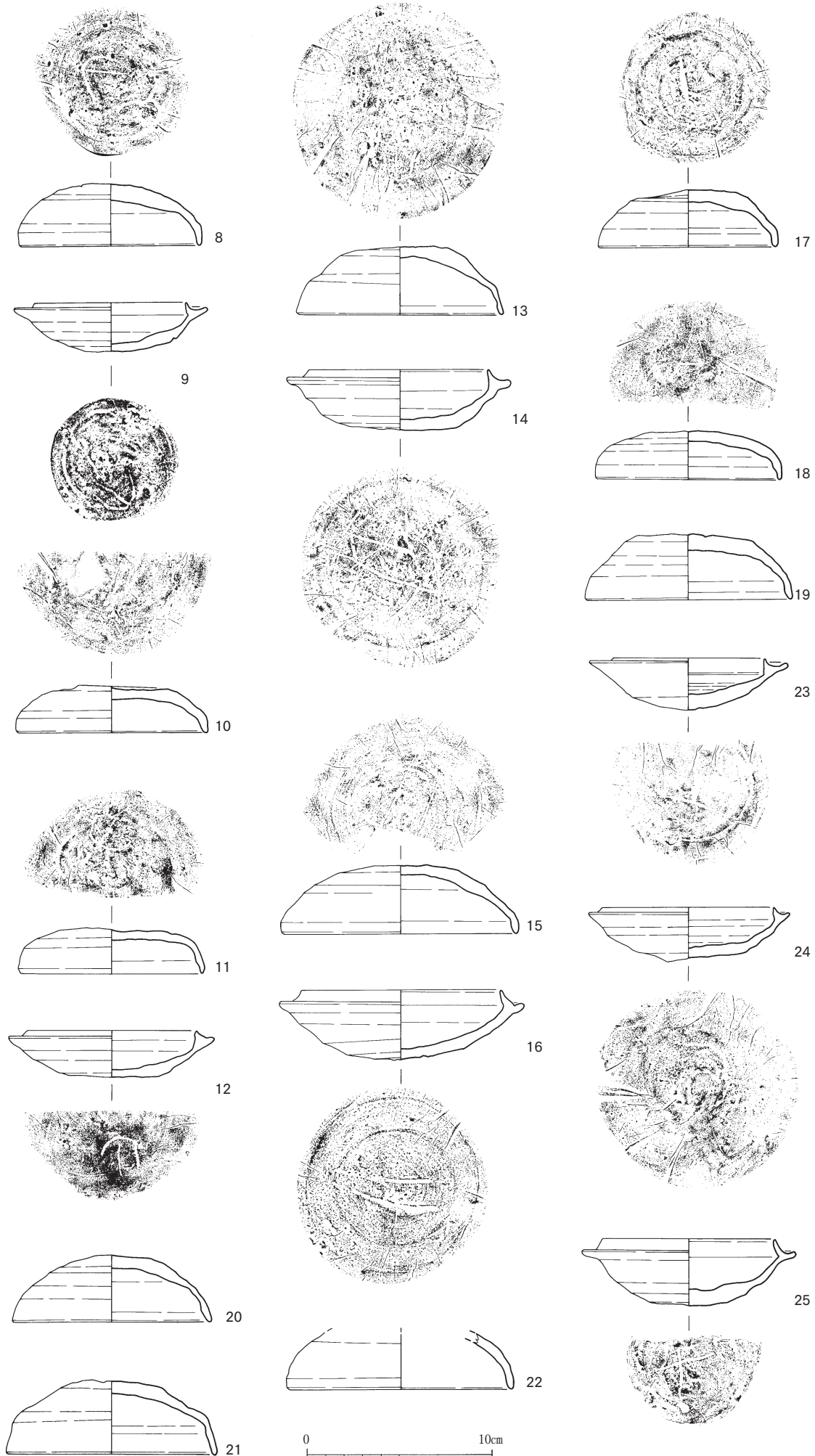
第 39 图 III-3 号墳墓土器出土状況実測图 (1/20)



第 40 图 III - 3 号墳出土金属製品実測图 (1/2)



第 41 图 III - 3 号墳出土土器実測图 1 (前室、1/3)



第 42 图 Ⅲ-3 号墳出土土器实测图 2 (墓道 1、1/3)

9は刀子片で、柄から刃部へはなだらかに移行する。10は返りのある鉄鏃片。11は前室左奥（北東）で出土した鉄鉋で、これは原位置を保っているのであろう。図版13に見るように出土時は完形を維持していたようだが、遺存状況が悪く、破損した。1/10で作成した出土状態の実測図によれば全長約20cmの小型品である。蝶番が大きく突出しているが、補修したものであろうか。

12は「前室左（北）」から出土した鉄槌であるが、出土状態の詳細は記録がない。錆びて大きく膨らむ。全長7cmを測り、図上端は叩かれて大きく潰れ、下端は断面三角形に近く尖っていたようである。

13は墳丘「SW区」出土の鉄鏃片。出土状態の詳細を確認していないが、該区は墳頂から転落した土器群があり、そこに混入していたものであろう。16は「STr.」出土であり、同様のことが考えられる。これも破損が著しい。この2点は実用的な細根式でなく、出土状態から見ても儀礼に使用されたものであろう。

土器（図版51～53、第41～47図）

主体部（第41図） 第38図に示すように、前室から比較的良好な状態で土器が出土しているが、框石上に置かれ置かれたものがあるなどやはり一部は攪乱されている。図示していないが近現代の染付椀が出土している。

1は1/2が残存する。篋削りで調整した天井部は平坦に近く、口縁部は小さく内折して、境界に弱い稜線をもつ。2は完存。これは1に比して器高が高く、天井部が丸くなる。砂粒が器表に浮き、天井部は篋削りの後に撫でて仕上げる、この2点はいずれも口径10cmほどであるが、3は口径12cmと明らかに差異がある。天井部から口縁部にかけて連続的にカーブを描き、天井部の篋削りなど調整は丁寧になされる。完存する。

4は完存する杯身で、口径は9cmである。作りはシャープで調整も丁寧になされるが、外底面は篋切り後軽く撫でただけで終わる。外面に灰を被る。法量・天井部の調整技法から見て2とセットであろう。5は口径10cmとやや大型で、3とセット関係で使用されたものであろう。完存し、調整は丁寧。外底面の篋記号は繊細である。

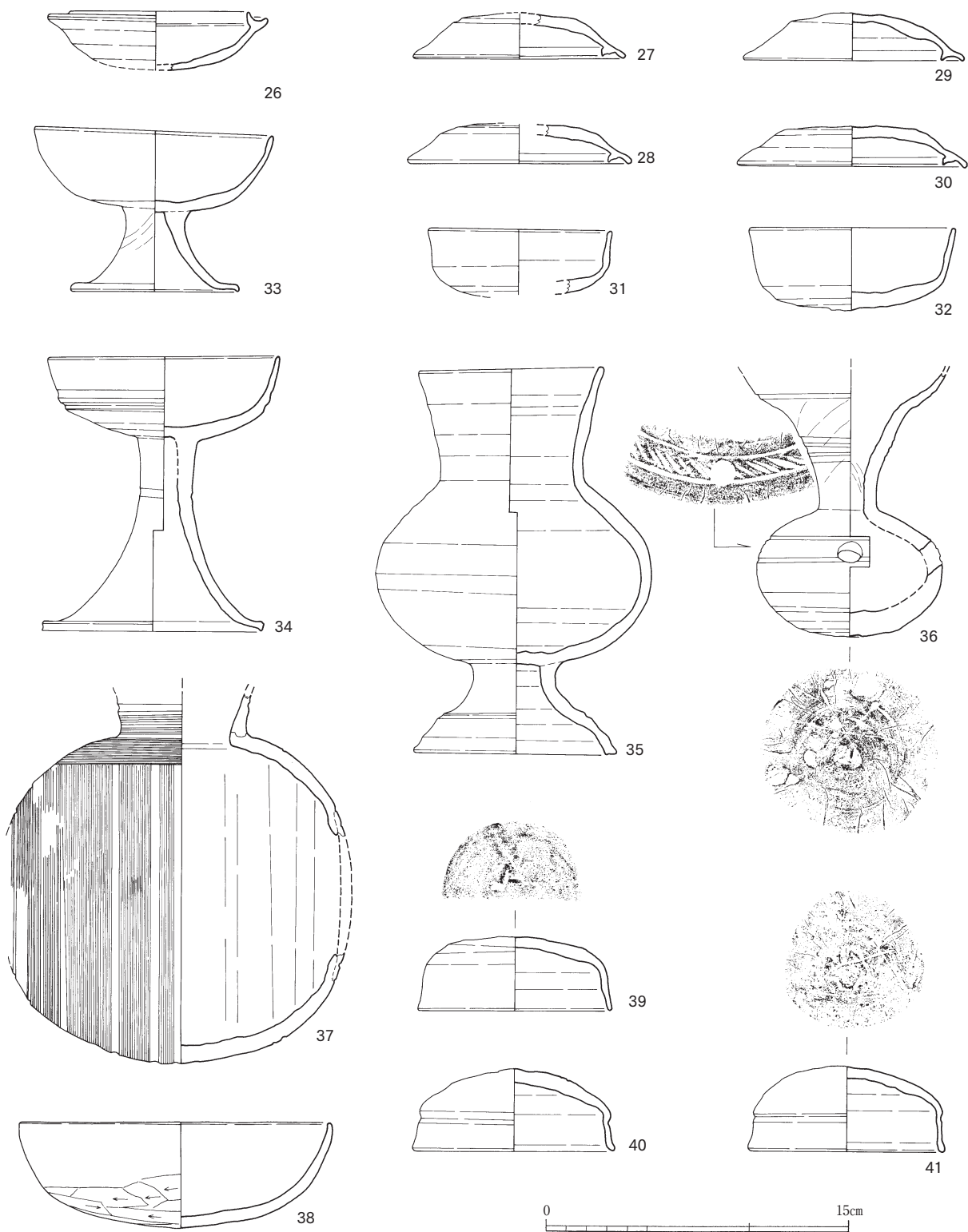
6・7は完形の小型提瓶。6は扁平な体部に、わずかに内彎しつつ開く口縁部を付すが、口縁部が体部に比して大きい。体部の扁平な面は丁寧に篋削りがなされ、それ以外は横撫でで仕上げるが、凸面上半は灰被りが著しい。7は本来の下半部が半球形、塞いだ部分が扁平となる。最大径部付近から下位（図左側）は広く篋削りを行い、扁平部分はカキ目、両者の境界付近は横撫でを行う。焼成不良で灰白色を呈し、直径1cmほどの楕円形に打ち欠きがある。

墓道（第42・43図） 出土状態を記録し、番号を付して後に取り上げたもののほか、表土掘削時に出土したもの、墓道南端付近出土と注記したものなどがある。

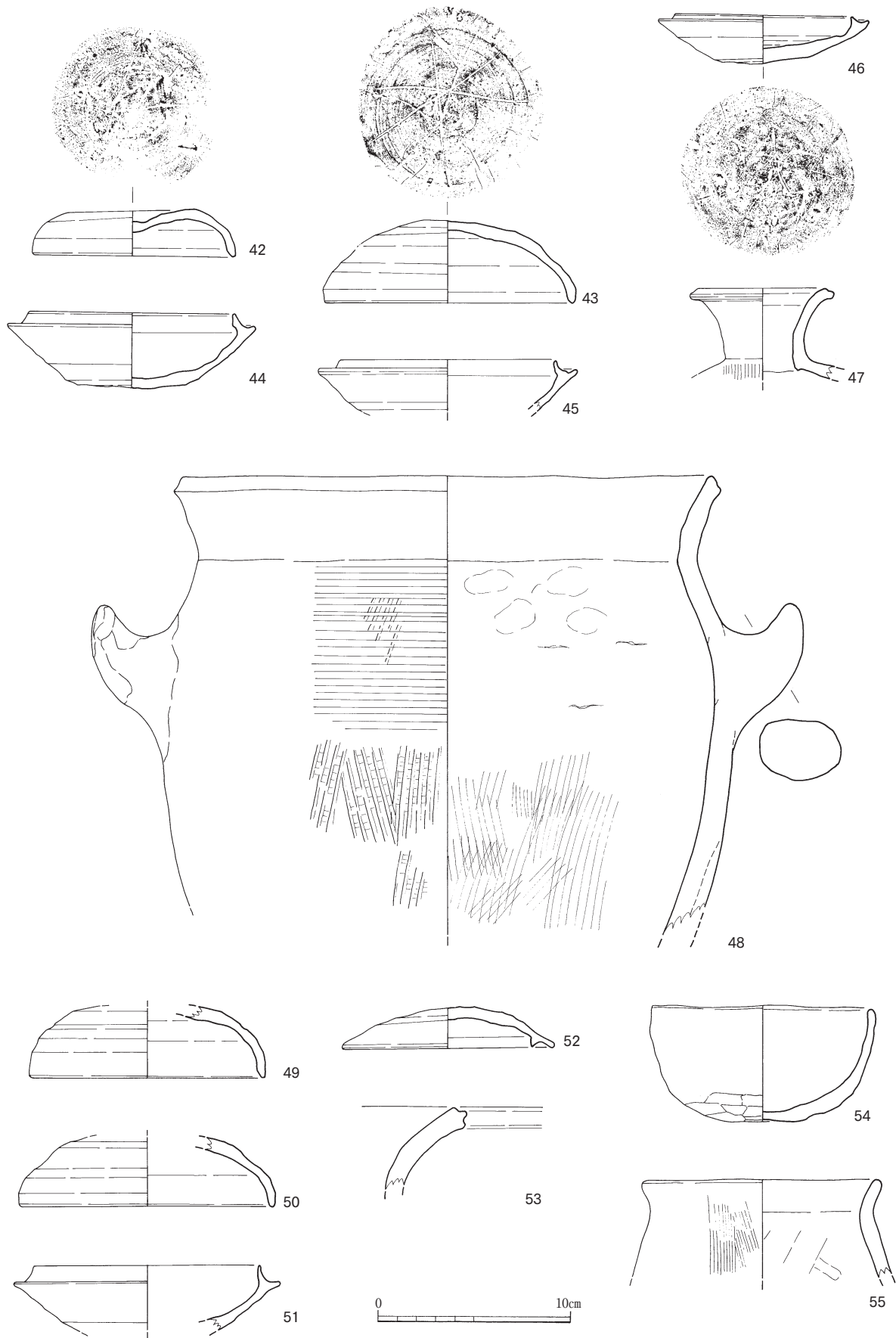
8・9、10～12、13・14、15・16は胎土・作りや篋記号などからそれぞれセット関係となると思われるもの。8・9はほぼ完存し、焼成時に焼け歪み、窯土が付着している。外面調整は篋切りのままで終わり、蓋の口径は10cmである。10～12も8・9と同様の「山」字のような篋記号をもつが、口径が10.6・11cmとやや大きく、丸みを欠いて扁平となるなど、ずいぶん異なっている。これらも完存あるいはほぼ完存し、外面は篋切りの後に軽く撫でているようである。作りは丁寧。13・14は先の3点よりわずかに大きい口径であるが、器高が高い。これらもほぼ完存し、胎土・作りともに粗雑で、外面は篋切り後に撫でている。15は1/2の残片、16はほぼ完存する。蓋は口径13cmを測り、外面は篋削りで仕上げる。作りは丁寧。篋記号は2本の平行線を用いるが、原体が異なるよ

うである。

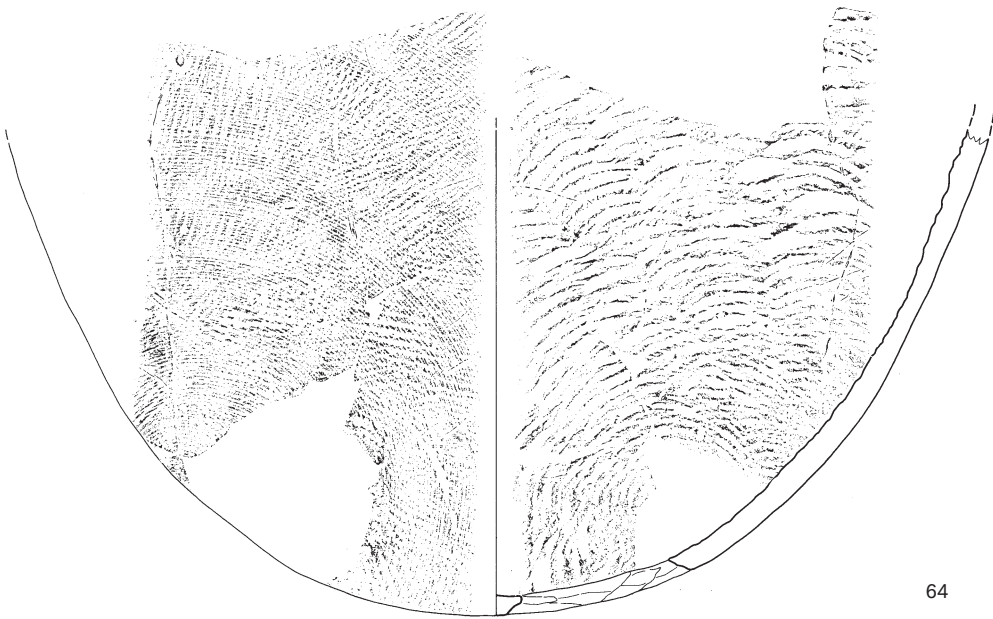
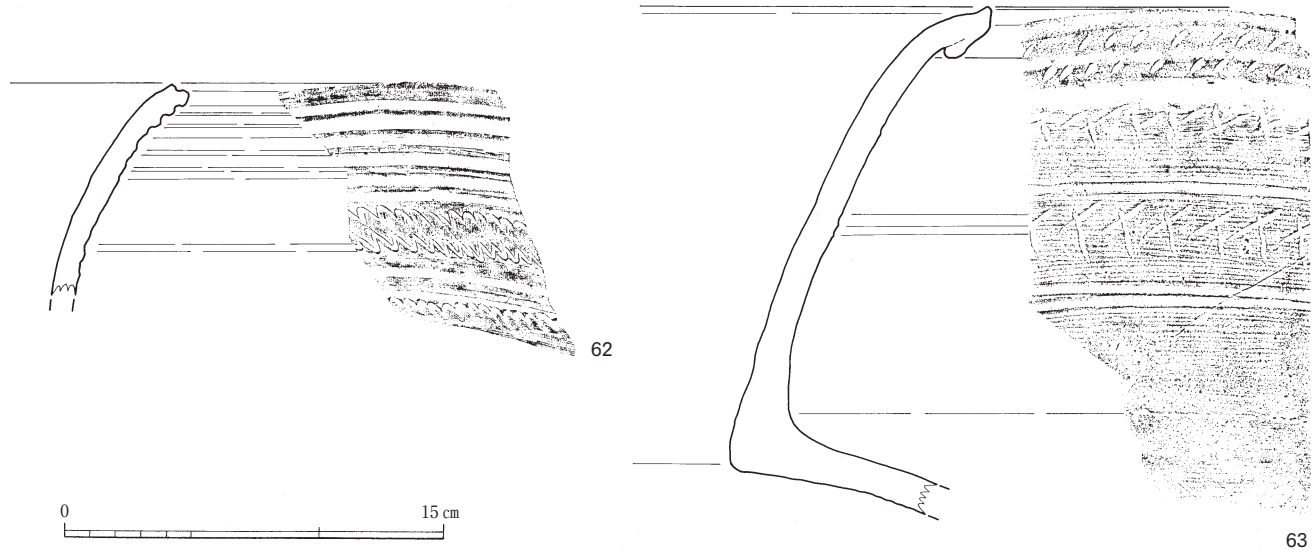
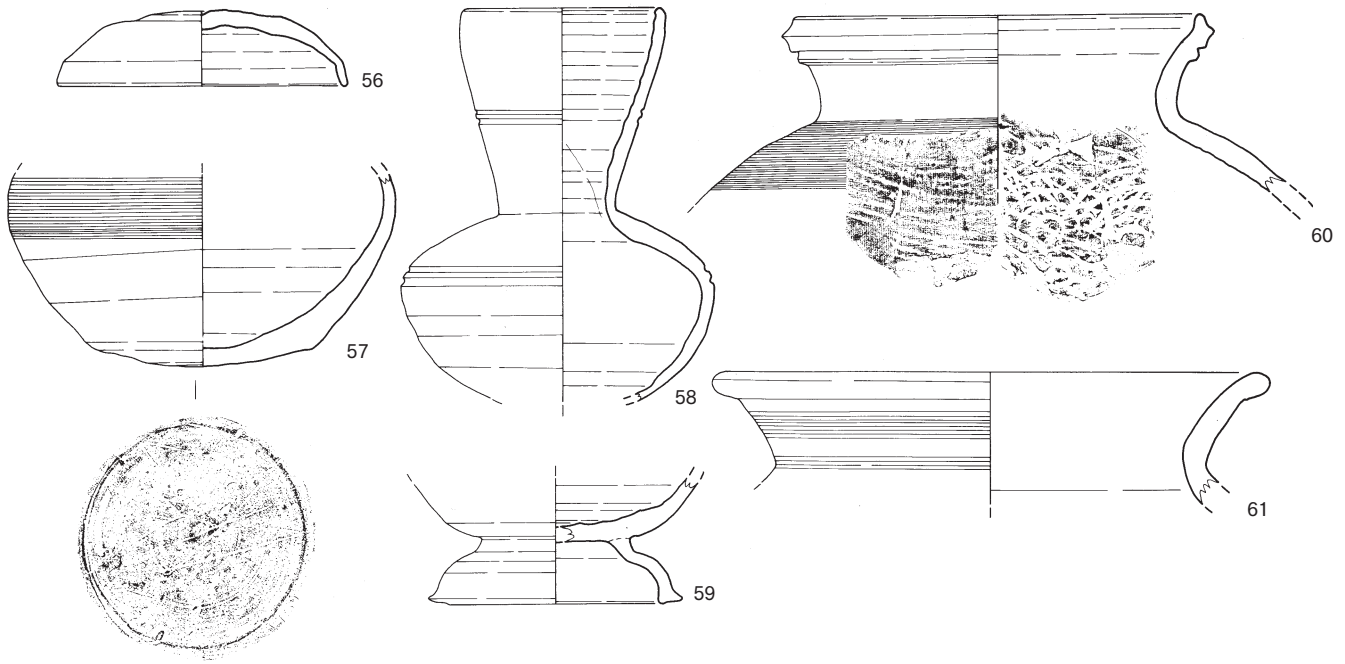
17は焼成不良で、外面は黄白色～灰褐色となる3/4の残片。18は法量・器形は10・11に似るが、外面は丁寧に篋削りを行っている。これは完存する。19は蓋として図示したが、天井部が篋切りそのまま終わるようで、平坦となるために杯身としても良いかも知れない。口径11.4cmでほぼ完存。20は1/2の残片で、胎土・作りは丁寧だが焼成不良で灰白色となる。天井部は撫でで終わる。21は



第43図 Ⅲ-3号墳出土土器実測図3 (墓道2、1/3)



第 44 图 Ⅲ-3 号墳出土土器実測図 4 (墳丘、1/3)



第 45 图 Ⅲ - 3 号墳出土土器実測図 5 (4 号墳周溝 1、1/3)

ほぼ完存。器表に砂粒が多く浮き、天井部は篋切り後に雑に撫でている。22は1/3の残片で、これも丁寧な作られた土器である。

23は口縁部付近の1/2を欠く。黄白色を呈し、器表が荒れているが、外底面は篋切り後に撫でるようである。蓋として使用されたものであるかも知れないが、後述する27～30に比してまだ底部が丸い。24はほぼ完存。外底面に粘土瘤があって、篋切りのまま終わるようである。25も多くが残存。胎土精良で丁寧に作られ、外底面は篋切りのまま終わる。外面に灰を被る。26は口縁部付近の3/4が残存。胎土粗く、外底面は丁寧に撫でて仕上げ、焼成も甘い。

27～30は返りをもつ蓋。27は口縁部の1/3が残存し、胎土が粗いが、作りは丁寧である。天井部は篋切り後に撫でている。28も1/3の残片で、胎土・作りともによい。天井部も丁寧に撫でて仕上げる。29は黄白色を呈し、天井部はほぼ完存するが口縁部は小片となっている。天井部は撫で。30はほぼ完存。調整は丁寧で、天井部は篋切りのまま終わる。なお、これは32とセットとなるようである。以上の蓋は口径11cm前後となる。

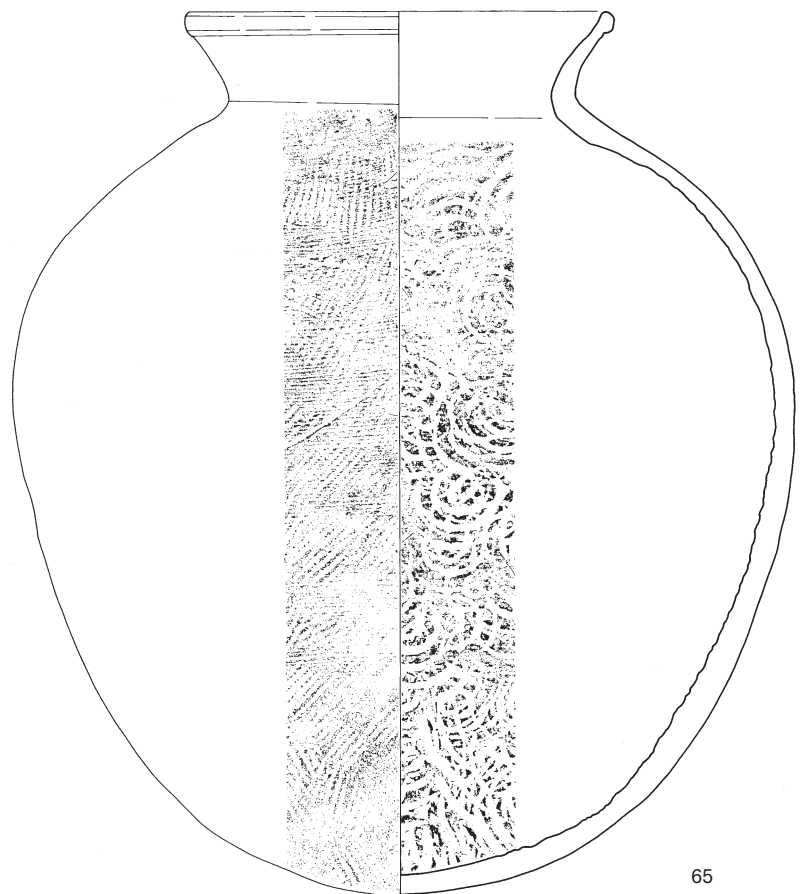
31は底部を欠くほかはほぼ完存。胎土・作りは丁寧で、淡灰褐色を呈する。32はほぼ完存、胎土・調整は良好で、外底面は粘土瘤が残り、篋切り後撫でる。

33は椀型の杯部をもつ短脚高杯で、装飾が乏しい。杯部下位に篋削りを施すが、焼成甘く灰白色となり、器表が摩滅する。34は杯部中央に2条、脚部上位に1条の甘い凹線を巡らせる。杯部では凹線以下を丁寧に篋削りし、全体に灰を被る。

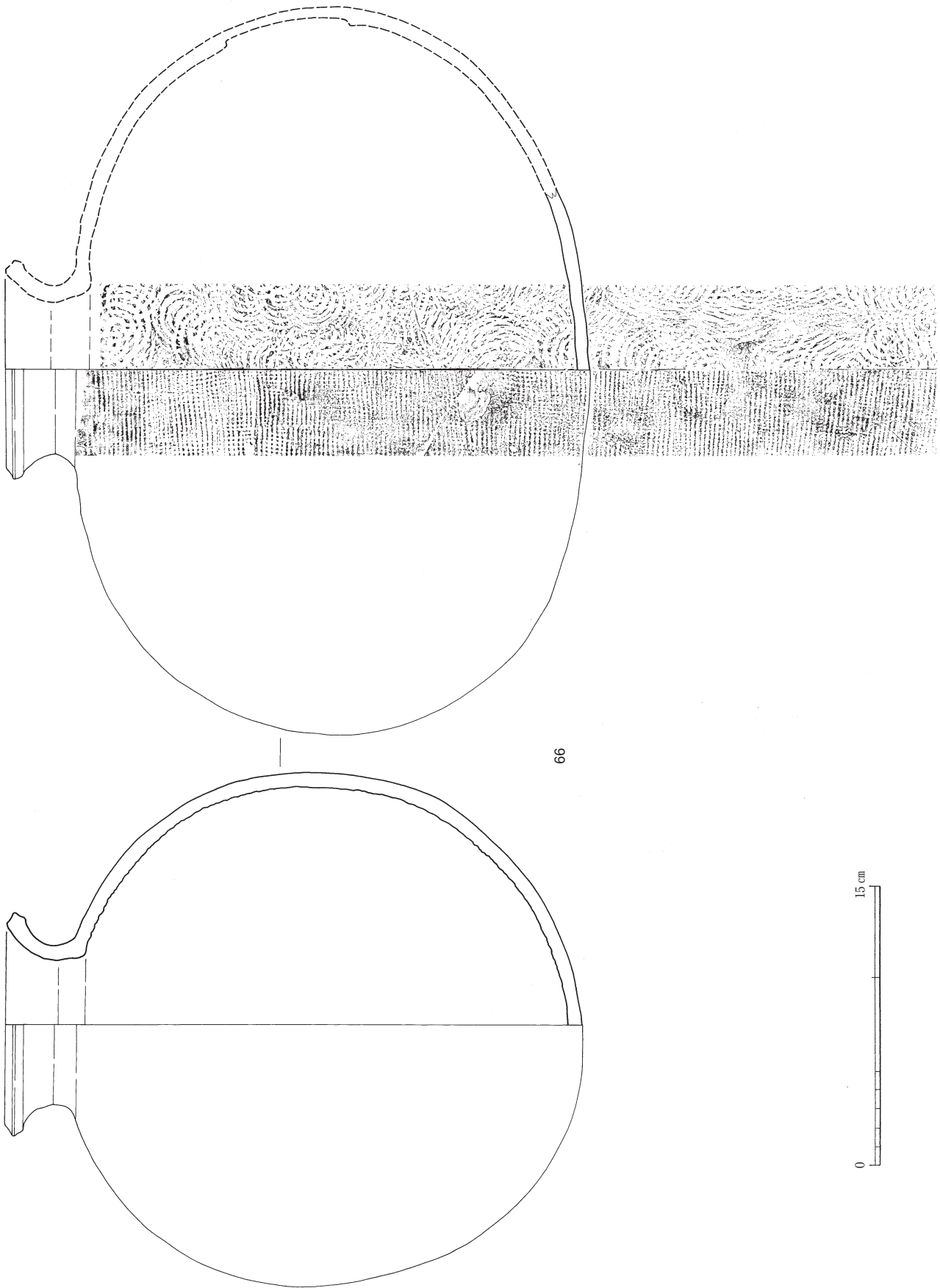
35は脚付直口壺で、これも全体に灰を被る。頸部の締まりが弱く、体部最大径部以下を丁寧に篋削りで仕上げる。脚部の作りはシャープである。

36は口縁部を欠くほかは完存する。口頸部の境は段でなく沈線で画し、頸部には甘い凹線3条を刻む。体部の文様帯は篋描斜線文で充填する。体部下半の回転篋削りは丁寧で、器表が焼け弾けている。

37は横瓶と思われる残片で、一部が4号墳SW区・5号墳NE区から出土している。頸部と体部は接合不可だが、図上復原したものである。外面全体をカキ目で覆うが、頸部・体部の一部にしつ



第46図 III-3号墳出土土器実測図6 (4号墳周溝2、1/3)



第 47 图 Ⅲ - 3 号墳出土土器実測图 7 (4 号墳周溝 3、1/3)

かりとした凹線が刻まれている。

38～41は土師器。38は淡黄褐色～淡灰赤色を呈する椀で、底部付近は完存、口縁部は小片となる。口端部を小さく内側へつまみ、外面下半は不定方向の篋削りで終わる。39～41は杯蓋形の蓋で39はほぼ完存。天井部から口縁部にかけて丸く移行し、天井部は篋切り後に撫でるようである。灰白色を呈し、器表は摩滅する。40は天井部と口縁部界に段をもつ。天井部は完存するが、口縁部は小片。明黄褐色を呈し、器表が荒れているが、天井部は篋切り後に撫でるようである。これも篋記号が刻まれるか。41は40と同様の器形となり、灰黄色を呈する。天井部は篋切り後撫でる。

42～48は「墓道表土」などから出土したもの。42は口縁部の1/2が残存し、大きく焼け歪む。落ち込んだ天井部に粘土瘤が残り、篋切り後に撫でたようである。43は「墓道付近表土」のほか、「3号墳SW区」・「4号墳NW区表土」などから出土したものが接合している。1/2が残存し、天井部は丁寧に篋削りが施される。

44は体部の3/4が残存、口縁部は小片となる。胎土良好で、外底面の回転篋削りも丁寧に施される。45は1/3の残片で、これも丁寧に作られる。46も丁寧に作られるが、外面の灰被りが著しい。9の杯身に似るが、口径が1cm強大きくなっている。

47は提瓶であろうか。墓道前端（西端）付近出土で、図示部は完存。雑な作りである。

墳丘（第44図） 図版14に示したように南西部墳裾から若干の土器が出土した。48は「墓道前端付近」・「2号墳SW区」・「3号墳NW区表土」出土片が接合したもので、灰黄褐色を呈する土師質土器。口縁部には端面を作り、細部は比較的シャープに作られる。体部外面は平行叩きの後に上半ではカキ目を施す。内面は粘土紐接合痕や指頭痕が明瞭で、仕上げは刷毛目を用いる。

49～52は「3号墳SW区」・「4号墳NW区」から出土したものだが、50は「墓道付近表土」出土片も接合している。49は1/3の残片で、丁寧に作られた土器。天井部には篋削りの後に複数の平行線からなる篋記号が刻まれるようである。50は1/4の残片。これも丁寧に篋削りが施される。51は1/3の残片。これも先の2点と同様の作りである。52は2/3の残片で、天井部は篋切り後撫でて仕上げる。

53は「3号墳SW区」出土の小片。

54は「2号墳SW区」・「3号墳NW区付近表土」出土片で、本来の帰属は明らかでない。底部付近は完存するが、口縁部付近は小片となる土師器椀。灰黄褐色～灰赤褐色を呈し、外底面は雑な不定方向篋削りで調整する。胎土も粗い。55は「3号墳NW区付近表土」出土の土師器甕片。小片のため径は不安。

4号墳周溝北辺（第45～47図） 4号墳周溝のうち、NW区の北肩近くで3号墳から転落したような状況で出土した一群で、その出土状態から本来は3号墳に帰属したとしてよからう。なお、4号墳北Tr.の周溝中から出土した土器（56・57・63）もここでまとめて紹介するが、トレンチを拡張していないのでその帰属については十分な検討ができない。

56は作りが丁寧な杯蓋で、復原口径は11.4cmである。胎土に微少な黒色粒が目立つ。57は壺底部か。図示部は完存する。体部下半は丁寧な篋削りが施され、内面には焼け膨れが見える。

58は底部を欠く長頸壺で、「4号墳西Tr.」・「3号墳SW区」・「5号墳NW区」・「6号墳NE区表土」などから出土している。口縁部は内彎気味に長く伸び、中位にしっかりした凹線を2条刻む。肩部の凹線も同様で、体部最大径部のやや下位以下は回転篋削りで仕上げる。全体に作りは雑な感じである。59は脚付壺であろう。内外面に灰を被り、胎土・作りは良好。体部下半は丁寧な細かいカキ



第48図 III-4号墳周溝北辺遺物出土状況実測図(1/20)

目を施す。60は「5号墳周溝西辺」・「3号墳墓道付近表土」からも出土。口縁部細部はシャープで、丁寧に作られた土器であるが焼成は甘い。61は「9号墳周溝」などからも出土している甕で、装飾に乏しい。

62は大型甕小片で、胎土精良で丁寧に作られ、施文も整っている。63は櫛描刺突文を口端部や頸部に施す。64は体部下半の残片で、底部付近を径7～8cmの円形に打ち欠く。

65は口径17cm、器高35cmほどの甕で、口頸部は短く外反して、口縁部の加飾は乏しい。頸部も無文である。「4号墳周溝NW区」のほか、「5号墳NE区周溝」・「5号墳盛土中」などから出土している。66は短く外反する口頸部をもつ横瓶で、これも口縁部の加飾は乏しい。これも「5号墳NE区周溝」・「5号墳盛土中」などから出土している

4) 小 結

今回調査した古墳の中で1号墳とともに複室構造を有し、かつ縦断面の形状が単室構造の石室と同じ形状で一致する。さらにこの2基のみが主体部主軸を東西方向にとるなど、盟主的な古墳に近

しい関係が窺える。また、出土品でいえば、本古墳からは鉄鉗・鉄槌の鍛冶工具が出土したのに対し、1号墳墓道からは出土状態を確認していないものの鉄滓が出土していて、両古墳ともに鍛冶に関わった人物が葬られていたらしいという共通性がある。

3号墳出土土器のうち、前室出土土器については法量から2セットに分けられそうである。1・2・4と3・5である。前者は杯蓋の口径が約10cm、後者は12cmである。1・3が天井部を篋削りで仕上げのほかは、篋切り後撫でで終わるなど、技法的にも通じる。これらはIVB期に比定できよう。

墓道出土の杯蓋は法量が10～13cmを測り、最大の第42図15・16は外面調整も篋削りを行ってIII B期に比定して良からう。口径10～11cmに属する小型のものは篋切りのみで終わるもの、撫でで終わるものがあるが、これらはIVB期に比定できる。第43図27～32は逆転した蓋杯で、蓋のつまみは確認できない。これらはV期に比定できよう。

4. 平石Ⅲ－4号墳

3号墳の南に近接し、これも墳丘の半分近くが用地外となる。また、4・5号墳付近は大きな榿の株が墳丘および周辺に多く、除去もままならず十分な成果を得ないまま終わった部分がある。

1) 墳 丘 (図版15、第49図)

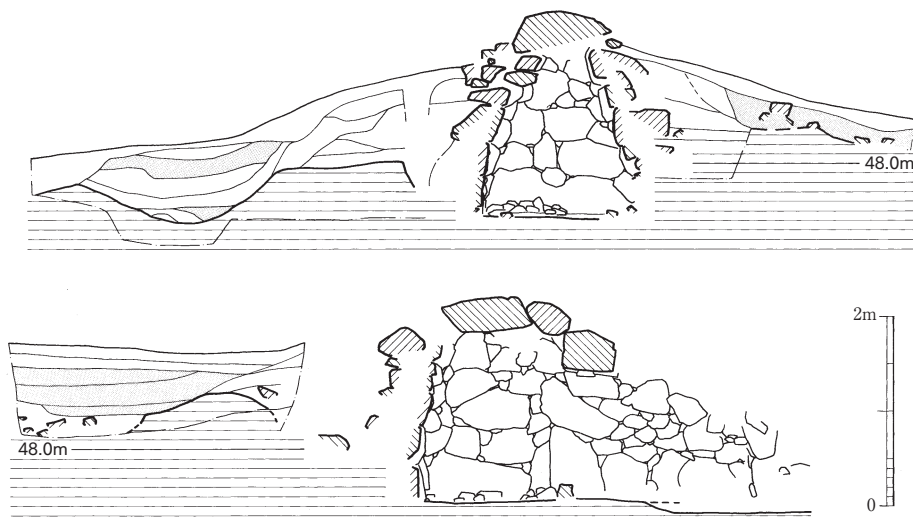
現況では直径6mほどの円墳と判断された。

i) 北 Tr.

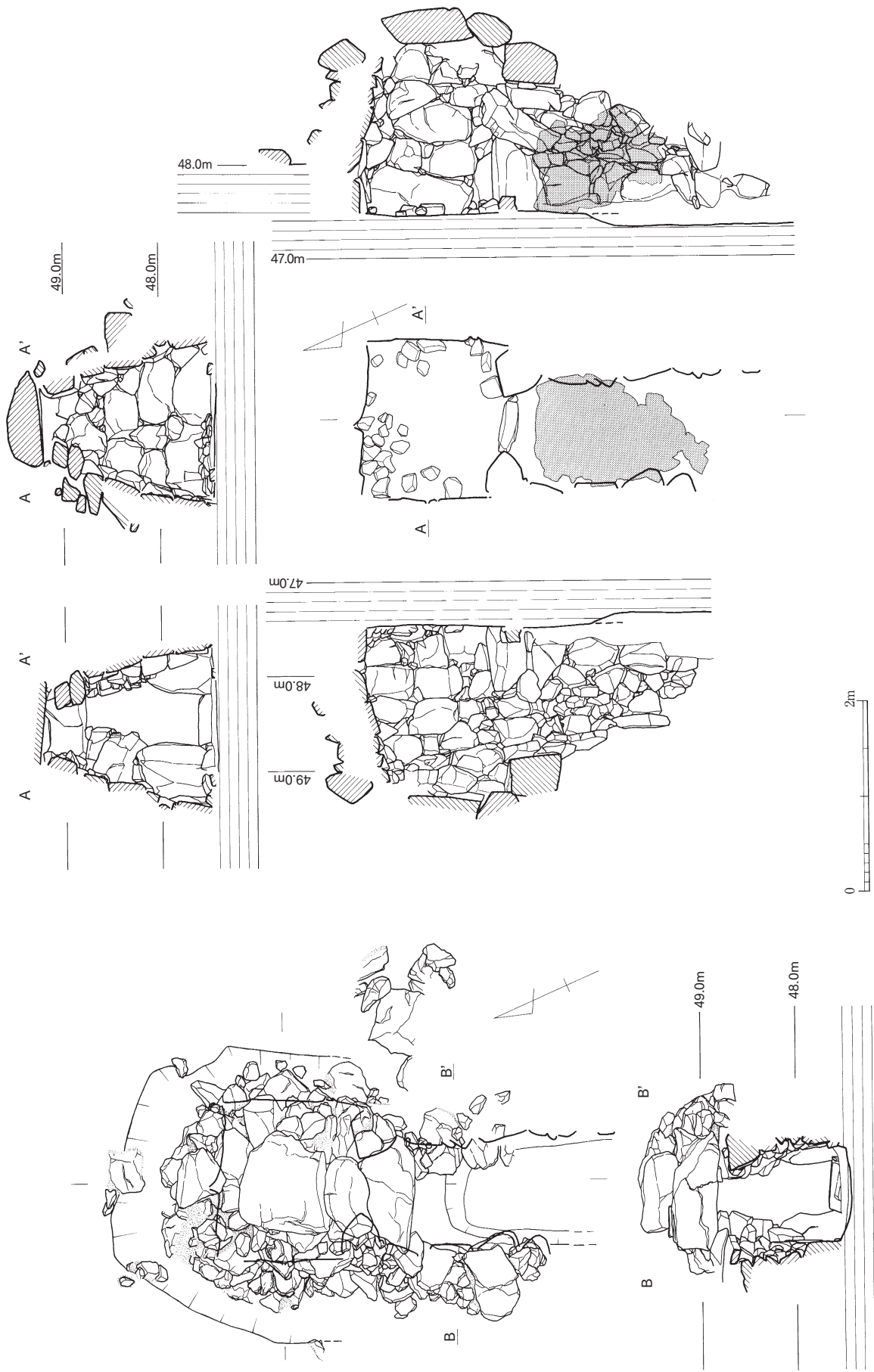
榿の株のために発掘不十分で終わったが、奥壁から2.3mの付近で盛土端部を確認できた。さらに北側は厚く黒色系埋土が覆う周溝が続くが、その端部は未確認である。掘削した最下層は黄褐色粗砂層であるが、土器が出土するなどして周溝底に達していない。

ii) 西 Tr.

主体部中心から3mの位置に地山削り出しがなされ、盛土もほぼその付近が端部となる。さらに西側は暗渠によって端部を破壊されていたが、幅2mほどの周溝が掘削されている。



第49図 Ⅲ－4号墳墳丘層実測図 (1/80)



第 50 图 III - 4 号墳主体部実測図 (1/60)

iii) 東 Tr.

ここも株のために不十分で終わった。主体部中心から1.8m付近から黒色土の堆積が見られ、それは3.8mのTr.端まで続くが、間に株や礫があって、連続する土層かどうかは不明である。石室背面では地山を確認できていないが、中心から3.1m付近で盛土端部かと思われるラインを確認している。

以上のことから東西長6.1m、石室前端から北側盛土端までの長さ5.7mとなり、ほぼ直径6mの円墳とみてよかろう。幅2m前後の周溝が伴う。

2) 主体部 (図版16、第50・51図)

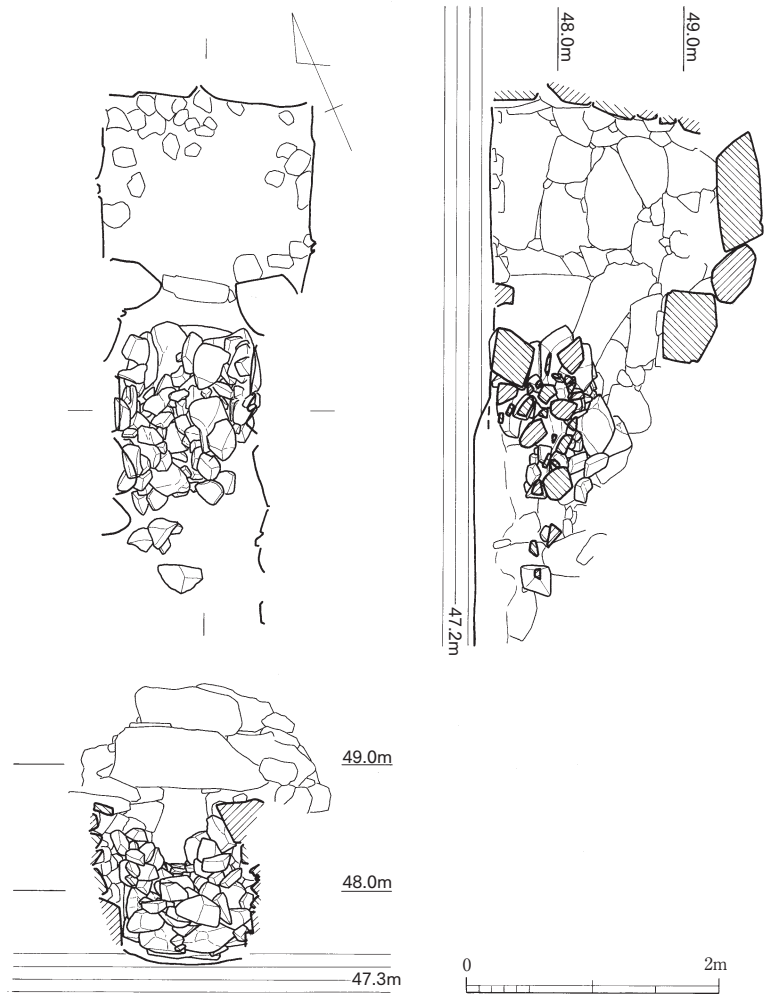
すでに天井石は露出し、入口も開口していた。

i) 閉塞

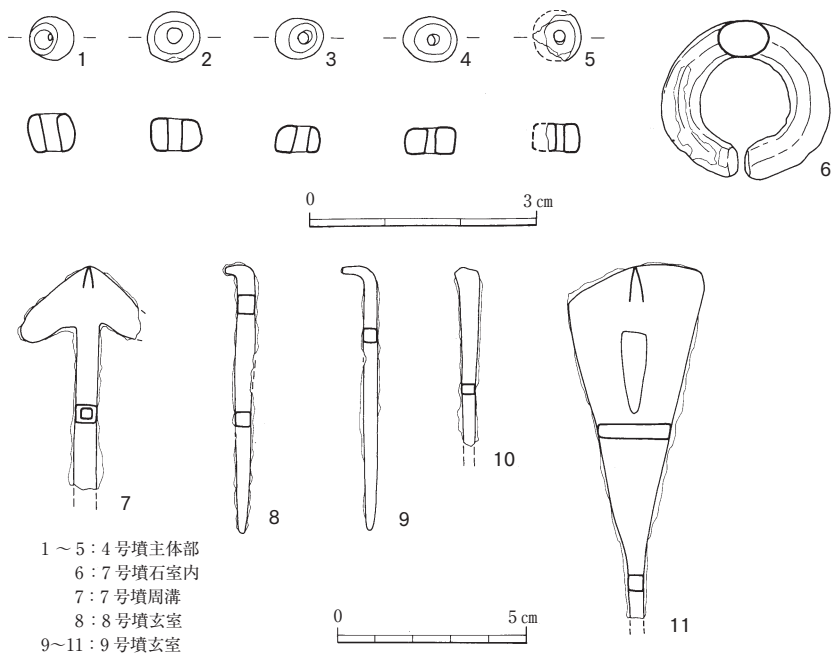
框石との間に0.2mほどの距離をもって塊石を積み上げた閉塞が残っていた。最下段に長さ0.7m、幅・厚さ0.3mほどの比較的大きな石材を固定し、その上に積み上げたようだが、上方では多くが掻き出されたように前傾する。

ii) 羨道・墓道

現況では楣石前面に天井石は無かったが、閉塞を覆う1石は使用されたものと思われる。右(東)側壁は前



第51図 III-4号墳閉塞状況実測図 (1/60)



1~5: 4号墳主体部
6: 7号墳石室内
7: 7号墳周溝
8: 8号墳玄室
9~11: 9号墳玄室

第52図 III-4~9号墳出土玉類・金属製品等実測図 (1/1、1/2)

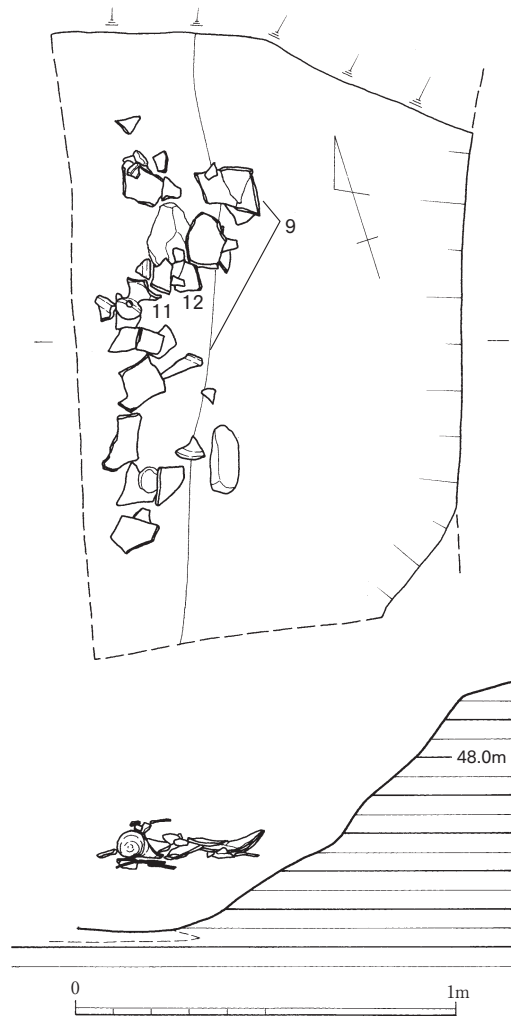
端付近が株のために壊れて乱れるが、左側壁は旧状を比較的留めるようである。

iii) 石室

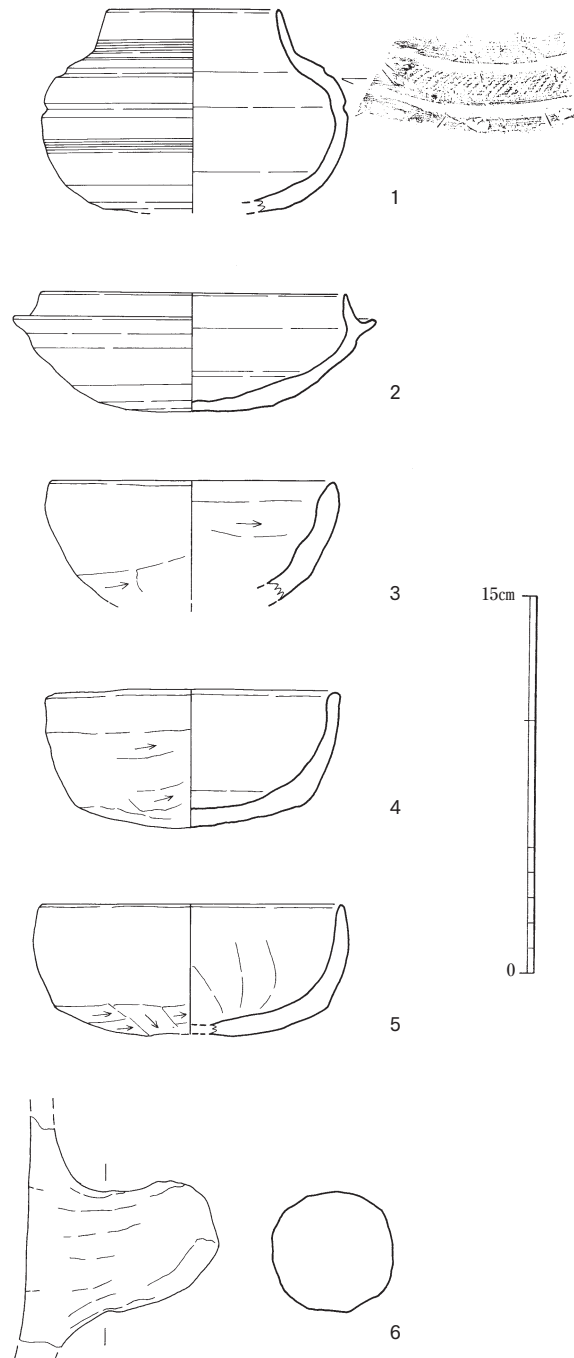
単室横穴式石室で、西壁で測った全長は3.5mとなる。玄室は長さ1.4m、幅1.7mと小型横長で、高さは1.8m。奥壁・右側壁に比べて、左側壁の石材は小振りのものを使用している。敷石は攪乱を受けていたためにほとんどを除去している。

3) 出土遺物

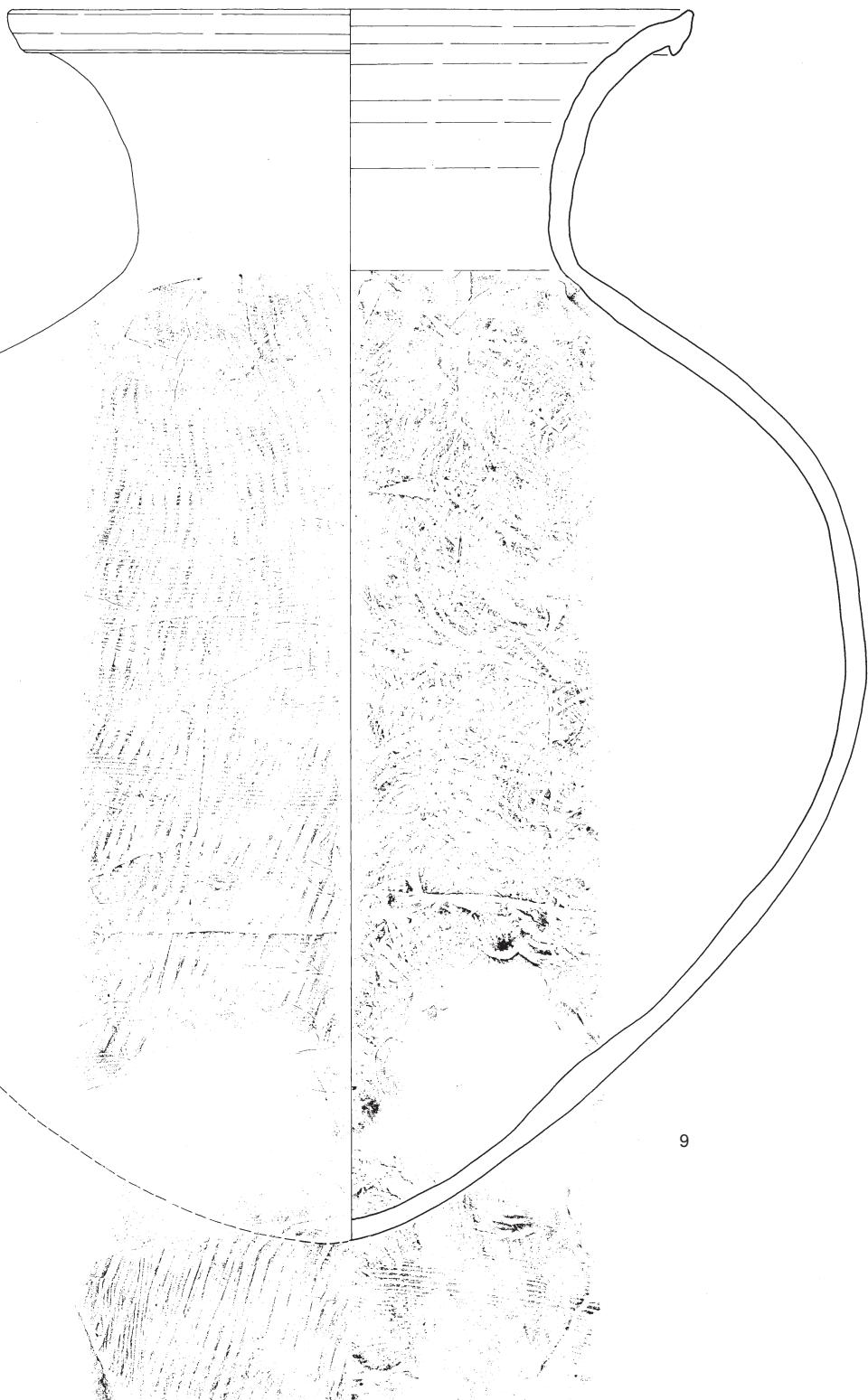
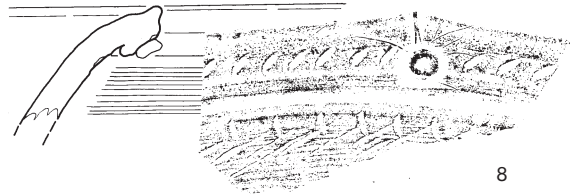
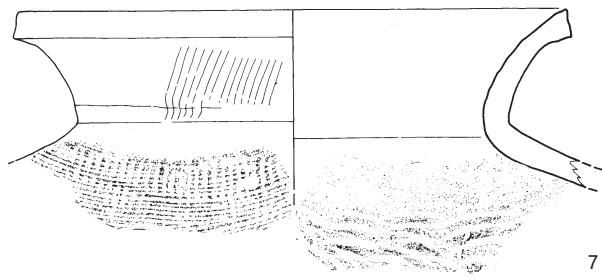
主体部内は攪乱を受け、玉類若干を確認したに過ぎない。周溝からかなりの量の土器が出土したが、北辺出土の土器群は上記したように3号墳墳丘から転落した様を見せていた。西辺から出土した土器群は4号墳墳丘から転落したものとよからう。



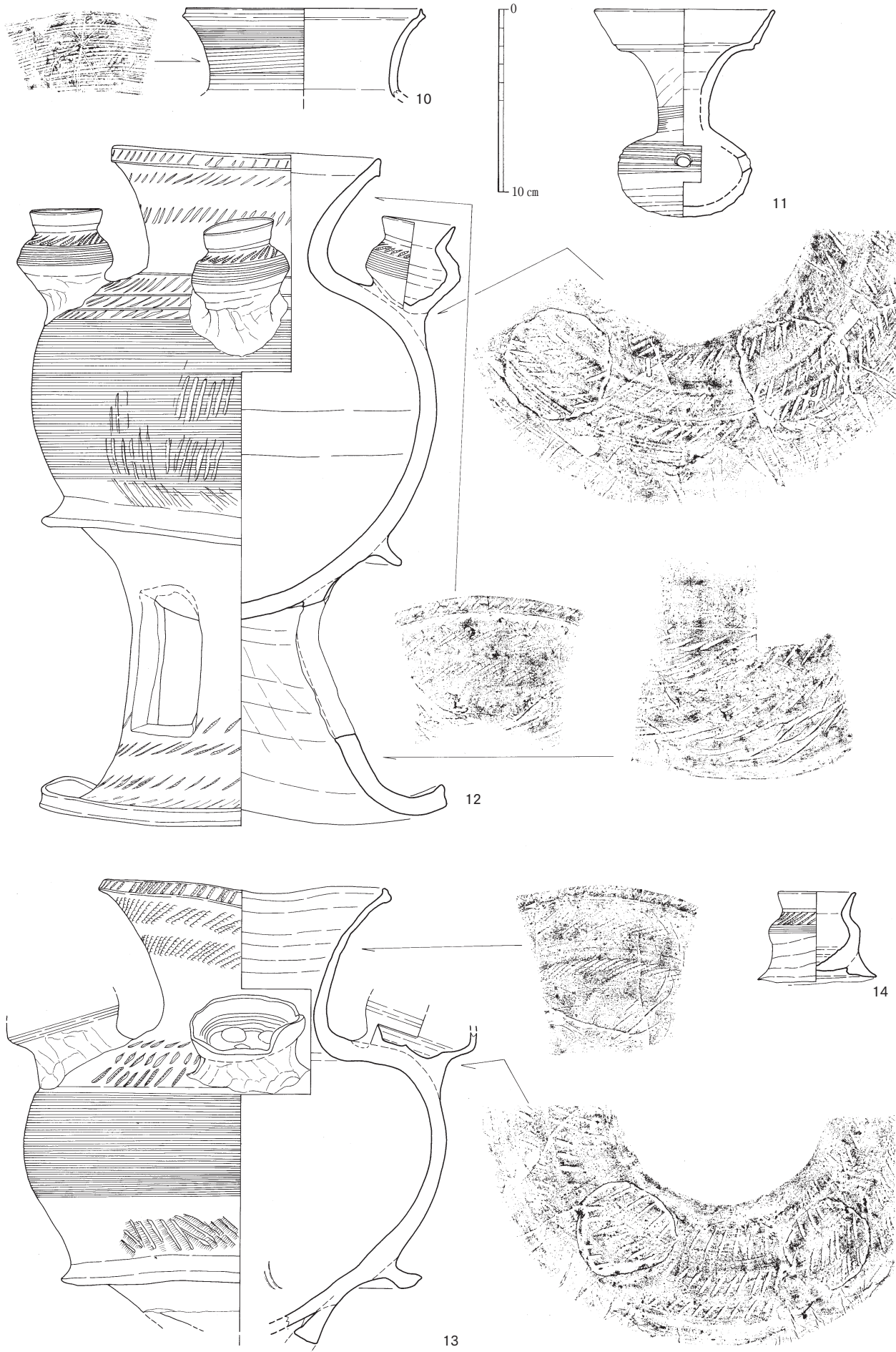
第53図 III-4号墳周溝西辺遺物出土状況
実測図(1/3)



第54図 III-4号墳出土土器実測図1(1/3)



第 55 图 Ⅲ - 4 号墳出土土器实测图 2 (1/3)



第 56 图 Ⅲ - 4 号墳出土土器実測図 3 (1/3)

玉類(図版53、第52図1～5)

攪乱中から出土した玉で、3個が完存、破損したものが数点ある。表面は灰黒色で風化したガラス玉あるいは土玉を思わせるが、破面は灰褐色硬質で、光沢はない。滑石製のようなものである。

土器(図版53・54、第54～56図)

墓道(第54図1) 短頸壺片で、墓道最下層・周溝SE区出土片が接合している。口縁部は内傾して直行し、肩部・体部最大径部にしっかりした凹線を巡らせる。凹線間を文様帯として、斜位の篋描刺突文を刻む。全体に雑な作りとの感じを受けるが、底部付近の篋削りは丁寧になされる。

墳丘(第54図2～6) 2～5は墳丘SW区表土・盛土除去に際して、6は盛土中から出土したものである。株に邪魔されて、いずれも並べ置いたりといった状態を確認していないが、祭祀に用いられた可能性は否定できない。2はほぼ完存し、灰黄褐色～灰赤褐色に焼き上がった須恵器。胎土精良で、丁寧に作られている。口径12cmである。

3～6は土師器。3は1/2が残存し、雑な仕上げの手捏ね土器。灰黄色を呈し、黒斑を有する。4は2/3が残存し、灰黄褐色を呈する。これも口縁部付近を除いて手捏ねである。5も1/3が残存し、これは内面を縦方向に撫でている。

周溝SE区(第54図7・8) 墳丘東側は調査区境に当たり、トレンチを開けたのみで周溝を面的に発掘していない。トレンチから出土したものかも知れないが、出土地点に若干の不安がある土器群である。2は口縁部を断面方形に整形し、端部はシャープ。全体に灰が飛んでいる。3は小片。口縁部を上下に拡張して円形浮文を付し、口縁部・頸部に櫛描刺突文を刻む。

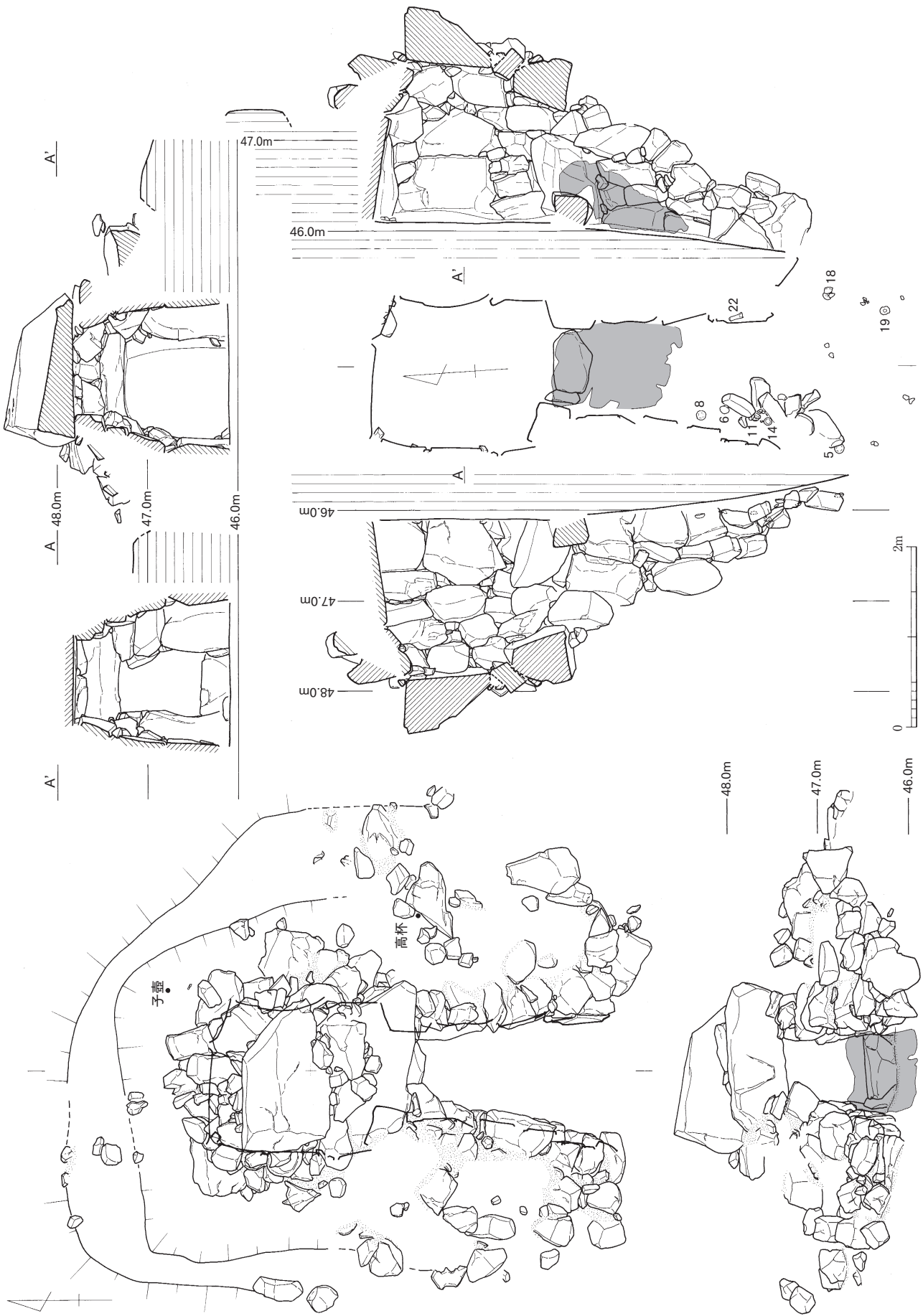
周溝SW区(第55図9) 第55図9は「4号墳NE区周溝黒色土」・「5号墳NE区周溝」・「5号墳北畦周溝中」・「5号墳東Tr.黒色土」などから出土したものが接合している。口頸部が長く外反して伸びる甕で、口径30cm、器高54cmを測る。口縁部は上下に拡張して面を作るが、そこは無文。頸部は櫛描刺突文を2段に配するが、界線は使用されていない。底部付近の多くを欠損するが、以上は多くが残存する。

周溝NW区(第56図) 1号小石室は周溝を切って構築されていたが、その小石室堀形に接する周溝からまとまって出土したもの。

10は小型薄手の口縁部片で、シャープな作りで胎土も良好。「5号墳SE区」・「4号墳SW区黒色土」からの出土片が接合。11は「5号墳NTr.」出土片が接合した處で、口縁部は1/3が残存、頸部以下は完存する。口頸部間の段は整形が甘く、体部の2条の凹線も甘い。通常は文様帯を画する凹線であるが、施文されていない。12～14は同好の脚付子持ち壺で、「5号墳NE・SE区周溝」・「5号墳NE区盛土中」などからも出土している。12は口頸部が肉厚となり、口縁部を断面三角形に整形する。口端面・頸部に櫛描刺突文を付す。なお、頸部は界線を使用していないが2段とする。肩部は甘い凹線で文様帯を画して、やはり3段の櫛描刺突文を施す。この文様帯の上に4個の子壺を配するが、残存するのは1個である。体部はカキ目で仕上げるが、所々に平行叩きの痕跡が覗き、その下位に細身の篋状突帯を巡らせて脚部を付す。脚部は焼け歪むが、長方形に近い大型透孔を



Ⅲ - 5号墳墳丘内の子壺出土状態



第 57 图 III - 5 号墳主体部实测图 (1/60)

3個配する。脚下半には口頸部などと同じ原体を用いて、無界線3段の櫛描刺突文を刻む。胎土は良好といって良い。13は12に比して口頸部が薄く作られていて、口端部の形状も異なり繊細な感じとなる。これも1個の子壺片が残存する。また、剥離した子壺は5号墳盛土中から出土し、古墳築造時に混入したものと思われる。

4) 小 結

蓋杯の出土が少ないが、第54図2に示した杯身は口径12cmで、ⅢB期に属するものとしてよからう。3号墳との関係は、土層観察から切り合い関係を確認することができなかった。ただ、4号墳周溝は3号墳墳丘の一部を削り込んでいて、4号墳が後出するであろう。

5. 平石Ⅲ - 5号墳

4号墳南西に近接し、さらに西側に6号墳が併置されたような位置関係にある。位置関係から見て通常ならばそれぞれ周溝が重複するはずであるが、4号墳周溝を5号墳周溝が掘り込んでいる状況は確認できたが、6号墳には明確な周溝が無く、関係は不明であった。

1) 墳 丘 (図版15・18・21、第58図)

墳丘南側は小さな谷となっていて、傾斜変換点は見えない。北半では直径6mの円墳に見えた。

i) 北 Tr.

主体部奥壁から1.6mの位置に地山削り出しが見え、幅1.4m、深さ0.5mの周溝が続く。主体部前端から盛土北端までの長さは約6.4mである。

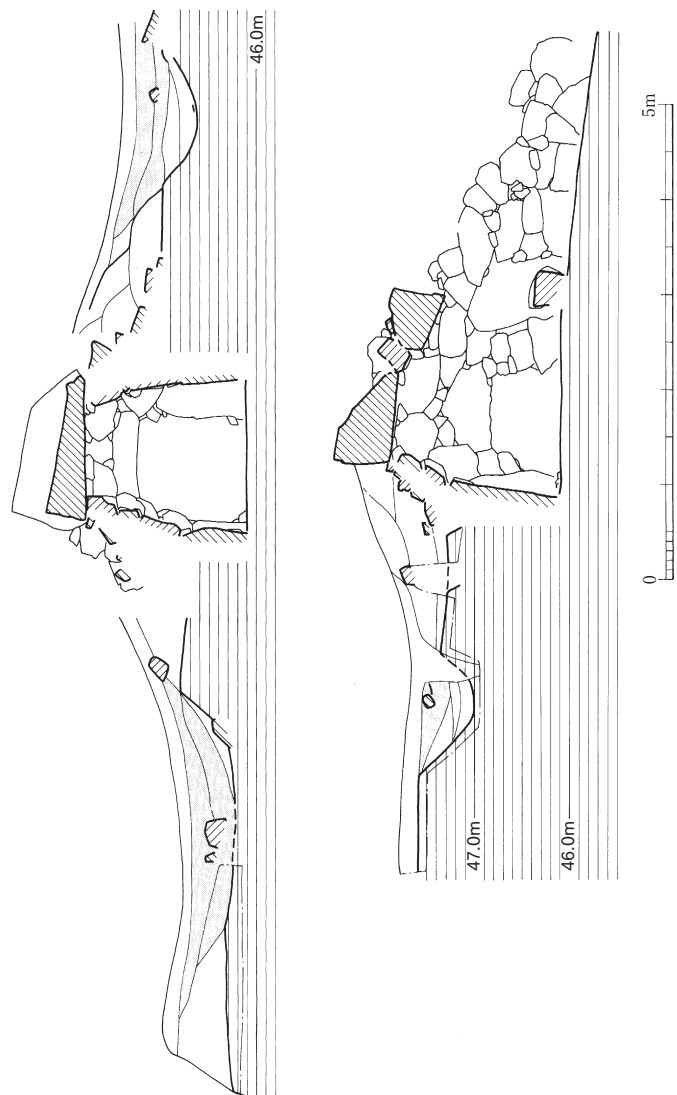
ii) 西 Tr.

主体部断面軸線から西へ2.6mの位置で地山を削り出し、盛土もそこから始まる。削り出しから西は3.5mほどの幅で黒色系埋土が堆積し、これは6号墳墳丘の一部も覆う。

iii) 東 Tr.

同じく主体部断面軸線から2.7mの位置で地山削り出し、盛土がなされる。平面的には4号墳周溝を切っていたが、土層では確認できなかった。

以上の結果から、直径5～6mの円



第58図 Ⅲ - 5号墳土層実測図 (1/80)

丘に周溝を巡らせていたようである。ただし、谷となる南半には及ばない。

iv) 墳丘祭祀土器

楣石の東端から0.7mの付近で礫の間に埋められたと思われる土器を検出した(図版21-3、第60図)。この古墳では墳丘内外にかなりの礫が見られ、どこまでが意図的なものか判断に苦しむ。この土器の周囲にも大小の礫があるものの、意図的に整然と配置したものとは言い難い状況である。

2) 主体部(図版19~21、第57・59図)

これも天井石は露出し、開口していた。

i) 閉塞

框石の上から前面にかけて塊石積みの閉塞が残存していたが、框石上のそれは崩落したものであろう。2~3段、高さ0.6mが残存するのみである。墓道南側に土器とともに散乱する礫もその一部だったと思われる。

ii) 羨道・墓道

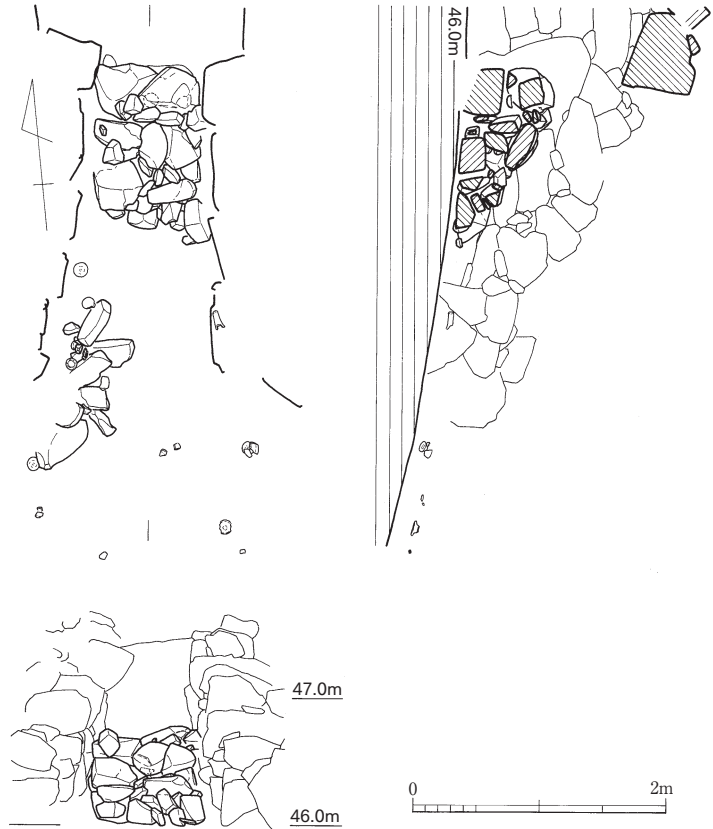
現状で墓道前端付近に大型石材が転落していて、これが楣石前面に置かれた天井石であったと思われる。框石から墓道貼石前端までの長さは2.1mほどとなる。

墓道前端の貼石は低くなり、東西に数個の石材をほぼ直角に並べて装飾的に処理している。東西両辺にも不連続に石材が検出されたが、本来的には2号墳のように堀形外周に並べ置かれたものであるのかも知れない。

iii) 石室

単室横穴式石室であるが、袖石の突出が小さく、羨道側壁と連続する。玄室は長さ1.8m、幅1.6mの長方形となり、高さは1.8mほどである。使用石材の中では奥壁腰石の大きさが際だつ。また、ほかの古墳に比べて框石の大きさも特異である。

なお、敷石はほとんどが荒らされていたために除去し、図化していない。



第59図 III-5号墳閉塞状況実測図(1/60)

3) 出土遺物

これも主体部内は攪乱を受けていて、良好でなかった。墳丘各所から土器が出土するが、中でもSE区墳丘上では石で囲ったような状態で土師器高杯が出土したことは上記した。墓道からもまともな土器が出土している。4号墳・6号墳との間から出土した土器の帰属は難しいが、とりあえずここで紹介する。

土器(図版54・55、第61～63図)

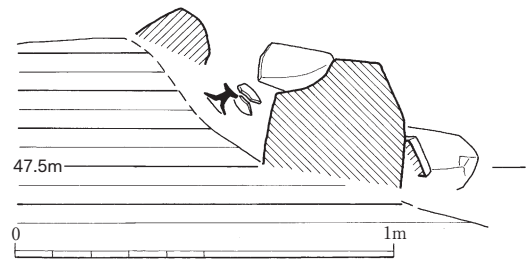
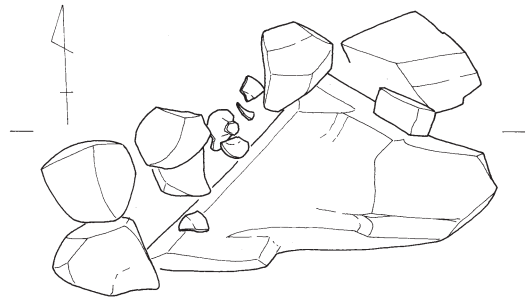
主体部(第61図1～3) 主体部内のどこから出土したものかの注記がない。1は1/5ほどの小片。口縁部付近が直線的となり、天井が高くなるようである。復原口径は11cmである。2も1/5ほどの残片で、丁寧に作られた杯身である。3は1/4の残片で、外底面は篋切りの後に撫でる。

墓道(第61図4～18・第62図19～22) 3号墳と同様に、床面近くにあって出土状態を図化し、番号を付して取り上げたものと、記録せずに取り上げたものがある。4は口縁部付近が小片となっていて復原口径には不安がある。丁寧に作られていて、天井部は撫でで終わる。5は実物を見てもセット関係と気付かずにいたが、篋記号が共通し、口径も相応しいのでここに配列した。焼け歪みのある完形品で、これも丁寧に作られる。天井部は篋切り後撫でている。6は天井部が平らとなるので身とするべきかも知れないが、外見が9に似るので蓋としておく。復原口径は10.4cm。器表に砂が多く浮き、灰褐色を呈する焼成不良の土器である。天井部は篋切り後撫でている。7～9はお互いに似た杯身である。7は1/2が残存する。器表に砂粒が多く浮き、焼成は甘い。8は完存し、やはり器表の砂粒が特徴的である。作りは雑で、外底面は篋切りのままである。9はほぼ完存。これも胎土粗く、作りも雑である。外底面は不定方向の丁寧に篋削りのようで、この点はほかと異なり、次の10と共通する。

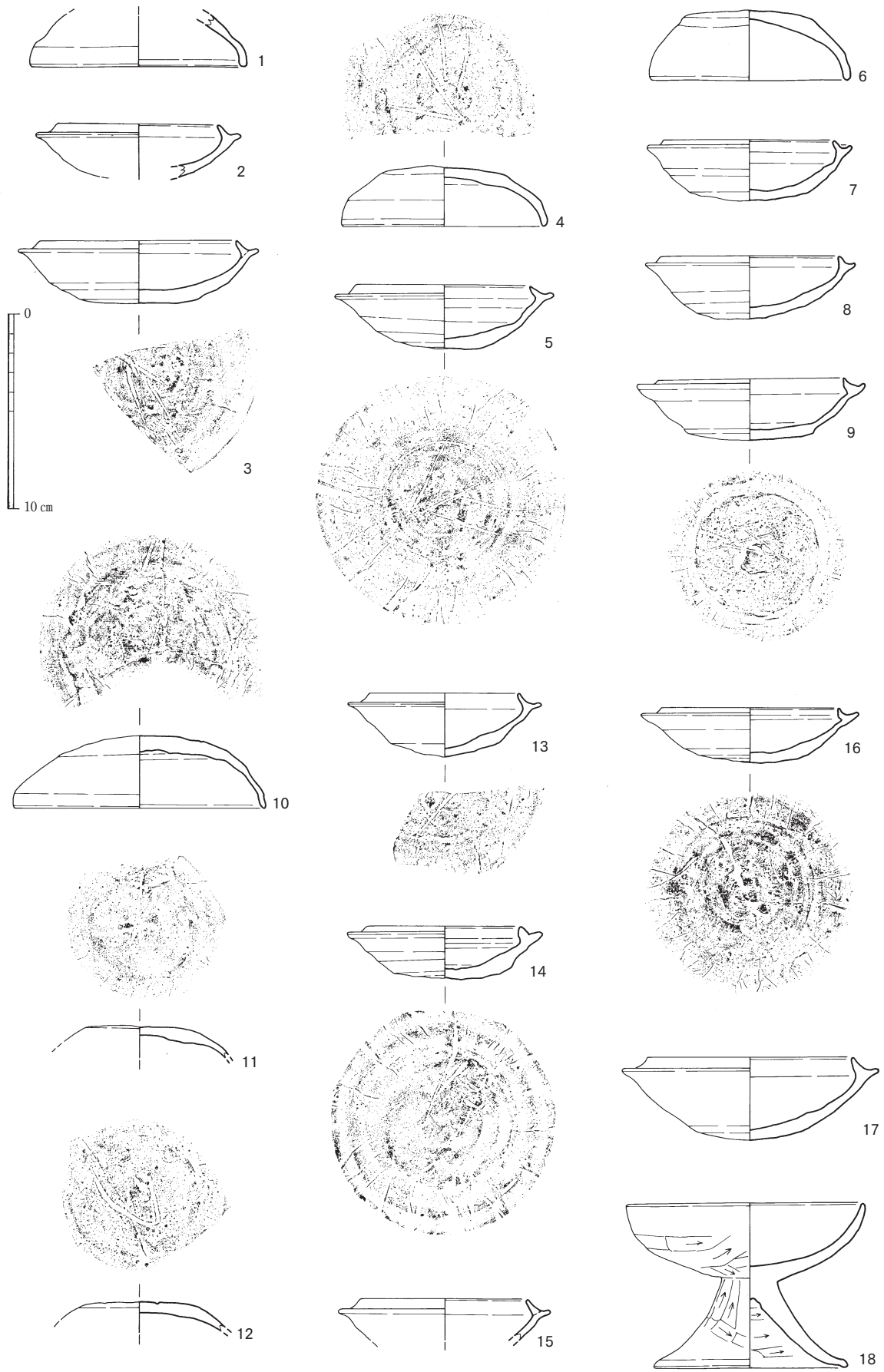
10は天井部から口縁部へと丸く移行し、天井部は肉厚であるが口縁部は薄くなる。胎土良く、作りも丁寧である。天井部は不定方向の篋削りで仕上げる。口径13cmと大型となる。11・12は天井部として図示しているが、身底部であるかも知れない。11は丁寧に作りだが、焼成甘く器表が荒れる。12は砂粒が多く浮く。

13は小片で焼け歪むため、復原口径には不安がある。丁寧に作られた土器。14はほぼ完存する。肉厚で焼成が甘い。外底面は篋切りで終わる。15は小片。16は口縁部の一部を欠き、これも焼成が甘い。丁寧に作られた土器で、外底面は篋切りのままで終わる。また、外底面に篋記号が刻まれるが、非常に弱く暗文風である。17は1/3が残存するが、焼け歪むために復原口径は不安である。丁寧に作りであるが、外面には窯土が付着する。

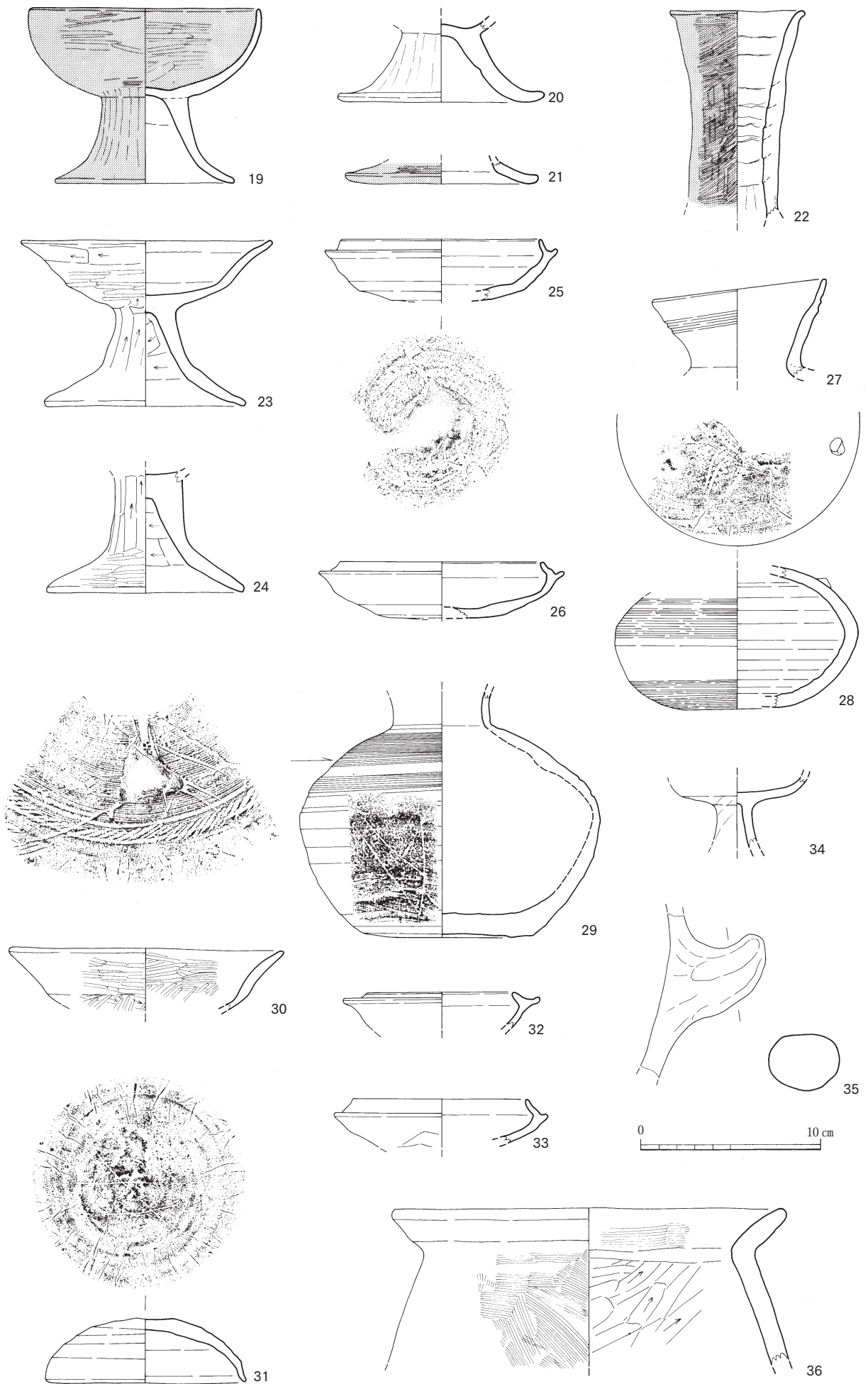
18～22は土師器。18は完形に近い高杯で、赤みの強い黄褐色に焼き上がる。椀形の杯部は内面を撫で、外面下半を丁寧に篋削りで調整する。脚部も稜をもたず、脚端部を小さく屈曲させるなど、須恵器の器形を意識したようである。19も椀形杯部をもつ高杯で、これは脚部上半が非常に太くなる。細部に変化は加えていないが、杯部内外面、脚部外面に赤色顔料を塗布する。文字通り胎土精良で、作りも丁寧である。20はさらに太く、短い脚部で、杯部内底面が灰黄色、脚部外面が灰赤色と色調がかなり異なるので、脚付壺であったかも知れない。これも胎土・作りともに良好だが、赤色顔料は見えない。21は図示部はほぼ完周する、赤色顔料が塗布された残片。22も図示部はほ



第60図 III-5号墳墳丘SE区遺物出土状況
実測図(1/20)



第 61 图 III-5 号墳出土土器実測图 1 (1/3)



第 62 图 Ⅲ - 5 号填出土土器实测图 2 (1/3)

ほ完存。口縁部を小さく外反させる長頸壺で、内面は粘土紐接合痕が顕著であるが、とても丁寧に作られている。

墳丘（第62図23） 墳丘SE区で祭祀に供されたと想定される土師器高杯で、伝統的な屈曲する杯部・脚部を有する。杯部上半は大きく開き、口縁部付近でさらに外反する。下半との稜線は甘いものの、比較的明瞭である。器表が荒れているが、全面を篋磨きで仕上げていると思われる。脚部も中位で勾配を変え、端部は丸く収める。ここも外面下半は篋磨きを多用する。赤色顔料は使用していないが、意図的に赤く焼き上げるようである。

周溝SE区（第62図24） 周溝底出土の土師器高杯脚部で、図示部は完存。23に比して脚部上半の開きが小さく、外面下半の篋磨きは粗雑となる。なお、これも赤く焼き上がっている。

周溝NE区（第62図25～30） 30が土師器で、それ以外は須恵器。25は雑な作りで焼成甘く、器表が荒れている。外底面には弱い線で篋記号が刻まれている。26は1/3が残存し、これは胎土・調整とも良好である。この2点の口径は11cm余で、器高がかなり異なるが、受部の形状や外底面の篋削り処理など類似する。なお、26は「周溝下層」の注記がある。

27は平瓶の口縁部で、図示部はほぼ完存するが大きく焼け歪む。中位やや上方に2条のしっかりした凹線を刻み、胎土・作りともに良好。28も体部の多くが残存する平瓶で、これも胎土精良で調整も丁寧になされる。体部最大径部以下は篋削り後に細かいカキ目で覆い、体部上面にはボタン状の装飾と篋記号・叩き痕が残る。非常な高温で焼かれたようで、器表に微細な亀裂が多く見える。

29は長頸壺か。図示部はほぼ完存し、肩部に2条の凹線を巡らせて文様帯とし、篋描斜線文で埋める。体部最大径部以下は篋削りを行い、下端付近を除いて横撫で処理する。なお、肩部と体部下版に同じモチーフの篋記号が刻まれるが、位置は対角線上に近く、かつ体部下半のモチーフは肩部のそれを上下逆にしたものとなる。

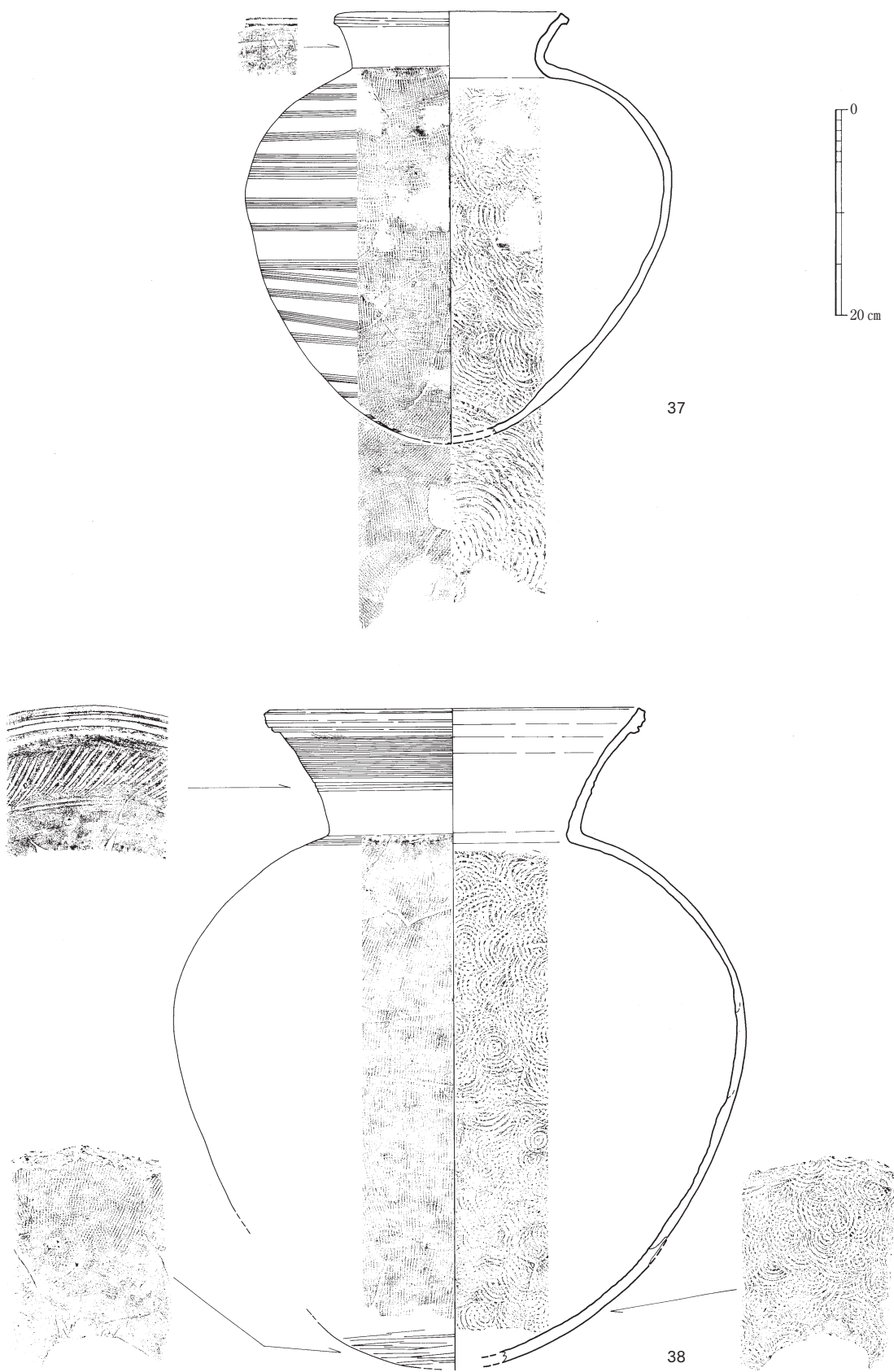
30は高杯口縁部片で、3/4が残存する。灰赤色に焼き上がり、胎土・作りともに良好。杯部下半は篋削りの後に丁寧に篋磨きを施す。

その他（第62図31～38） その他帰属のはっきりしないものも含めて5号墳周辺からの出土土器をまとめて紹介する。31は「5号墳」とだけ注記がある須恵器杯身で、完形品であることから墓道からの出土品かも知れない。胎土良好で、調整も丁寧になされる。天井部は篋切りのままで終わり、細かい線で篋記号が刻まれる。32は「墳丘SW区表土」出土の須恵器杯身小片で、復原口径に不安がある。33・34は「5・6号墳間黒色土」出土の須恵器。33は杯身小片、34は図示部が完存する高杯片。35は「5号墳前面巨岩周辺」出土の土師器把手。器表が非常に荒れている。36は「5・6号墳間周溝底付近」出土の土師器甕で、口縁部付近の1/4が残存する。器壁が厚い。

第62図37は口径23cm、器高42cm弱の甕で、体部最大径部以下はほとんどが残存する。5号墳NE区周溝のほか、「5・6号墳間表土」・「4号墳SW区周溝」などからも出土している。口縁部は肥厚させて断面方形に近く整形し、頸部は無文だが縦位に2条のシャープな篋記号を刻む。作りは丁寧に、非常に良く焼けている。同38は口径37cm、器高65cmほどに復原できるが、底部は接合しない。これも4号墳SW区各所から出土していて、必ずしも帰属は定かではない。

4) 小 結

墳丘構築に伴う祭祀に供されたと考えられる土師器高杯（第62図23）は単独では時期の比定が困難である。墓道などから出土した須恵器蓋杯は、法量から見ればIVB期に属するものであろうが、



第 63 图 Ⅲ - 5 号墳出土土器実測図 3 (1/6)

まだ逆転現象は確認できない。

4号墳に後出することは、平面的にとらえた周溝の切り合い関係、盛土中に4号墳出土の子持ち装飾須恵器の子壺が混入していたことから裏付けられる。6号墳との先後関係は現地では確認できていない。

6. 平石Ⅲ - 6号墳

現況ではほとんど墳丘の高まりを視認できなかったが、古墳群の配置から推測して古墳がありそのような付近に陥没坑が見られ、それを清掃して石室を確認した。

1) 墳丘 (第64図)

古墳を確認した後で見れば、陥没坑の西側にわずかに傾斜変換点を認めることができる。しかし、現況では6号墳・9号墳ともに古墳との確信がなかった。

i) 北 Tr.

主体部奥壁の北側、1m弱の付近から6m以上にわたって黒色土が堆積し、判断に迷ったが、結果的にはこれが9号墳の周溝であると判明した。ここでは6号墳の墳丘はほとんど残存していなかった。

ii) 西 Tr.

主体部縦断面軸から2.6mの付近で地山削り出しを確認でき、そこから盛土も施されている。そして、その西側では墳丘を覆う9号墳の盛土が認められた。ただ、この盛土はほとんどが削平されていて、よもや古墳が存在しようとは考えていなかった。

iii) 東 Tr.

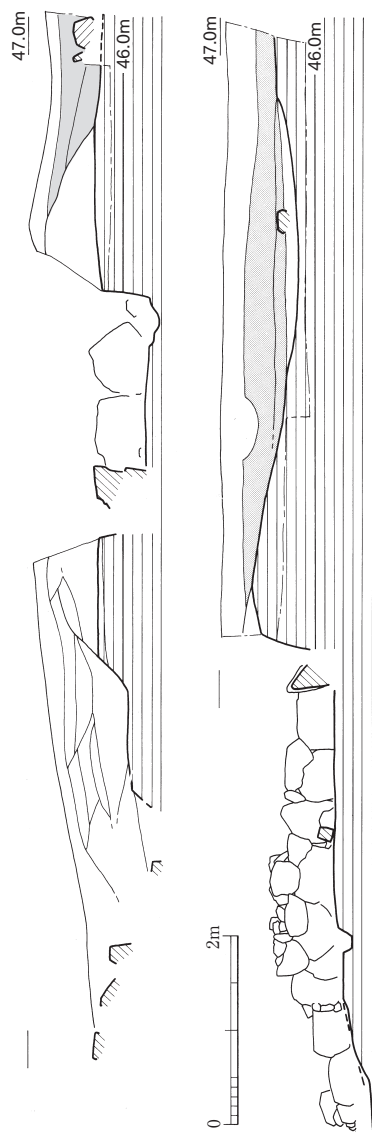
同じく断面軸から3mの付近から盛土が確認できるが、分層が困難な土質であった。5号墳で記したように、両古墳間に切り合い関係は確認できなかった。

iv) 列石

主体部は大破するが、方形に巡るかと思われる列石の一部が検出された。ただ、整然としたものではなく、乱れていた。また、東西の列石間の距離は約5mであるが、上記したように盛土東西長は5.6mを測ることから、この列石も盛土中に隠されたものであったかも知れない。列石の露出はともかく、方形を意識していたものとしてよいであろう。

2) 主体部 (図版22、第65・66図)

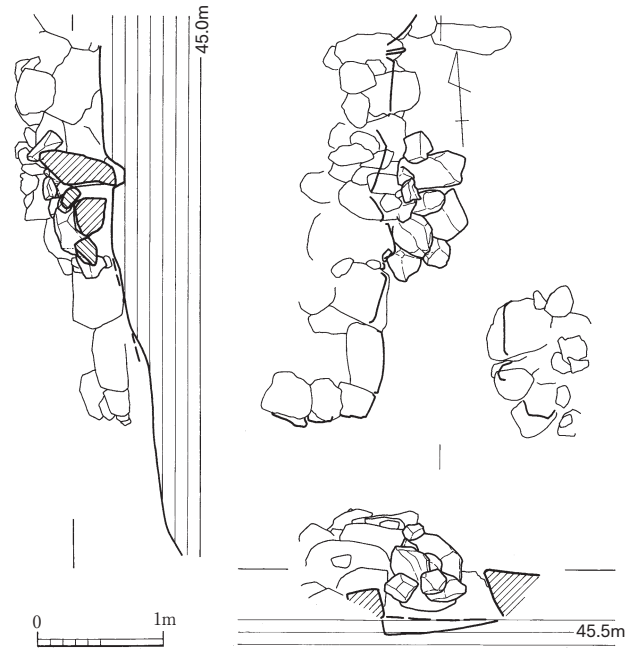
大破し、石材の多くが抜かれていたが、かろうじて平面プランは確認できる。



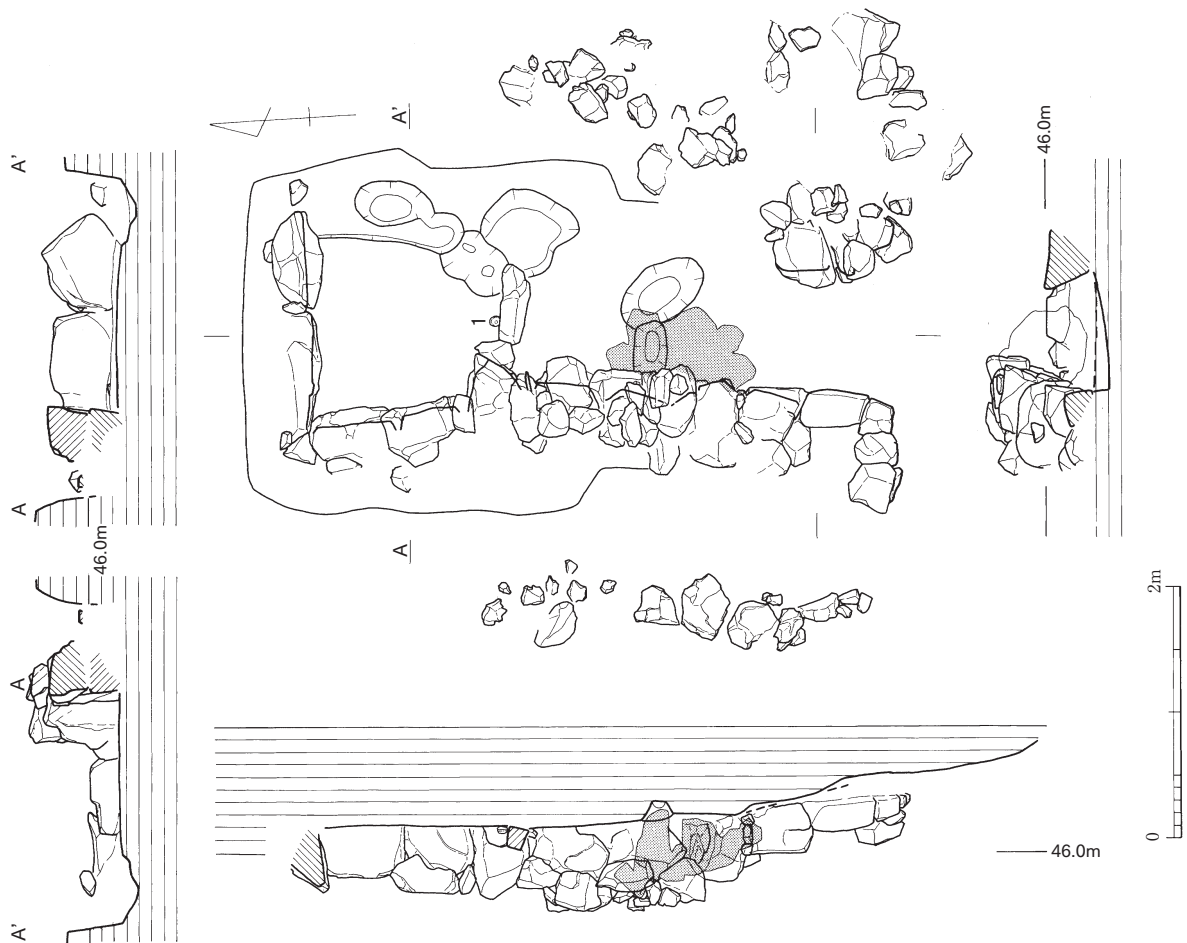
第64図 Ⅲ-6号墳墳丘土層実測図 (1/80)

i) 閉塞

通常は玄門框石付近に積み上げられるのだが、ここでは框石から0.8mほどの距離を置いて塊石を積み上げている。閉塞を除去した平面図には框石の抜き取り跡に見える窪みがあるが、ここには横幅および高さが0.6m、最大の厚さが0.3mの大型石材が立てられていた。その頂部は玄室框石よりも0.3m高い位置にあるので、本来閉塞として使用された石材としてよからう。対応する南側壁も通常の袖部のようにことさらに石材を立てて使用しているわけでもない。他の古墳に比べて閉塞の位置が前面に位置することは、框石までの空間を前室のような位置付けで使用したものかと思われる。



第65図 Ⅲ-6号墳閉塞状況実測図(1/60)

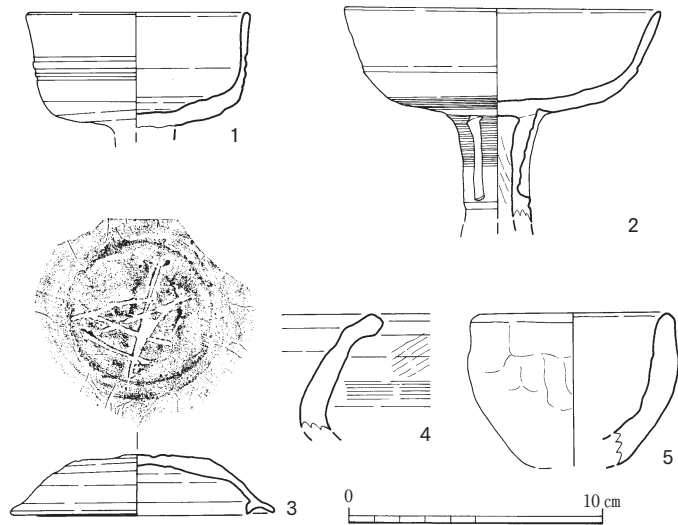


第66図 Ⅲ-6号墳主体部実測図(1/60)

ii) 羨道・墓道

天井石は一切残存しないが、閉塞を覆う位置までは天井石が架構されたものと思われる。

比較的石材が残る西側壁は框石から3mまで石組が続き、前端は明らかに直角を意識して3個の石を並べている。さらに0.5mの間は石材が抜かれたようで、そこから北へ延びる石列があったようである。東側壁は隅が残存しないが、側壁から2mの位置に乱雑に石材が残っていることから東西両辺に主体部に併走する列石が配置されたと考えてよからう。



第67図 III-6号墳出土土器実測図(1/3)

iii) 石室

東側壁がすべて破壊された単室横穴式石室で、残存する部位も腰石あるいはその直上の石材が一部残るのみである。玄室は奥壁付近で幅1.6mほどと推測され、玄門付近では幅を減じるようである。奥壁から框石までの長さは1.5m、袖石基部までの長さは1.2mとなる。

3) 出土遺物(図版55、第67図)

主体部は大破して良好な出土遺物は框石横に伏せて置かれた高杯杯部のみである。

土器(図版55、第67図)

1が框石の北に接して伏せた状態で出土したもので、高杯を想定している。体部中位に3条の甘い沈潜を刻み、口縁部はほぼ直立して丸く終わる。焼成が甘く、器表が摩滅するが、底部外面は篋削りの後に横撫でを施すようである。

2は5号墳に接する東Tr.出土であり、厳密には帰属は確定しない。1/2が残存する高杯杯部で、体部中位に段を付して、口縁部は直線的に開く。脚部上段の透孔は3個配されるが、貫通していない。焼成は甘い、胎土・造作は良好である。

3はSW区表土出土で完存する。これは9号墳に帰属するものとした方が妥当であろう。口径8.5cm、器高2.3cmの杯蓋で、口縁部付近は1/2が残存する。胎土良好で調整も丁寧になされ、天井部外面は篋削りで終わる。

4はNW区表土出土の須恵器甕小片で、内面は暗緑色の自然釉が付着、外面は黒色化する。

5はSE区墳丘出土の手捏土器で、小片のため復原図に不安がある。

4) 小 結

今回調査した中では唯一方形墳の可能性をもつ。4・5号墳と西側から順次、ほぼ等間隔で構築されていることから類推すれば、5号墳に後出するのであろう。

7. 平石Ⅲ - 7号墳

6号墳のすぐ西隣には9号墳が存在するが、これは確認が遅れたために、その西に位置する古墳を7号墳とした。これも天井石が露出し、石室も開口していた。

1) 墳丘 (図版23、第68図)

現況では約8mの円墳を思わせるが、墳丘南側は不明瞭となる。

i) 北 Tr.

主体部奥壁背面の北 Tr. では、奥壁から2.4mの付近から盛土が始まるが、地山削り出しは観察できず、周溝も確認できなかった。この地点から主体部前端の石材までの距離は約6.3mを測る。

想定した墳丘を覆う水平な堆積土があるが、これは後述する9号墳の盛土だと考えている。また、墳丘上にさらに掘り込む黒色土の落ち込みがあるが、この性格は不明である。

ii) 西 Tr.

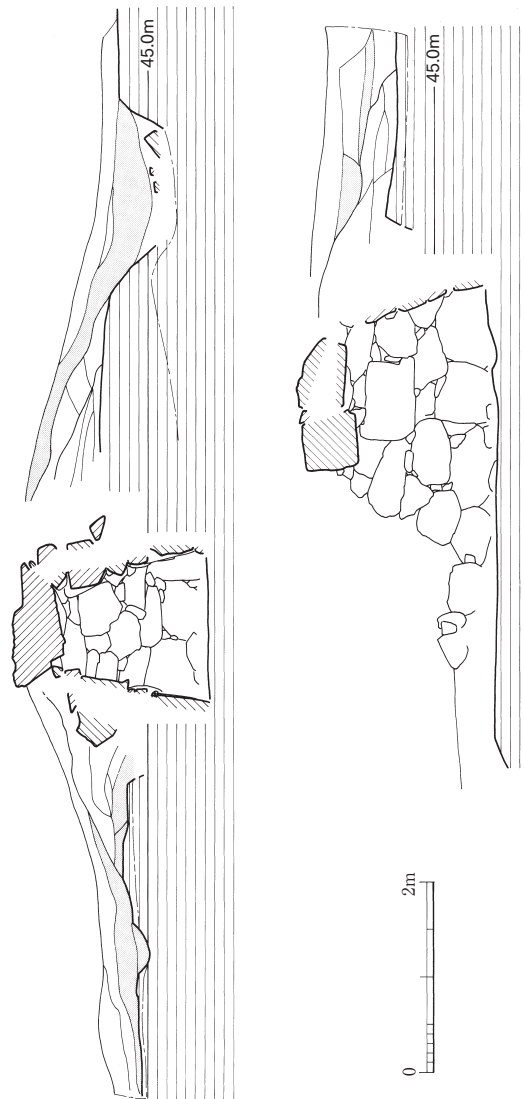
主体部中心から2.7mの地点から盛土が始まり、墳丘下位から墳裾にかけて黒色土が覆う。墳丘最下層には珍しく黒色系の盛土が使用されている。墳裾から0.5mほど西側に、幅0.6m、深さ0.1mほどの黒色土が堆積した小溝が検出されている。この溝は北・東 Tr. では確認できず、9号墳周溝に連続するような位置にあって9号墳周溝と重複する。9号墳西 Tr. の土層観察では、上層から掘り込んでいるので、これも性格は不明といわざるを得ない。

iii) 東 Tr.

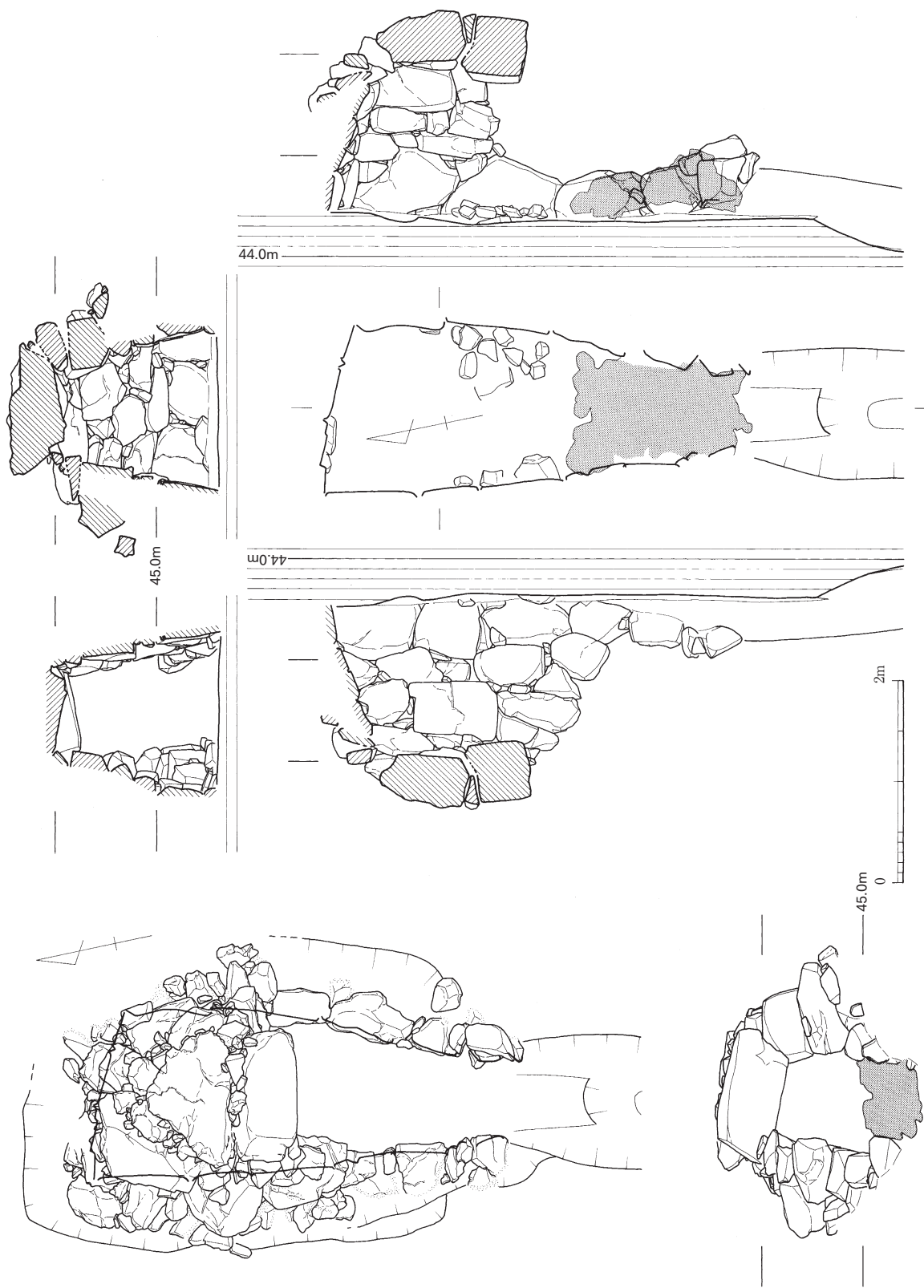
現状では主体部中心から3.4mの付近から盛土が始まるが、主体部に向かって盛り上がる通常の盛土と、それを覆う逆の傾斜の盛土が見られる。さらに東は墳丘をも一部覆う黒色土が堆積し、石材も埋没していた。後で判ったことだが、これは9号墳の墓道で、7号墳墳裾近くに掘り込まれている。したがって、逆の傾斜で盛られたものが9号墳の盛土と考えれば、7号墳本来の盛土は主体部中心から2.7mの地点から始まるものと考えられ、西 Tr. の観察結果とも一致する。周溝はまったく確認できなかった。

2) 主体部 (図版24・25、第69・70図)

天井石が2個残存するとはいえ、前半は大きく破壊されていた。



第68図 III - 7号墳墳丘土層実測図 (1/80)



第 69 图 Ⅲ - 7 号墳主体部実測図 (1/60)

i) 閉塞

石室前端の側壁から1.8mの長さにわたって、60cmほどの高さで閉塞石が残っていた。最奥部は幅0.8m、長さ0.6m、高さ0.4mの大型石材が据え置かれ、その前面に小型石材が密に積み上げられていた。小型石材が密に積まれていることや、最下段が床面近くに位置することなどから、これらが大型石材の上から掻き出されたと想定することは困難であろう。本来のあり方に近いものと思われる。

ii) 羨道・墓道

袖石・墓道貼石をもたないため、羨道の有無は不明である。素掘りの墓道は長さ約5m、最大幅1.3mの規模で掘削される。床面は凹凸があり、連続的ではない。

iii) 石室

今回調査した古墳では唯一の単室無袖の横穴式石室で、奥壁の傾斜が強く床面プランは羽子板形となる。奥壁が主軸に対して傾くため、長さは3.9～4.0mを測る。奥壁の幅は1.6m、前端幅は0.7mである。高さは奥壁付近で1.5mであるが、その前の天井石は0.2mほど低くなっている。これが玄室と前室の区別を意識したものか、天井石が2個しか残存せず、側壁の石組みにも特別な変化が観察できないので断定できないが、1石（奥行き1.2m）ほどの空間では玄室としては狭すぎよう。

3) 出土遺物

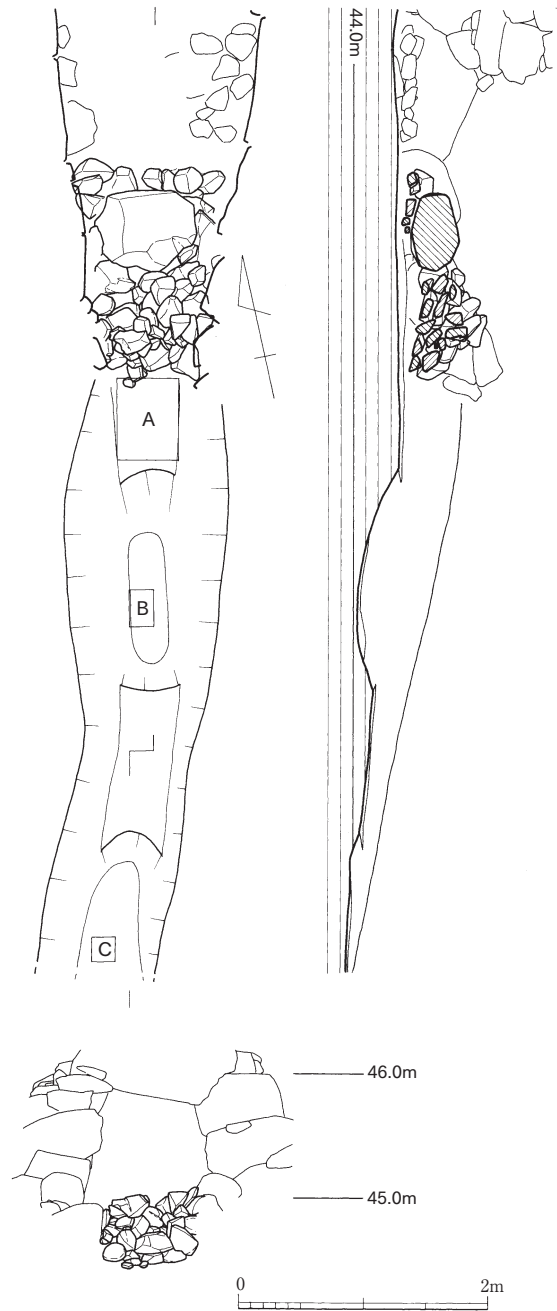
これも主体部内は攪乱を受けていたが、墓道からは良好な状態で土器群が出土した。

金属製品 (図版53、第52図6・7)

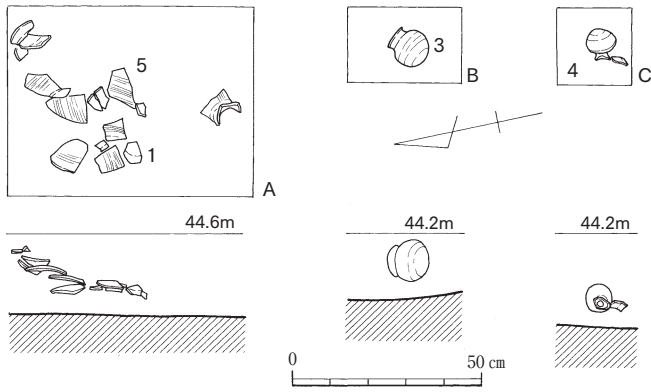
攪乱を受けた玄室内からの出土。金銅製で、全体に緑青が吹き、わずかに金が見える。直径2.1cmを測り、重量感がある。7は「墳丘NE区黒色土」出土であり、本来は9号墳に関する遺物であった可能性が高い。図右端を欠損する。

土器 (図版55、第72図)

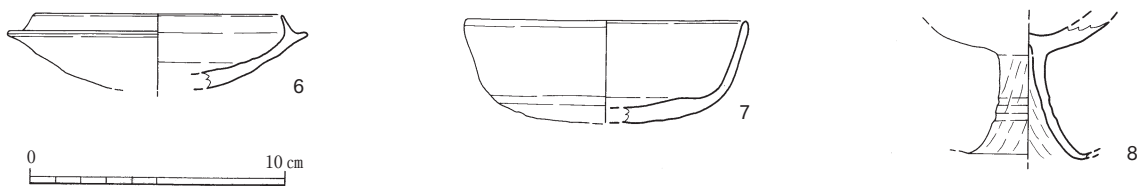
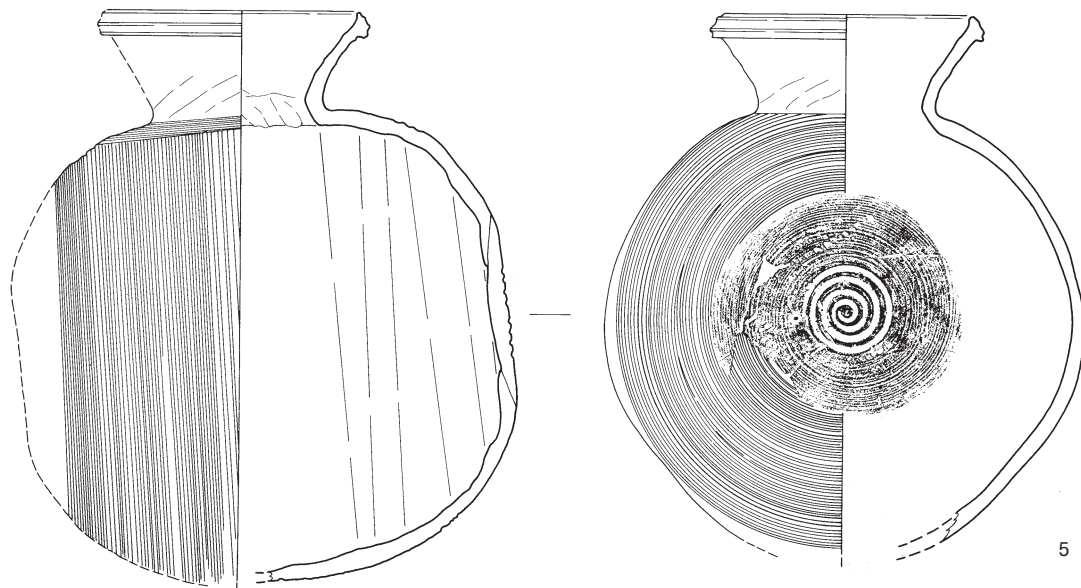
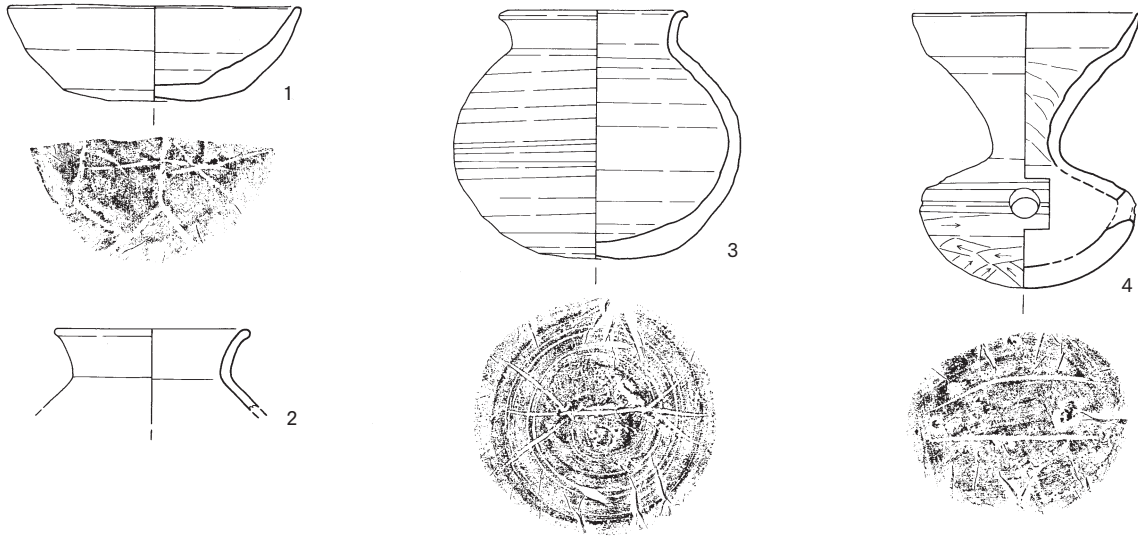
1～4は墓道出土の須恵器。1は口縁部の大部分を欠くが、それ以外は1/2が残存する。底部が平底風となって、稜をもって立ち上がることから杯身としておく。体部は内彎しつつも、口縁部まで大きく開く。器壁が厚く、生焼けで器表が荒れている。2は完存する小型壺で、胎土は良好であるが、外底面付近の篋削りは雑である。体部は球形に近く、頸部界は丸みをもち、短く外反する口縁部へと続く。口端部はさらに小さく外反する。これも焼成甘く器表が荒れている。3は頸部以下が完存、



第70図 III-7号墳閉塞状況実測図 (1/60)



第 71 图 Ⅲ - 7 号墳墓道遺物出土狀況
実測図 (1/20)



第 72 图 Ⅲ - 7 号墳出土土器実測図 (1/3)

口頸部は1/2が残存する。口頸部界は稜線のみとなり、体部文様帯はしっかりした凹線で画されるが無文のままである。底部付近は不定方向の篋削りで仕上げる。窯土が付着し、外面の灰が飛んでいる。5は「6号墳SW区溝状遺構(9号墳墓道)」・「7号墳西側溝中」・「8号墳NTr.」などから出土した土器片が接合したもので、多くは7号墳墓道出土である。横瓶で、口縁部は小片。体部の割に大きな口縁部をもち、端部は上下に拡張して変形する。体部は全体をカキ目で覆うが、中央部に4条、左右に3条のしっかりした凹線を刻んでアクセントをつける。胎土精良で、作りも丁寧である。

6は「7号墳NE区表土」出土の須恵器杯身で、1/4の残片。胎土・作り良好で、焼成は甘い。7はNTr.出土の須恵器で、杯身あるいは碗として図示したが壺蓋であるかも知れない。1/4の残片で、焼成甘く器表が荒れている。8は「7号墳NE区墳丘表土」出土の高杯片で、脚部中位にごく弱い凹線を2条巡らせる。この3点の帰属は明確ではない。

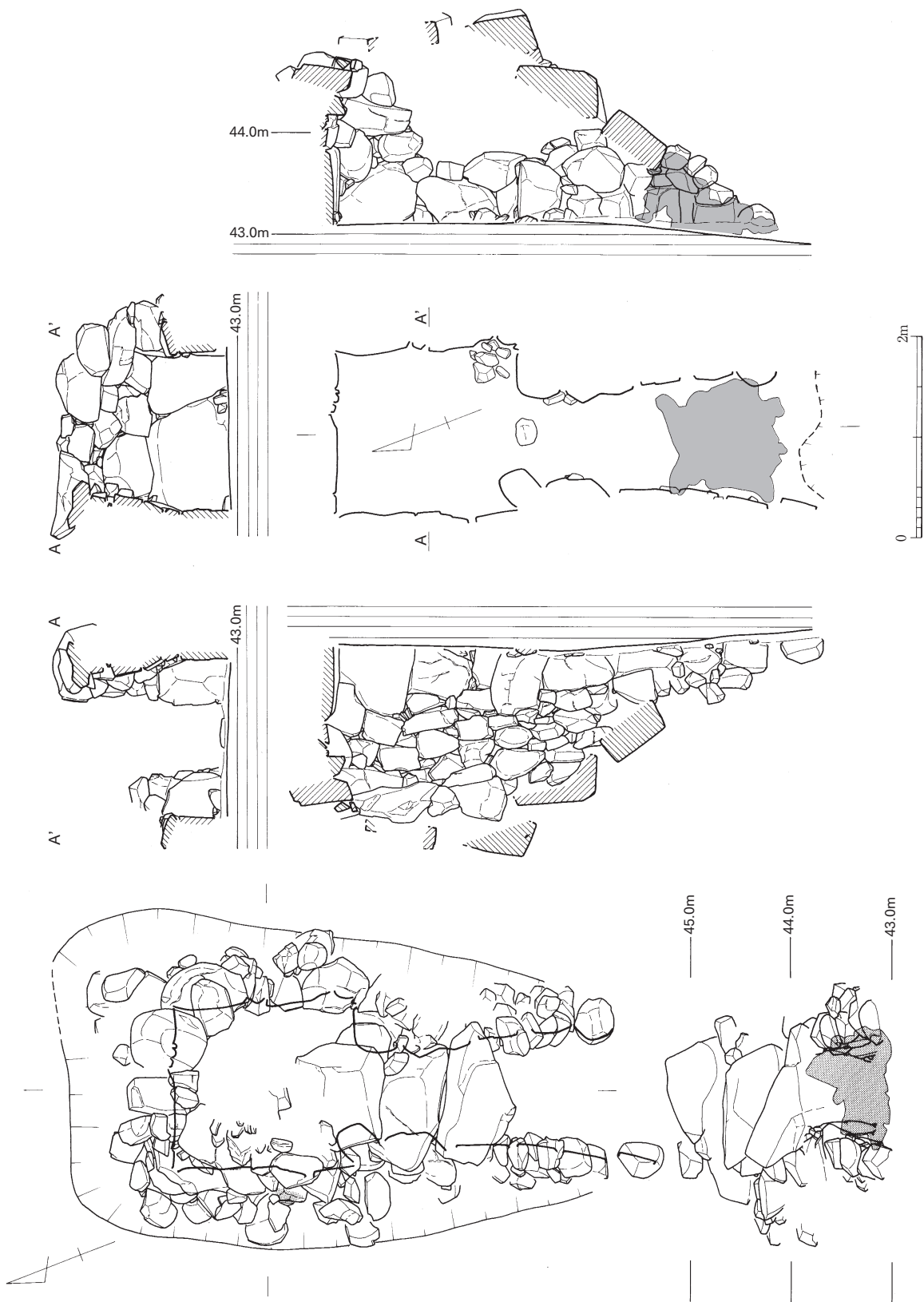
4) 小 結

主体部は袖石を用いず、かつ床面プランは羽子板形に近くなる、やや変わったものであった。これも築造時期を示す良好な土器は乏しい。1に杯身として図示した土器は蓋としてもおかしいものではない。蓋杯の形状の逆転が起きる頃に属するものと考えればIV A～IV B期に比定できようか。9号墳を除けば、最も退化した石室形態であり、時期比定も齟齬はないであろう。先述したように9号墳に覆われるので、その築造以前として下限は捉えられる。

西側に位置する3・4号小石室との関係は、両者が無遺物であることもあって不明である。また、7号墳の北から西へ迂回するように走る小溝は、後述する9号墳西Tr.で確認されたものと同一の遺構と思われ、その南西端は古墳から遠ざかるように伸びて8号墳周溝へ連なっているために、これとの関係も不明といわざるを得ない。ただ、7号墳墓道出土小壺の底部に刻まれた特徴的な篋記号と同じ篋記号をもつ杯蓋2点が小溝から出土していることを重視すれば、小溝と7号墳の関係は不明のままであるが、小溝出土土器は本来7号墳に帰属していた可能性が考えられる。この小溝の出土土器はIV A期に比定でき、7号墳の築造時期もそこまで遡る可能性がある。



7号墳主体部現況



第73图 Ⅲ-8号墳主体部実測図(1/60)

8. 平石Ⅲ－8号墳

この平石Ⅲ群中において、工事用道路建設予定地内で調査を行った唯一の古墳で、かつ、調査した古墳としては最も西に位置し、平石Ⅲ群中でも同様である。

1) 墳丘 (図版26、第74図)

現況では径8mほどの円墳と思われたが、南西側はかなりの傾斜で落ちていて、傾斜変換点は判らなかった。また、南には農業用水路に係る構造物が設置されていて、大きく掘削されている。

i) 北 Tr.

主体部奥壁背面のトレンチ。奥壁から1.6mの地点から盛土が始まり、その北側では地山が緩傾斜面となって掘削ははっきりしないが、緩斜面に墳丘を造ることから浅い周溝でも効果的であったのだろう。ここには黒色系埋土が厚く堆積していた。なお、主体部前端までの長さは6m余である。

ii) 西 Tr.

主体部中心から3.1mの地点から盛土が始まり、ここでは0.2mほどの低い段があって地山成形を行うようであるが、周溝は認められない。墳裾から西側は黒色系埋土が堆積し、その西端付近の地山上から古代の土器がまとまって出土した。その段階では後述する1号墓の存在自体が判明していなかったために困惑したが、結果的には1号墓周溝に置かれた土器群であろうと判断している。

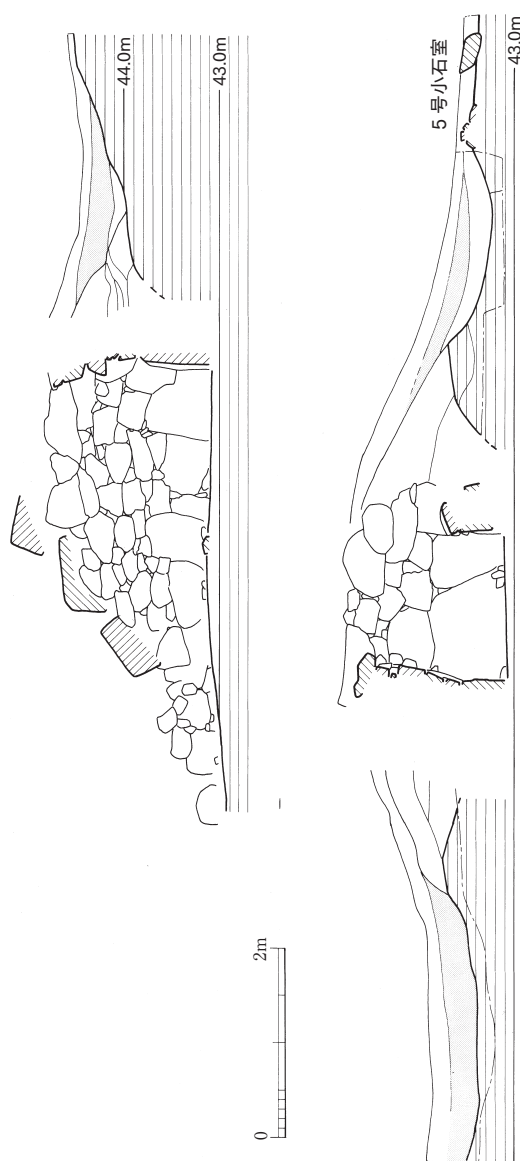
iii) 東 Tr.

ここも主体部中心から3mの地点で盛土端が確認できた。地山のラインは主体部に向かって傾斜するが、これは本来の地形を示しているであろう。ここも地山を削り出しているが、トレンチ端に5号小石室が位置することも災いして明確な周溝は把握できなかった。小石室掘形は周溝最下層の肩埋土に覆われていて、先後ははっきりしない。

以上のことから、本来は直径6mほどの円墳に復原できる。

2) 主体部 (図版26・27、第73・75図)

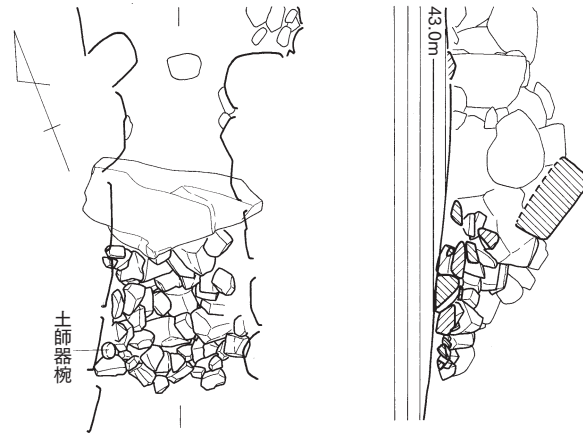
右壁(東側壁)の石材が大きく抜かれていて、かつ天井石が前方にずれていた。平面の図化を終えて後、安全のために天井石を除去して調査を行った。



第74図 Ⅲ－8号墳墳丘土層実測図 (1/80)

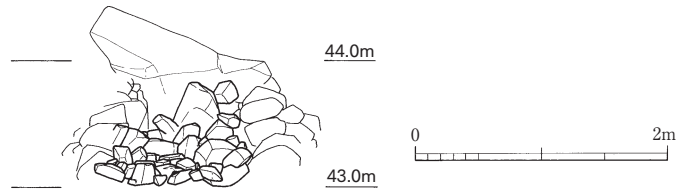
i) 閉塞

主体部最南端の崩落した天井石直下に、長さ1.4mほどの範囲で小振りの塊石が散乱していた。ほかの古墳で往々にして見られた大型の石材は使用していない。縦断面で見るように、地山に接する閉塞石は1～2段に過ぎず、最北端の石材は転落した状況を示している。したがって、前傾した天井石を水平に復原した場合の前(南)端に閉塞石の北端が対応していたものと思われる。



ii) 羨道・墓道

4個の天井石が残存していたが、上記した理由で平面図および上面の断面図作成後に除去した。北の2個が玄室を覆い、その南の石材が楣石となる。さらに南の1個の石材が羨道天井として使用され、その南側は天井石が架構されていない。石組みによる墓道の前面に素掘りの墓道はない。



第75図 III-8号墳閉塞状態実測図(1/60)

iii) 石室

単室両袖式横穴式石室である。床は大きく攪乱を受け、敷石のほとんどが攪乱を受けていたので除去している。

玄室は長さ1.8m、幅1.6m、高さ1.7mの規模をもち、床面プランは整った長方形となる。

右側の袖石は明瞭に突出し、そのまま羨道・墓道の石組みに連続する。左袖石は突出してその南の壁体はいったん幅広くなって南側へ続き、左右で形状が異なっている。框石は使用されていない。

3) 出土遺物

玄室攪乱中から鉄釘が1点、閉塞石前面で土師器椀を出土したが、土器は所在不明となっている。

金属製品(図版53、第52図8)

断面方形の鉄釘で、頂部が曲がる。

4) 小 結

平石Ⅲ群が位置する丘陵の最西南端に位置し、南は谷へ続く斜面、西は里道を挟んで梶原川へ急落する。この古墳も築造時期を示す遺物がないが、後述する9号墳に先行するものと考えている。4～8号墳は小さな谷に面して、ほぼ等間隔に築造されていることを考えると、短期間に東から順次築造されたものと思われる。

9. 平石Ⅲ - 9号墳

6・7号墳の間にある。現況地形でも、その付近の等高線が乱れていて、主体部西側に巨石が散乱していたが、5～7号墳がほぼ8～10mの間隔で直線的に並んでいて、線上から外れる9号墳の存在は全く予想していなかった。古墳の存在に気付いたのは6号墳の墳丘盛土除去の際である。といっても、大破した6号墳の北西に位置し、クロボク状の黒色土を埋土とする土坑に巨石が散乱していたこともあって、破壊した6号墳の石材を投棄した土坑と考えていた。7号墳東Tr.内の溝が墓道であると判明したのはまだ暫く後のことであった。

1) 墳丘 (図版28・29、第76図)

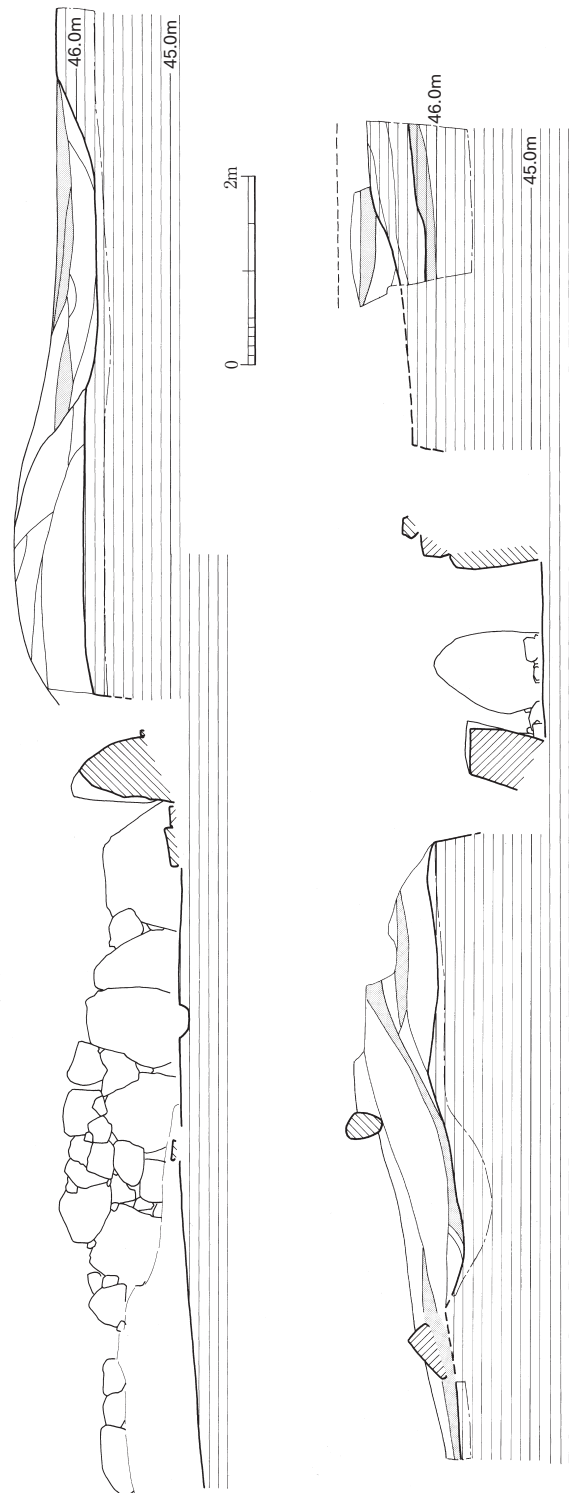
現況測量図を見ると、主体部東側から北側の等高線の乱れは石室中心から4mの付近で現れ、また、北西に散乱する巨石もほぼ同じ距離を隔てている。この石材が墳丘から落とされたものと考えられることから、本来的には直径8mほどの規模を有していたと復原できよう。

i) 北Tr.

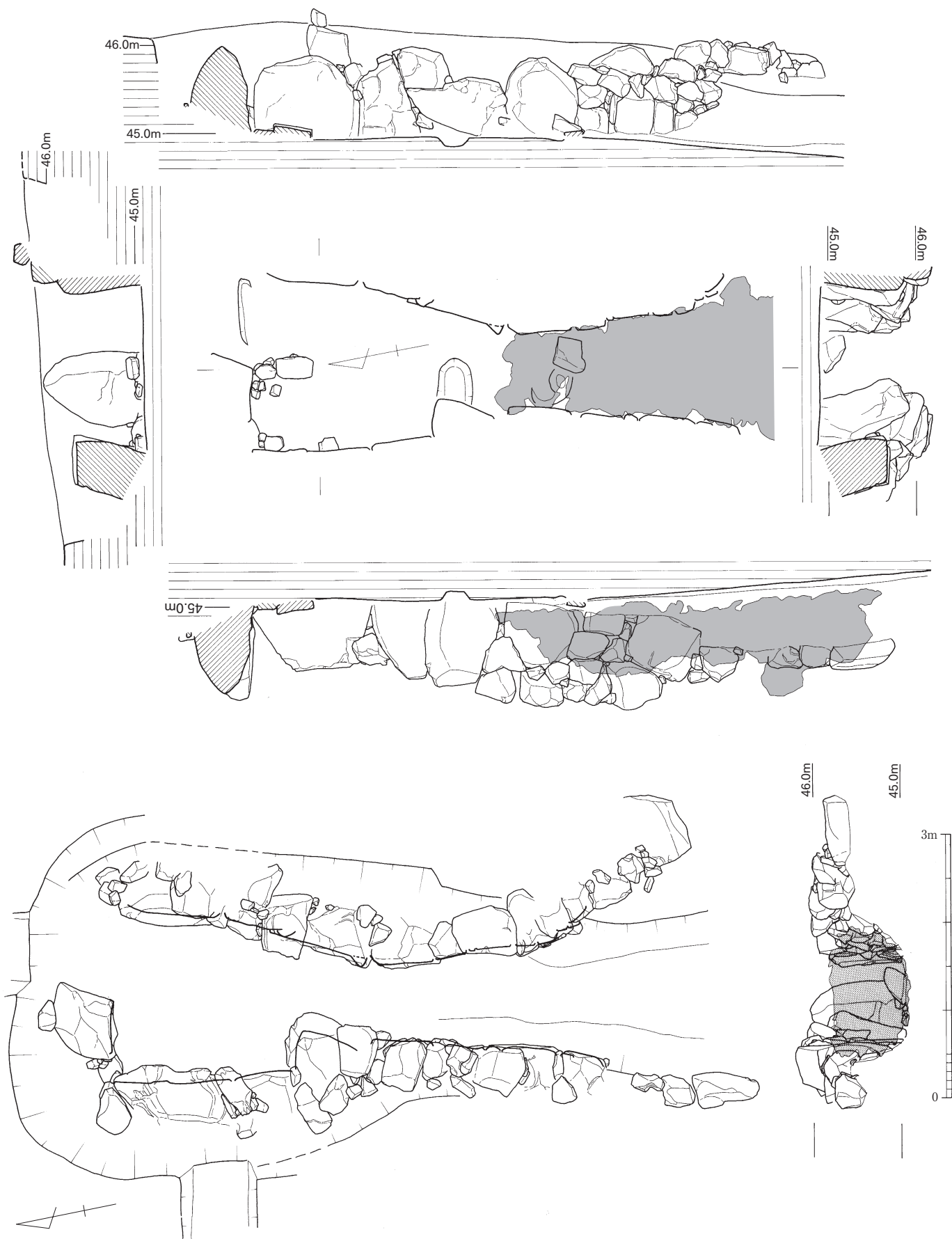
盛土は奥壁から4.4mの付近から始まり、最大厚は0.7mほどで土質は緻密なものではない。その北側には浅く掘りくぼめた周溝がある。深さは最大0.4mであるが、幅は3mを超える。通常、周溝埋土は最下層と最上層を除いて黒色腐植土であることが多いが、ここでは墳丘に接して灰黒色土があるものの、それは流失した盛土と思われる二次堆積層に覆われ黒色土は上層にしか見られない。埋土下位は粗砂層で、通常では見られないものである。

ii) 西Tr.

主体部中心から4.4mの付近で地山成形とそこから始まる盛土ラインが認められる。このラインを覆う盛土が同5mの付近から始まっていて、自然堆積とは思えない不自然な



第76図 Ⅲ - 9号墳墳丘土層実測図 (1/80)



第 77 图 Ⅲ - 9 号墳主体部实测图 (1/60)

終わり方をしている。北Tr.の所見や、通常の盛土のあり方からして4.4mの規模をとりたいところであるが、土層ラインを見る限りは5mとせざるを得ない。

墳丘を覆う厚さ0.1m弱の淡灰黒色土は墳丘表土であろう。その上に墳丘を破壊して堆積したと思われる厚い層が墳丘を隠すように覆う。なお、墳丘表土を掘り込む幅約1m、深さ0.2mの小溝がある。7号墳西側を蛇行する小溝に連なるものであろう。

iii) 東Tr.

塩ビパイプがあって、十分な土層観察ができなかった。ここでは旧地表と思われる灰黒色土が白色粗砂層の上に残っていて、その上に東に向かって積み上げられた盛土がある。これは6号墳のものであろう。最上層付近は西に向かって積み上げられた盛土があって、これが9号墳盛土であろうと考えている。盛土に灰黒色土を使用する点はほかの土層でも見られたことである。

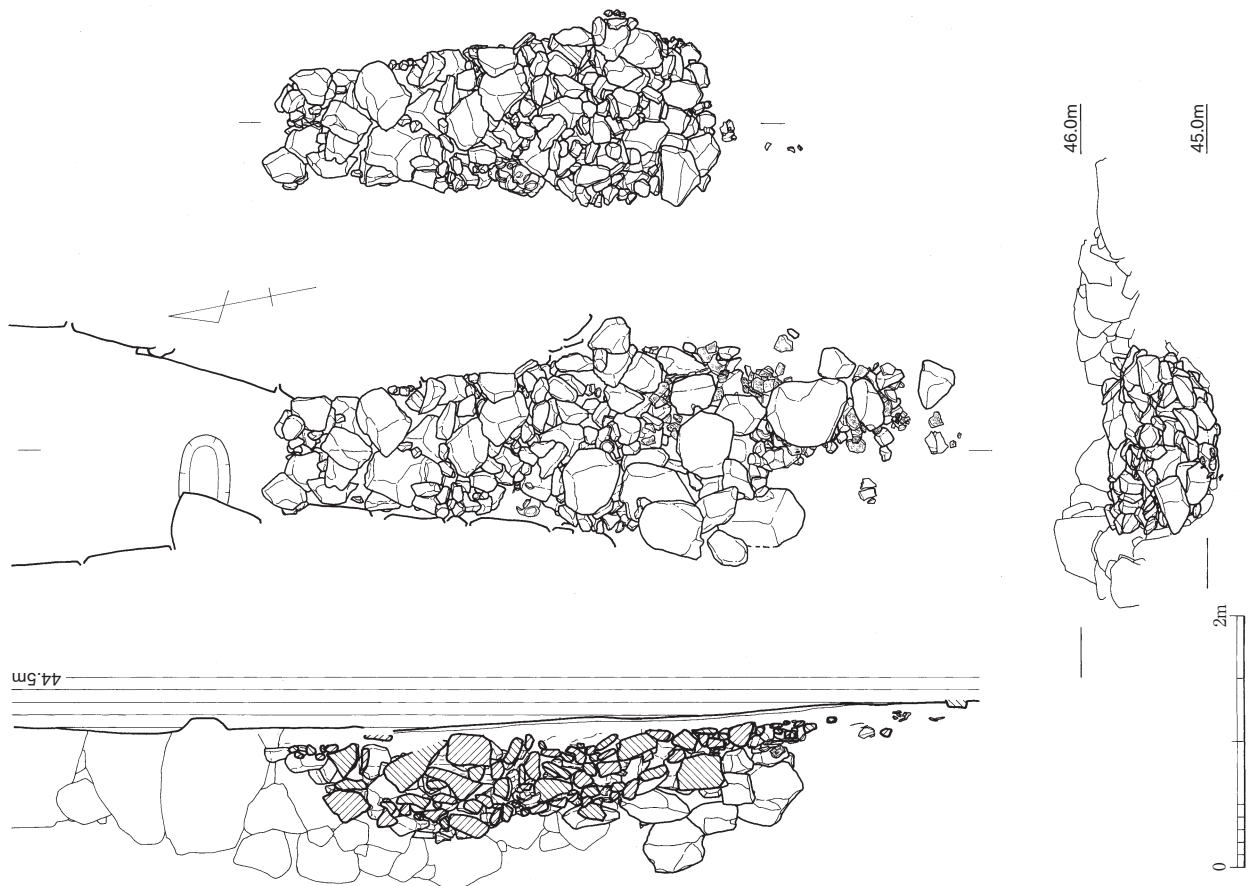
西Tr.の所見を重視すれば、直径10mほどの円墳に復原できよう。

2) 主体部 (図版28～32、第77・78図)

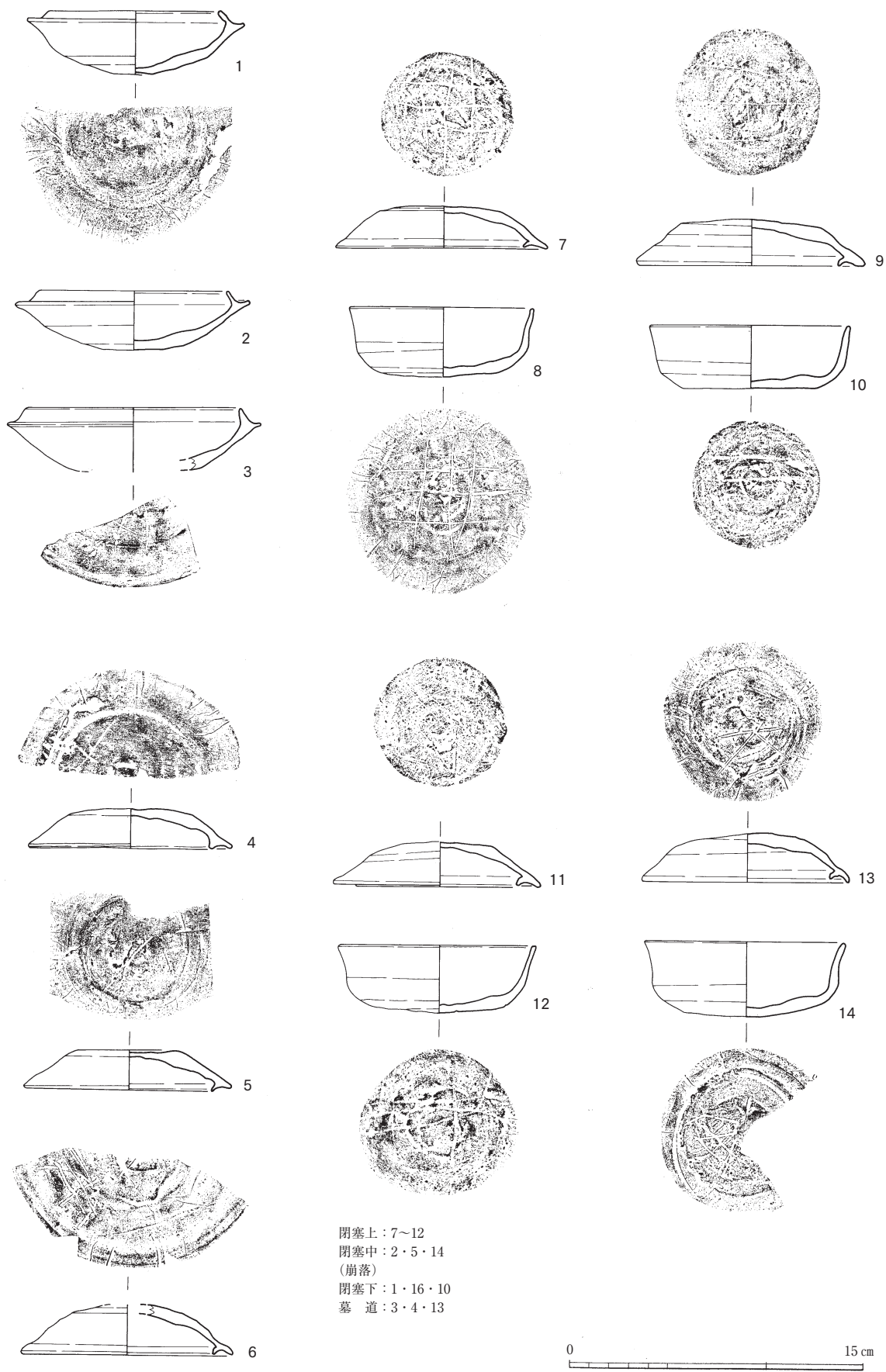
多くの石材が抜き取られて大破していたが、腰石はほぼ残存していて平面プランは窺える。

i) 閉塞

長さ5mにわたって、墓道いっばいに大小の礫が密に詰め込まれていた。基底部石材のほぼすべてが墓道床面に接しているものの、これが本来の姿とは思えず、盗掘に伴う掻き出しは築造後間も



第78図 III-9号墳閉塞状況実測図 (1/60)



第 79 图 Ⅲ-9 号墳出土土器実測图 1 (1/3)

ない時期のことであったのであろう。その先端は袖石の一つ前面の腰石の中程を基準にするようである。袖石に対応して框石抜き取り穴かと思われる窪みがあるが、そこから1mほどの距離をもつ。

先端付近では1.3mの長さで基底部に比較的大型の石材を置いていて、この部分が本来の閉塞状況を残しているであろう。

ii) 羨道・墓道

玄門は片袖である。その手前は、左（西）壁が直線的に延びるが、大型の石材の使用は袖石を含めて2個で一旦終わり、大型石材1個分を小石材の積み上げに変えて、その手前に大型石材をさらに1個配し、後は小石材1段を墓道を装飾するように並べ置いている。右（東）壁は、左壁に対応するように大型石材1個を置くが、後は比較的小型石材を使用するとともに、前端は開いて終わる。したがって、天井石を架構した羨道部は左壁の大型石材使用範囲、また右壁が開いていくまでを想定できるだろう。しっかりと地山に掘り込んだ墓道としては、今回調査中最大規模の例である。

iii) 石室

片袖の単室横穴式石室である。玄室は長さ2.1m、幅は奥壁で1.9m、袖石付近で1.4mほどを測って、平面プランは逆台形状となる。左袖石に対応する右壁は袖石手前端まで玄室から連続的に幅を減じている。高さは最大で1.3mが残存するに過ぎない。

なお、床面には敷石が施されていたが、これも大きく攪乱されていた。

3) 出土遺物（図版53、第52・79～81図）

玄室から若干の鉄製品が、そして墓道内閉塞石の上、閉塞石中、およびその前面などから多くの土器が出土している。

金属製品（図版53、第52図9～11）

9・10は通常の鉄釘で、完存する9は全長7cmを測る。11は中央部に大きな孔が開けられた大型の鉄鏃で、これも関ははっきりしない。

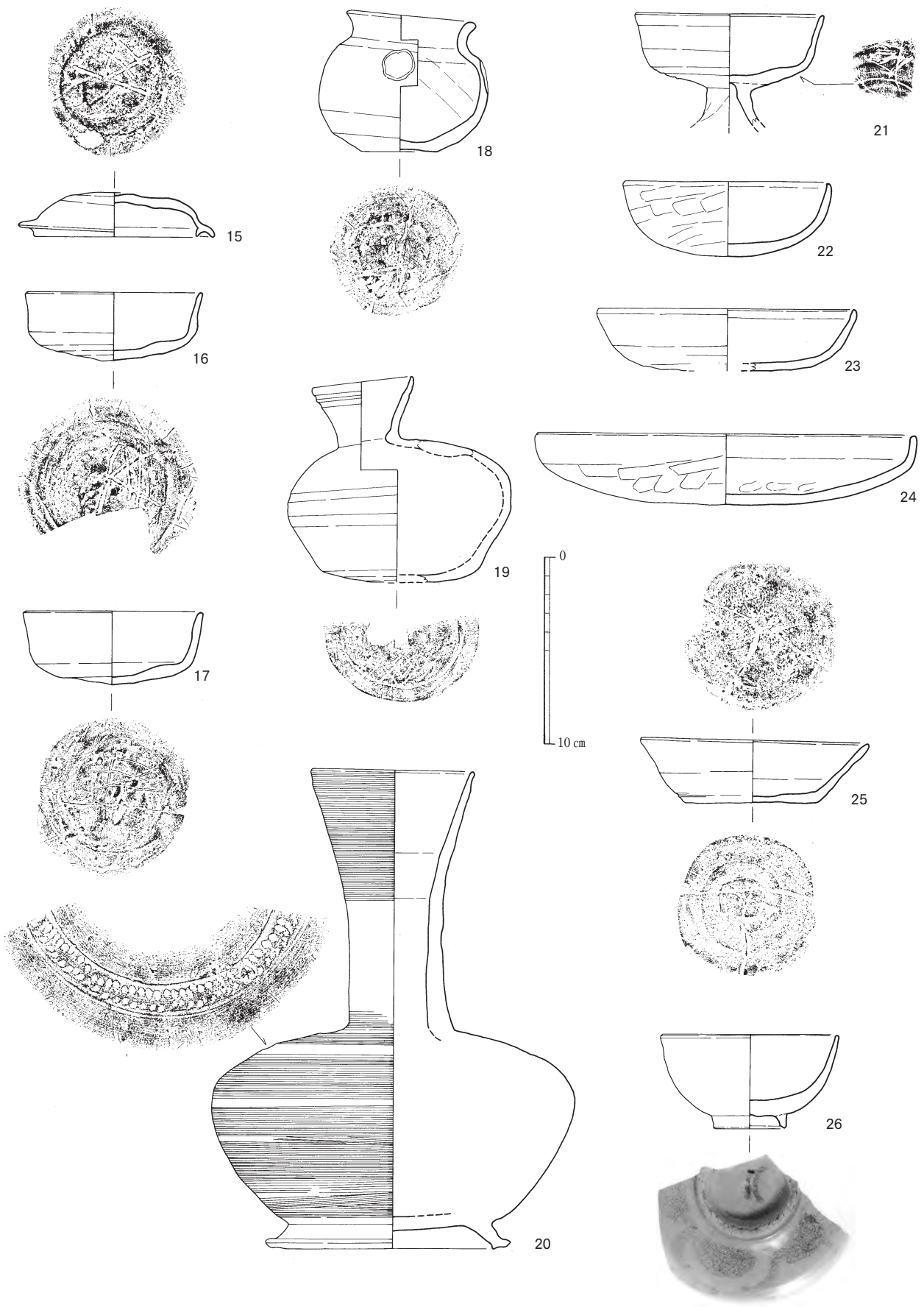
土器（図版56・57、第79～81図）

ほとんどが閉塞石周辺の墓道中の出土だが、24・26は墳丘裾からの出土で、帰属に問題があるかも知れない。

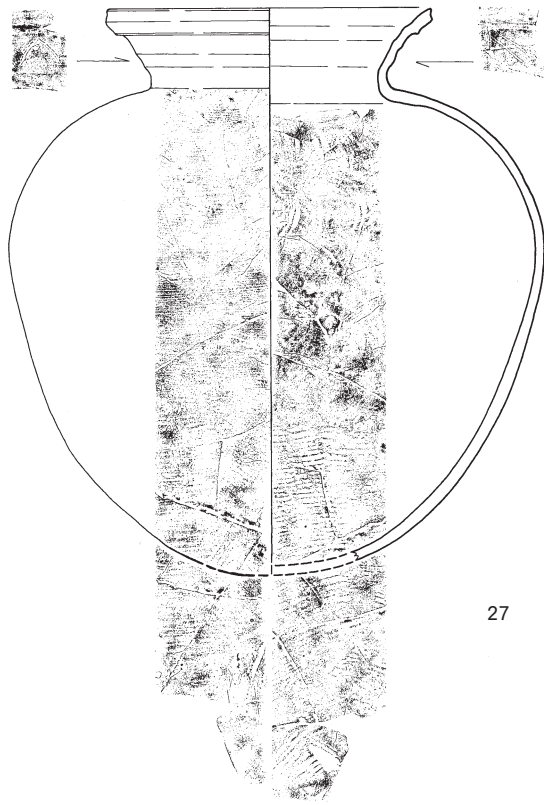
墓道（第79～81図） 1～20は須恵器。1～3は返りをもつ杯身で、1は口縁部の一部を欠き、焼け歪むが良好に残存する。外底面は篋削りで終わるが、全体に雑な作りとなる。2は口端部が残存しているか、確信が持てないが、体部は2/3が残存、焼成甘く、器表が摩滅する。3は1/4ほどの残片で、これは胎土・作りともに良好である。外底面は篋削りで仕上げ、浅い暗文風の篋記号が刻まれる。なお、これらの杯身に伴う蓋はない。

4～6は返りをもつ杯蓋。4は灰赤褐色に発色し、完存に近くなる残片があるが、接合し得ない。器表は摩滅するが、天井部にシャープな篋記号が見える。5は平坦な天井部をもち、口縁部の2/3が残存。胎土良好、作りも丁寧で、天井部は篋削りの後に撫でて終わる。6は天井部が丸みをもち、杯身としても違和感がないが、後述する13～17の存在から蓋としておく。1/2が残存し。天井部は篋削りで仕上げる。胎土・調整ともに良好である。

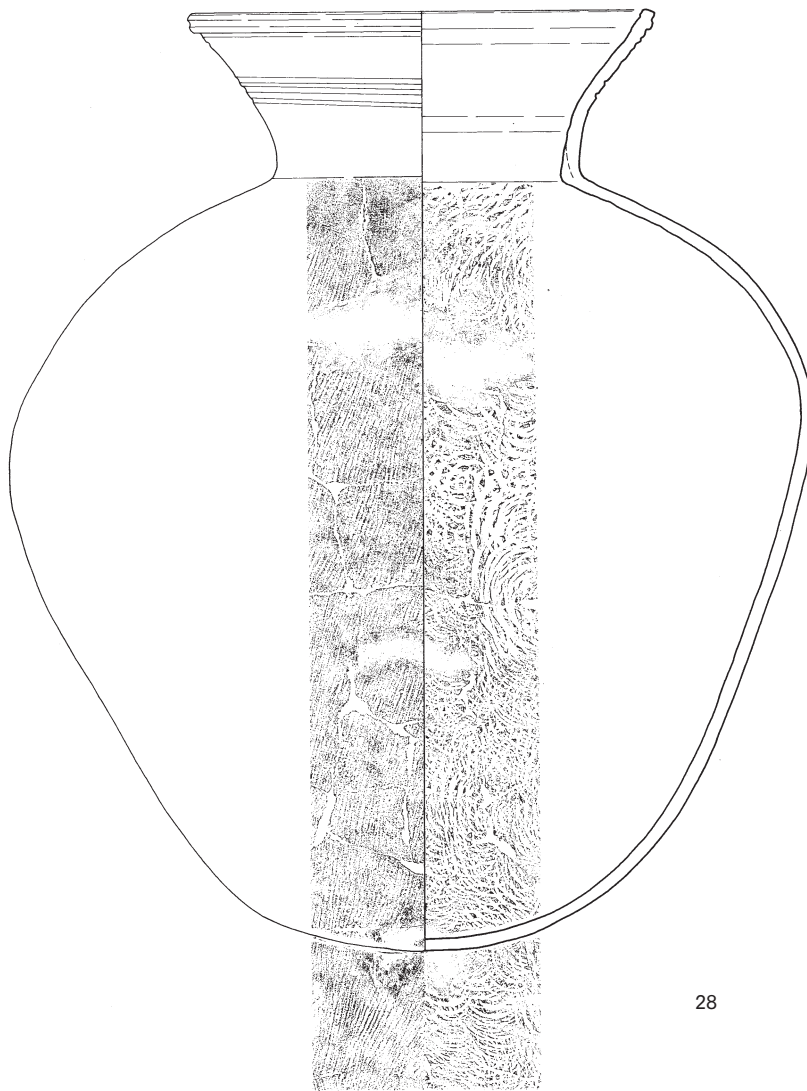
7～12・13～17はセットと思われるものであるが、図で組み合わせたものが必ずしも本来のセットであるとの確証はない。7～12は天井部・外底面に6本の直線で格子を刻むもの。7は完存し、胎土粗く調整も雑な仕上げである。天井部はほぼ平坦となり、篋切りのままで終わる。8もほぼ完



第 80 图 III-9 号墳出土土器実測图 2 (1/3)



27



28

第 81 图 Ⅲ - 9 号墳出土土器実測図 3 (1/6)

存する。底部は丸みをもち、口縁部は小さく開いてほぼ直立する。これはわずかに焼け歪むが、この2点はセットであったと思われる。9は返りの一部を欠くほかはほぼ完存。焼成甘く、器表が荒れている。10も焼成が甘いもので、この2点もセットであった可能性が高い。ただ、杯身の篋記号は暗文風で弱い。外底面は篋切りのままで終わるが、板状圧痕が残る。11もほぼ完存。これは胎土粗く、作りも雑である。天井部は篋切り後に撫で、格子を刻む直線は7本見られる。12は底部付近が完存するが、口縁部のほとんどを欠いている。これは焼成甘く、器表が荒れている。篋記号は幅広く浅い沈潜を刻むが、11と様子が異なっていて、本来のセットかどうか不安がある。

13～17は「大二」を組み合わせたような篋記号を刻む。13は完存し、胎土・作りは良好である。天井部は丁寧に撫でて仕上げる。14は13とセットであったと思われる。口縁部の1/4を欠くが、調整は丁寧に、外底面は篋削りされている。15も完存。これも丁寧な作りで、天井部は灰を被り焼け歪む。16は作りがやや雑だが、篋記号の特徴が15に似る。17は灰赤褐色に焼き上がるもので、外底面の篋削りは丁寧になされる。篋記号もシャープである。

18は小型壺で、頸部は直立し、口縁部が小さく外反して丸く終わる。体部の張りは弱く、底部は粗い篋削りで上げ底状となっている。なお、頸部下の円文風の表現は焼け弾けた部分である。

19は平瓶でほぼ完存する。口縁部は直線的に開いて、端部を小さく内側へつまむ。端部下に2条の凹線を巡らせるが甘い。体部最大径部付近は篋削りの後に撫で、以下は外底面まで丁寧な篋削りで終わる。外底面には直線を組み合わせた複雑な篋記号を刻む。

20は長頸壺で高台の一部を欠く。口頸部は細く、長く伸び、口縁部の加飾はない。体部は径に比して低く、高台は外方へ強く踏ん張る。肩部に文様帯があるが、全体にカキ目を多用し、施文は巻貝を用いたものであろうか。

21は酸化炎焼成の赤褐色硬質に焼けた高杯片で、器表が荒れる。杯屈曲部に蓋杯13～17の篋記号と同じような線刻がある。

22～25は土師器。22はほぼ完存する椀で、外面は不定方向の篋削りで、内面は撫でて仕上げるようである。23は赤く焼き上げられた皿の残片で口端部を小さくつまむ。外面下半は不定方向の篋削りで丁寧に仕上げ、それ以外はやはり丁寧に撫でるようである。胎土・作りは良好である。24もほぼ完存する。底部は丸みをもち、口縁部は短く直立する。胎土・作りともに良好である。

第81図27は口径25.8cm、器高45.5cmの甕で、大部分が墓道から出土するほか、「6号墳墳丘SW区表土」・「7号墳ETr.黒色土」などから出土した破片が接合している。口縁部は肥厚させて面を作るが、頸部も含めて施文はない。ただ、頸部の2箇所異なる篋記号を刻む。焼成良好で、灰が飛ぶ。同28は口径36.8cm、器高64.3cmの甕である。すべてが墓道から出土し、ほぼ完形に復原できた。口縁部位の変化は小さいが、頸部に各2条の凹線で画した文様帯を配し、浅い篋描沈線を刻む。なお、肩部に複数の細篋描沈線を縦位に刻むが、何を意図したものか判らない。また、頸部に接して直径10cmの円形に変色する範囲が3個連続している。焼成時の安定を図って何かを添えたものであろうか。胎土粗く、多くの砂粒が器表に浮く。

墳丘NW区（第80図25・26）25は墳丘NE区集石中出土の土師器で、底部は完存、体部以上は1/2が残存する。大部以上は直線的に開き、口縁部はわずかに肥厚する。外底面は篋切り痕を良く残し、細線による篋記号が刻まれ、見込みにも同様の篋記号が残る。

26は墳丘NW区墳丘盛土中から出土した近世染付。

4) 小 結

6・8号墳の間に割り込むように築造された古墳で、土層観察では両古墳の墳丘の一部を覆って墳丘を構築していた。石室も単室片袖でかつ玄室に比して長い墓道を付すなど特徴ある主体部をもつ。

出土土器では、古墳時代的な杯身が3点出土しているが、それ以外の蓋杯はすべて明らかに蓋と身が逆転したものである。IVB～V期に比定できるが、細かな年代はともかく、古墳群の状況から見て今回調査した中でもっとも後出することは間違いない。

以上のことから、この古墳は本古墳群の最後に構築されたもので、かつ既存の「古墳の上」に築造するなど、それ以前の造墓集団の規範を無視しているようである。大胆な推測を加えれば、この古墳の被葬者は他所から新たに進出してきた支配者的集団に属していたのであろう。

10. 小石室

無墳丘の主体部を数基確認した。そのうち、確実な埋葬遺構をここで報告する。

1) III-1号小石室

(図版33、第82・82図)

4号墳の西にあって、5号墳の北に位置する。両古墳周辺を人力によって表土掘削する過程で発見したもので、墳丘の有無は確認できていない。検出時に天井石はなく、その有無は確認できないが、農業用塩ビパイプのすぐ脇にあることから、パイプ敷設時に取り除かれた可能性は否定できない。

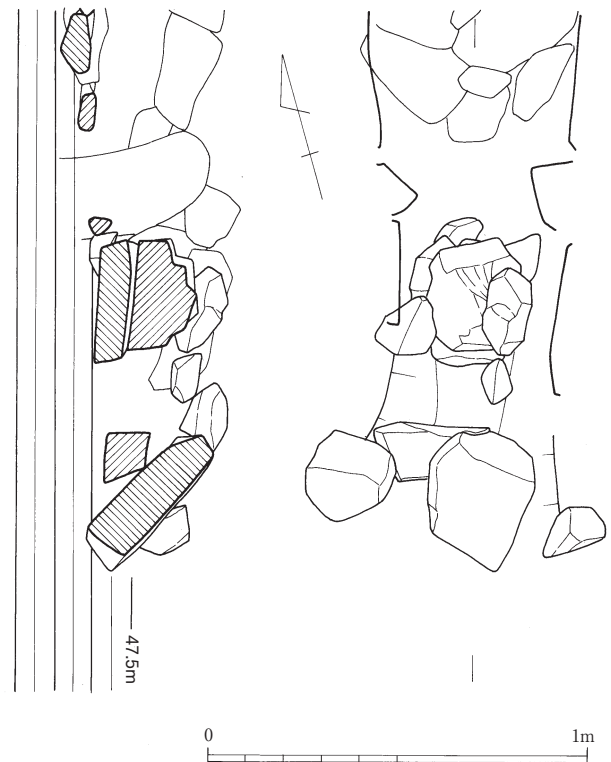
堀形は不明瞭であったが、西側が大きく膨らむ東西長約2.5m、南北長約3.5mを測る歪な形状を示す。かつ、埋没した4号墳

周溝に掘り込んでいて、堀形東側が張り出さないのは4号墳の存在に規制されたものかも知れない。

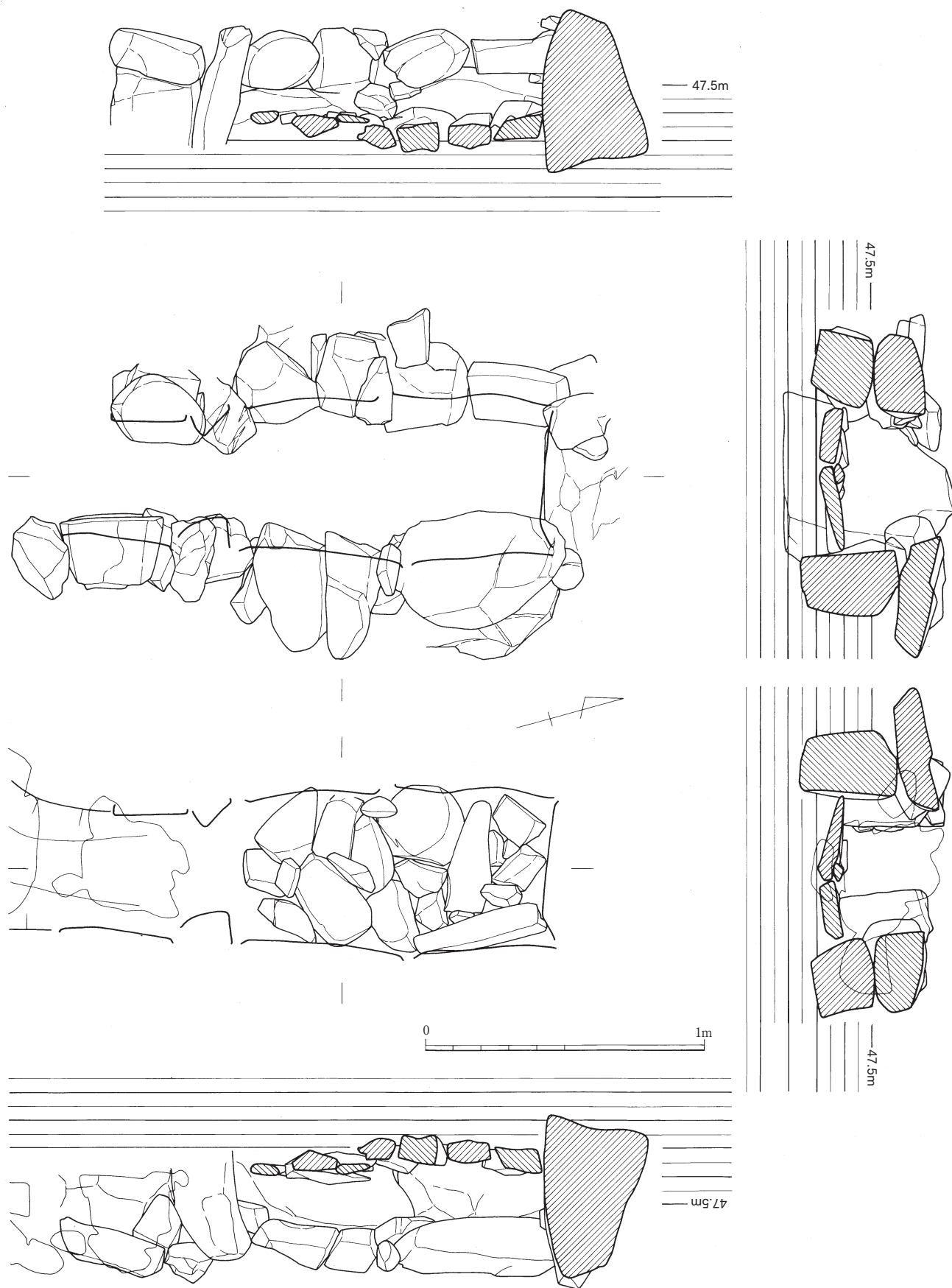
石室の平面形は通常の横穴式石室と変わらず、単室両袖式と言うべきであるが、玄室規模は長さ1.1m、幅0.5m、敷石からの高さが0.4mという小型石室である。奥壁・袖石は石材を立てて使用、両側壁は2段に積み上げている。敷石もしっかりと敷設している。

框石は使用されていないが、閉塞は通常の横穴式石室同様、袖石手前で行っている。

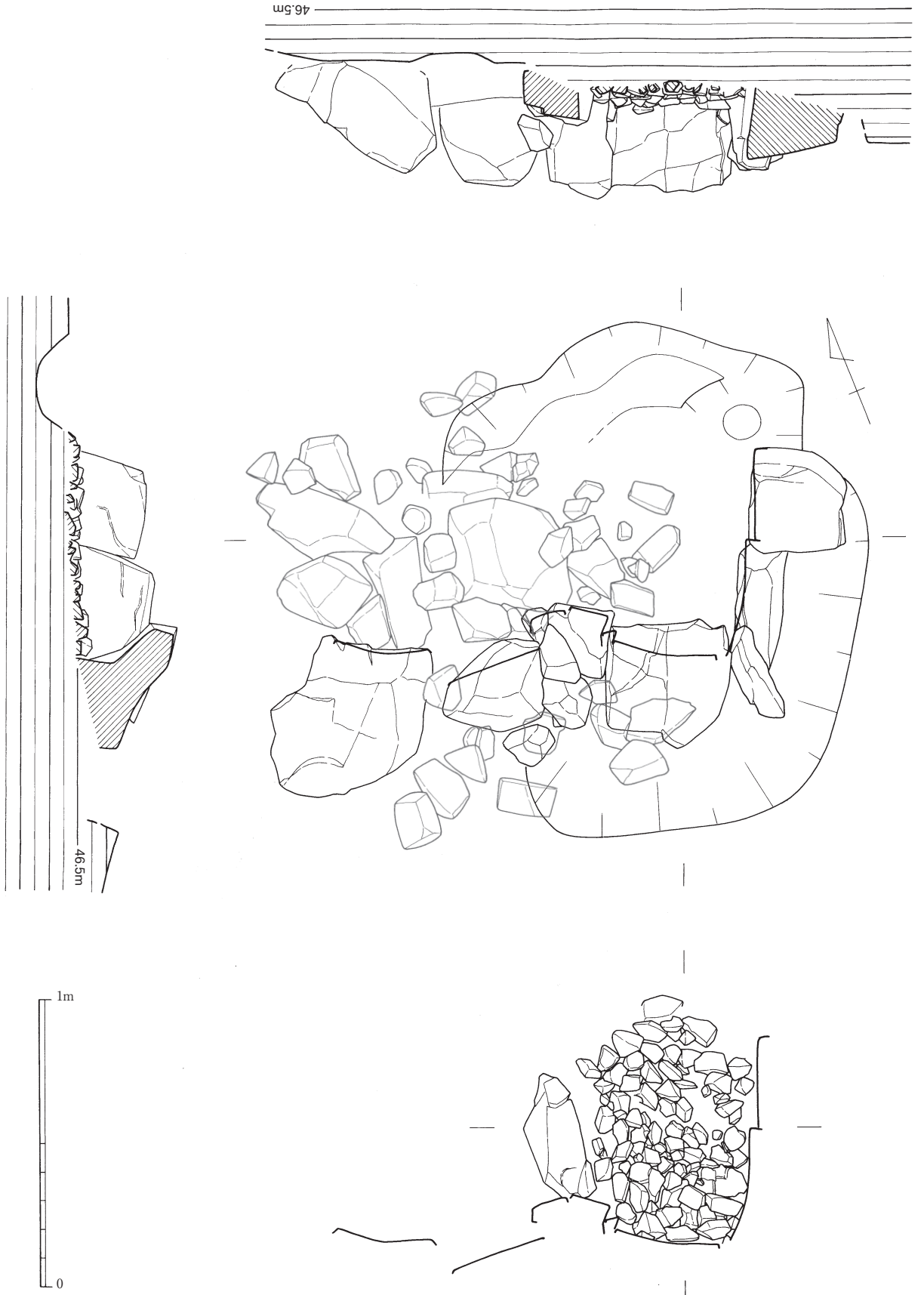
小石室墓道は南へまっすぐ延びると5号墳周溝と重複するが、先後関係は把握できていない。閉塞に使用されたとと思われる石材が5号墳周溝肩にずり落ちたような状態で出土したが、5号墳築造に際して閉塞石が露出・移動したならば、そのまま放置したとは思えない。このことから5号墳の築造後、周溝が埋没する以前に築造されたものと考えられる。その場合には、小石室は5号墳周溝を墓道として利用していたことも考えられ、5号墳被葬者に近い人物が埋葬されたと推測できる。



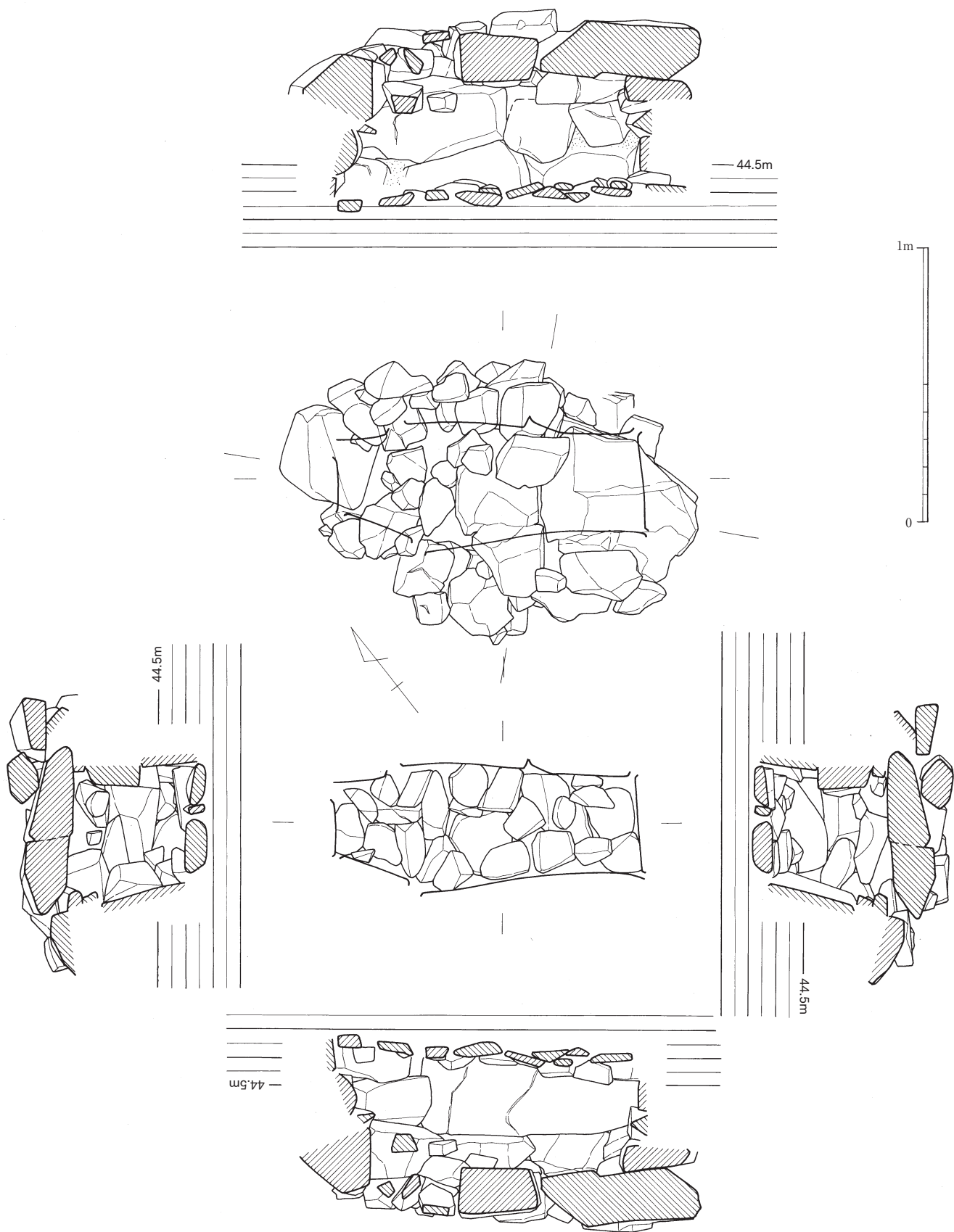
第82図 III-1号墳閉塞状況実測図(1/20)



第 83 图 III - 1 号小石室实测图 (1/20)



第 84 图 III - 2 号小石室实测图 (1/20)



第 85 图 III - 3 号小石室实测图 (1/20)

2) III - 2号小石室 (図版34、第85図)

5・6号墳間の北側に位置し、5号墳周溝を一部切る。平面的には9号墳周溝内に位置するが、塩ビパイプの南側では周溝がはっきりしなかったため、両者の関係はつかめなかった。また、想定される6号墳墳丘とも切り合うような位置にあるが、これも確認できなかった。

散乱した石材を検出した際は小石室を想定することが困難であったが、石材が少ない南側で石室コーナーと思われる部分を認め、そのラインを追って石材を外していった。

左側壁および前面を大破した小型横穴式石室である。敷石から復原した玄室の規模は、長さ0.5m、幅0.8m、残存する高さは0.3m強である。ここでは框石が使用されているが、墓道ははっきりしない。また、検出時に存在した石材の中には、天井石として相応しいものは見あたらず、これも天井石が使用されていなかった可能性が高いであろう。

閉塞石は残存しておらず、右壁最前端的石材は動いていて、本来の位置を留めていないようである。

3) III - 3号小石室 (図版34・35、第85図)

3・4号小石室は7・8号墳間に位置する。これらも盛土は確認できておらず、堀形も判然としなかった。調査終了時の等高線を見ると、これら2基を囲むようなラインが認められることから、今から思えば盛土を地山と誤認していたのかも知れない。

石室は小型縦穴式石室で、検出時は南端に比較的大型の石材を置くものの、小型石材が集積されたような乱雑さであった。通常であれば、大振りの石材数枚を架構して、その目地を小石で塞ぐのであるが、ここでは北西小口付近のように小礫のみで覆った箇所がある。石材不足で木蓋を使用したものであろうか。

天井石を外すと、壁体がずれ、傾いた石室が現れた。長さ1.1m、幅0.25～0.4m、高さ0.4mほどの規模である。四壁ともに3段の石組が認められるが、北西小口では最下段に小さな石材を使用、南西長側片では使用した石材中最大のものを基底部に使用するなど、規則性がない。断面図に顕著に表れるように、石材がせり出すなど、小さな石室であるが、稚拙な構造といって良いのであろう。

敷石は石室の規模に比して大振りの石材を使用し、かつ、これも上手に敷き詰めたとはいえない状況であった。敷石のレベル、天井石の大きさや床幅が広いことから頭位は南東小口であろう。

埋葬部からの出土遺物はない。

4) III - 4号小石室 (図版34～36、第86図)

3号小石室の南西約2mの位置にあって、主軸は揃っている。検出時に天井石はなく、壁体中央付近が崩落していた。床面プランも乱れていて3号小石室同様に稚拙な構造物である。

石室は縦穴式石室で、長さ約1.9m、幅0.45～0.2m、高さ0.4mほどとなり、四壁は基本的に2段積みとする。ただ、3号小石室同様、ここでも大型石材を基礎としてその上に小振りの石材を積みという考えはないようで、大型石材が上段に多く用いられた部分もある。その結果、床平面プランも乱れているが、中央付近の壁体上部が崩落していた。

床面には拳大の石材を用いて敷石が敷き詰められるが、これも石材の重なりが見られるなど、3号小石室同様粗雑なものである。敷石レベルは南東小口が高くなっているが、北西小口との差は5cmもない。ここでは平面プランを重視して、より整った北西小口に頭位を想定しておく。3号小石

室と頭位は逆になるようである。

5) III-5号小石室(図版37、第87図)

8号墳東Tr.を掘削して検出したものである。遺構配置図で見ると、8号墳周溝に近接する。石室構造などは他の小石室とは異なって本格的な横穴式石室であるが、ここでは小石室として報告する。ほぼ表土直下で検出したため、盛土の有無は未確認であるが、当然ながら本来は有していたであろう。また、この付近は地山に礫が多く含まれていたことも災いして、8号墳土層の観察において小石室と8号墳との関係を確認できなかったが、ETr.の周溝底に掘り込みと思われるラインがあり、8号墳に先行する可能性がある。

主体部は無袖の横穴式石室で、長さは約2m、奥壁幅約1m、前端幅約0.8m、高さは最大で0.8mを測る。構造は通常の横穴式石室と変わるところがないが、石材が全体に小振りである点特徴的である。腰石として使用した石材とその上に積み上げられた石材にさほどの大小はない。床は敷石を施していたが、攪乱を受けていたためにほとんどを除去している。

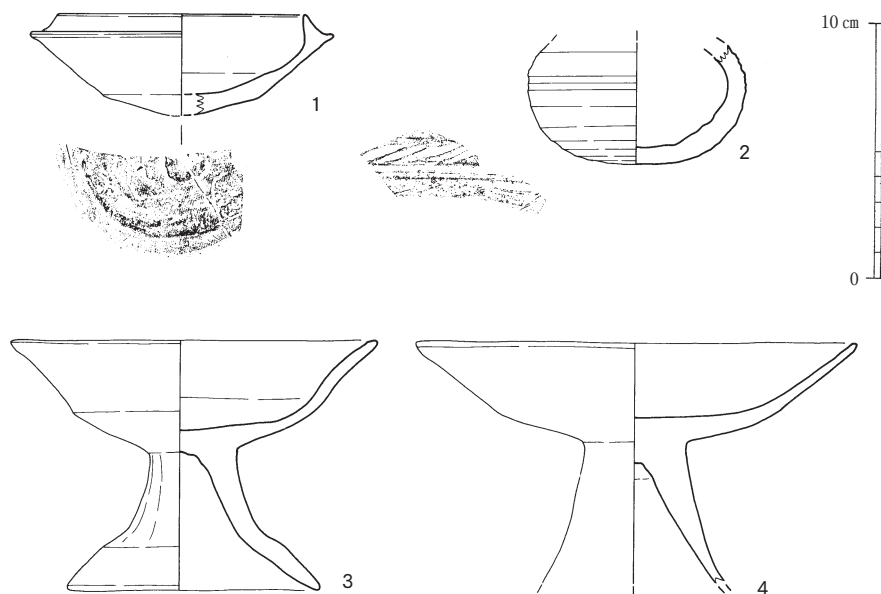
閉塞先端は奥壁から1.2mの付近にあって、その範囲が墓室として意識されていたものであろう。成人の伸展葬では埋葬不可の大きさである。

石室の前面はかなりの傾斜で谷に落ちて行き、墓道は検出できなかった。

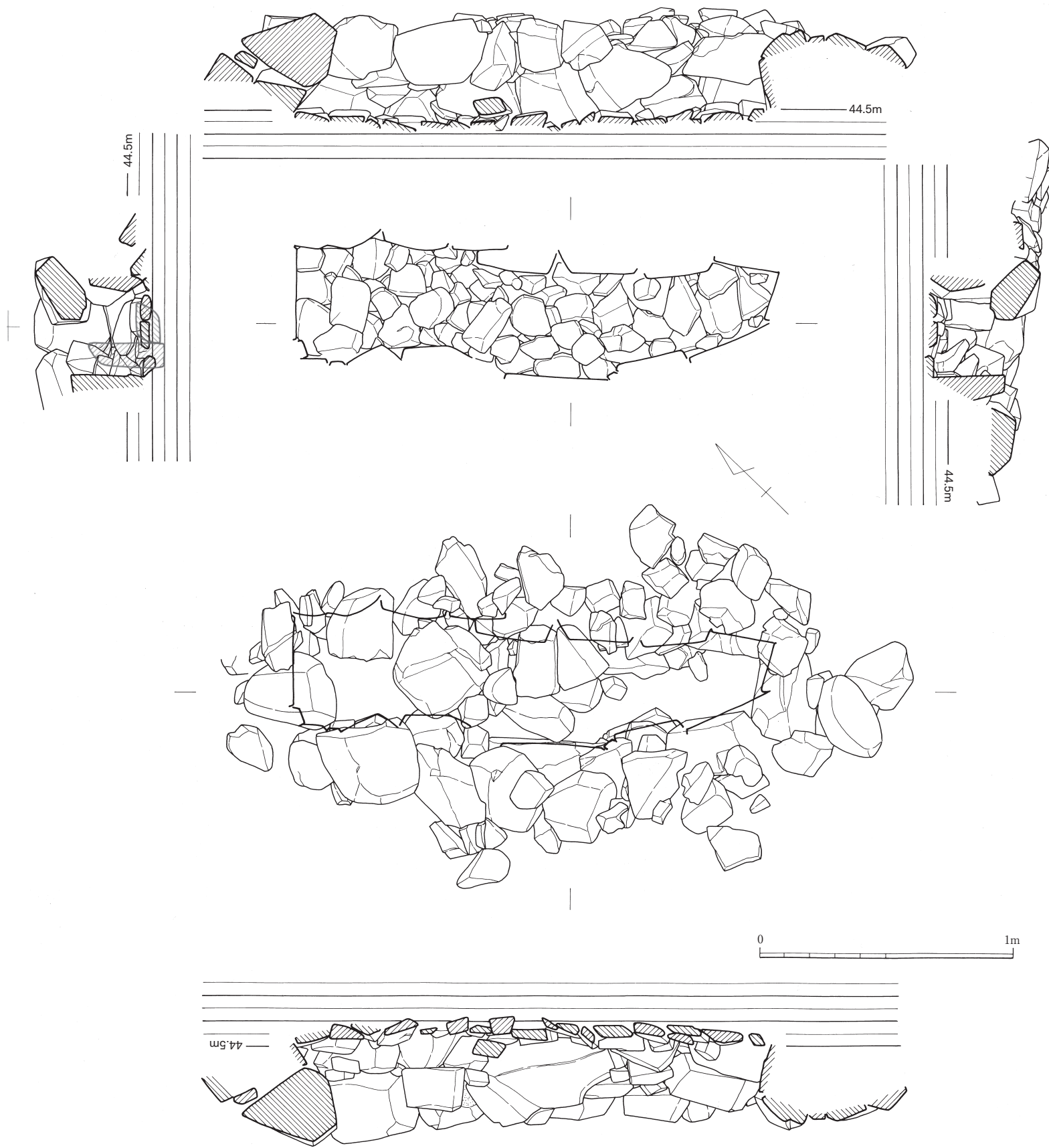
6) 出土遺物(図版57、第86図)

必ずしもこれらの小石室に伴うものとの確信がないが、取り上げ時に小石室の名前を付した周辺出土遺物の紹介をする。

1は「8号墳北Tr.3号小石室付近」の注記がある須恵器杯身で、口縁部付近の1/4が残存する。復原口径は9.8cmである。外底面は篋切りのままで終わり、篋記号の一部が見える。2は「8号墳北方表土」の注記があり、3・4号小石室付近から出土した須恵器匙片。体部最大径部に2条の凹線を連続して巡らせ、その上方に篋描き斜線文を刻む。この2条の凹線は始点と終点が一致しないものの、本来同一のものであろう。凹線以下は雑な篋削りで仕上げる。

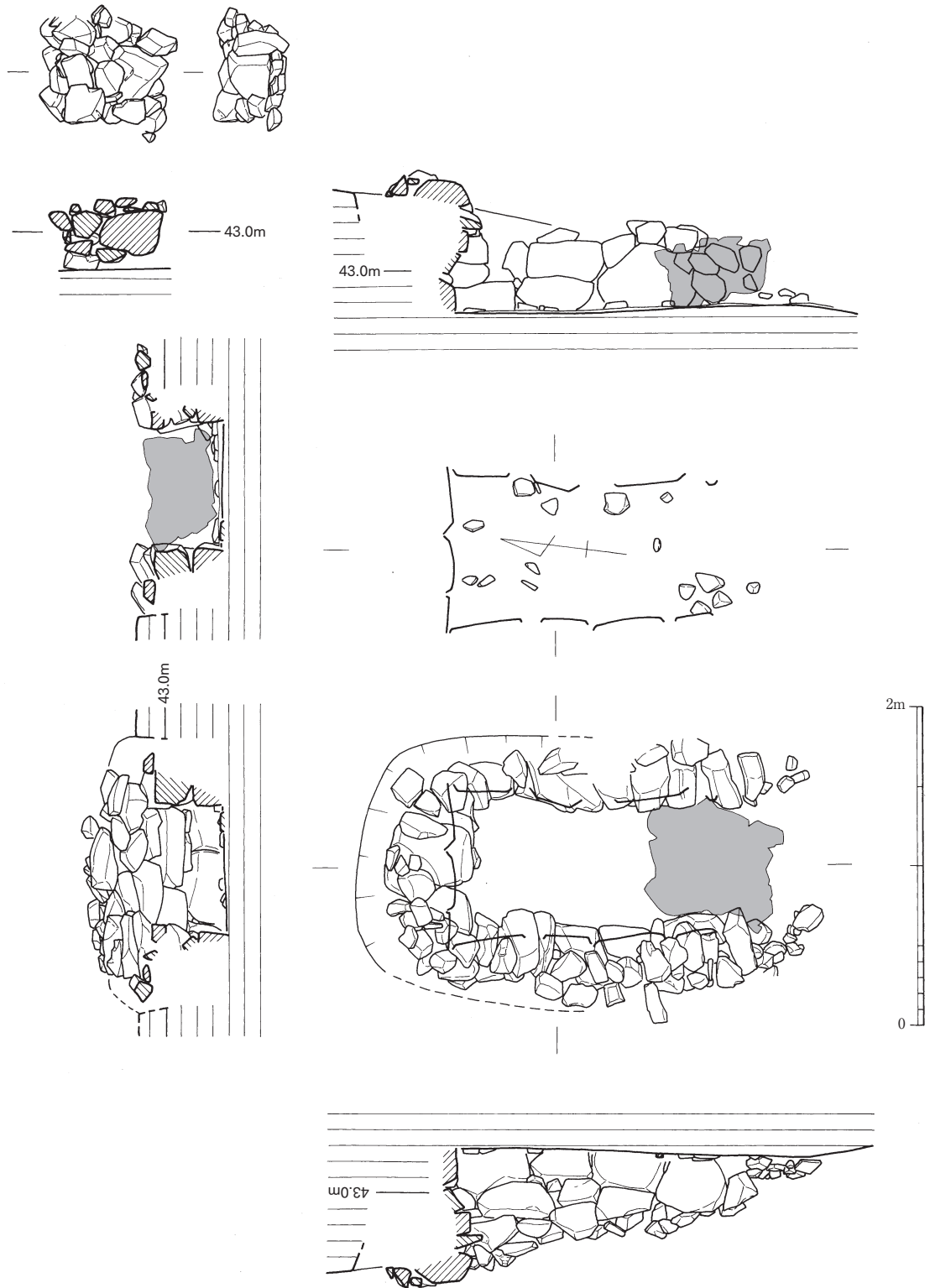


第86図 小石室関連出土土器実測図(1/3)



第 87 图 III - 4 号小石室实测图 (1/20)

3は6・7号墳付近の表土から出土したものと、「4-1号小石室（本報告の3号小石室）」出土片が接合した土師器高杯。杯口縁部付近は3/4が残存するが、脚端部付近は小片となる。明赤褐色となるが、器表が非常に荒れている。4も「4-1号小石室北側」の注記がある土師器高杯片で、脚部は完周するが、杯部は小片である。灰赤褐色となる。



第 88 図 III - 5 号小石室実測図 (1/40)

7) 小 結

観音山古墳群に限らず、北部九州では往々にして小規模な石室が古墳の間に造られている。今回同様、多くは成人の伸展葬に適さない大きさのものであり、埋葬に使用されたとすれば小児・幼児が想定される。あるいは改葬に使用した可能性も考えられるが、使用法を示す出土品も乏しいのが現状である。この調査でも同様であった。



第 89 図 1 号墳墓実測図 (1/40)

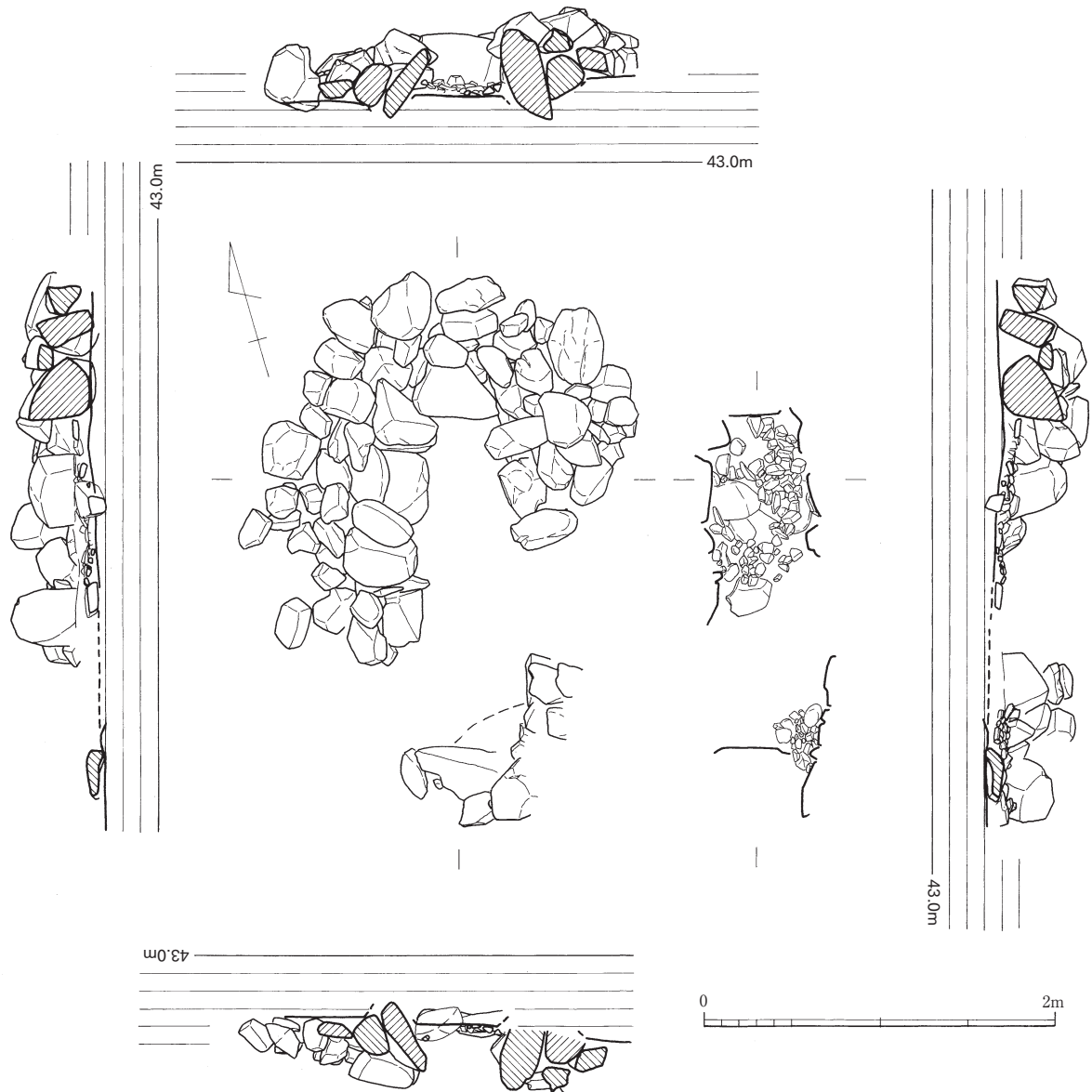
11. 古代の墳墓

当初は調査対象ではなかったが、工事関係者から塩ビパイプを使用した水路の付け替え工事を行う旨の打診を受けて調査を行った。8号墳西Tr.付近で8世紀の土器が出土したことに首をかしげていたが、隣接して古代の墳墓3基を検出したことで、それに伴う遺物であることが判明した。

なお、この付近はやはり大きな樫の株がいくつかあって、遺構の全体は確認できなかった。

1) 1号墳墓 (図版38・39、第89・90図)

調査時には12号墳と呼称した。すでに石材が多く露出していて、その周辺まで表土を除去していくと、南北2m、東西3mほどの範囲の集石と、幅1m弱、最大の深さ0.3mほどの溝が内法で5m弱の円形に巡る状況が確認できた。集石の南は塩ビ管で破壊されていたが、結果的には基部が残存していた。検出時は性格を予想できず、塩ビパイプに沿う主軸を設定して図化を行ったが、併行し



第90図 1号墳墓主体部実測図 (1/40)

て実施していた3号墳墓の様相が判るにつれてこの集石を見ると中央付近に石材がない空隙が存在することに気づき、それを追って調査を行った。

i) 主体部

塩ビパイプで一部を破壊されるが、石材を立て据えて長さ1.9m、幅0.5m前後、高さ0.4mほどの空間を造って埋葬部としている。床面には小石を敷き詰めていたようであるが、全く大きさの異なる石材が置かれるなど、統一されていない。頭位は北を意識しているようである。

埋葬部の周囲をやはり石材で厚く補強したような様となる。天井石は見られないので、木蓋を使用したものであろう。また、鉄釘も全く出土していない。

ii) 出土遺物 (第91図1・2)

1号墳墓周溝を延長した位置にある8号墳西Tr.付近から出土した土器がこれに伴うものとして報告する。

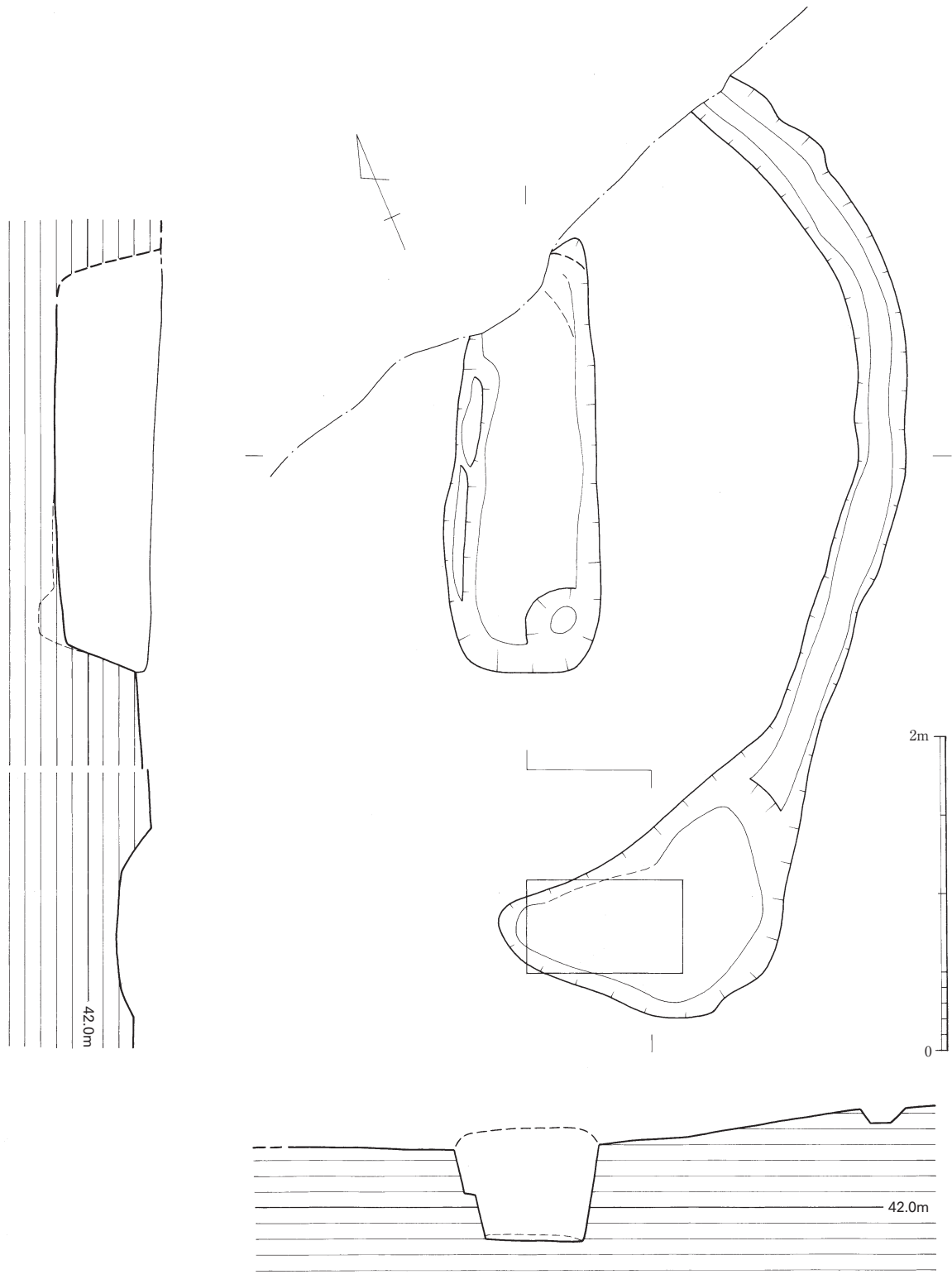
1は土師器皿で、口縁部は1/2を欠く。暗灰赤褐色を呈し、仕上げは比較的丁寧である。底部は篋切り痕、板状圧痕が残る。口径17cm弱、器高2cm弱を測る。2は8号墳盛土を除去する際に出土した土師器甕で、恐らくこれに伴うものであろう。口縁部は小片であるが、体部は1/3ほどが残存する。口縁部付近は丁寧に横撫で調整され、体部外面は平行叩き、下半は縦位の粗い篋削りを施す。内面は当て具痕が残存。



第91図 墳墓出土土器実測図 (1/3)

2) 2号墳墓 (図版39、第92・93図)

1号墳墓の北西に近接して位置し、調査時は11号墳としていた。重機を使用しての表土掘削によって周溝と墓壙がすぐに認識できた。まだ1・3号墳墓の調査を行う前でもあり、土壙を主体部



第92図 2号墳墓実測図 (1/40)

とする円墳であろうと考えていた。周溝は幅0.4m前後、深さ0.1m弱の小規模なものであるが、東南端が広くなり、そこから土器が出土した。

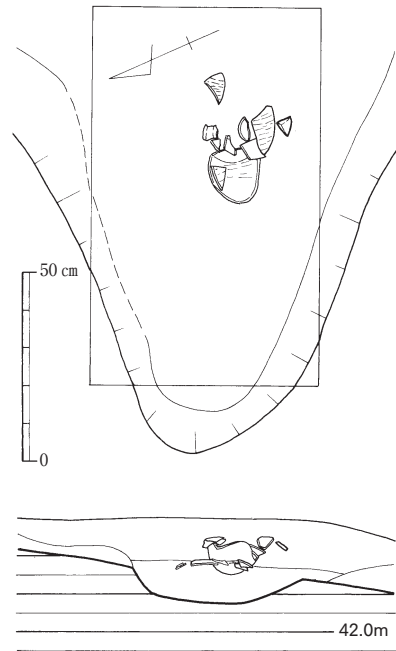
なお、盛土は確認できていない。

i) 主体部

北小口を未確認であるが、北東端で上端が曲がる状況を確認してほぼ全体に近い部分を調査したと考えている。墓壙は長さ約2.7m、幅1mの隅丸長方形を呈し、深さは最大で0.7mほどとなる。西長側辺では床から0.3mほど高い付近に狭いテラスを検出していて、ここを木蓋で塞いだものであろうか。ここも釘は出土していない。調査時に土層を観察したが、ほぼ全体に黒色土が埋積していた。

ii) 出土遺物 (第91図3・4)

周溝南東端から出土した土器。3は土師器杯で、1/3ほどが残存。丁寧に作られた土器で、篋磨きを多用する。体部外面下半は篋削りの後に撫でるようで、外底面は篋切りで終わる。赤味帯びた色調に焼き上がる。4は須恵器瓶子で、口縁部と体部は接合せず、図上復原した。口頸部は強く、短く外反し、端部は面を作る。体部はいわゆる水挽痕が顕著で、外面下端付近の狭い範囲で篋削りが残るが、以上および底面は撫でて終わる。胎土は粗いと言うべきであるが、薄手で丁寧に作られている。



第93図 2号墳墓周溝遺物出土状態実測図 (1/40)

3) 3号墳墓 (図版40・41、第94・95図)

2号墳墓の南西に隣接し、その西は段落ちとなっている。調査時は10号墳としていたものである。検出時は長軸4m弱、短軸2.5mの楕円形に近い形状で礫が集積していたが、中央北に礫のない部分があって埋葬部を予想させた。

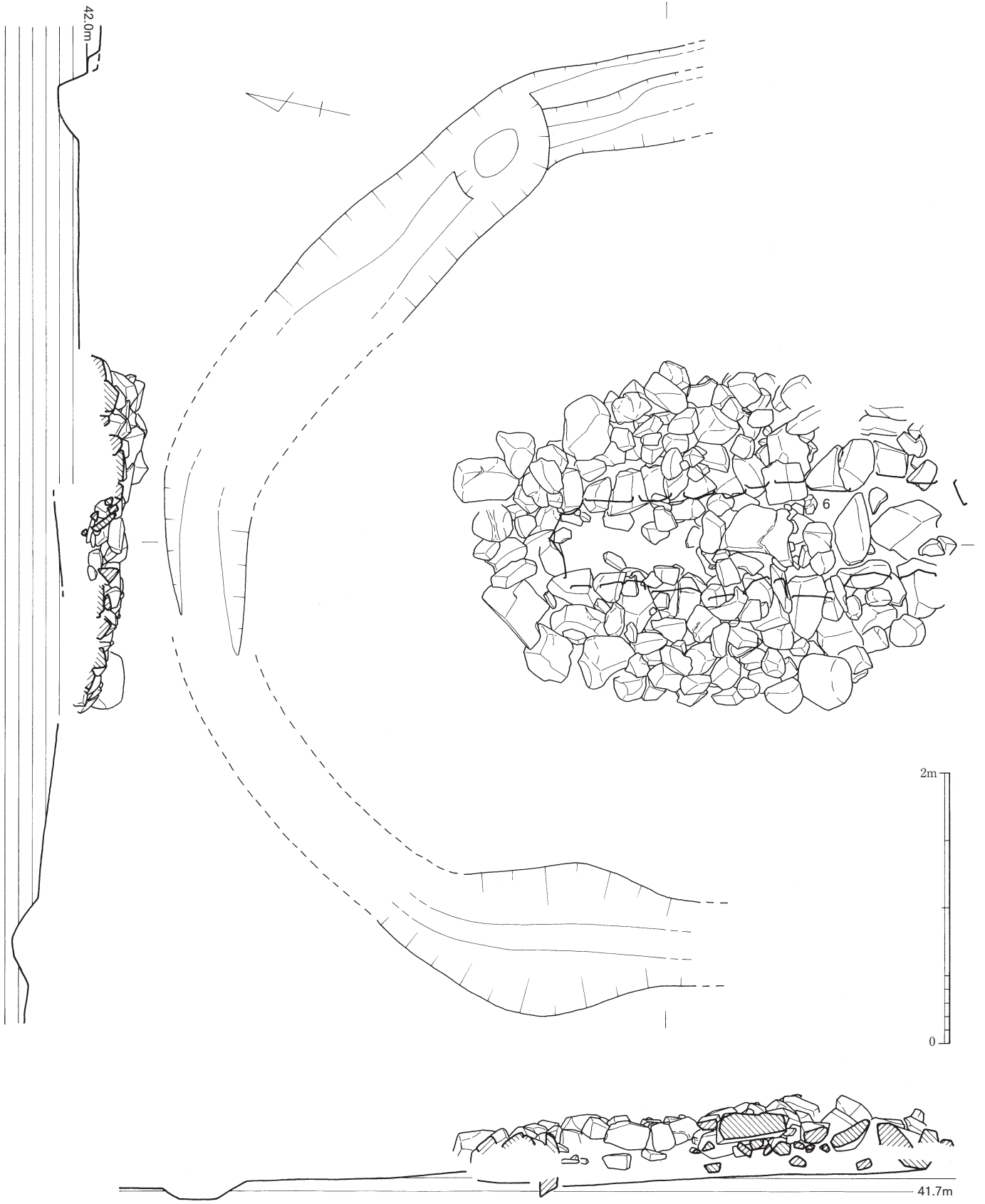
周溝は椀の株によって全体の把握ができなかったが、内径で5.5mほどの円形を呈し、幅0.7m前後、深さは最大で0.3mほどであった。主体部の北に礫が1列並ぶようにあったが、これも株に邪魔されてその性格を把握するには至っていない。

i) 主体部

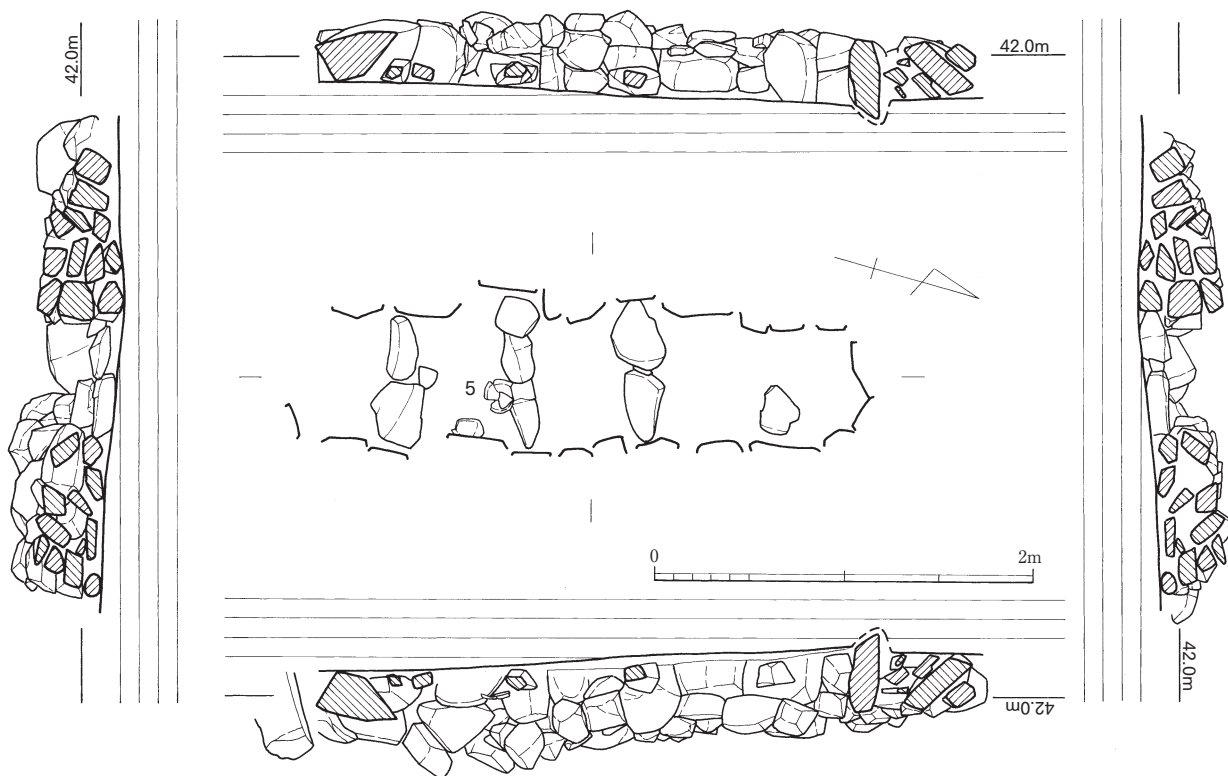
南小口部西側の石材を確認できなかったが、埋葬部の内法は長さ約3m、幅は石材の配列が不規則だがおおむね0.6m、高さは最大で0.5mを測るが、棺台以上の高さは0.4mほどとなる。1号墳墓では石材を立てて空間を造っていたが、ここでは立てた石材も見られるが、平積みしたものが多く、特に西側では丁寧に控え積みがなされていた。

検出時は埋葬部の南半も石材で覆われていて、床面実測図で南端付近に断面を示した大型石材は小口材が倒れ落ちたものと判断して図示したものである。中央付近にも大型の石材がほぼ水平に置かれていて、天井石のように見えるが、北半には石材が見られないことから通常の天井石として使用したものではないと思われる。

床面はほぼ等間隔で棺台の石列が4列置かれ、その上面は南が高いことから、頭位は南にあったものと思われる。ただ、ここも釘は全く出土していない。2点の土器は南半からの出土である。



第 94 图 3 号墳墓实测图 (1/40)



第95図 3号墳墓主体部実測図(1/40)

ii) 出土遺物(第91図5・6)

主体部内から出土した土師器。5は埋葬部内北側出土の灰黄褐色を呈するほぼ完形の皿で、口径18cm弱、器高1.8cm。内定面は篋削りの後に幅広い篋磨きを施すようで、外底面は篋削りで終わる。作りは雑。6は口径15cm、器高3.5cmほどの杯で主体部内南側からの出土。底部は完存するが、口縁部は1/4の残片である。灰黄褐色を呈し、胎土・作りともに良好。体部は丸く、口縁部は小さく外反する。内面は荒れるが撫でであろう。外面では口縁部付近を除いて広く篋削りを施すが、下端付近を除いて横撫でしている。外底面は丁寧に篋削りする。削りはいずれも回転を利用している。

4) 小 結

思っても見ない遺構で、文献を渉猟するに至っていない。『太宰府市史 考古資料編』(1992)では当時までに知られた墳墓資料を集成的に掲載するが、そこに類似遺構は見えない。

さて、出土品を見ると、2号墳墓出土の杯は回転篋削りと篋磨きを併用、3号墳墓の杯は篋磨きを使用せず、法量が小さくなる。1・3号墳墓の皿は口径17cm前後、器高2cm前後で、回転篋削りを多用する。森田勉氏による大宰府の土器編年によれば、C期を中心とし、2号墳墓の杯がB期2小期(8世紀後半)、1・3号墓の土器群はC期(9世紀前半)に比定でき、この頃に継続して造営されたものであろう。

一定の墓域を有し、石室を構築するなど通常の土壙墓に比べれば遙かに厚葬と言うべきであろう。ただ、古代の厚葬墓といえどもっぱら火葬墓で、こうした石室墓はまだ希有の例といって良い。今後の資料の増加を期待したい。

森田勉「大宰府の出土品 ③ 土器 陶磁器」(『仏教藝術』146号、1983)

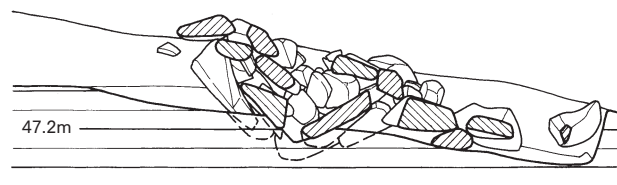
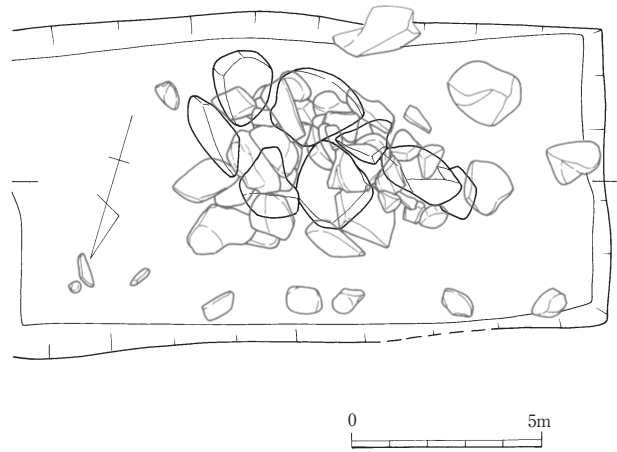
12. その他の遺構と遺物

1) 石組炉 (図版42、第96図)

調査区南東隅付近、1号小石室の北西に位置する。この石組炉以外にも焼けて赤変した石材が所々で発見され、そのいくつかを精査したが、原状を留めたものはこれのみであった。

検出時は赤変した礫の幾つかが見えていたが、周辺も含めて掘り下げると礫群のまとまりが現れた。さらに注意深く礫を外して、比較的扁平な石材を中央部がくぼむようにすり鉢状に配列した炉跡を検出したものである。

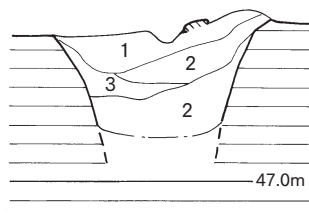
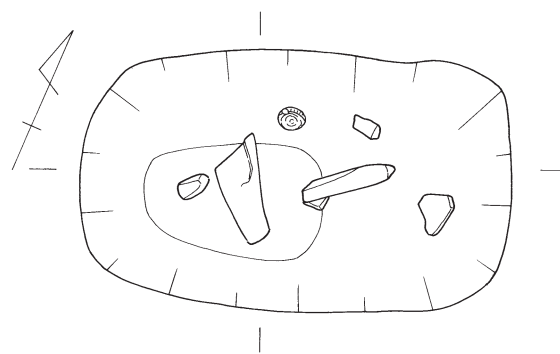
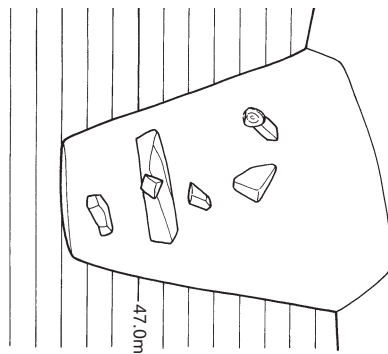
内部から土器等の出土品はない。



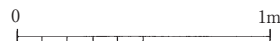
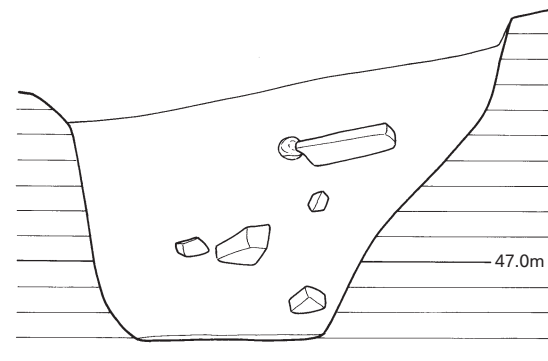
第96図 石組炉実測図 (1/20)

2) 土坑 (図版43、第97図)

2号墳の西側に位置する。長さ1.7m、幅1mほどの隅丸長方形平面を呈し、深さは1.3mほどを測る。床面はほぼ平坦で、上端の半分以下の規模の隅丸長方形となる。内部から礫や土器片が出土したが、図で見ると



- 1. 黒灰色
- 2. 暗灰色
- 3. 2よりやや暗い



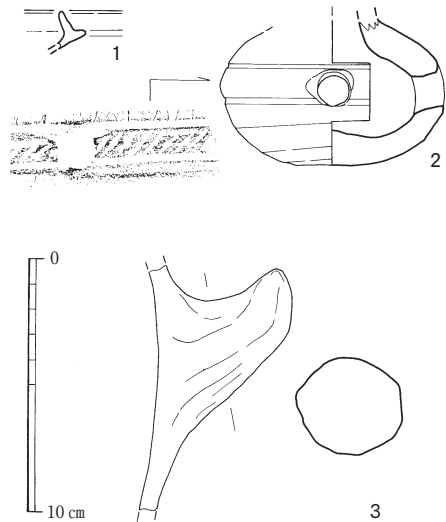
第97図 土坑実測図 (1/30、1/40)

に出土位置に規則性はない。このような遺構が丘陵上で発見された場合は、通常、縄文時代の落とし穴と考える場合が多いが、1基単独であり、床面に杭跡などの痕跡もないために断言はできない。ただ、筆者は以前、朝倉市(旧甘木市)矢野竹遺跡で奈良時代の遺物を出土した落とし穴と思われる遺構を調査したことがあり、本例も落とし穴の可能性は残る。

出土遺物(第98図)

1は須恵器杯身小片。2は甕。文様帯を篋描斜線文で飾り、上下の界線はしっかり刻まれる。底部付近は篋削りで処理する。胎土良好だが、焼成は甘い。

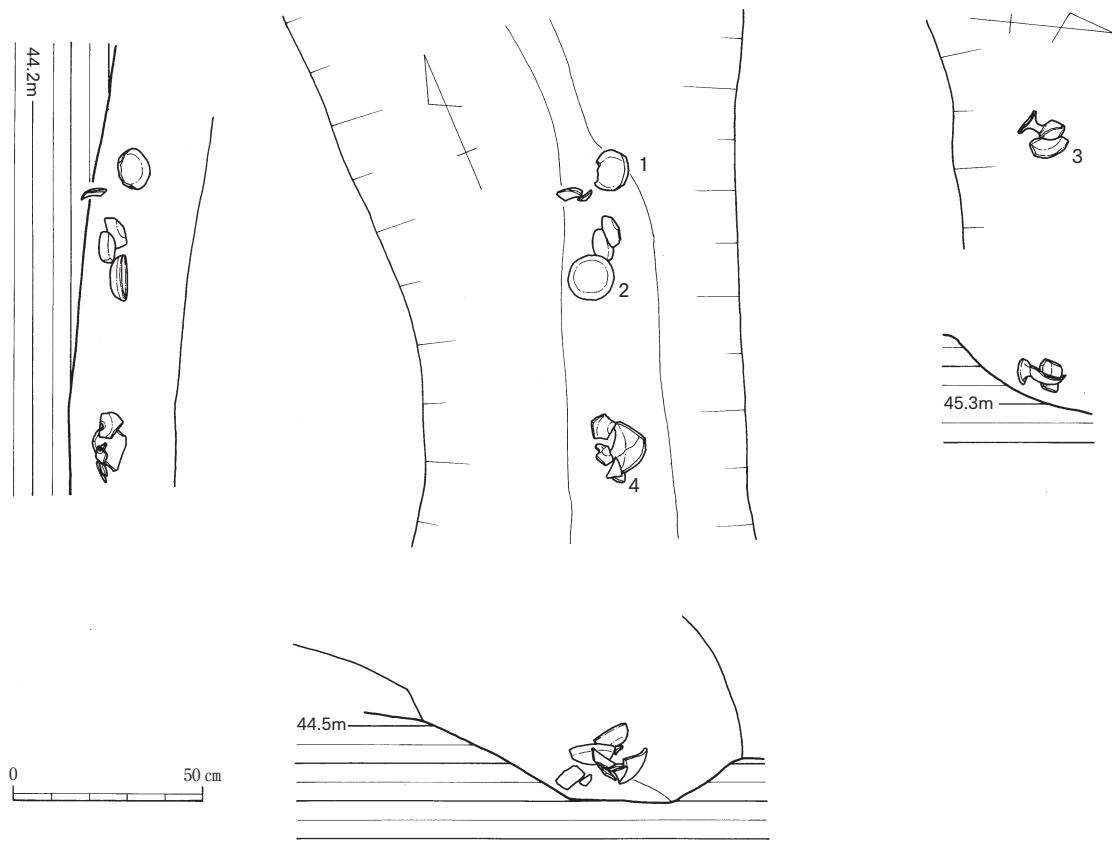
3は土師器把手片で、器表は荒れる。「下層」出土の注記がある。



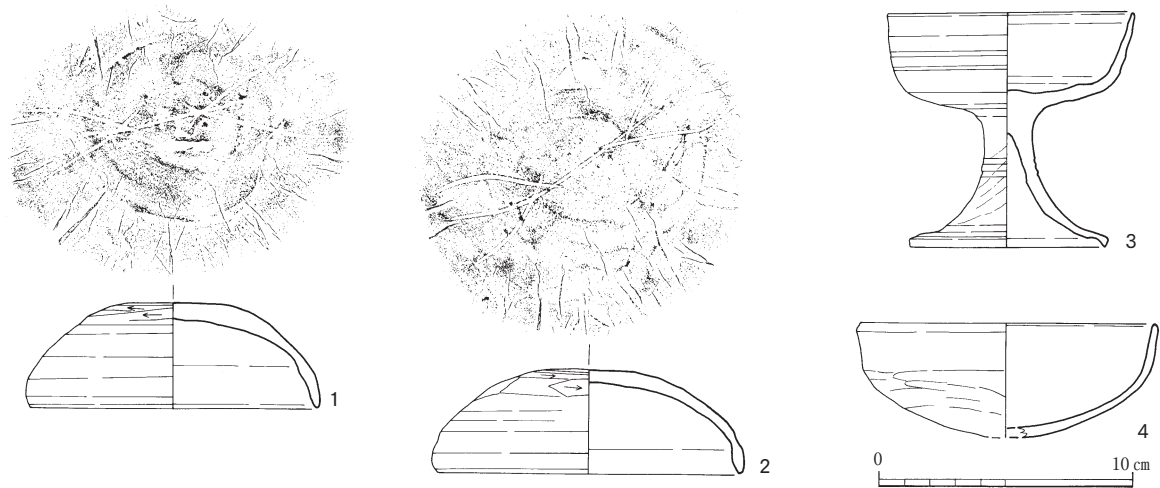
第98図 土坑出土土器実測図(1/3)

3) 溝状遺構(図版44、第99・100図)

9号墳西畦土層で見たようにこの溝は9号墳表土上から掘削され、7号墳北側から西側を迂回して8号墳周溝に至る、幅1m前後、深さ0.2mほどの小溝であるが、7号墳北側で3に図示した高杯が、また西側でまとまった3点の土器が出土した。残存状況から見て人為的な処置と思われるが、どの



第99図 7号墳北小溝土器出土状態実測図(1/20)



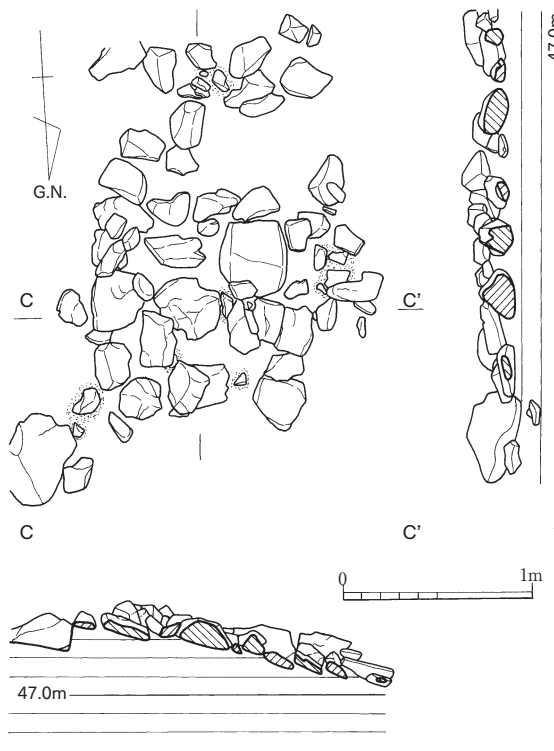
第 100 図 7号墳北・西小溝出土土器実測図 (1/3)

古墳に伴うものか判断できかねるためにここで紹介する。ただ、7号墳の項で記したように、7号墳に伴う土器群である可能性が高い。

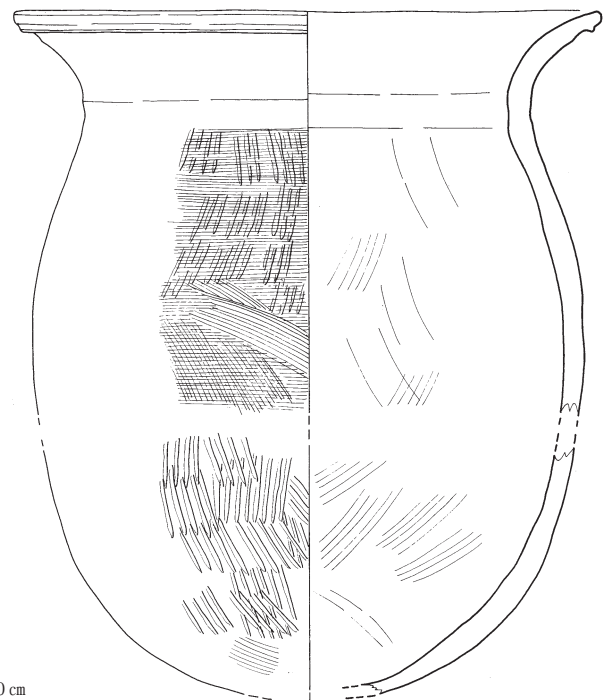
1は口縁部の1/4を欠くほかは完存する須恵器杯身。復原口径11.4cm、器高4.1cmと、天井部は丸く高い。胎土・作り精良で、天井部は篋削りを行い、篋記号を刻む。2は完存する杯身。口径12cm、器高4.1cmで、1に比べてやや大きい。篋記号は共通し、胎土・作りなどもよく似ている。同様の篋記号が1号墳墓道出土平瓶・7号墳墓道出土小型壺に見られる。

3も完存する須恵器高杯で、口縁部・脚端部は焼け歪む。杯部中位および脚部中位に2条の甘い凹線を巡らせ、脚端部は立ち上がって面をなす。

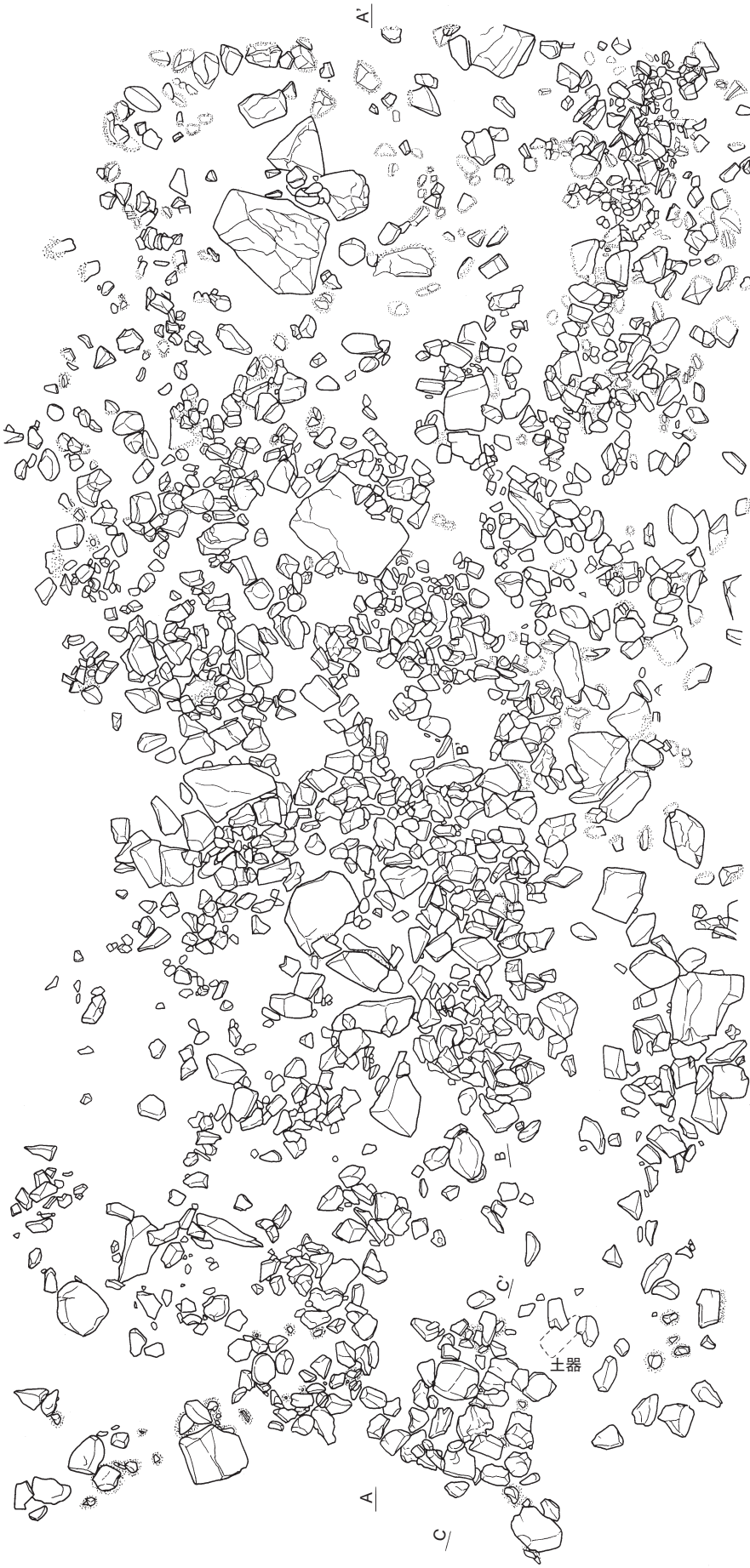
4は土師器碗で、明赤褐色となる。胎土・作り精良で、体部外面下半は不定方向の篋削り。内面



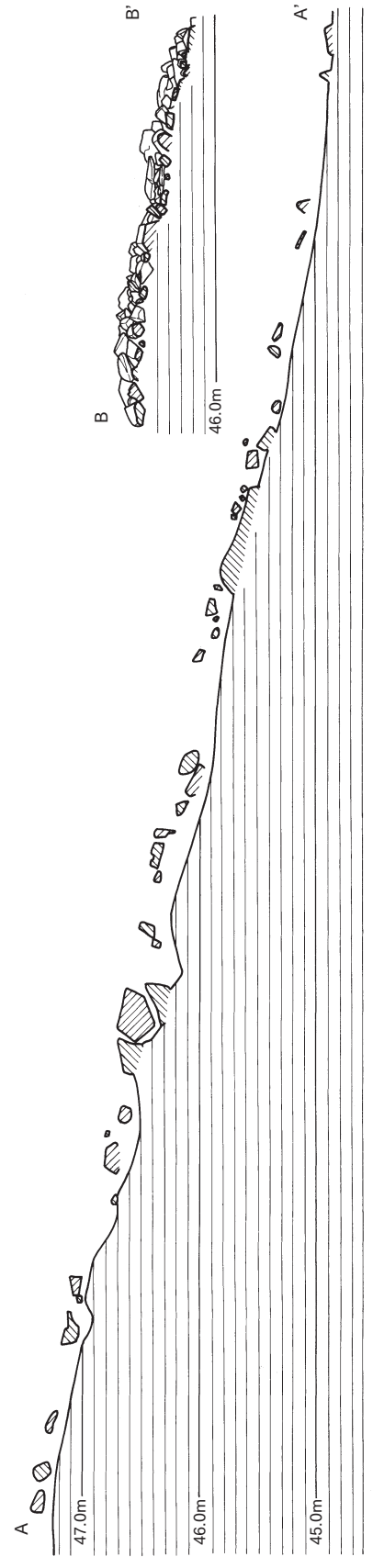
第 101 図 集石個別実測図 (1/40)



第 102 図 集石中出土土器実測図 (1/3)



G.N.



第 103 図 集石全体実測図 (1/60)

は撫でで終わるようである。

杯蓋は口径12cm弱で、天井部は篋削りを丁寧に行うなど、IV A期に属するものとして良からう。

4) 集石遺構 (図版45、第101・103図)

4～9号墳の墓道は浅い谷へ向かっている。その浅い谷の南に狭いなだらかな尾根線があって、多くの礫が露出していたために、表土を除去した。

図示したように大小の礫が無秩序に近い状態で散乱していて、明らかに組み合わせたものや区画したようなものは確認できなかった。ただ、調査区内最高所付近に方形とも受け取れる形状の集石があり、それは別に図示した。また、中央付近では特に礫が集中する部分があり、それも断面図を図示している。なお、調査では礫を除去したが、火葬骨片の出土や下部遺構は無かった。

出土遺物 (第102図)

土師器甕で、口縁部は須恵器のように肥厚・変化を加える。頸部は締まりが無く、体部も張りが弱い。図上復原しているが、図以上に長胴となりそうである。体部は平行叩きを残し、上半は細かい刷毛目で終わる。内面では一部に同心円の当て具痕が残る。胎土粗く、底部付近では部分的に煤が付着する。

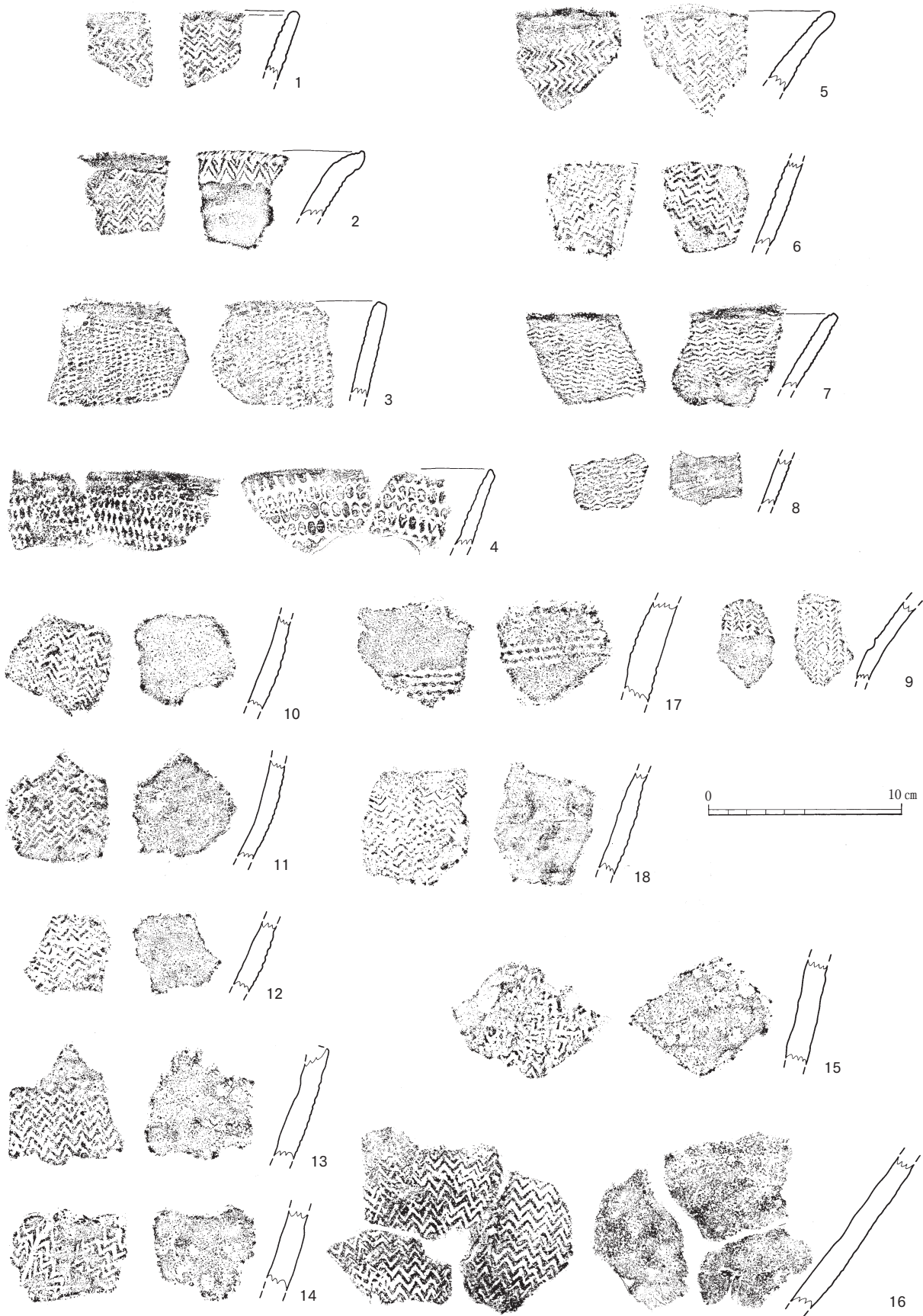
5) 縄文土器

発掘調査の過程で、縄文・弥生土器片や石器等の出土が頻繁にあり、下層に包含層が存在することは容易に判った。古墳の調査の進捗に合わせ、調査対象地南よりの範囲を部分的に重機・人力を用いて掘削し、遺構の確認作業を行った。人力による作業は遺物がほぼ出なくなるまで、約20～30cmを掘り下げた。結果的に遺構は石組炉1基の確認で終わったが、包含層中から多くの土器・石器を出土したので報告する。なお、包含層と呼んでも、通常イメージする黒色系のものでなく、バイラン土の再堆積で、黄褐色の真砂土である。

i) 縄文時代早期に属する土器

早期前半から中頃に属する押型文土器 (図版57、第104図) 稲荷山式に相当する一群で1～7は口縁部片、8～18は胴部片である。1は直行する口縁で、外面に縦走、内面に口唇部際から横走山形文を施す。2は口縁端付近より外反する口縁部を有す。外面は横走山形文、内面は屈折部から端部にかけて原体端で横走後、端部に刺突文を施す。この個体は次形態の可能性も残る。3は直行する口縁部を呈し、内外面ともに細かい楕円文が横走する。4は直行する口縁部で、内外で異なる楕円文原体を使用する。5・6は胎土と色調からしても同一個体で、内面はともに横走山形文、外面は縦横に山形文を施す。6は胴部上位の破片で、外面には煤が付着する。7・8は同一個体片で、内外面ともに鋭角さが無い山形文を横走する。9は口縁付近の破片で器壁は薄く、細かい山形文が横走し、内面に半貫通の刺突文を施す。10～12は同一個体の胴部破片で、外面に横走山形文、内面は撫でる。13～16も同一個体片で、外面は横走山形文を施し、内面は撫でる。なお16は胴部下半に近いが割と薄手である。17はベルト状に横走楕円文を施す破片で、楕円は小さく連結するような原体である。この時期よりも遡る可能性を残す。18は外面に横走山形文、内面は丁寧な撫でを施す。また外面には煤が付着する。視認では同一個体を選り分けてはいるが、特に山形施文土器の口縁部片と胴部片は、同一個体の可能性が残る。

早期中頃から後半に属する押型文土器 (図版57・58、第105図) 19～25はいわゆる早水台式に



第 104 図 縄文土器実測図 1 (1/3)

相当する一群である。19～21は口縁部片、22～25は胴部片である。

19はやや外反する口縁で、外面はやや傾斜ぎみに横走楕円文、内面も楕円文を横走させ口唇部内側より2.5cmほどの原体条痕を残す。非常に丁寧な施文状況である。20は外彎の弱い口縁部形状で外面に縦走楕円文、内面に楕円文が横走し、1.8cm程の浅い原体条痕が残る。割と小形の個体である。21は外面の楕円文の細かさでこの一群にと判断したが、次形態の下菅生B式の範疇のものかもしれない。内面原体条痕の終息地点に明らかに屈折部をもち、ややラッパ状に開く口縁を有する。外面は口縁端まで楕円文が縦走し、屈折部から口縁端にかけては軽く撫でる。内面は口縁端から一度、やや傾く4cm程の原体条痕を施し、その途中から屈折部まで3cm程重ねて原体条痕を残す。22は外面に傾斜する楕円文を横走させる。胴部～口縁部下位の破片であろう。23～25は同一個体の破片で、潰れたような楕円文を傾斜・横走する。内面は撫でて仕上げる。

26～42は下菅生B式に相当すると思われる、接合しない同一個体片である。器壁の傾きにやや難点があるものもあるが、26・27が口縁部片、29は口縁部下位～胴部上位片、30～41までが胴部片、42は底部片である。外面は9×7mmほどの大粒の楕円文が横走し、胴部内面は撫でて仕上げている。26・27の口縁形は台形状の平坦面をつくりラッパ状に開き、28の破片より緩やかに外彎して伸びる口縁をなすものと推測できる。胴部片の中にはやや湾曲するものが看取でき、胴部付近は緩く膨らみ24の底部片のやや丸底につながる、ラッパ状口縁の砲弾形体部の器形をなすであろう。口縁部内面は、傾斜をするがやや密に直線的に伸びる5.5cm程の原体条痕を施す。条痕終息地点は止めずに振り下ろしている。

この26～42は口縁部の開き方と胴部上位から下菅生B式の範疇としたが、底部形態から広義の田村式の範疇にかかる個体ではとも推測している。

早期後半に属する押型文土器 (図版58、第106図43～47) 43～47はいわゆる田村式に相当する一群である。43・44は同一個体で43により短く外彎する口縁形を呈すものと判断できる。外面の楕円文は楔状に潰れ、内面は恐らく原体自体で条痕状に仕上げているものと思われる。45・46も外面は楔状に潰れた楕円文であるが、43・44の同一個体の可能性が残る。47は乳房状の尖り底の破片で、外面は荒く指整形をし、施文部の残存度が悪いが、恐らく山形文であろう。内面は指腹痕・指腹痕が残る。

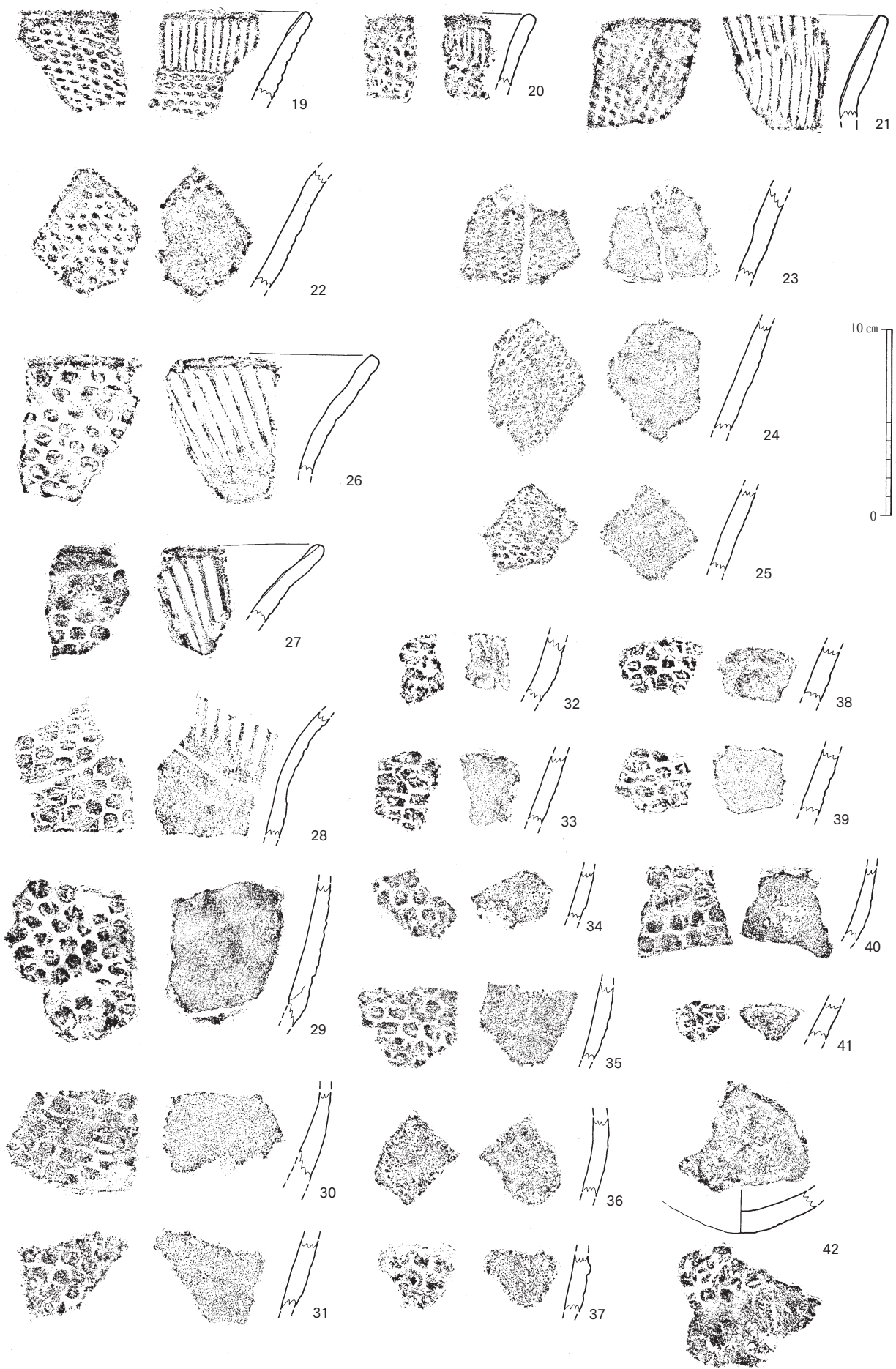
ii) 縄文時代晩期に属する土器

縄文晩期の土器群は、観音山古墳群中原Ⅲ群報告に従い、精製・粗製の他、口縁部形態で分類し、説明を加える。

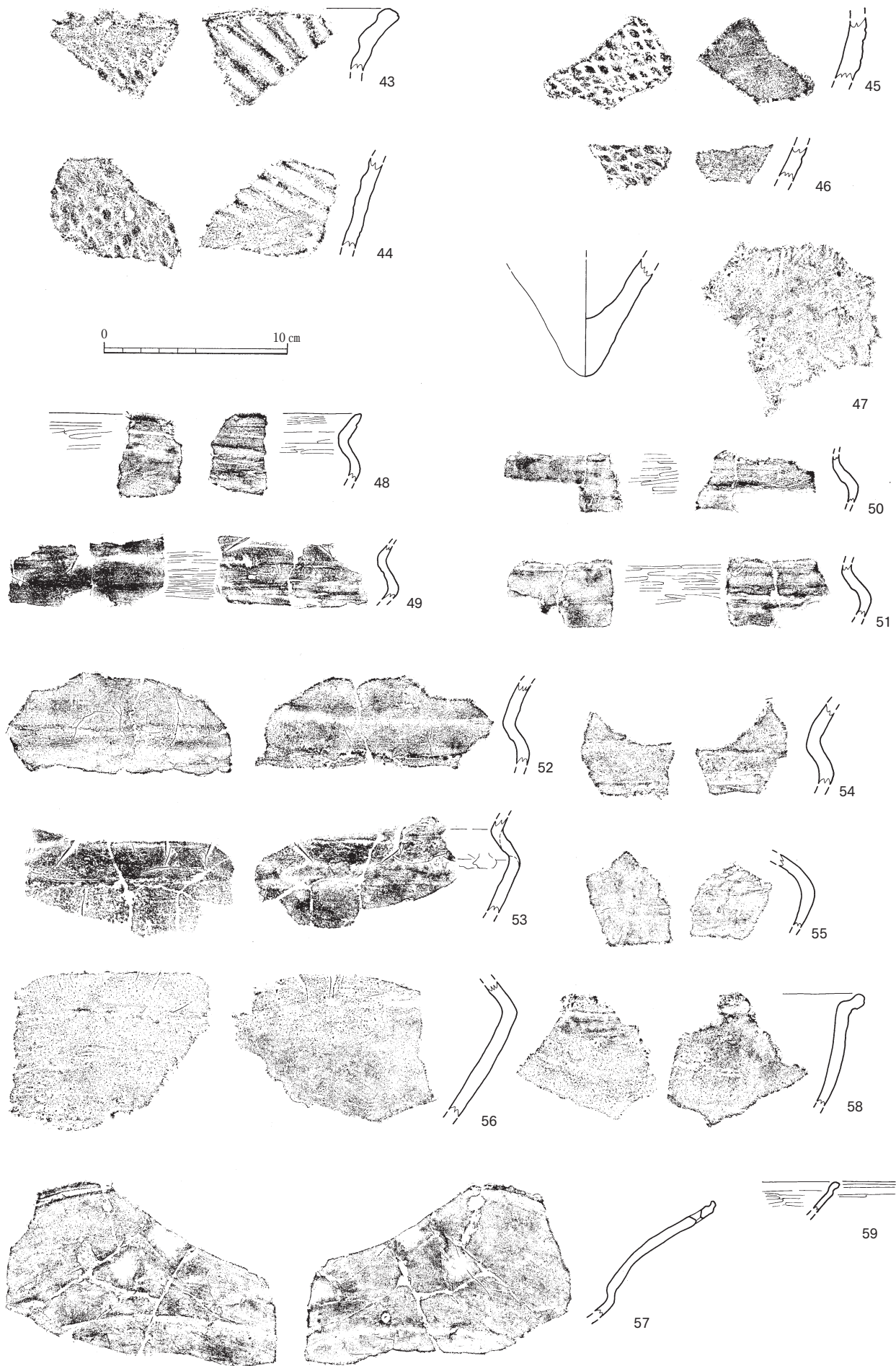
精製土器

Ⅲa類 (図版58、第106図48～56) 口縁部が外彎して長く伸びる精製浅鉢で、口端部の細部形状にはバラエティがある。48・49は同一個体で屈折の弱い胴部、48により短く直線的に伸びる口縁部を有する。外面には密に横方向の磨きを施す。この個体はV類とすべきか躊躇したが、体部の張り出しの弱さから、Ⅲa類としている。50・51は同一個体で胴部破片である。内外面に磨きを施す。52～55も同一個体片で、52により口縁部がやや外彎しつつ伸びる個体であることがわかる。56は唯一口縁部形状で判断出来る個体で、口縁端部が直角に近く内折し、外面側端部に沈線を刻む。また口縁部内面からの補修孔痕が残る。57は内外面磨きを施す。

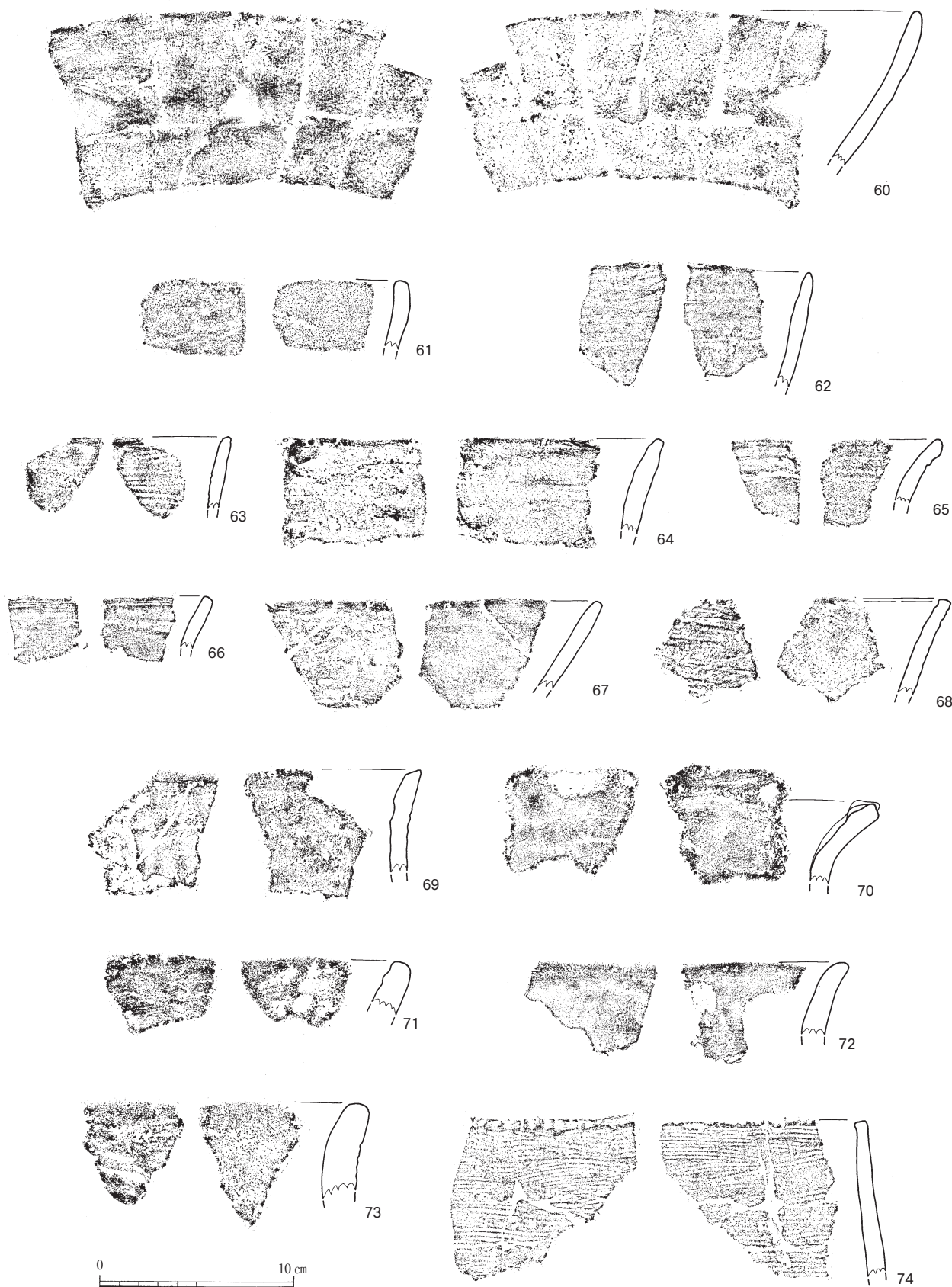
Ⅳb類 (図版58、第106図58・59) 口縁部外面にも沈線や段で変化を加え、結果口縁部が屈曲するもの。58は「て」字状の口縁部で、丸みを帯びる工具を使用して屈折部を形成する。内面に篋



第 105 図 縄文土器実測図 2 (1/3)



第 106 図 縄文土器実測図 3 (1/3)



第 107 図 縄文土器実測図 4 (1/3)

状工具での削り痕を明瞭に残す。59は外面に沈線を有し、内面には横方向の磨きを施す。

粗製土器

Ⅹ類 (図版58、第107図60～61・第108図75) 口縁部が内彎気味に終わる粗製深鉢。60は緩く口縁部に向かい内彎し、外面は横方向に荒い削りを施し弱く撫でる。61は内外面ともに撫でる。傾きに自信はもてない。62は緩く内彎気味に伸び、内外面ともに撫でる。

第108図75は体部から口縁にかけ緩く内彎する。器厚はやや薄手で内外面ともに横・斜め方向にやや荒い磨きを施す。外面口縁部に、篋状工具で4本の弧状沈線を施文する。その間にも2本の沈線を入れる。

Ⅹa類 (図版59、第107図63～68) 口縁部が外反ないし直行する粗製深鉢である。63は口縁端部で丸味をもち、内面は条痕を残す。64は緩く外反して伸び、内外面を撫でる。65は外反がやや強く、口縁端部は丸味をもつ。66～68は口縁端部が断面方形となるもので、66は内外面を撫でる。67は外面に荒い条痕地に煤が残る。68は僅かに外反し、口縁端部は端正な断面方形である。外面は条痕を施す。

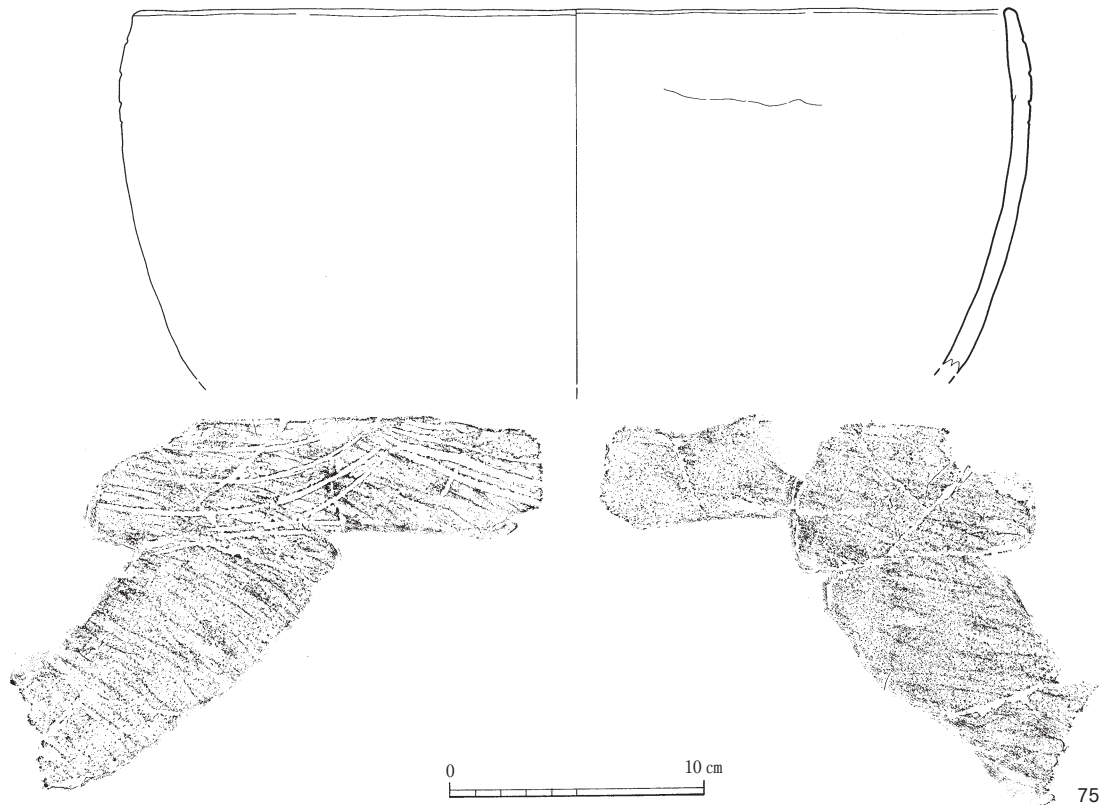
Ⅹb類 (図版59、第107図69・70) 口縁付近が小さく外彎するもので、薄くなり終わるもの。69は傾斜する口縁。70は外彎が強く、内面端部から1cm幅程で段を有する。

その他の口縁部破片 (図版59、第107図71～74) 特に71～73は端部が丸味を帯び分厚く、縄文時代早期の無文土器の可能性を残す。71は内外面撫でて、内面は凹凸がある。72は端部を短く外反させ、丁寧な撫でを施す。外面煤が付着する。73は内外面ともに撫でる。74は内方向に伸び、口唇部に荒い刻目状の痕跡を残す。黒川新段階～夜白段階のものであろう。

その他の縄文土器 (図版59～60、第109図76～第111図144) 体部・底部の破片をまとめて紹介する。ほとんどが粗製深鉢である。

第109図76は緩く内折する胴部をもち、口縁付近で外折する破片である。内外面ともに撫でて仕上げる。77は胴部付近の破片であろう、内面には煤が付着する。78は胴部下半の破片で、やや内彎する。79～81は同一個体片。80が口縁付近で、79・81は体部破片である。口縁部は恐らくは波状口縁となるであろう。外面は削り状になる。82・83は同一個体片で、内外面ともに撫でて仕上げる。84・85は同一個体片で、若干内彎し外面には荒い条痕が残る。86は緩い屈曲をもつ。内外面ともに撫でる。87は外面に荒い条痕をもつ。88は若干内彎気味で外面には条痕、内面は撫でる。89は外面に荒い条痕が残り、内面は撫でる。90は外面に条痕、内面は撫で。91はやや内彎する破片で、外面は条痕、内面は撫でる。92は内外面ともに撫で。93は内外面ともに条痕が残る。94は外反する体部破片で、内外面ともに条痕を残し外面には煤が付着する。95はやや器壁の厚い破片で、内外面ともに撫でて仕上げる。96は内外面ともに条痕を残す。97は外面に条痕、内面は撫でて仕上げる。98は若干外反する破片で、外面は条痕、内面は撫でる。99は内彎気味の破片で、内外面ともに条痕を残す。100は外面に撫でを、内面に削り痕を残す。

第110図101は若干内彎気味な破片で、外面は荒い斜め方向の磨きを施す。内面は丁寧に撫でている。102は外面に条痕を残し、内面は撫でて仕上げる。103は断面中央より若干内傾し、そして外反気味になる破片である。内外面ともに条痕を残し、外面には煤が付着する。104は外面に甘い条痕を残している。内面は丁寧な撫でて仕上げる。105は若干内彎気味になる破片で、内外面ともに撫でて仕上げる。106はやや内彎気味となる破片で、内外面ともに撫で、外面はやや荒れている。107は外面を丁寧な条痕で、内面は強めの撫で痕が残る。108は内外面ともに撫でて仕上げる。109

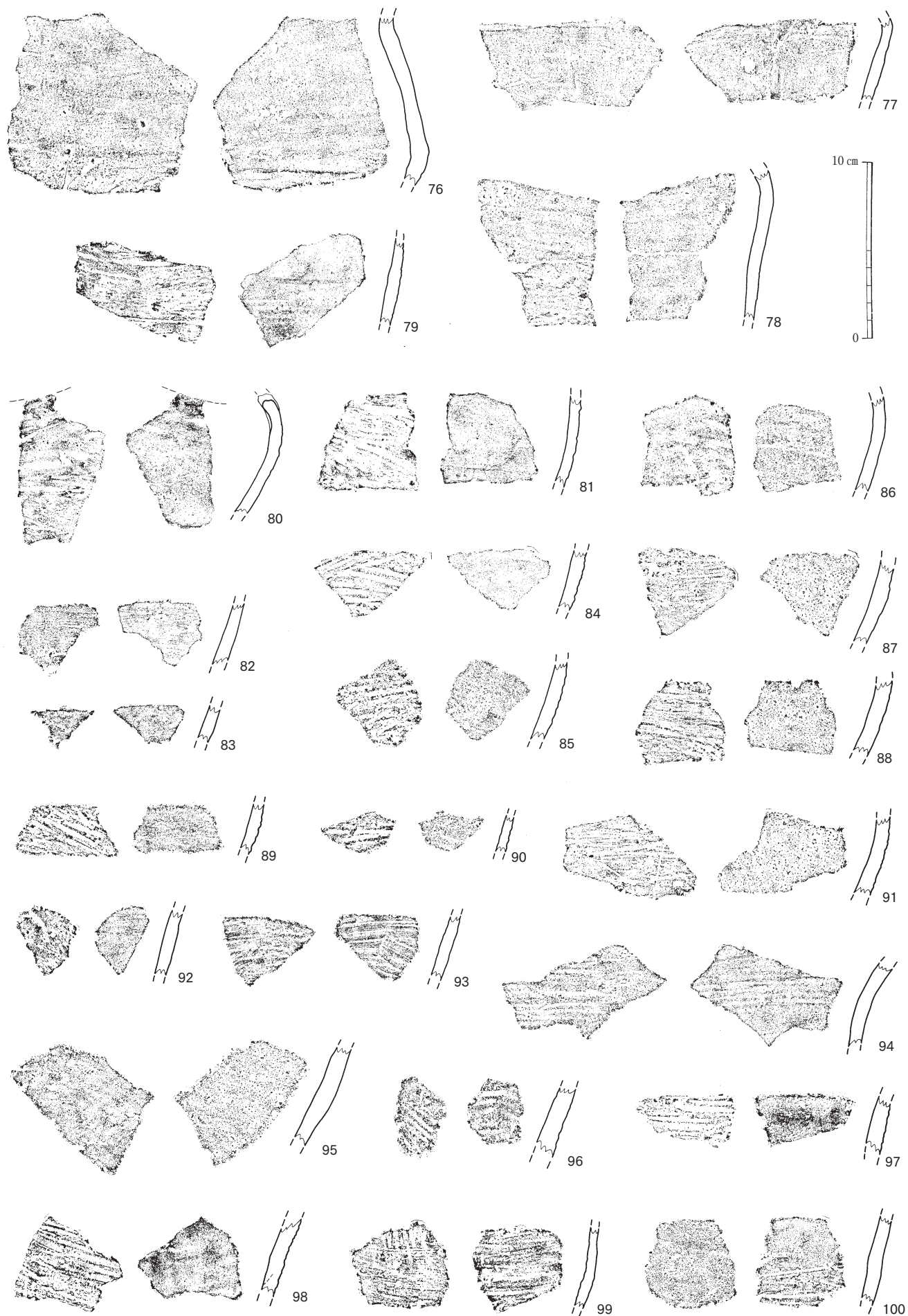


第108図 縄文土器実測図5 (1/3)

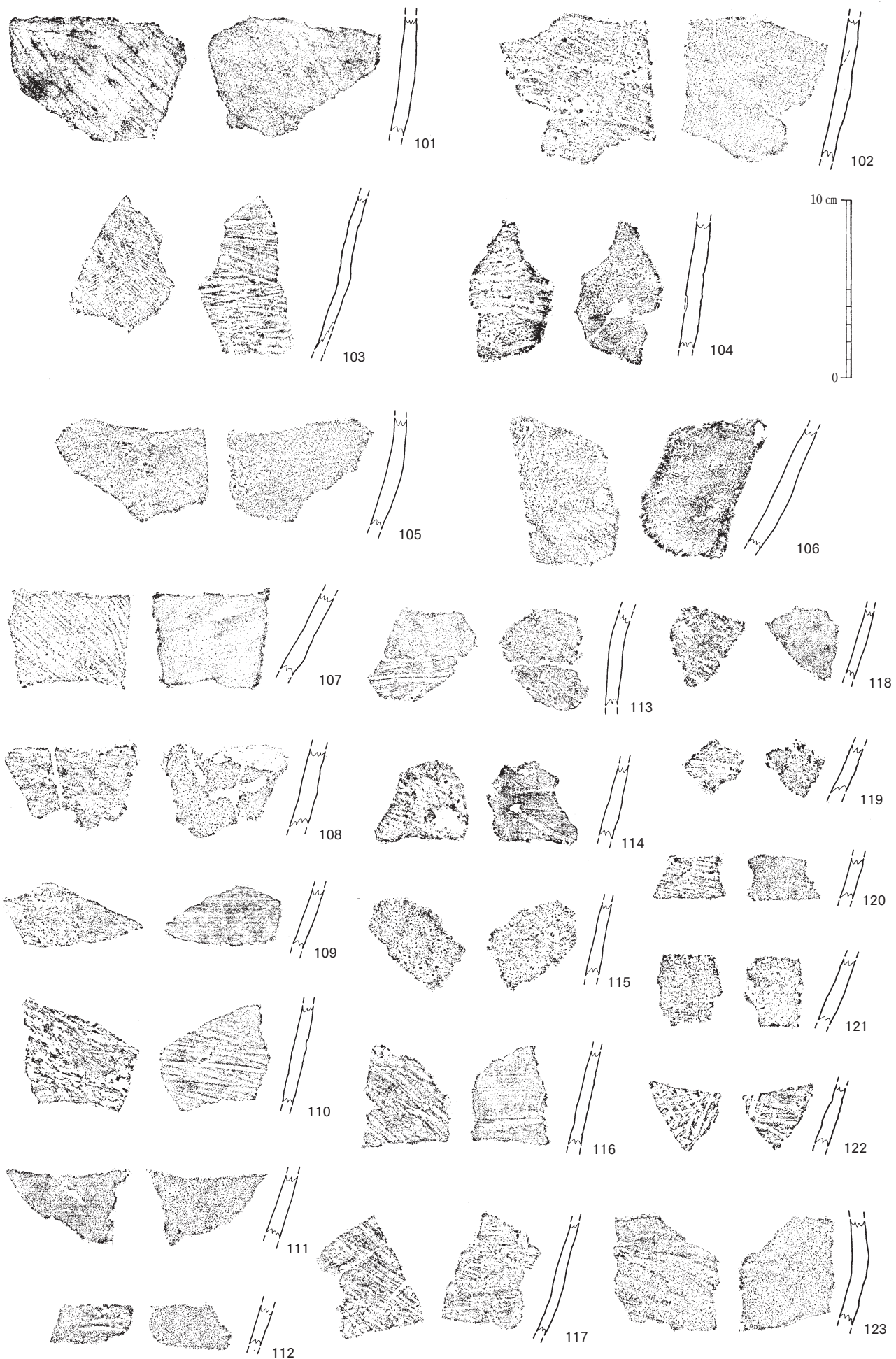
は外面を条痕後に弱く撫でる。内面は非常に浅い磨きを施す。110の外面は荒く弱い削り後に軽く撫で、磨きに似る条痕が残る。111は内外面ともに撫でる。112の外面は撫でる。113はやや外反気味の体部片で、外面は条痕を施し、内面は撫でて仕上げている。114の外面は条痕後に軽く撫でる。内面は強い撫で痕が残る。115は内外面ともに撫でる。116は外面に斜め方向の条痕、内面は撫でて仕上げる。117は破片下部が若干内彎する破片で、内外面ともに条痕が残る。118～120はともに、外面は条痕、内面は撫でて仕上げる。121は内外面ともに撫でる。122は特徴的で、内外面ともに縦横方向に条痕を残す。123はやや内彎する体部の破片で、内外面ともに撫でる。

第111図124は内外面ともに撫でる。125の外面は荒れぎみで、調整は不明瞭である。内面は丁寧な撫でを施す。126の外面は甘い削りを施し、内面は弱い条痕後撫でる。127の外面は条痕後に弱く撫で、内面は明瞭な条痕が残る。外面には煤が付着する。128は内外面ともに条痕を残す。129はやや厚手の器壁の破片で、内外面ともに撫でて仕上げる。色調・胎土・焼成具合から縄文時代早期の無文土器の可能性を残すものである。130は緩やかに内彎気味となる破片で、外面に条痕、内面は撫でる。131はやや外反気味の破片で、内外面ともに撫でるが、内面は強めの痕が残る。132は接合部付近の破片で、荒い条痕の一部が残る。なお、拓本の外面中央部の横方向の凹み線が接合痕である。内面は丁寧な撫でを施す。133は内外面ともに撫でる。134は内外面ともに撫で、外面には煤が付着する。135は内外面ともに撫で。136はやや外反する部分の破片で、内外面ともに撫でる。137は内外面ともに撫で。138は直線的な胴部破片で、外面は斜め方向の荒い磨きを施し、内面は横方向の磨きを残す。他の破片でもあったが、荒いが磨きを施す破片については精製深鉢の可能性はあるが、部分破片であるため判断は困難であった。

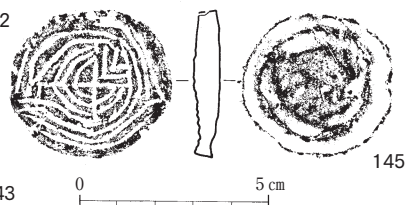
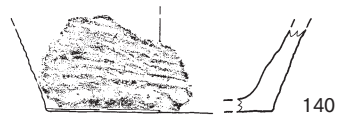
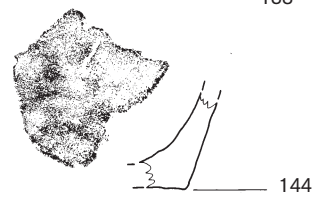
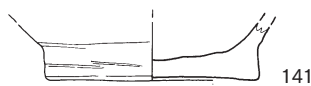
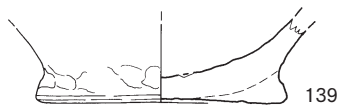
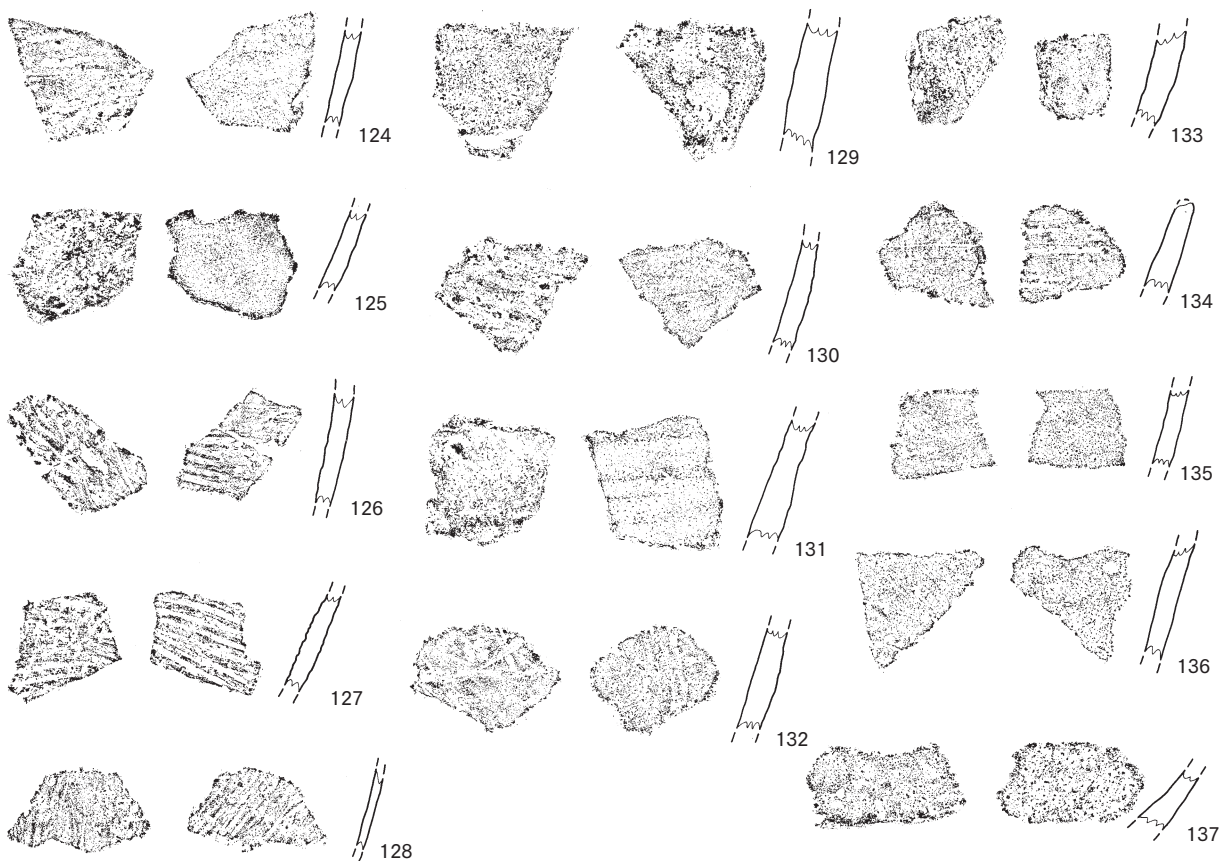
139～144は底部破片である。139は復元底径が10cm前後で、1/2ほど残存する。破面部より、粘土接合痕が明瞭に看取でき、丸底の底部に1cm程度の粘土を貼り付けて外側面は指整形する。断面



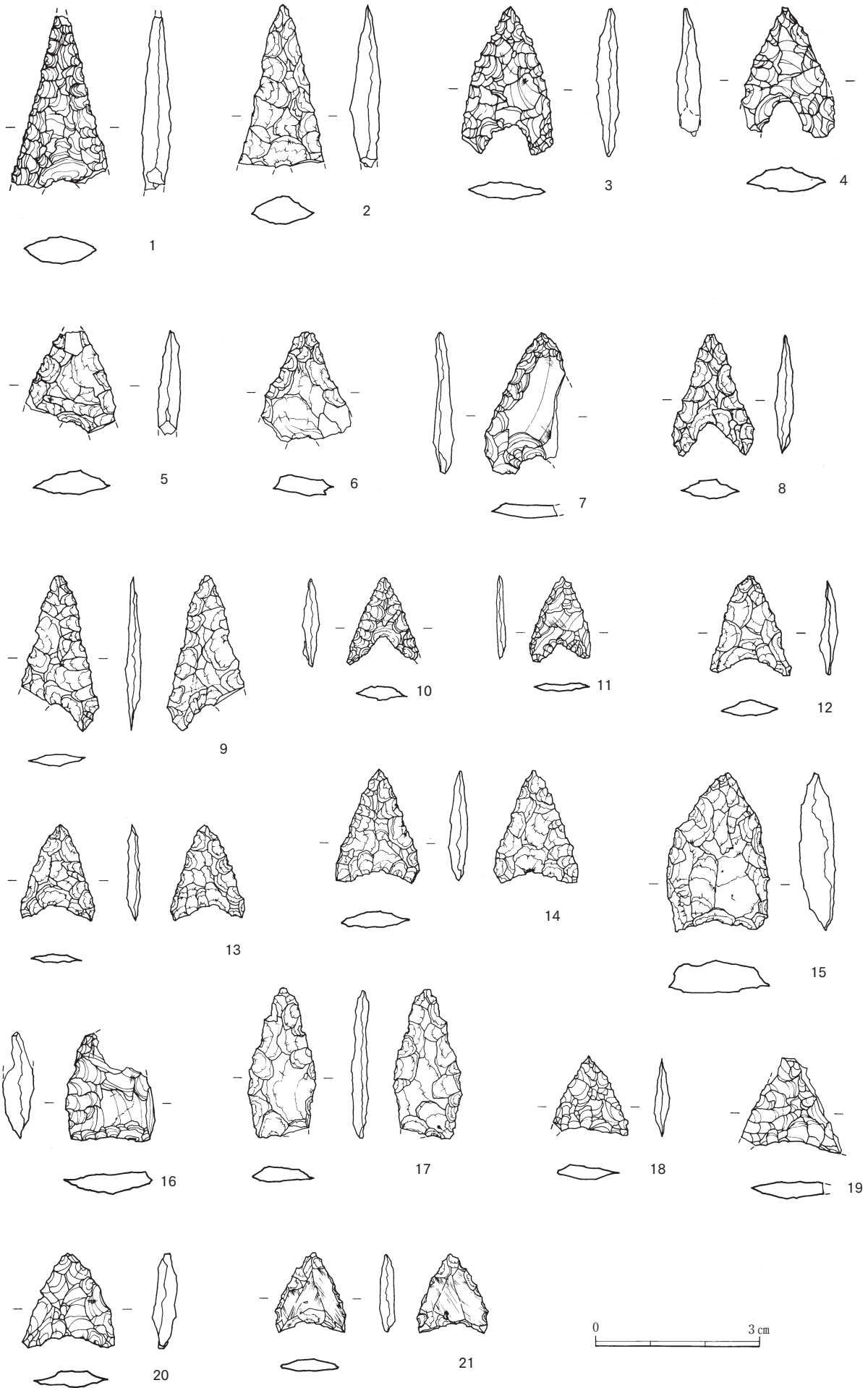
第 109 図 縄文土器実測図 6 (1/3)



第110図 縄文土器実測図7 (1/3)



第 111 図 縄文土器実測図 8 (145 : 1/2、その他 1/3)



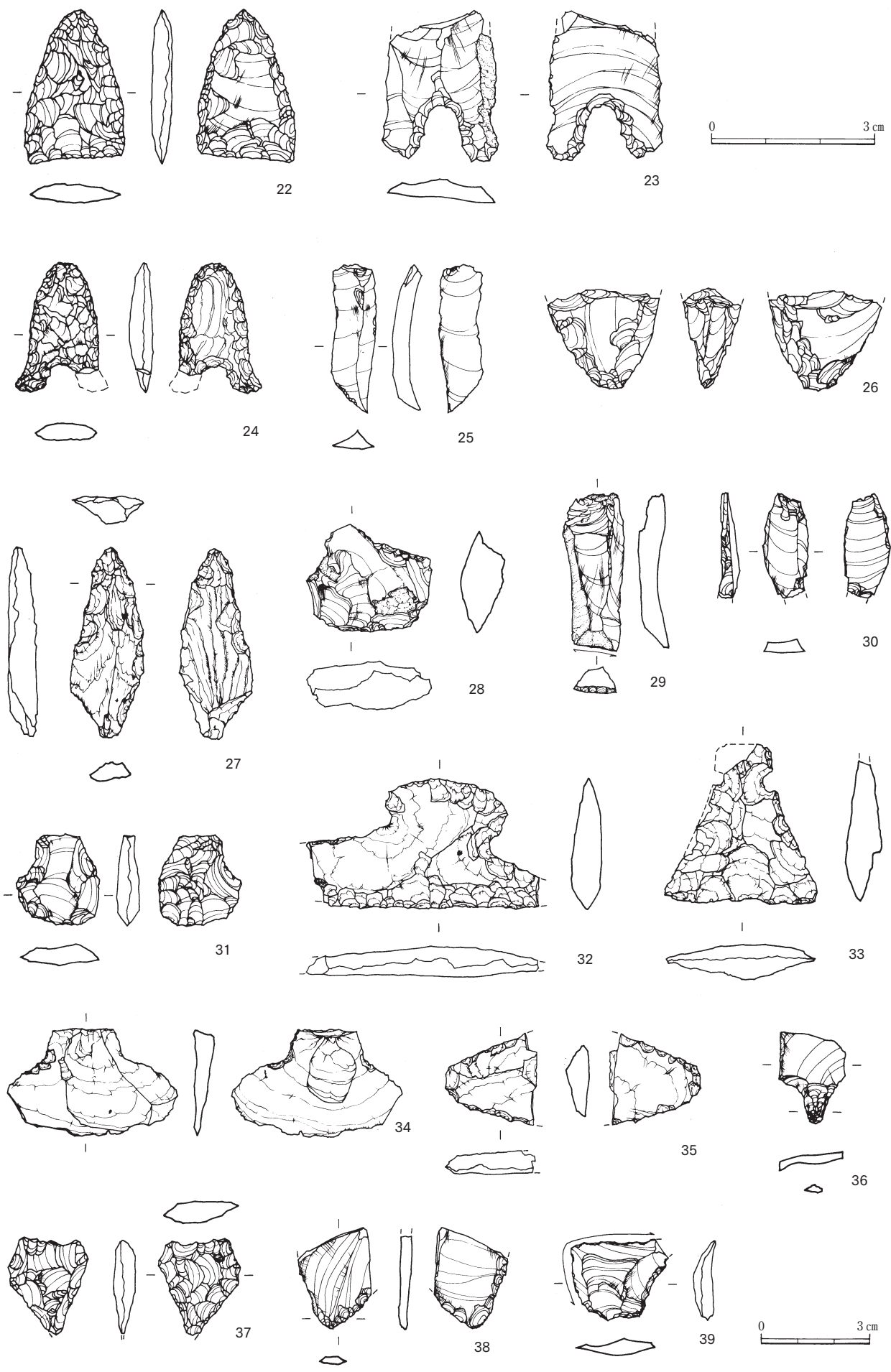
第 112 图 石器等实测图 1 (1/1)

は稜の甘い三角形となる。屈折部の指腹痕は接合時と整形時のものであろう。底面はほぼ平坦で、整形時に土器を回転させた時についてと思われる擦痕、拓本の破面側中央には石ズレ痕が明瞭に残る。布目痕等はない。底部内面は丁寧な撫でで仕上げる。140は接地部分より直接胴部方向へ伸びる器形を有す。外面には二枚貝条痕の後に撫でている。底面にも条痕が看取できる。復元底径は約9cmである。141は7割程残存する。体部への立ち上がりは端正で、約1.4cm幅位を工具撫で、その後撫でる。底面は平坦で丁寧な撫でで仕上げる。内面は若干の凹凸があるが割合丁寧な撫でである。142は復元底径が約11cm近くあり、約1/4残存する。これも破面部より、粘土接合痕が明瞭に看取でき、丸味を帯びた底部に1.5cm程度の粘土を貼り付けている。その後、整形しているものと思われる。139・143ともにそうだが、粘土円盤に粘土を継ぎ乗せて整形というより、貼り付けた感じをもつ。底面は若干踏ん張る形状を呈し、石ズリ痕を残す。内面は丁寧な撫でで仕上げる。布目痕はない。143は復元底径にやや自信をもてないが、外側面の破面部分は接合部より欠損している。外側面は指腹痕が残る。144は器壁の剥落が激しい。140と同様に接地面から胴部へ立ち上がる底部である。外面は撫で、底面には指腹痕が残る。内面にも指腹痕が残る。

土製品 (図版60、第111図45) 145は珍しい精製円盤状土製品で、土器片の流用品ではない。上面は撫で整形後に、円弧文と幾何学文を線刻し、下面も撫で整形後に棒状工具の側面で篋磨き風に調整を行なう。焼成は良く、最大径は4.3cm、厚さ0.55cmを測る。

6) 石器・石製品 (図版59・60、第112～118図)

第112図・113図22・23は石鏃。第113図1は腰岳系黒曜石製。身部が長い二等辺三角形を呈し、押圧剥離は表・裏面ともに奥部まで及ぶ。先端・脚部は欠損する。縄文時代早期の抉りの深い鍬形鏃であると推測される。2はサヌカイト製で、二等辺三角形に近い形状を呈し、左右脚部を欠損するが、基部はやや深い抉りを有していたと推測される。3は腰岳系黒曜石製。両側縁は弧状をなすが、二等辺三角形に近い形状を呈し、基部にやや深い抉入状の整形を行なう。右脚部を若干欠損する。4も腰岳系黒曜石製で、表・裏面の大部分に押圧剥離が及ぶが、若干素材の面が残る。左脚部を欠損し、先端はやや歪でリダクションしたと推察される。5は安山岩製で、先端及び左右の脚部を欠損するが、基部は若干の抉りを有している。6はサヌカイト製の石鏃。表・裏面ともに中央部に素材の面を残し、基部に浅い抉りを有する。左右の脚部を欠損する。7は腰岳系黒曜石製。加工は周縁部に限られ、裏面下端近くには素材の打瘤を除去するように押圧剥離がやや内部に及ぶ。基部には若干の抉りが見られ、右側縁及び脚部を欠損するが、逆ハート形に近い形状をしていたと考えられる。8はサヌカイト製。左右脚部は側縁から内湾する整形をし、基部は深い抉りを有する。先端を僅かに欠損する。9もサヌカイト製の石鏃。側縁からやや内湾する脚部を呈し、基部にやや深い抉りを形成する。左脚部を欠損する。10は姫島産黒曜石製で、基部に深い抉入状の整形を施す。左右脚部の長さが異なり、左側縁はリダクションしたと考えられる。11も腰岳系黒曜石製の石鏃。小形で二等辺三角形に近い形状を呈し、やや深い抉りを基部に入れる。右脚部を若干欠損する。12はサヌカイト製の石鏃。右脚部はやや内湾するように整形し、基部にやや深い抉りが入る。先端形状は歪で、リダクションの可能性が高い。13は安山岩製。脚部は浅い抉りを呈し、表・裏面ともに押圧剥離が内奥にまで及ぶ。14はサヌカイト製の石鏃。二等辺三角形に近い形状を呈し、基部に浅い抉りが入る。右脚部は若干欠損する。15は安山岩製。五角形に近い形状を呈し、基部に浅い抉りが入る。表・裏面ともに中央部に素材の面が残る。16は腰岳系黒曜石製の石鏃。左側縁の裏面



第 113 図 石器等実測図 2 (22 ~ 26 : 1/1、その他 2/3)

と右側縁の表面に加工が及んでおらず、尖端が加工途中で欠損したのに伴い、遺棄したものと考えられる未成品である。17はサヌカイト製。左脚を若干欠損しているが、殆ど挟りがなく、砲弾形に近い形状を呈する。表・裏面ともに中央部に素材面を若干残すが、大半に押圧剥離が及ぶ。18は腰岳系黒曜石製で、正三角形に近い形状を呈し、基部にごく浅い挟りを入れる。左脚部を若干欠損している。19も腰岳系黒曜石製。正三角形に近い形状を呈し、基部に浅い挟りを入れる。尖端左脚部・右側縁を欠損する。20も腰岳系黒曜石製で正三角形に近い形状を呈し、基部に浅い挟りを入れる。左右のバランス及び右側縁の形状がやや歪で、リダクションを行なった可能性が高い。21はサヌカイト製の磨製石鏃。正三角形に近い形状を呈し、基部に浅い挟りが入る。表・裏面に研磨整形を施した後、周縁部に細かな加工を行なう。第114図22は腰岳系黒曜石製で、五角形に近い形状を呈し、基部の挟りは浅い。表面は中央部まで押圧剥離が及ぶが、裏面は素材面が大きく残る。表面右側縁の尖端近くには若干の欠損が認められ、尖端は形状の歪さからリダクションにより再生した可能性が高い。同23は腰岳系黒曜石製の剥片鏃。縦長に近い剥片を素材として打面側を脚部に設定し、脚部の周縁部に深い挟りを入れるように整形する。欠損しているが周縁に加工を施して尖端を作り出していたと推測される。

第114図24は白色の地に黒色の縞の入るチャート製のトロトロ石器。全面への押圧剥離と、周縁への微細な調整によって整形する。表・裏面に磨痕が認められる。

25は腰岳系黒曜石製の細石刃。上端を切断して形成し、切断面には微細な剥離痕が認められ、左右側縁にも使用痕が見られる。

26は腰岳系黒曜石製の船底形細石核。やや厚めの剥片を素材としており、左側縁付近に石核調整を施した後、素材の打面部に複数の剥離を施して打面を形成している。右側縁に小口状の作業面を形作って少なくとも4枚以上の細石刃を剥取している。

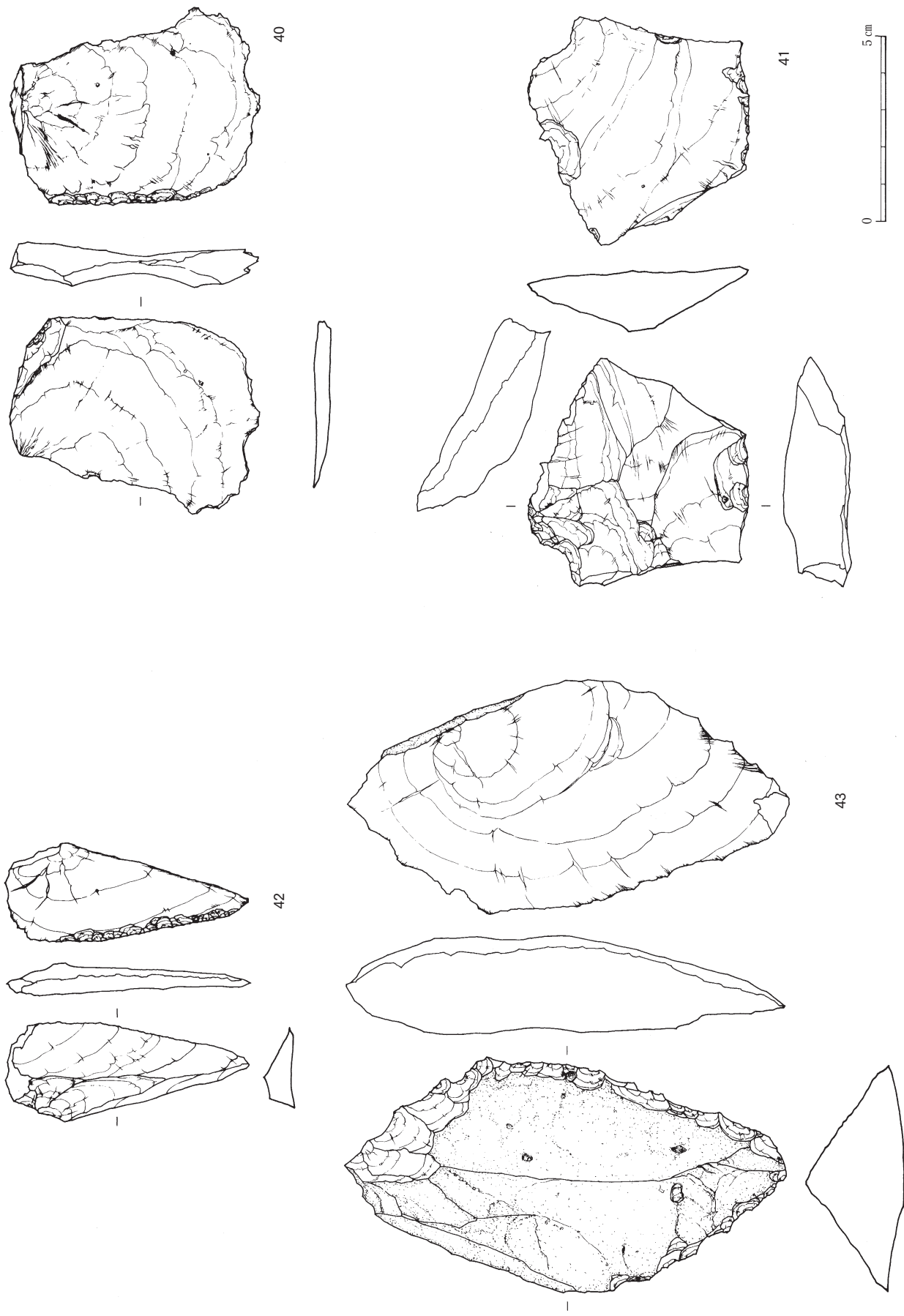
27はガラス質安山岩製の槍先形尖頭器未成品。左右側縁への角度の浅い加工により尖端を作り出す。尖端は潰れが認められる。

28は腰岳系黒曜石製の鑿状石器だと考えられる。表・裏面に大柄で平坦な加工を施して大まかな整形をした後、周縁部に小振りな調整により整形および下端に刃部形成を行なう。上半の欠損後、折れ面付近に再利用によると考えられる剥離痕が認められる。

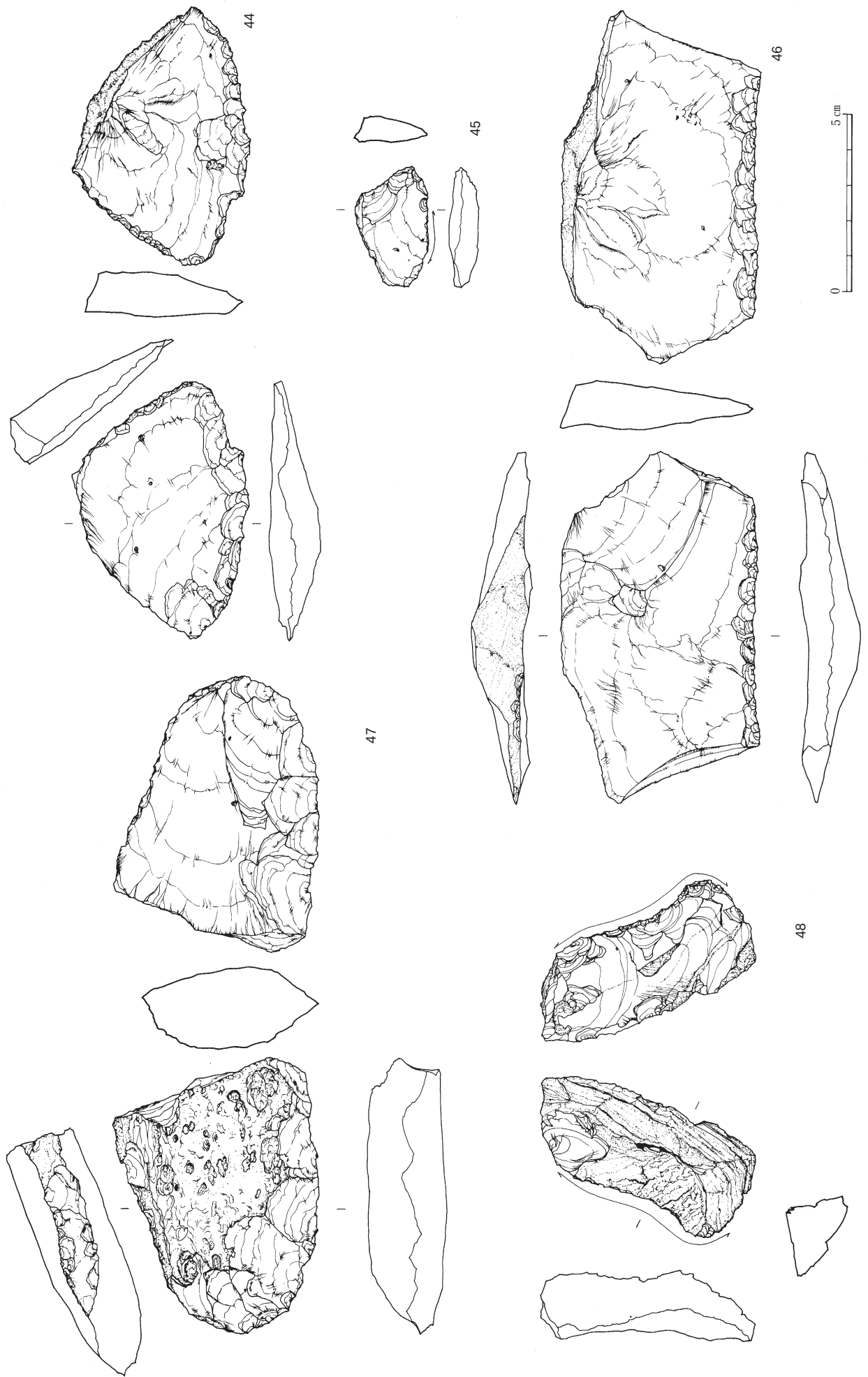
29は腰岳系黒曜石製の搔器。打面と背面に礫面を残す縦長剥片を素材とし、末端に細かく急斜度な加工を施して刃部を形成する。

30は腰岳系黒曜石製の彫器。自然面打面から剥離された縦長剥片を素材とし、素材末端の切断面から2回の槌状剥離によって彫刀面を形成しており、彫刀面の上端付近に使用による微細な剥離痕が認められる。

31は腰岳系黒曜石製の石匙。表面は部分的だが、裏面はほぼ全面に押圧剥離が及ぶ。右側縁から下端にかけて使用痕が認められる。32は多久産と考えられるサヌカイト製の横形の石匙。周縁部のみに表・裏面から加工を施して整形する。刃部とつまみ上端部を丁寧に仕上げる。左右の端部を欠損する。33も多久産と考えられるサヌカイト製の石匙。表・裏面ともに押圧剥離が内奥まで及び、左右側縁の上端近くに挟入状の加工を施す。つまみ部を形成するが若干欠損する。下端刃部の使用痕が顕著である。34はサヌカイト製の石匙。幅広剥片を素材とし、左右側縁上端近くに挟入状の整形を施し、末端部縁辺には使用痕が顕著に認められる。35は金山産と考えられるサヌカイト製の石匙。周縁部にのみ表・裏面から加工を施して整形・刃部形成を行なう。右半を欠損する。



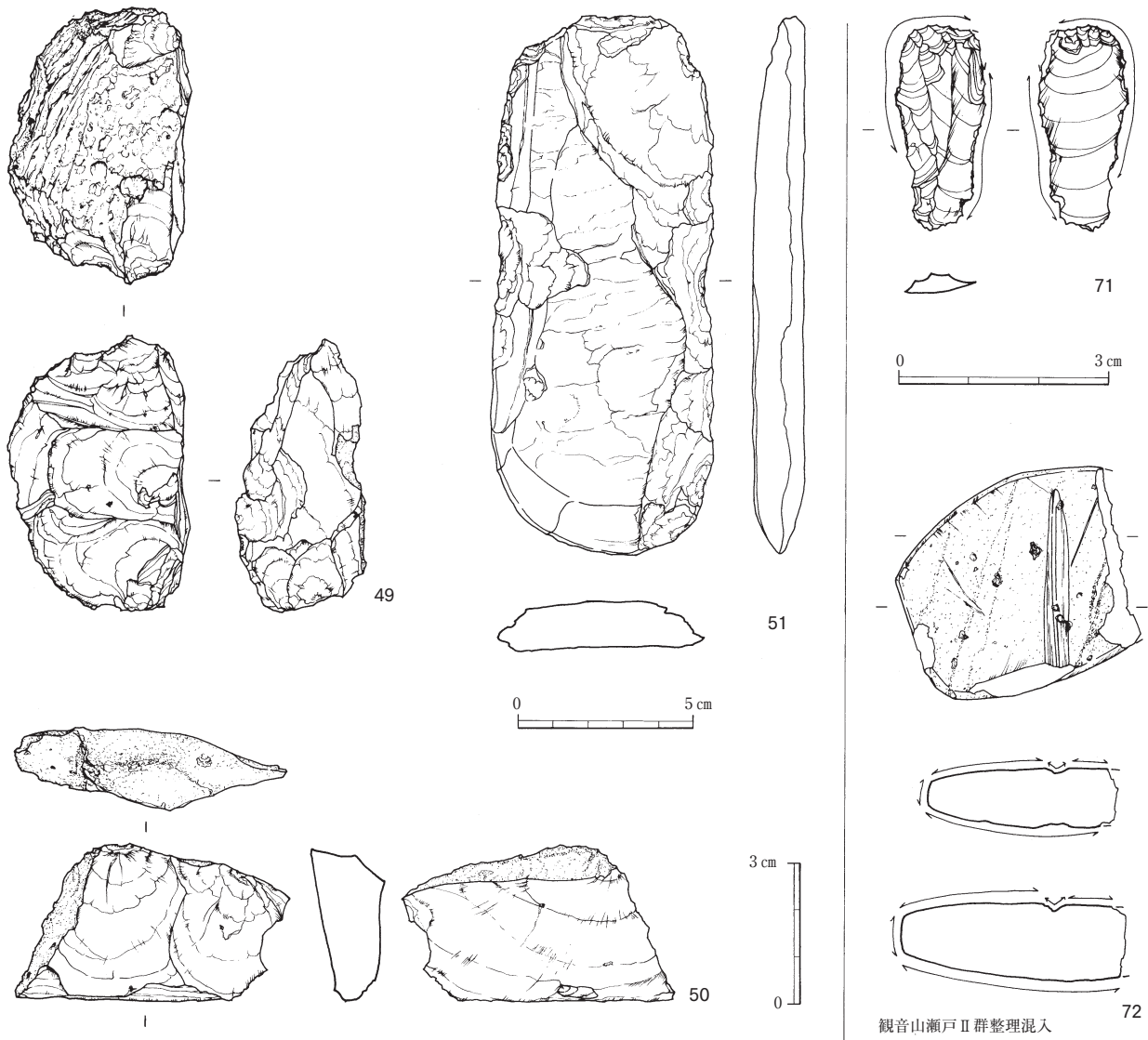
第 114 图 石器等实测图 3 (2/3)



第 115 图 石器等实测图 4 (2/3)

36～39は腰岳系黒曜石製の石錐。36は半欠損した幅広剥片を素材とし、右側縁は折断、左側縁は下端からの槌状に近い剥離によって先端を作り出す。上端には装着によると考えられる微細な剥離が認められ、先端は使用による折れと剥落が見られる。37は石鏃をリダクションしたと考えられ、先端作り出しのために周縁部に再加工する。機能部は下端と左側縁上端の2か所である。38は幅広剥片の末端部(=周世の上端)を折断後、右側縁は腹面から、左側縁には表・裏面から浅い角度の加工を施して先端を形成する。先端裏面には槌状の使用痕が観察される。右側縁上半を欠損する。39は幅広剥片を素材とし、左側縁から上端左半では腹面から、上端右半では背面から加工を施し、上端中央に先端を作り出している。先端は使用により若干欠損し、右側縁には微細な剥離痕が認められる。

第114図40は安山岩製の削器。縦長状剥片を素材とし、右側縁に背面から加工を施して刃部を形成する。41はサヌカイト製の大型削器。大型の幅広剥片を素材とし、下端部に背面から抉入状の二次加工を施し、刃部を形成する。刃部付近に使用によると考えられる微細な使用痕、裏面に剥落が、上端に装着によると推測される微細な剥離痕が認められる。42は多久産と考えられるサヌカイト製の削器。幅広剥片を素材とし、右側縁に背面側から加工を施し、スクレーパーエッジを形成する。



第116図 石器等実測図5 (51:1/2、71:1/1、その他2/3)

43は背面全面に自然面を残す大形の幅広剥片を素材とする多久産サヌカイト製の尖頭状石器。腹面からの加工によって整形する。

第115図44は金山産と考えられるサヌカイト製の削器。自然打面から剥離された幅広剥片を素材とし、末端及び右側縁に表・裏面から加工を施して刃部を形成する。顕著な使用痕が認められる。45は多久産と考えられるサヌカイト製の削器。自然面を打面とする幅広剥片を素材とし、末端に加工を施して刃部を形成する。使用痕が顕著である。46もサヌカイト製の削器。複剥離打面から剥離された横長剥片を素材とする。左右側縁を折断した後、末端に表・裏面から加工を施しスクレーパーエッジを形成する。上端に装着によると考えられる微細な剥離痕が認められる。47は多久産と考えられるサヌカイト製の大形削器。背面全面に礫面の残る大形剥片を素材とし、下端部に交互剥離状の割合大柄な加工により刃部を形成する。刃部に使用痕が、上端に装着によると考えられる剥離痕が認められ、右半を欠損する。48は腰岳系黒曜石製の削器。背面の大部分に自然面が残る石核調整のための大形剥片を素材とし、左右側縁に背面から二次加工を施して、刃部を形成する。両側縁ともに使用痕が顕著である。

第116図49は多久産と考えられるサヌカイト製の石核。右側面を作業面として、下端及び左側面から剥離→正面を最終作業面として、複剥離の裏面を打面として幅広剥片1枚を剥離→その後、遺棄している。

50は多久産と考えられるサヌカイト製の幅広剥片。打面と左側縁は全面自然面が残る。右側縁を若干欠損する。

51は緑泥片岩製の部分磨製石斧。背面の大部分に礫面が残る平坦な大形剥片を素材とし、主に周縁部に表・裏面から加工を施して整形した後、末端部を研磨して刃部を形成する。また、斧身中央部には抉入状の整形が認められる。

第117図52は蛇紋岩製の磨製石斧。表・裏面の大部分に研磨が及ぶが、若干の磨き残しも認められる。また左・右側面に敲打による整形の痕が認められる。

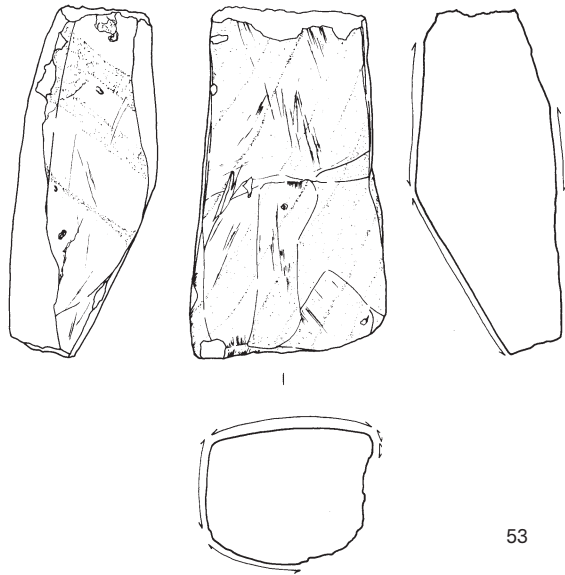
53は天草石製の砥石。正面のみを機能面とし、左・右側縁・裏面を研磨整形するが、左側面・裏面は部分的である。また、上・下端は欠損している。

54は凝灰岩製の礫器。扁平な自然礫を素材とし、下端に表・裏面から大柄な加工を施して両刃を形成している。刃部には使用によると考えられる細かな剥離痕が認められる。55は安山岩製の礫器。背面の大部分に自然面が残る分割礫の腹面に数回の加工を施して平坦化した後、下端付近の周縁に腹面から大柄な加工行ない、整形後に下端右半に小振りな加工で刃部を形成する。刃部表面には微細な使用痕が、裏面には使用による剥落が認められる。

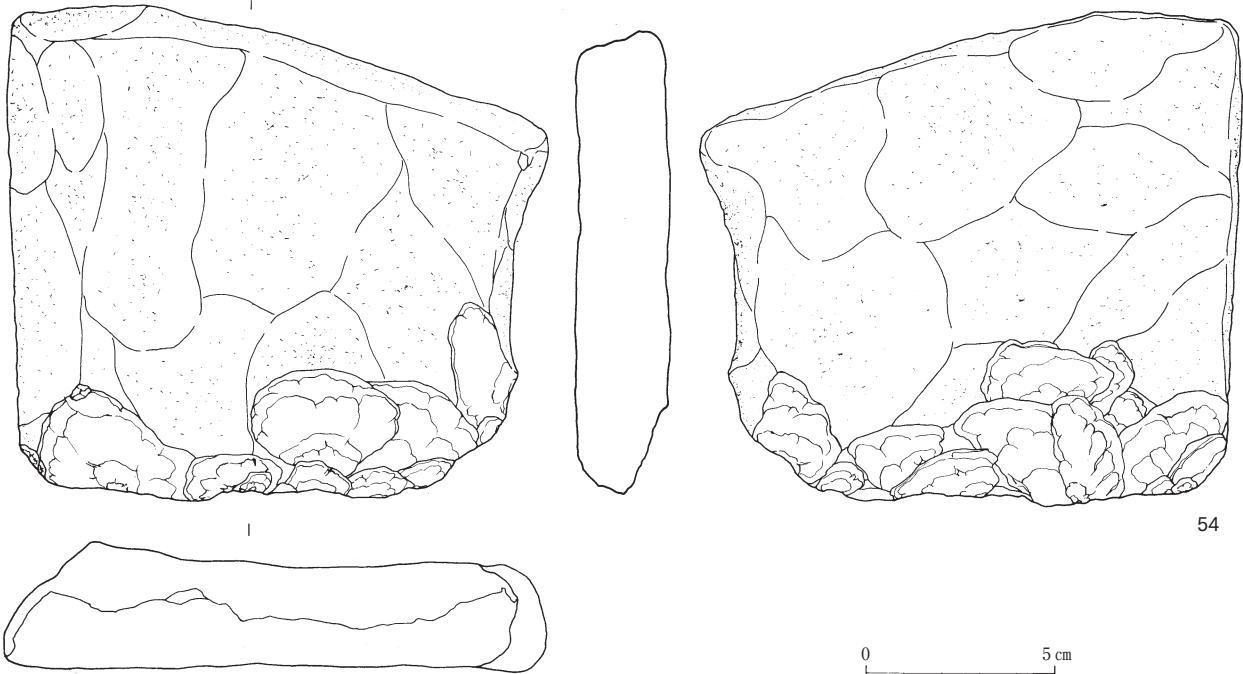
第118図56は腰岳系黒曜石製の使用痕剥片。頭部調整の顕著な縦長に近い剥片を用い、主に左側縁に使用痕が認められる。57も腰岳系黒曜石製の使用痕剥片。縦長状の剥片を用い、右側縁から末端部にかけて使用痕が認められる。58も腰岳系黒曜石製の使用痕剥片で、若干の頭部調整が認められ、連続的に剥離された末端部のやや厚い縦長剥片を用いる。右側縁に微細な使用痕が見られる。59は安山岩製の使用痕剥片。自然面打面の幅広剥片を用い、鋭い縁辺の全縁に使用痕が認められる。60はサヌカイト製の使用痕剥片。頭部調整が若干認められる縦長状の剥片を用い、右側縁下半に使用痕が認められる。61もサヌカイト製の使用痕剥片。自然面打面から剥離された幅広剥片を用いる。左右側縁部には使用痕が認められる。62は腰岳系黒曜石製の単剥離打面から連続的に剥取されたと考えられる縦長剥片。63は針尾系黒曜石製の複剥離打面から剥出された縦長状



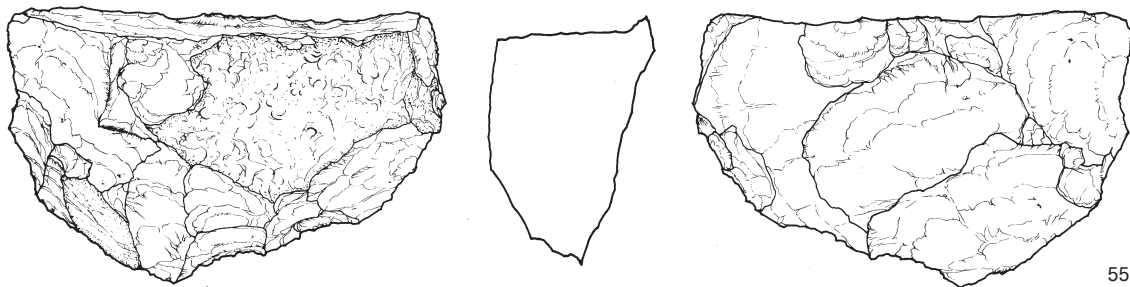
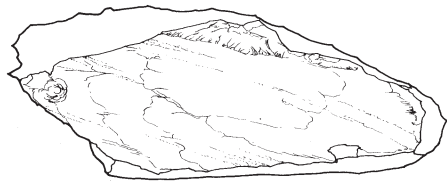
52



53



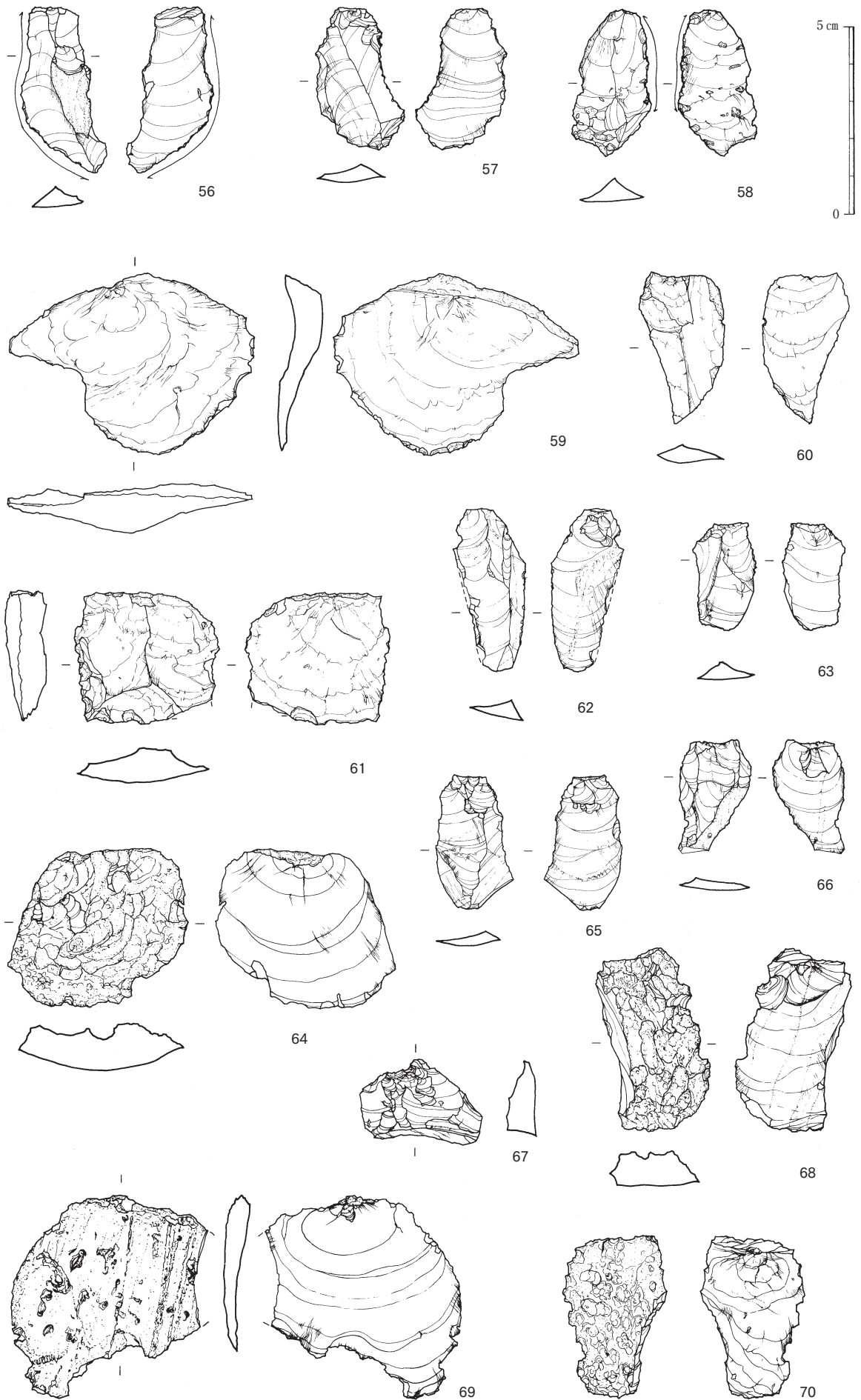
54



55



第117図 石器等実測図6 (55: 2/3、その他 1/2)



第 118 图 石器等实测图 7 (2/3)

の剥片。64は背面と打面全面に礫面が残る針尾系黒曜石製の石核調整剥片。65は腰岳系黒曜石製の縦長剥片。頭部調整が顕著で、右末端部を若干欠損する。66は腰岳系黒曜石製の自然面打面から剥離された剥片。右側縁にも自然面を残す。67は腰岳系黒曜石製の単剥離打面から剥取された幅広剥片。頭部調整が顕著である。68は腰岳系黒曜石製の石核調整剥片。背面の大部分には礫面が残る。69は腰岳系黒曜石製の石核調整剥片。自然面打面から剥取され、背面全面に礫面が残る。70は針尾系黒曜石製の石核調整剥片。打面は剥離面だが、背面は全面礫面である。

所属時期 本遺跡からは、縄文時代早期と晩期の土器が検出されており、殆どの石器が両時期いずれかの所産と推察される。但し、少なくとも細石核、細石刃、磨製石斧、槍先形尖頭器に関しては、縄文時代草創期に所属させるのが妥当だと考えられるが、当該期の土器は出土していない。

残る石器の所属時期であるが、九州北部の他遺跡の様相からすると、鋏形鎌、トロトロ石器、礫器、石匙、定形的な石錐（第113図36）については縄文時代早期に、五角形鎌、剥片鎌、素材剥片の縁辺の一部に簡易な二次加工を施して先端を作り出すだけの石錐（第113図37・38）は縄文時代晩期に属すると考えられる。

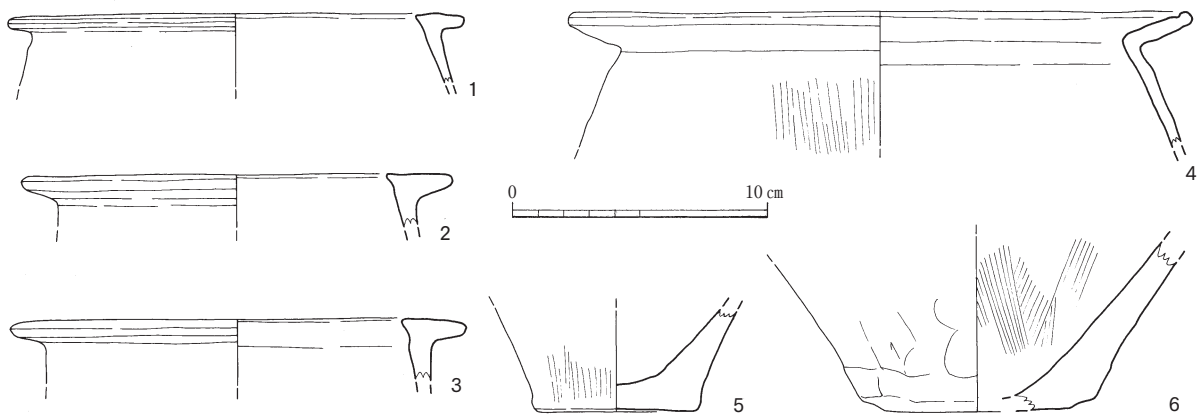
石材利用と製作状況 剥片石器の大半は、腰岳系黒曜石—少なくとも、腰岳産・牟田産があると思われる—とサヌカイト—殆どが多久産と推測される—を主要石材としており、両石材のみが石核ないしは原石レベルで遺跡内に搬入されており、大半の器種の石器製作が盛んに為されている。

針尾系黒曜石・安山岩・ガラス質安山岩に関しては剥片レベルで持ち込まれ、若干の製作が看取される。そのうち、針尾系黒曜石では石鎌は製作されておらず、搔器・石錐の製作に限られる。安山岩では、石鎌・削器が製作されており、使用痕剥片にも用いる。ガラス質安山岩では、石鎌と草創期の槍先形尖頭器が製作されているが、いずれも未成品で、製品は残されていない。

姫島産黒曜石・象ヶ鼻産黒曜石・金山産サヌカイト・チャート・鉄石英は製品搬入品のみである。そのうち姫島産黒曜石は石鎌であり、象ヶ鼻産黒曜石・金山産サヌカイトは削器、鉄石英は使用痕剥片であり、チャートはトロトロ石器特有の黒と白の縞を有するものである。

礫石器については、磨製石斧・凝灰岩製の礫器については搬入品であるが、礫器については安山岩製の遺跡内で製作されているようである。

まとめると、剥片石器は非在地の良質の腰岳系黒曜石と多久産サヌカイトで製作しており、あまり良質でない安山岩は剥片石器・礫石器の両者が製作されている。



第119図 弥生土器実測図 (1/3)

表3-1 縄文土器観察表

挿図番号	遺物番号	登録番号	出土遺構	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	胎土	残存部位
第104図	1	J-3	黄褐色土	山形文	山形文	黄茶色	灰色	細砂粒	口縁部
	2	140	表採	山形文	山形文・撫で	灰黒色	灰黄色	細砂粒	口縁部
	3	75	黄褐色土	細楕円文	細楕円文	黄茶褐色	茶褐色	細砂粒	口縁部
	4	32+43	6・7号墳墓道	楕円文	楕円文	茶褐色	暗茶褐色	細砂粒	口縁部
	5	14	黄褐色土	山形文	山形文	黄茶色	灰茶色	細砂粒	口縁部
	6	16	3・4号墳表土	山形文	山形文	黄茶色	黄茶褐色	細砂粒	体部
	7	22	4号墳周溝	鈍角山形文	鈍角山形文	暗黄茶色	暗黄茶色	細砂粒	口縁部
	8	84	黄褐色土	鈍角山形文	撫で	黄茶褐色	暗黄茶色	細砂粒	体部
	9	87	黄褐色土	山形文・撫で	山形文	灰黄褐色	灰黄褐色	細砂粒	口縁部～胴部
	10	11	黄褐色土	山形文	撫で	明灰黄色	明灰黄色	細砂粒	体部
	11	28	5号墳黒色土	山形文	撫で	明灰黄色	明灰黄色	細砂粒	体部
	12	30	5・6号墳表土	山形文	撫で	明灰黄色	明灰黄色	細砂粒	体部
	13	95	A1Gr黄褐色土	山形文	撫で	灰黄色	灰黄色	細砂粒	体部
	14	94	A1Gr黄褐色土	山形文	撫で	灰黄色	灰黄色	細砂粒	体部
	15	97	A1Gr黄褐色土	山形文	撫で	灰黄褐色	灰黄色	細砂粒	体部
	16	148+93+100	A1Gr黄褐色土	山形文	撫で	灰黄色	灰黄色	砂粒	胴部下半
	17	39	7号墳集石中	楕円文・撫で	楕円文・撫で	暗茶褐色	暗茶褐色	砂粒	体部
	18	9	黄褐色土	山形文	撫で	黄茶色	黄茶色	細砂粒	体部
第105図	19	90	表採	楕円文	楕円文・原条	淡黄褐色	淡黄褐色	細砂粒	口縁部
	20	114	A2Gr黄褐色土	楕円文	楕円文・原条	灰黄色	灰黄色	細砂粒	口縁部
	21	8	3号墳表土	楕円文	原体条痕	黄橙色	黄橙色	細砂粒	口縁部
	22	19	4号墳盛土	楕円文	撫で	茶褐色	茶褐色	細砂粒	体部
	23	42	7号墳東Tr	楕円文	撫で	黄橙色	黄橙色	細砂粒	体部
	24	38	7号墳Tr	楕円文	撫で	黄橙褐色	黄橙褐色	細砂粒	体部
	25	37	7号墳東Tr	楕円文	撫で	黄橙褐色	黄橙褐色	細砂粒	体部
	26	133	B2Gr黄褐色土	大粒楕円文	原体条痕	こげ茶色	灰黄色	細砂粒	口縁部
	27	129	B1Gr黄褐色土	大粒楕円文	原体条痕	灰黄色	灰黄色	細砂粒	口縁部
	28	131+117	B1Gr黄褐色土	大粒楕円文	撫で・原条	淡黄色	淡黄色	細砂粒	体部
	29	134	B2Gr黄褐色土	大粒楕円文	撫で	灰黄色	灰黄色	細砂粒	体部
	30	98	黄褐色土	大粒楕円文	撫で	灰黄褐色	灰黄褐色	細砂粒	体部
	31	112	A2Gr黄褐色土	大粒楕円文	撫で	灰黄色	灰黄色	細砂粒	体部
	32	5	3号墳ベルト	大粒楕円文	撫で	灰黄茶色	灰黄茶色	細砂粒	体部
	33	1	2・3号墳表土	大粒楕円文	撫で	灰黄褐色	灰黄色	細砂粒	体部
	34	108	A1Gr黄褐色土	大粒楕円文	撫で	灰黄色	灰黄色	細砂粒	体部
	35	111	A2Gr黄褐色土	大粒楕円文	撫で	灰黄色	灰黄色	細砂粒	体部
	36	107	A1Gr黄褐色土	大粒楕円文	撫で	黄褐色	暗灰黄色	細砂粒	体部
	37	113	A2Gr黄褐色土	大粒楕円文	撫で	黄褐色	こげ茶色	砂粒	体部
	38	2	2号墳墓道	大粒楕円文	撫で	暗灰色	灰黄褐色	細砂粒	体部
	39	4	2号墳墓道	大粒楕円文	撫で	灰黄褐色	黄茶色	細砂粒	体部
	40	130	B1Gr黄褐色土	大粒楕円文	撫で	こげ茶色	灰黄色	砂粒	体部
	41	3	2号墳墓道	大粒楕円文	撫で	こげ茶色	こげ茶色	細砂粒	体部
	42	132	B2Gr黄褐色土	大粒楕円文	撫で	暗灰黄色	暗灰黄色	砂粒	底部
第106図	43	109	A1Gr黄褐色土	楕円文	原体条痕	灰黄褐色	灰黄褐色	細砂粒	口縁部
	44	101	A1Gr黄褐色土	楕円文	撫で・原条	黄茶褐色	黄茶褐色	細砂粒	口縁部付近
	45	127	P29	楕円文	撫で	灰黄色	灰黄色	細砂粒	体部
	46	115	A2Gr黄褐色土	楕円文	撫で	こげ茶色	こげ茶色	細砂粒	体部
	47	88	黄褐色土	山形文?・撫	撫で	茶褐色	茶褐色	細砂粒	底部
	48	121	P19	横方向磨き	横方向磨き	灰黄色	灰黄色	細砂粒	口縁部

※ Grは包含層調査区の一部で5×5mのグリッドに分けて取り上げたもの(第6図参照)

表3-2 縄文土器観察表

挿図番号	遺物番号	登録番号	出土遺構	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	胎土	残存部位
第106図	49	120+141	P18	横方向磨き	横方向磨き	暗灰黄色	暗灰黄色	細砂粒	頸部～胴部
	50	147	黄褐色土	横方向磨き	横方向磨き	暗灰黄色	暗灰黄色	細砂粒	頸部～胴部
	51	146	黄褐色土	横方向磨き	横方向磨き	灰黄色	灰黄色	細砂粒	頸部～胴部
	52	151	5号 Tr	撫で	撫で	こげ茶色	こげ茶色	砂粒	頸部～胴部
	53	41+83	7・9号墳検出	撫で	撫で	黄茶色	茶褐色	細砂粒	頸部～胴部
	54	58	9号墳検出	撫で	撫で	灰黄褐色	暗茶褐色	砂粒	頸部～胴部
	55	60	9号墳検出	撫で	撫で	暗黄茶色	黒褐色	細砂粒	体部
	56	116	A2Gr 黄褐色土	横方向磨き	横方向磨き	こげ茶色	こげ茶色	細砂粒	口縁部～胴部
	57	44	8号墳盛土	横方向磨き	横方向磨き	黄土色	黄土色	細砂粒	体部
	58	23	4号墳周溝	磨き	削り	黄茶色	黒褐色	細砂粒	口縁部
59	J-1	A1Gr 黄褐色土	横方向磨き	横方向磨き	こげ茶色	こげ茶色	細砂粒	口縁部	
第107図	60	152	試掘	削り→撫で	撫で	灰黄色	灰黄色	砂粒	口縁部
	61	56	9号墳検出	撫で	撫で	茶褐色	黄土色	砂粒	口縁部
	62	70	9号墳表土	撫で	撫で	茶褐色	灰黄褐色	砂粒	口縁部
	63	145	黄褐色土	撫で	二枚貝条痕	灰黒色	灰黒色	砂粒	口縁部
	64	144	表採	撫で	撫で	濃灰色	濃灰色	砂粒	口縁部
	65	34	6号墳墓道	撫で	撫で	黄茶色	黄茶色	砂粒	口縁部
	66	64	9号墳検出	撫で	撫で	暗黄茶色	灰黒色	細砂粒	口縁部
	67	24	4号墳北 Tr	二枚貝条痕	撫で	灰黄褐色	灰黄褐色	砂粒	口縁部
	68	7	3号墳南 Tr	二枚貝条痕	撫で	黄茶色	灰黄茶色	細砂粒	口縁部
	69	119	P15	撫で	撫で	灰黄色	灰黄色	細砂粒	口縁部
	70	128	P 33	荒い撫で	撫で	灰黄色	灰黄色	細砂粒	口縁部
	71	138	C2Gr 黄褐色土	撫で	撫で	茶褐色	茶褐色	砂粒	口縁部
	72	18	4号墳盛土	撫で	撫で	黄茶褐色	黄茶褐色	砂粒	口縁部
	73	139	B2Gr 黄褐色土	撫で	撫で	灰黄色	灰黄色	砂粒	口縁部
74	102	A1Gr 黄褐色土	二枚貝条痕	二枚貝条痕	暗黄褐色	暗黄褐色	細砂粒	口縁部	
第108図	75	493	南端礫群土器3	荒い磨き	荒い磨き	茶色	褐色	細砂粒	口縁部
第109図	76	35	6・7号墳表土	撫で	撫で	茶褐色	茶褐色	細砂粒	肩部
	77	72	9号墳表採	撫で	撫で	灰黄褐色	暗黄茶色	細砂粒	体部
	78	52	9号墳検出	撫で	撫で	灰黄褐色	暗黄茶色	細砂粒	胴部下半
	79	122	P 22	削り状	撫で	灰茶色	灰茶色	砂粒	体部
	80	124	P 22	削り状	撫で	灰黄褐色	灰黄褐色	砂粒	口縁部
	81	123	P 22	削り状	撫で	灰茶色	灰茶色	砂粒	体部
	82	73	9号墳表土	撫で	撫で	暗黄茶色	黒灰色	細砂粒	体部
	83	65	9号墳検出	撫で	撫で	暗黄茶色	黒灰色	細砂粒	体部
	84	76	9号墳北西集石	二枚貝条痕	撫で	茶褐色	茶褐色	細砂粒	体部
	85	78	9号墳北西集石	二枚貝条痕	撫で	茶褐色	茶褐色	細砂粒	体部
	86	31	5・6号墳周溝	撫で	撫で	黄茶褐色	暗黄茶褐色	細砂粒	体部
	87	50	9号墳検出	二枚貝条痕	撫で	灰黄褐色	灰黄色	細砂粒	体部
	88	49	9号墳検出	二枚貝条痕	撫で	黄茶色	黄茶色	細砂粒	体部
	89	40	7号墳北西集石	二枚貝条痕	撫で	黄橙色	黄橙色	細砂粒	体部
	90	77	9号墳北西集石	二枚貝条痕	撫で	橙褐色	橙褐色	細砂粒	体部
	91	54	9号墳検出	二枚貝条痕	撫で	灰黄褐色	灰黄褐色	細砂粒	体部
	92	69	9号墳検出	撫で	撫で	暗黄茶色	暗黄茶色	細砂粒	体部
	93	36	7号墳北西集石	二枚貝条痕	二枚貝条痕	灰黄色	灰黄色	細砂粒	体部
	94	33	6号墳盛土	二枚貝条痕	二枚貝条痕	灰黄褐色	暗灰色	細砂粒	体部
	95	46	8号墳盛土	撫で	撫で	茶褐色	茶褐色	細砂粒	体部
96	85	黄褐色土	二枚貝条痕	二枚貝条痕	茶褐色	茶褐色	細砂粒	体部	

表3-3 縄文土器観察表

挿図番号	遺物番号	登録番号	出土遺構	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	胎土	残存部位
第110図	97	17	4号墳盛土	二枚貝条痕	撫で	暗灰色	暗黄茶褐色	細砂粒	体部
	98	20	4号墳盛土	二枚貝条痕	撫で	黄茶褐色	黄茶褐色	細砂粒	体部
	99	118	P15	二枚貝条痕	二枚貝条痕	灰黄色	灰黄色	細砂粒	体部
	100	48	8号墳表土	撫で	削り	灰黄褐色	灰黄褐色	細砂粒	体部
	101	142	南端礫群土器3	荒い磨き	撫で	灰黄褐色	灰黄褐色	砂粒	体部
	102	81	9号墳西 Tr	二枚貝条痕	撫で	灰黄褐色	灰黄褐色	砂粒	体部
	103	91	黄褐色土	二枚貝条痕	二枚貝条痕	灰黄褐色	灰黄褐色	細砂粒	体部
	104	126	P27	二枚貝条痕	撫で	灰黄こげ茶色	灰黄こげ茶色	砂粒	体部
	105	57	9号墳検出	撫で	撫で	灰黄褐色	灰黄褐色	細砂粒	体部
	106	25	表採	撫で	撫で	暗茶褐色	茶褐色	細砂粒	体部
	107	21	4号墳北周溝	二枚貝条痕	撫で	黄茶褐色	黄茶褐色	細砂粒	体部
	108	61	9号墳検出	撫で	撫で	灰黄褐色	灰黄褐色	砂粒	体部
	109	55	9号墳検出	二枚貝条痕	撫で	灰黄褐色	茶褐色	細砂粒	体部
	110	104	A1Gr黄褐色土	弱い削り	二枚貝条痕	灰黄褐色	灰黄褐色	砂粒	体部
	111	53	9号墳検出	撫で	撫で	灰黄褐色	灰黄褐色	細砂粒	体部
	112	67	9号墳検出	撫で	撫で	灰黄褐色	灰黄褐色	細砂粒	体部
	113	74	黄褐色土	二枚貝条痕	撫で	茶褐色	暗黄茶色	細砂粒	体部
	114	125	P23	二枚貝条痕	撫で	灰黄色	灰黄色	細砂粒	体部
	115	105	A1Gr黄褐色土	撫で	撫で	灰黄褐色	灰黄褐色	細砂粒	体部
	116	96	黄褐色土	二枚貝条痕	撫で	灰黄褐色	暗黄茶褐色	細砂粒	体部
	117	92	A1Gr黄褐色土	二枚貝条痕	二枚貝条痕	灰黄褐色	灰黄褐色	細砂粒	体部
	118	86	黄褐色土	二枚貝条痕	撫で	暗灰黄褐色	暗灰黄褐色	細砂粒	体部
	119	27	5号墳盛土	二枚貝条痕	撫で	灰黄褐色	灰黄褐色	砂粒	体部
120	82	9号墳西 Tr	二枚貝条痕	撫で	灰黄褐色	灰黄褐色	細砂粒	体部	
121	6	3号墳南 Tr	撫で	撫で	暗黄茶褐色	暗黄茶褐色	細砂粒	体部	
122	68	9号墳検出	二枚貝条痕	二枚貝条痕	灰黄褐色	灰黄褐色	砂粒	体部	
123	63	9号墳検出	撫で	撫で	黄橙色	灰黄褐色	細砂粒	体部	
第111図	124	71	表採	撫で	撫で	灰黄褐色	暗灰黄褐色	細砂粒	体部
	125	13	黄褐色土	器壁荒れ	撫で	暗黄茶褐色	暗黄茶褐色	細砂粒	体部
	126	106	A1Gr黄褐色土	削り	二枚貝条痕	灰黄褐色	灰黄褐色	砂粒	体部
	127	26	表採	二枚貝条痕	二枚貝条痕	黒灰色	暗黄茶褐色	細砂粒	体部
	128	110	A1Gr黄褐色土	二枚貝条痕	二枚貝条痕	灰黄褐色	灰黄褐色	細砂粒	体部
	129	103	A1Gr黄褐色土	撫で	撫で	灰黄茶色	灰黄茶色	細砂粒	体部
	130	51	9号墳検出	二枚貝条痕	撫で	茶褐色	黄橙色	細砂粒	体部
	131	10	黄褐色土	撫で	撫で	黄茶色	暗茶褐色	細砂粒	体部
	132	79	9号墳盛土	撫で	撫で	暗黄茶色	黒褐色	細砂粒	体部
	133	12	黄褐色土	撫で	撫で	黄茶褐色	黄茶褐色	細砂粒	体部
	134	29	5・6号墳表土	撫で	撫で	茶褐色	茶褐色	細砂粒	体部
	135	80	9号墳盛土	撫で	撫で	灰黄褐色	灰黄褐色	細砂粒	体部
	136	62	9号墳検出	撫で	撫で	灰黄褐色	灰黄褐色	細砂粒	体部
	137	99	A1Gr黄褐色土	撫で	撫で	灰黄褐色	灰黄褐色	細砂粒	体部
	138	150	1号 Tr 方形石組	荒い磨き	荒い磨き	茶褐色	茶褐色	砂粒	体部
	139	135	B2Gr黄褐色土	撫で	丁寧な撫で	灰黄褐色	灰黄褐色	砂粒	底部
	140	47	表採	二枚貝条痕	撫で	灰黄褐色	灰黄褐色	細砂粒	底部
	141	59	表採	撫で	撫で	黄茶褐色	灰黄褐色	砂粒	底部
	142	89	表採	撫で	撫で	暗黄茶褐色	暗黄茶褐色	砂粒	底部
	143	J-6	9号墳検出	撫で	撫で	灰黄色	灰黄色	砂粒	底部
	144	149	1号 Tr	撫で	撫で	茶褐色	茶褐色	砂粒	底部
	145	489	黄褐色土	幾何学文(上面)	工具撫で(下面)	灰黄色	灰黄色	細砂粒	円板状土製品

表4-1 観音山古墳群平石Ⅲ群出土石器観察表1

挿図番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重(g)	備考
第113図1	5・6号墳表土	石 鎌	腰岳系黒曜石	(3.15)	1.70	0.50	2.1	先端・脚部欠損
第113図2	7号墳墓道	石 鎌	サヌカイト	(2.90)	(1.55)	0.55	1.7	脚部欠損
第113図3	1号墳墳丘盛土	石 鎌	腰岳系黒曜石	2.70	1.65	0.30	1.3	右脚部微欠
第113図4	黄褐色土	石 鎌	腰岳系黒曜石	2.30	(1.70)	0.45	1.2	左脚部欠損
第113図5	8号墳北方表土	石 鎌	安山岩	(1.85)	(1.65)	0.45	1.2	先端・脚部欠損
第113図6	10号墳周辺	石 鎌	サヌカイト	(2.00)	(1.60)	0.35	1.1	脚部欠損
第113図7	5・6号墳黒色土	石 鎌	腰岳系黒曜石	2.50	(1.45)	1.10	0.95	右側縁・脚部欠損
第113図8	表 土	石 鎌	サヌカイト	2.20	1.50	0.35	0.7	先端微欠
第113図9	B1黄褐色土	石 鎌	サヌカイト	2.80	(1.45)	0.30	0.7	左脚部欠損
第113図10	2号墳墓道	石 鎌	姫島産黒曜石	1.60	1.35	0.30	0.3	
第113図11	黄褐色土	石 鎌	腰岳系黒曜石	1.55	1.10	0.15	0.3	右脚部微欠
第113図12	1号墳丘表土	石 鎌	サヌカイト	1.75	1.45	0.30	0.6	
第113図13	黄褐色土	石 鎌	安山岩	1.70	1.35	0.20	0.4	
第113図14	黄褐色土	石 鎌	サヌカイト	2.00	1.50	0.30	0.8	右脚部微欠
第113図15	4号墳墳丘表土	石 鎌	安山岩	2.85	1.90	0.95	4.0	
第113図16	8号墳墳丘表土	石鎌未成品	腰岳系黒曜石	(1.95)	1.60	0.35	1.3	
第113図17	B2黄褐色土	石 鎌	サヌカイト	1.70	1.20	0.30	1.1	
第113図18	表 土	石 鎌	腰岳系黒曜石	1.40	1.35	0.30	0.4	左脚部微欠
第113図19	方形石組付近	石 鎌	腰岳系黒曜石	(1.70)	(1.80)	0.30	0.7	先端・左脚・右側縁欠損
第113図20	7号墳北西集石	石 鎌	腰岳系黒曜石	1.70	1.65	0.35	0.8	
第113図21	黄褐色土	磨製石鎌	サヌカイト	1.40	1.25	0.30	0.5	
第114図22		石 鎌	腰岳系黒曜石	2.75	1.85	0.40	2.15	右側縁欠損
第114図23	表 採	剥片鎌	腰岳系黒曜石	(2.70)	2.05	0.30	2.1	
第114図24	10号墳周辺	トトロ石器	チャート	2.35	1.15	0.30	1.4	
第114図25	5号墳周溝	細石刃	腰岳系黒曜石	2.75	0.75	0.30	0.65	
第114図26		細石核	腰岳系黒曜石	(1.80)	2.05	(1.10)	2.6	上端欠損
第114図27	5号墳周溝NE区	槍先形尖頭器	ガラス質安山岩	5.30	2.05	0.75	7.4	未成品
第114図28	C2黄褐色土	鑿状石器	腰岳系黒曜石	2.90	3.45	1.20	10.0	
第114図29	9号墳周辺	搔 器	腰岳系黒曜石	4.35	1.70	0.65	5.7	
第114図30	4号墳墳丘	彫 器	腰岳系黒曜石	2.90	1.25	0.50	1.7	
第114図31	9号墳北西	石 匙	腰岳系黒曜石	2.45	2.30	0.70	4.1	
第114図32	1号墳墳丘表土	石 匙	多久産サヌカイト	3.60	(6.40)	0.80	18.2	左右端部欠損
第114図33	5号 Tr.	石 匙	多久産サヌカイト	4.20	4.25	0.95	16.4	つまみ部微欠
第114図34		石 匙	サヌカイト	3.95	4.70	0.55	5.4	
第114図35	9号墳墳丘	石 匙	金山産サヌカイト	(2.55)	(2.55)	0.60	3.8	
第114図36	9号墳南方	石 錐	腰岳系黒曜石	2.50	1.80	0.20	2.1	
第114図37	3号墳墳丘	石 錐	腰岳系黒曜石	2.75	2.30	0.70	3.6	
第114図38	3号墳墳丘表土	石 錐	腰岳系黒曜石	2.80	1.95	0.40	1.9	右側縁上半欠損
第114図39		石 錐	腰岳系黒曜石	2.20	2.70	0.50	2.7	
第115図40	1号墳墳丘表土	削 器	安山岩	6.70	5.30	1.05	22.1	
第115図41	8号墳西半盛土	削 器	サヌカイト	6.00	6.20	1.65	54.7	
第115図42		削 器	サヌカイト	6.60	2.60	0.85	11.6	
第115図43		尖頭状石器	多久産サヌカイト	11.95	6.30	2.60	172.8	
第116図44	10号墳周辺	削 器	金山産サヌカイト	7.30	7.35	1.30	43.8	
第116図45	A1黄褐色土	削 器	多久産サヌカイト	2.10	3.40	0.70	5.8	
第116図46	表 土	削 器	サヌカイト	5.55	10.05	1.25	72.9	
第116図47	4号墳1号小石室	削 器	多久産サヌカイト	5.60	7.80	2.20	107.5	右半欠損
第116図48	7号墳北西集石	削 器	サヌカイト	6.70	3.00	1.50	34.2	
第117図49	3号墳墳丘表土	石 核	多久産サヌカイト	3.90	2.80	5.85	65.2	
第117図50	3号墳墳丘SW区	幅広剥片	多久産サヌカイト	3.36	5.85	1.45	29.4	右側縁微欠
第117図51	7号墳北西集石	磨製石斧	緑泥片岩	15.50	6.30	1.30	225.7	部分磨製
第118図52	B1黄褐色土	磨製石斧	蛇紋岩	11.00	4.50	1.90	171.7	
第118図53	黄褐色土	砥 石	天草石	9.20	5.20	4.30	228.9	
第118図54		礫 器	凝灰岩	12.90	14.30	2.45		
第118図55	3号墳墳丘盛土	礫 器	安山岩	5.20	8.60	3.15	168.7	
第119図56	3号墳墓道	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	4.40	1.80	0.60	4.3	
第119図57	2号墳周辺表土	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	3.80	2.40	0.45	3.5	

長さ、幅、厚さはcm

表4-2 観音山古墳群平石Ⅲ群出土石器観察表2

挿図番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重(g)	備考
第119図58	9号墳NW区集石	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	3.90	2.10	0.65	4.9	
第119図59	黄褐色土	使用痕剥片	安山岩	4.85	6.60	0.90	20.3	
第119図60	黄褐色土	使用痕剥片	サヌカイト	4.05	2.30	0.50	4.4	
第119図61	3号墳製法表土	使用痕剥片	サヌカイト	3.60	3.85	0.95	14.9	
第119図62	4号墳墳丘盛土	縦長剥片	腰岳系黒曜石	4.40	1.95	0.50	3.9	
第119図63	11号墳周辺	剥片	針尾系黒曜石	2.85	1.65	0.50	2.4	
第119図64	1号墳石室内	石核調整剥片	針尾系黒曜石	4.30	4.90	1.50	24.7	
第119図65	12号墳主体部	縦長剥片	腰岳系黒曜石	3.60	2.00	0.35	3.1	右末端部微欠
第119図66	10号墳周辺	幅広剥片	腰岳系黒曜石	3.10	1.90	0.30	2.1	
第119図67	8号墳3号小石室	幅広剥片	腰岳系黒曜石	2.30	3.40	0.80	4.8	
第119図68	1号墳周溝底	石核調整剥片	腰岳系黒曜石	4.90	2.45	0.95	16.5	
第119図69	3号墳墓道前	石核調整剥片	腰岳系黒曜石	5.40	5.00	0.60	13.1	
第119図70	9号墳北方遺構	石核調整剥片	針尾系黒曜石	4.35	2.80	0.85	11.5	

表4-3 観音山古墳群平石Ⅲ群出土石器組成表

器種	石材	腰岳系黒曜石	針尾系黒曜石	姫島産黒曜石	椎葉川産黒曜石	象ヶ鼻産黒曜石	小国産黒曜石	多久産サヌカイト	金山産サヌカイト	サヌカイト	安山岩	ガラス質安山岩	チャルト	鉄石英	緑泥片岩	蛇紋岩	凝灰岩	天草石	合計
		石 鏃	10		1						7	3							
石 鏃 未 成 品									1		2								3
磨 製 石 鏃									1										1
剥 片 鏃	1																		1
トロトロ石器													1						1
細 石 刃	1																		1
細 石 核	1																		1
槍先形尖頭器												1							1
尖頭状石器								1											1
鑿 状 石 器	1																		1
搔 器	1	1																	2
彫 器	1																		1
石 匙	1							3		1									5
石 錐	11	1								1									13
削 器	5				1		2	1	4	1									14
楔 形 石 器	1																		1
磨 製 石 斧														1	1				2
砥 石																		1	1
礫 器										2							1		3
石 核	9							1	1										11
使用痕剥片	25							2	6	3	1		1						38
二次加工剥片	2								4	1									7
縦長剥片	5									1									6
幅広剥片	21	2		1	1		2		9	3	1								40
調整剥片	84	9		1					13	8	2	1							118
石核調整剥片	13	2					1		1	1									18
碎 片	6								2										8
合 計	199	15	1	2	2	1	11	1	51	23	7	2	1	1	1	1	1	1	320

表4-4 観音山古墳群瀬戸Ⅱ群出土石器観察表2

挿図番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
第116図71	2号墳盛土	細石刃	腰岳系黒曜石	2.90	1.30	0.30	1.2	
第116図72	試掘Tr.	有溝砥石	天草石	4.30	4.90	1.65	50.7	右半欠損

7) 弥生土器

いずれも包含層中から出土した小片。1～3は逆L字状口縁部の小片。内側へのつまみ出しが微妙に異なる。4は口頸部がく字状となり、口端部はわずかにつまみ上げられる。5は平底、6は底部が丸みをもつ残片である。1～3・5は中期前半、4・6は後期初め頃に比定できよう。

IV. おわりに

以上が観音山古墳群平石Ⅲ群の発掘調査の内容である。恐らく縄文早期の土器群に伴うであろう石組炉1基、古墳9基、古墳時代と思われる小石室5基、近隣に例を見ない古代墳墓3基などが主要な遺構で、包含層から縄文時代早期・晩期、弥生時代の土器・石器等が出土した。

九州新幹線建設に伴う那珂川町内の発掘調査の最終報告書として、以下で若干のまとめを行って終わりとしたい。

1) 平石Ⅲ群の形成

「那珂川町文化財分布地図」(1995)によれば、この平石Ⅲ群は23基の古墳からなっている。実際古墳数は調査を行わない限り確定するものではないが、今回の調査で、平地から最もよく見える位置に占地する、支群の半数近い古墳を調査したことになり、群の概要を知る手がかりとなるであろう。なお、古墳をドットで地図に落とした第2図は、先の分布地地図を元に作成したもので、工事対象地の両側に古墳が残存するような配置となっている。実際には、工事対象地の西側には少なくとも墳丘を有する古墳は目視できない。

今回調査した中で、もっとも時期的にさかのぼる古墳は、麓からもっともよく見える、かつ最も雄大な1号墳である。出土した須恵器からⅢB期、6世紀後半に比定され、近畿地方の飛鳥寺下層、陶邑Ⅱ-4段階に相当する。2～4号墳も同型式に収まる土器を出土していて、相次いで築造されたようである。3・4号墳は墳丘の切り合い関係から4号墳が後出する。2・3号墳では2号墳墓道がわざわざ直角に近く屈曲するところを見ると2号墳が3号墳に後出するように思える。しかし、屈曲する場所が3号墳周溝に合致するという点を考えれば、どうして3号墳周溝に向けて墓道を掘削したのか、なぜ1・3号墳同様に西に向けて開口しなかったのかという疑問がわいてくる。反って、3号墳の造営に当たって2号墳墓道を一部周溝として利用した、つまり2号墳が先行したと考えることも可能であろう。2号墳が1号墳と主軸を変える理由は、被葬者間の社会的立場の相違に求めておこう。土器以外の出土品が無いので両者の直接的な比較はできないが、古墳の規模から推して双方の懸隔は大きいと言わざるを得ない。西にまっすぐに墓道を有する古墳は複室構造をもつ1・3号墳だけであることは、本支群において、被葬者の社会的地位を主体部の向き、墓道の向きといった古墳の構造でも表現したと考えられる。そうすれば、1号墳に近接する2号墳が墓道先端のみを西へ向けて設定した意味も、墓道へ至る道を共有するという点も含めて、1号墳被葬者への近ささと越えられない社会的格差を表現していると捉えることもできる。墓道へ至る道に関して付言すれば、南に位置する群とは峻別されている。この南北に並ぶ古墳は、1号墳から4号墳へと南へ向かって短期間のうちに、順次築造されたものと思われる。

一方、南側の谷に沿って東西に並んだ群については、4号墳が最も古い様相を見せ、5号墳がその周溝を切るほかは、先後関係を把握できていない。ただ、9号墳は6・7号墳の墳丘を覆って築造

して、これが最も新しく築造されたことは間違いないであろう。唯一、片袖の石室構造となる古墳である。5～8号墳については材料が乏しいが、5号墳はⅣA～ⅣB期、7号墳もⅣA～ⅣB期に比定できるようで、やはり東から西に向かって短期間で墓域を拡張していったと想定できる。4号墳造営に際しての墓道が、5～9号墳まで踏襲されたものであろう。ちなみにこれらの南側の小谷に試掘溝を開けたが、伏流水の流路となっていて墓道といった痕跡は認められなかった(図版44-3)。4号墳の東にはさらなる古墳も存在するが、今回はそれらとの先後関係は言及できない。9号墳はⅣB～Ⅴ期に比定したが、Ⅴ期は7世紀中葉とされている。

今回の調査は古墳群の西端部を対象としたために、直線的な築造順序を想定したが、対象地の東にはなお10数基の古墳が存在していて、それらの築造が直線的になされたとは考えがたい。ただ、今回の調査成果としては、上記のような群形成が推測できる。

さて、9号墳にはどのような被葬者像が考えられるであろうか。上述したように、既にある古墳を覆って盛土を盛るといった秩序破壊的な行動をとり、個性的な石室構造をもつ。残存状況が良くないが、単室片袖・長い墓道といった断片的な特徴を記せば、畿内的ということができるかも知れない。7世紀中葉に本古墳群周辺で畿内と結びつく遺跡としては、平石Ⅲ群の北東1.3kmほどにある山田寺系瓦を焼造した春日市ウト口瓦窯跡が挙げられる。また、大宰府造営に関連して天神山小水城の築造も近い時期に行われていて、それはウト口瓦窯跡に隣接する。想像を逞しくすれば、それらの事業に携わった、畿内出身者の奥津城であったのであろう。

2) 観音山古墳群について

観音山古墳群の既往の調査古墳については、「Ⅱ 位置と環境」に概要と古墳一覧表を掲載している。ここでは、観音山古墳群について、若干のまとめをしておく。

古墳群の出現 古墳群中、最も古い様相を呈する一群は中原Ⅰ・同Ⅳ群中の石棺・竪穴式石室といった小石室で、須恵器編年でいうⅠ・Ⅱ期の遺物を出土している。ただ、副葬品については、中原Ⅰ-9号墳で腕飾りの銅釦・鉄釦、大刀2が出土するほかは、刀子が出土するに過ぎず、集団の性格を推測させるものはない。立地を見るならば、観音山山塊北麓の、最先端部に中原Ⅰ群が占地、その東の奥まった部分に同Ⅳ群が位置する。この立地はその北に広がる平地、生活域を意識したものであろう。観音山古墳群中で唯一の前方後円墳であるⅠ-1号墳もここに位置する。

観音山古墳群の西側に近接する丘陵上にはその北側から北西側にかけてカクチガ浦古墳群等、竪穴系の主体部をもつ古式古墳や初期の横穴系主体部を有する古墳群が位置する。カクチガ浦古墳群等の造墓が停止する時期と、観音山北麓に増墓が開始する時期はほぼ須恵器Ⅰ型式で併行する。カクチガ浦古墳群の丘陵では地形によるものか造墓が南-丘陵深部へ浸透していない。近接した地域であり、カクチガ浦古墳群等がより早い時期から造墓が継続していることから見て、この造墓集団が観音山北麓へ墓域を移動させたものかと思われる。

古墳群の拡散 中原Ⅳ群では標高の低い北から高い南へ向かって、時期の下る古墳が展開して行き、古墳の増加、言い換えれば墓域の拡大とともに生活域から離れていく様相が窺える。中原Ⅲ群・平石Ⅰ・同Ⅱ群への拡散は中原Ⅰ・Ⅳ群の収束段階となるⅢ期である。中原Ⅲ群に至ってはほとんどがⅣ期の築造になり、中原Ⅰ・Ⅳ群の造墓集団が何らかの理由で絶滅したのでなければ、墓域の拡散としか理解できない現象である。主として地形的理由が想定されるが、中原Ⅰ・Ⅳ群の南への拡散が行き詰まった結果、西へ展開して中原Ⅲ・平石Ⅰ～Ⅲ群などの成立に繋がったものと考えら

れる。

横穴式石室墳を主とするこの後期古墳群は、ほとんどすべてが盗掘を受けて副葬品のすべてを知ることにはできないが、残された残片からおおよそその性格付けは推測可能である。古墳一覧表からすぐに判ることは、金銅製品の少なさである。耳環は普遍的といって良い遺物であるが、被葬者の社会的地位を示すような金銅製の装身具・馬具・刀装具に関して、わずかに中原Ⅲ-12号墳から銅製鞍尻・銀貼足金具が出土するのみで、中原Ⅱ-1号墳の青銅馬鈴を同等の遺物として加えても、150基近く調査した中でわずかに2古墳に過ぎない。馬具を出土した古墳についても鎖や鉸具、鉾留金具まで含めても10数基に過ぎず、大刀・刀装具も少ない。こうした出土品からは、被葬者集団の社会的な地位は決して高いものではなかったことが窺える。また、内部に政治権力に直結した、傑出した指導者の存在も想定することが困難である。わずかに個性を示すのは鉄滓・鍛冶具であるが、これも群西端部の10基に満たない数で、小規模な小鍛冶が行われていたことを推測させるに過ぎない。

もう一つの造墓集団 以上の中原・平石支群と呼ばれる古墳群が多分に北の平地を意識して造営されたとすると、観音山山塊の西麓、梶原川沿いの南側に位置する瀬戸支群はもはや北を意識したものではなく、南西の小盆地を意識して築かれたものといえる。この小盆地はその地形故、四周に古墳を造営する適地は十分にあり、盆地西の平蔵遺跡群中でも複数の古墳が調査されている。それでもなお盆地東の観音山山塊に古墳が集中することは、この山塊に古墳を築造することによって、北麓の造墓集団との紐帯を表現・確認したと考えることができよう。

古代の造墓 1号墳の須恵器高杯や短頸壺、9号墳の土師器椀などは8世紀代の遺物であり、その段階まで墓地として、あるいは祖先祭祀が続いていた。中原Ⅲ群でも同様な出土品が見られ、根強いものがあつたようである。次いで、8世紀後半～9世紀前半に再び造墓が開始されている。それも往々にして見られる追葬や石室の再利用といった行為ではなく、全く新たな墳墓の造営である。主体部は土壙墓・竪穴式石室で、周溝を備える。調査を行った墳墓は3基であるが、恐らくさらに広がりをもつのであろう。このような墳墓は観音山古墳群中はもちろん、広域に見渡しても類例を求めることができなかつた。一方、調査区南端で検出した集石中から出土した土師器甕も3基の墳墓と近い時期に比定できる。ここでは葬地に使用された痕跡を得てないが、方形を意識したような石組も一部に見られることから、葬地であつた可能性は高いと思われる。その場合には、3基の墳墓と集石との間には明らかな格差を認めることができる。これらの墳墓と集石は、20数基の後期古墳に隣接して造営されていて、古墳群を築造した集団と血縁・地縁的に密接な繋がりがあつたものと推測される。

IV. 補 遺

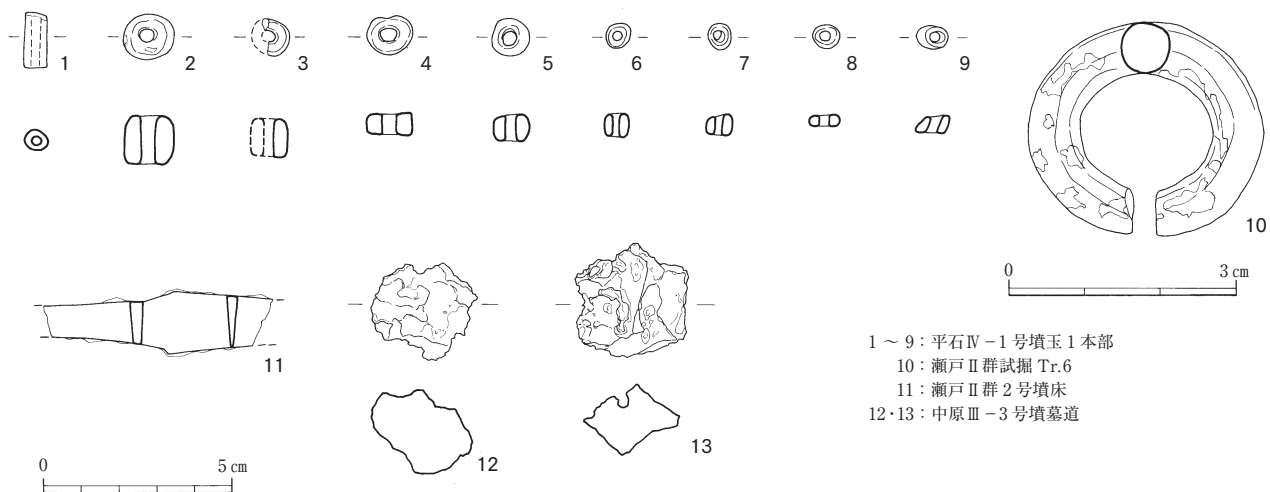
本書で那珂川町内における九州新幹線関係の埋蔵文化財報告書は終了する。既に報告済みの遺跡の中で、いくつか報告漏れの遺物に気付いたので、ここで紹介しておく。なお、石器等については実測図を第116図(136頁)、観察表を表4-4(145頁)に既に掲載している。

観音山古墳群中原Ⅲ-37号墳墓道出土鉄滓(図版61、第120図12・13) いずれも重量感があり、13は磁石に反応する。

観音山古墳群平石Ⅴ-3号墳出土玉類(図版61、第120図1~9) 主体部埋土を水洗して若干の玉類を採取したものである。1は灰味帯びる青緑色の碧玉製管玉で、長さ7mm、直径3mmの小型品。2~9はガラス玉。2は薄緑色、3~5は紺色、6~9は水色に近く発色する。

観音山古墳群瀬戸Ⅱ群Tr.6出土耳環(図版61、第120図10) 金銅製耳環で、金はまったく残らず、部分的に緑青が吹く。緑青のない部分は灰味帯びる青紫とでもいうような色となり、地肌は荒れていない。重量感がある。Tr.6は2号墳主体部を確認した試掘溝である。

観音山古墳群瀬戸Ⅱ-2号墳石室床面出土鉄製刀子(図版61、第120図11) 刀子関の部分の残片。



第120図 追加報告の遺物実測図(1/1、1/2)

圖 版



観音山古墳群平石Ⅲ群周辺航空写真（上が北）



1. 調査前全景
(南上空から)



2. 本線部分古墳群全景
(上空から)



1. 本線部分南半古墳群
(上空から)



2. 古代の墳墓群全景
(東上空から)



1. 1号墳全景
(南西上空から)



2. 1号墳現況
(西から)



3. 1号墳東畦北壁土層
(北東から)



1. 1号墳南畦西壁土層
(南西から)



2. 1号墳北畦西壁土層
(北西から)



3. 1号墳墳丘除去後主体部
(西から)



1. 1号墳列石東半
(東から)



2. 1号墳列石北半
(北から)



3. 1号墳列石南半
(南東から)



1. 1号墳墓道堆積状況
(北西から)



2. 1号墳墓道周辺
土器出土状況
(西から)



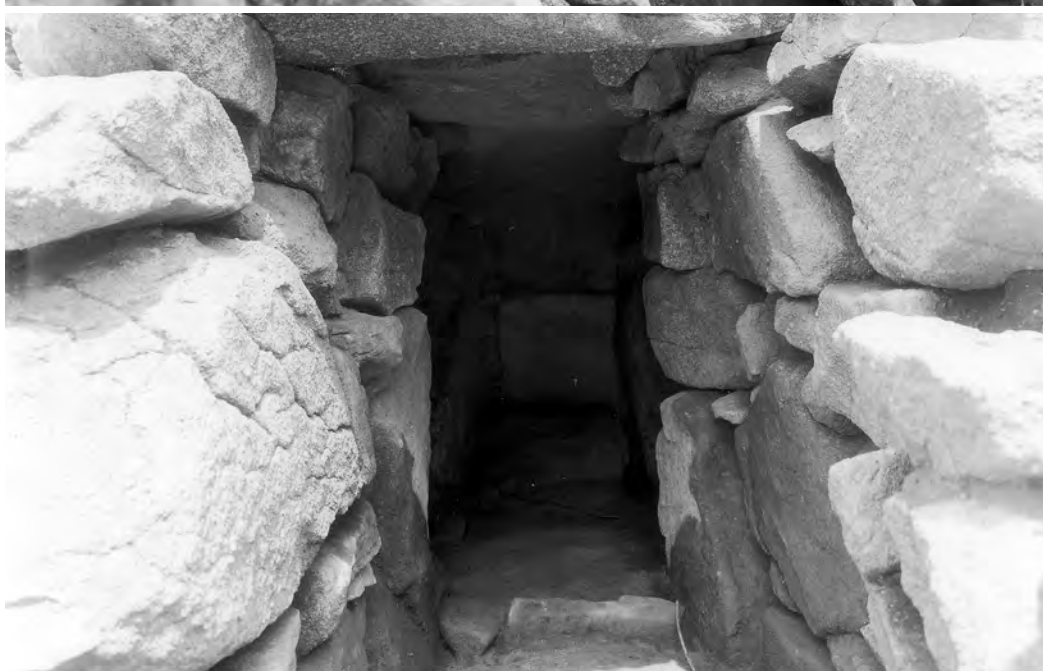
3. 1号墳閉塞状況と
墓道土器出土状況
(西から)



1. 1号墳墓道土器出土状況
(南西から)



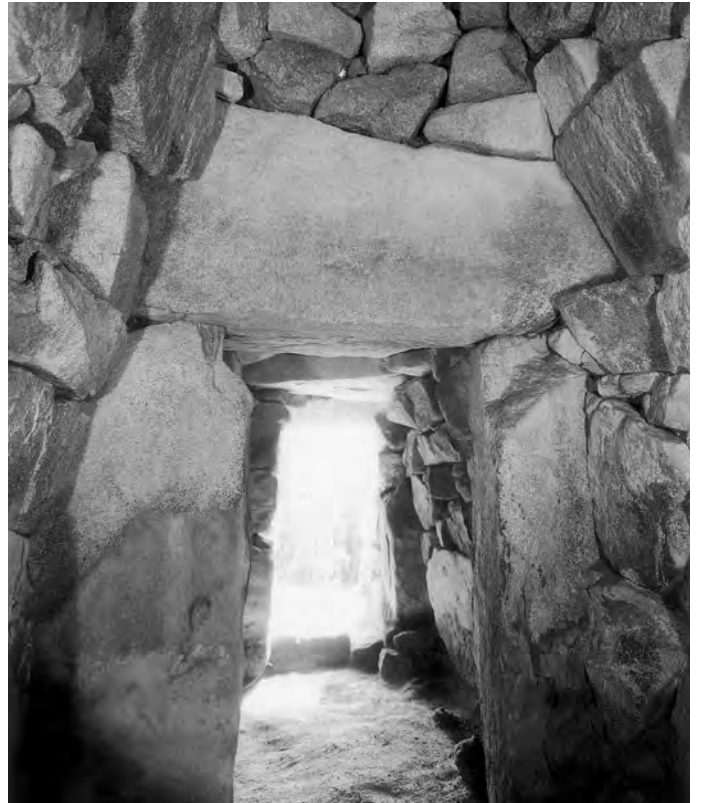
2. 1号墳入口南土器
出土状況 (北西から)



3. 1号墳羨道部
(西から)



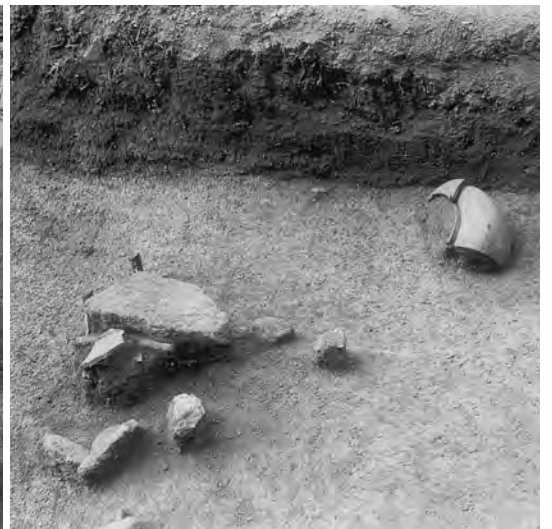
1. 1号墳主体部奥壁
(西から)



2. 1号墳主体部西半
(東から)



3. 1号墳南西墳裾
土器出土状況
(南西から)



4. 1号墳周溝南辺
土器出土状況
(東から)



1. 2号墳現況
(南から)



2. 2号墳閉塞状況
(南から)



3. 2号墳主体部全景
(南から)



1. 2号墳列石
(北西から)



2. 2号墳北畦西壁土層
(西から)



3. 2号墳東畦南壁土層
(南から)



1. 3号墳現況
(西から)



2. 3号墳東畦北壁土層
(北東から)



3. 3号墳南トレンチ土層
(南西から)



1. 3号墳閉塞と墓道土器出土状況
(西から)



2. 3号墳墓道土器出土状況
(南西から)



3. 3号墳前室土器
出土状況
(西から)

4. 3号墳前室鉄釘
出土状況
(東から)





1. 3号墳主体部
(西から)



2. 3号墳主体部後室
(西から)



3. 3号墳南西墳裾土器出土状況
(南西から)



1. 4・5号墳現況
(南西から)



2. 4号墳西トレンチ土層
(西から)



3. 4号墳北トレンチ土層
(北から)



1. 4号墳閉塞状況
(南西から)



2. 4号墳墓道西壁
(南から)



3. 4号墳主体部
(南西から)



1. 4・5号墳周溝
土器出土状況と
1号小石室の関係
(北から)



2. 4号墳周溝
西辺土器出土状況
(南から)



3. 4号墳周溝
北辺土器出土状況
(北西から)



1. 5号墳現況
(南から)



2. 5号墳北トレンチ土層
(北西から)



3. 5号墳東トレンチ土層
(南東から)

1. 5号墳墓道礫群
検出状況
(北から)



2. 同 (南から)



3. 5号墳墓道前端付近
土器出土状況
(南から)





1. 5号墳墓道土器出土状況
(南東から)



2. 5号墳閉塞と墓道
(南から)



3. 5号墳墓道完掘後
(南から)



1. 5号墳主体部
(南から)



2. 5号墳周溝北東辺
土器出土状態
(東から)



3. 5号墳墳丘
南東部祭祀土器
(北から)



1. 6号墳主体部検出状況
(東から)



2. 6号墳完掘後全景
(南東から)



3. 6号墳玄室
(北から)



1. 7号墳現況
(南西から)



2. 7号墳北トレンチ土層
(南東から)



3. 7号墳東トレンチ土層
(南東から)



4. 7号墳西トレンチ土層
(南西から)



1. 7号墳全景
(南西から)



2. 7号墳閉塞状況
(南西から)



3. 7号墳墓道土器出土状況
(南東から)



1. 7号墳主体部全景
(南西から)



2. 7号墳主体部全景
(南から)



3. 7号墳主体部前半部
(北東から)



1. 8号墳現況
(南東から)



2. 8号墳西畦南壁土層
(南西から)



3. 8号墳閉塞状況
(南西から)



1. 8号墳閉塞除去後
(南西から)



2. 8号墳主体部完掘後
(南西から)



3. 8号墳主体部西壁
(南東から)



1. 9号墳検出状況
(北西から)



2. 9号墳墓道検出状況
(南東から)



3. 9号墳北トレンチ土層
(北東から)



1.9号墳東トレンチ土層
(南西から)



2.9号墳西トレンチ土層
(西から)



3.9号墳墓道検出状況
(南から)



1. 9号墳完掘後
(南から)



2. 9号墳完掘後
(北から)



3. 9号墳閉塞状況
(南から)

1. 9号墳閉塞・
土器出土状況1
(北東から)



2. 9号墳閉塞・
土器出土状況2
(東から)



3. 9号墳閉塞・
土器出土状況3
(西から)





1. 9号墳墓道
土器出土状況1
(南から)



2. 9号墳墓道
土器出土状況2
(北東から)



3. 9号墳墓道
土器出土状況3
(北東から)



1. 1号小石室
(北から)



2. 1号小石室
(南から)



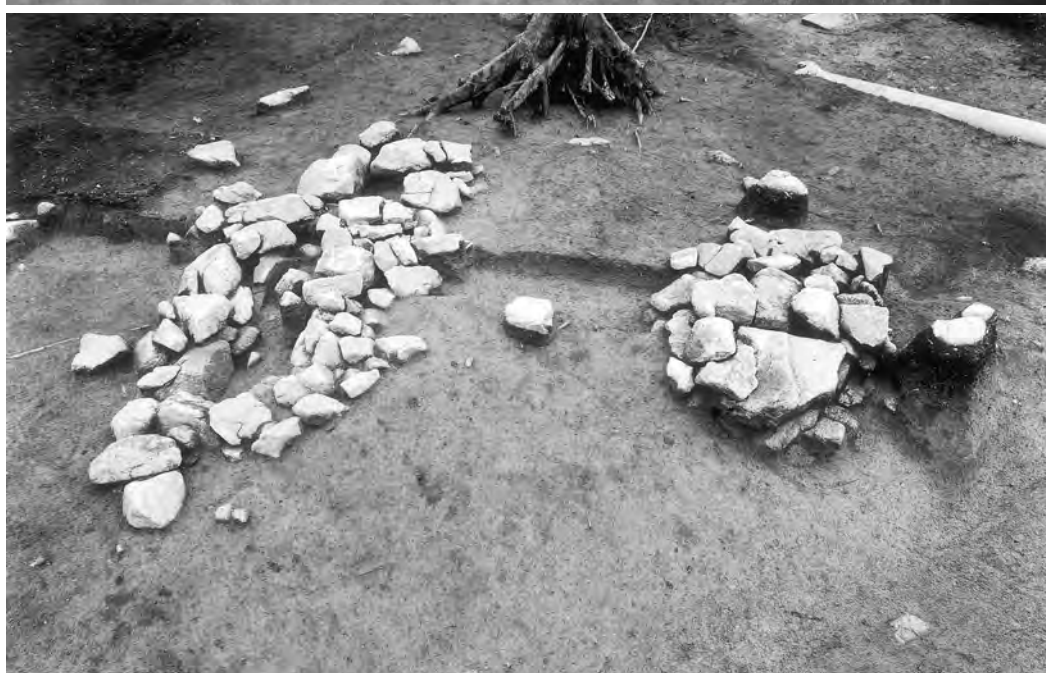
3. 1号小石室閉塞石除去後
(南から)



1. 2号小石室検出状況
(南西から)



2. 2号小石室完掘後
(西から)



3. 3・4号小石室検出状況
(南東から)



1. 3・4号小石室完掘後
(南東から)



2. 3号小石室検出状況
(北東から)



3. 3号小石室完掘後
(南東から)



1. 4号小石室検出状況
(南西から)



2. 4号小石室完掘後
(南東から)



3. 4号小石室完掘後
(南西から)



1. 5号小石室閉塞状況
(南から)



2. 5号小石室閉塞状況
(北から)



3. 5号小石室完掘後
(南東から)



1. 1号墳墓全景
(西から)



2. 1号墳墓全景
(東から)



3. 1号墳墓主体部
(南西から)

1. 1号墳墓周溝東辺
土器出土状態
(南東から)



2. 2号墳墓全景
(南西から)



3. 2号墳墓主体部
(南西から)





1. 3号墳墓全景
(北から)



2. 3号墳墓検出状況
(南から)



3. 3号墳墓内部の磔検出状況
(南から)



1. 3号墳墓内部
土器・礫検出状況
(南から)



2. 3号墳墓完掘後
(北から)



1. 縄文土器包含層発掘後
(東から)



2. 1号集石炉検出状況
(北から)



3. 1号集石炉完掘後
(北から)



1. 1号土坑土器等出土状況
(南西から)



2. 1号土坑土器等出土状況
(北西から)



3. 1号土坑完掘後
(南西から)



1. 7号墳北小溝
土器出土状況
(南東から)



2. 7号墳西小溝
土器出土状況
(北西から)



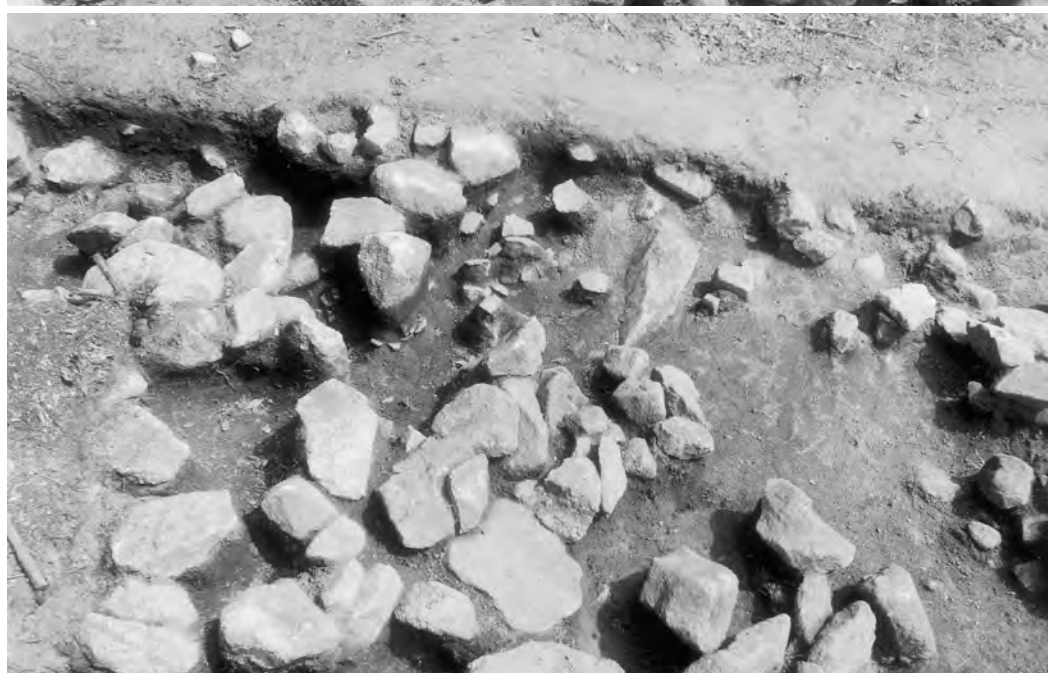
3. 4号墳南谷部トレンチ
(西から)



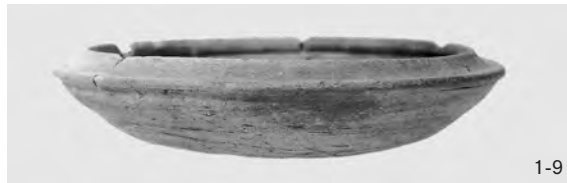
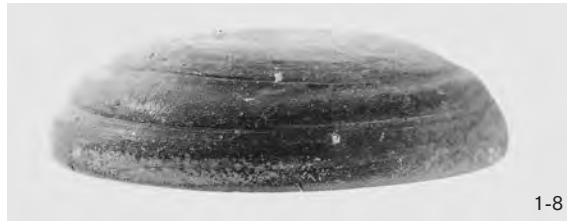
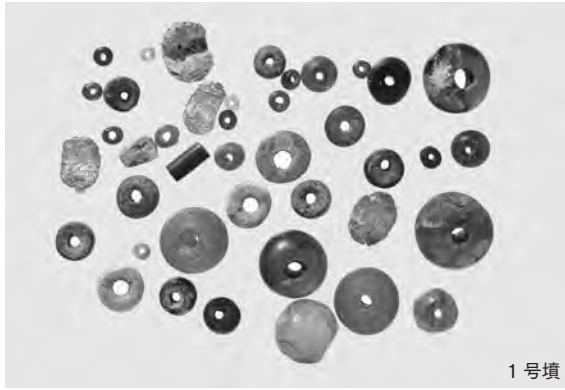
1. 調査区南端集石全景
(東から)



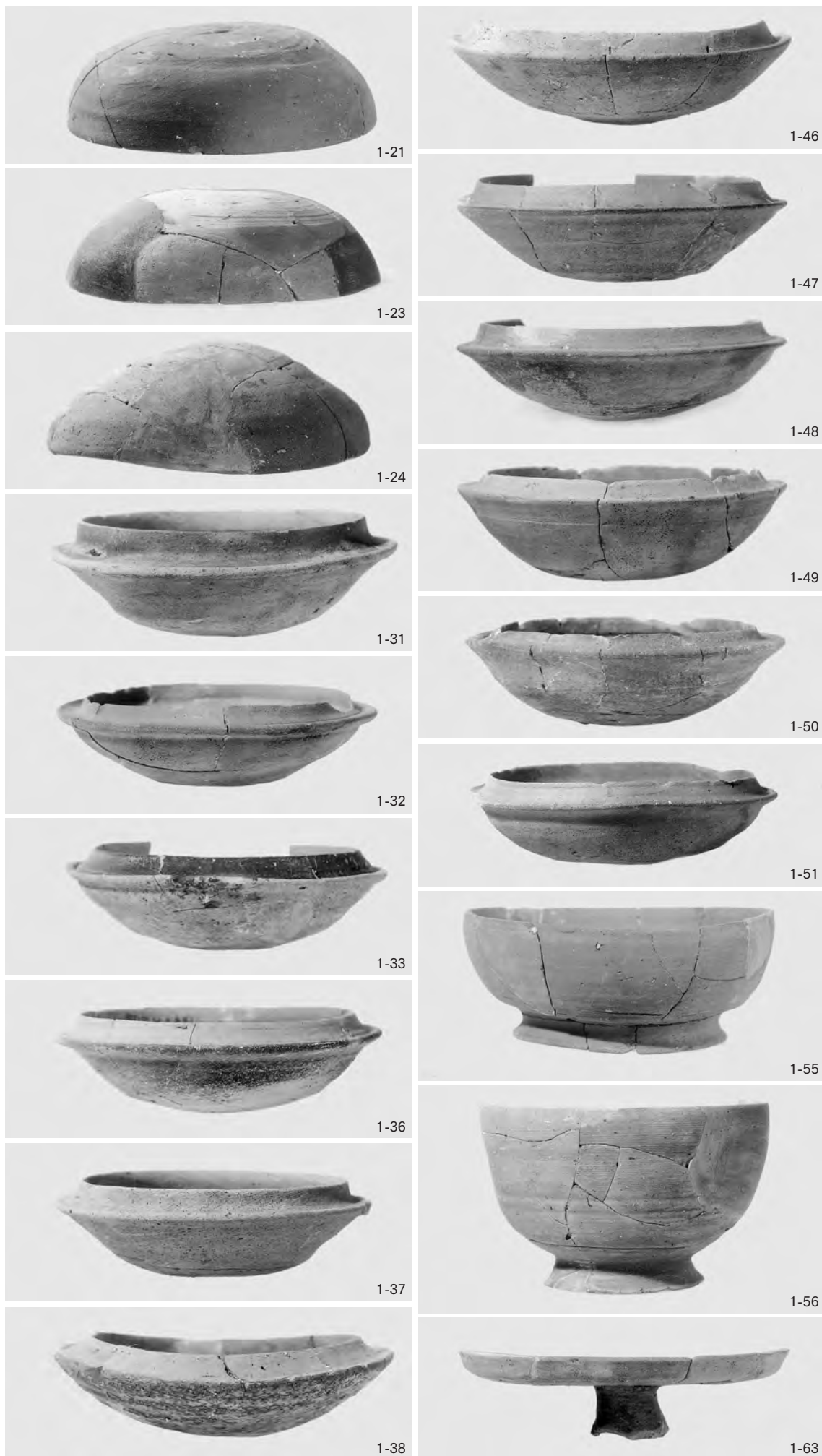
2. 調査区南端集石東半
(西から)



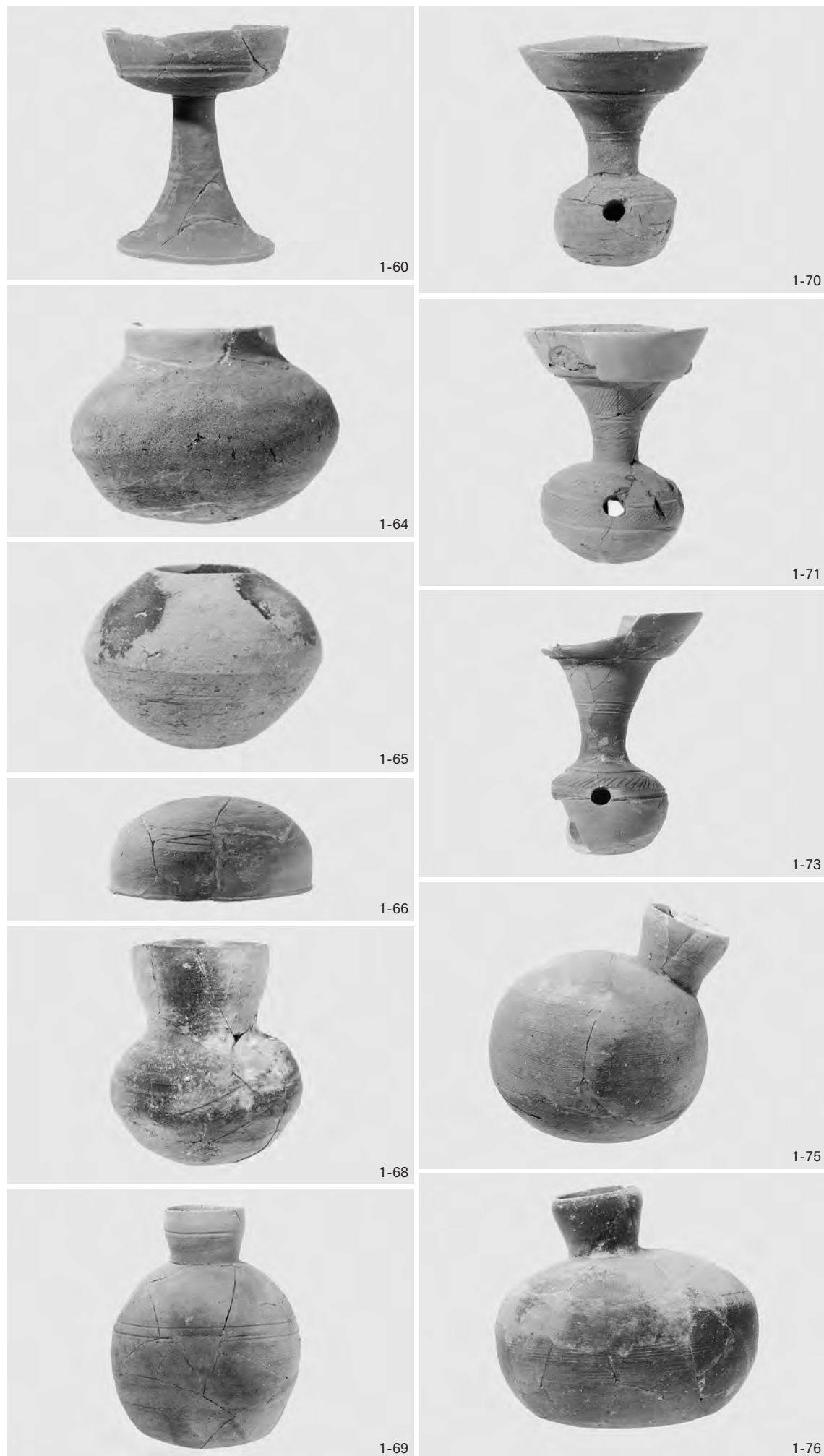
3. 集石南東部土器出土状況
(北西から)



出土遺物 1 (1号墳出土遺物)



出土遺物 2 (1 号墳出土遺物)



出土遺物 3 (1 号墳出土遺物)



1-77



1-98



1-83



1-104



1-84



1-106



1-91



1-107



1-92



1-110



1-94



1-113

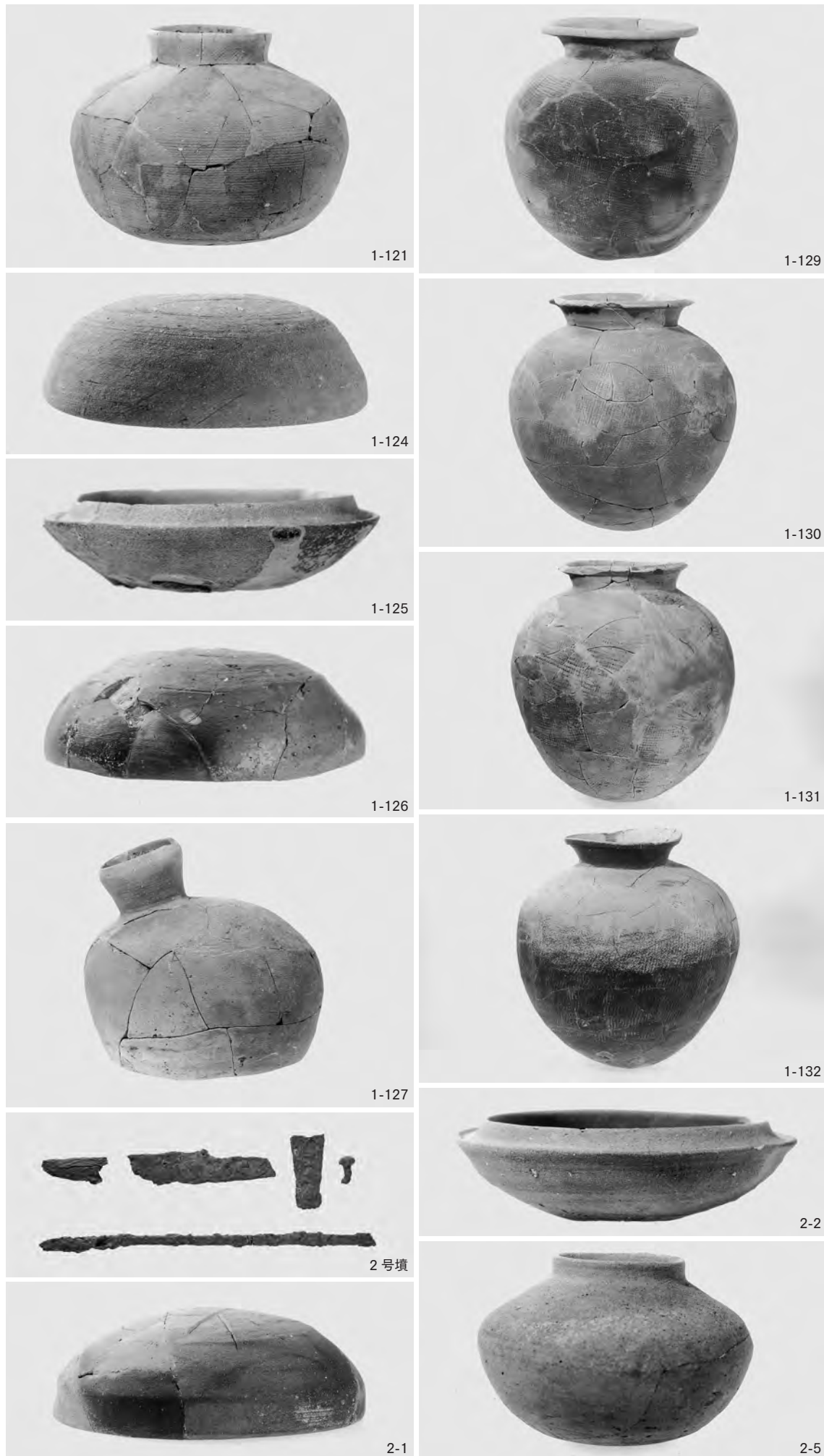


1-96



1-120

出土遺物 4 (1号墳出土遺物)



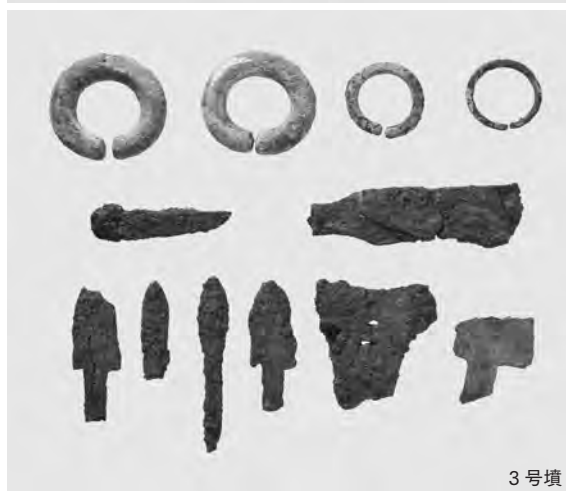
出土遺物 5 (1・2号墳出土遺物)



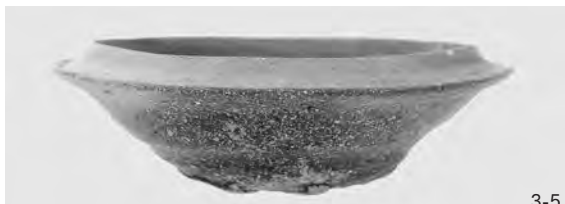
2-3



3-4



3号墳



3-5



3-6



3号墳



3-7



3号墳



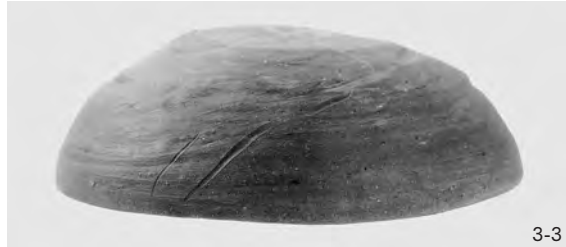
3-8



3-2



3-9



3-3

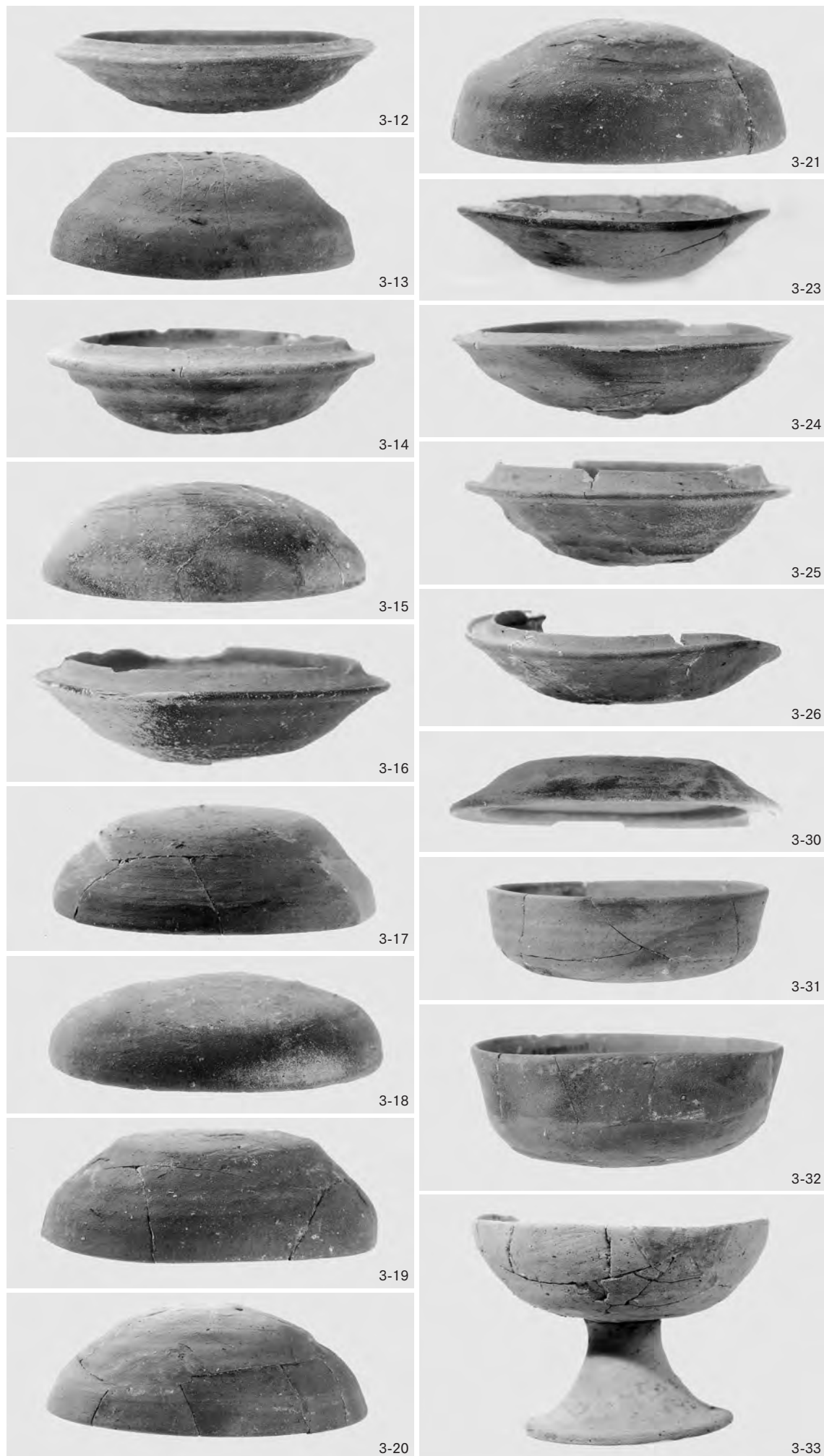


3-10



3-11

出土遺物 6 (2・3号墳出土遺物)



出土遺物 7 (3号墳出土遺物)



3-34



3-42



3-43



3-35



3-46



3-36



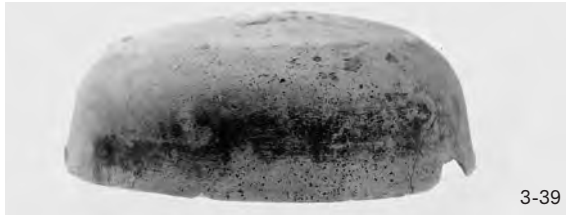
3-65



3-38



3-66



3-39



4~9号墳



3-40



3-41



4-2

出土遺物 8 (3・4号墳出土遺物)



4-9



4-13



4-11



4-13



4-12



4-14



5-5



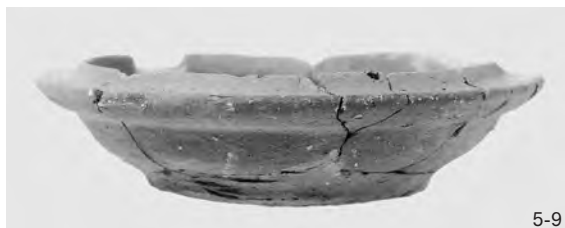
4-12



5-8



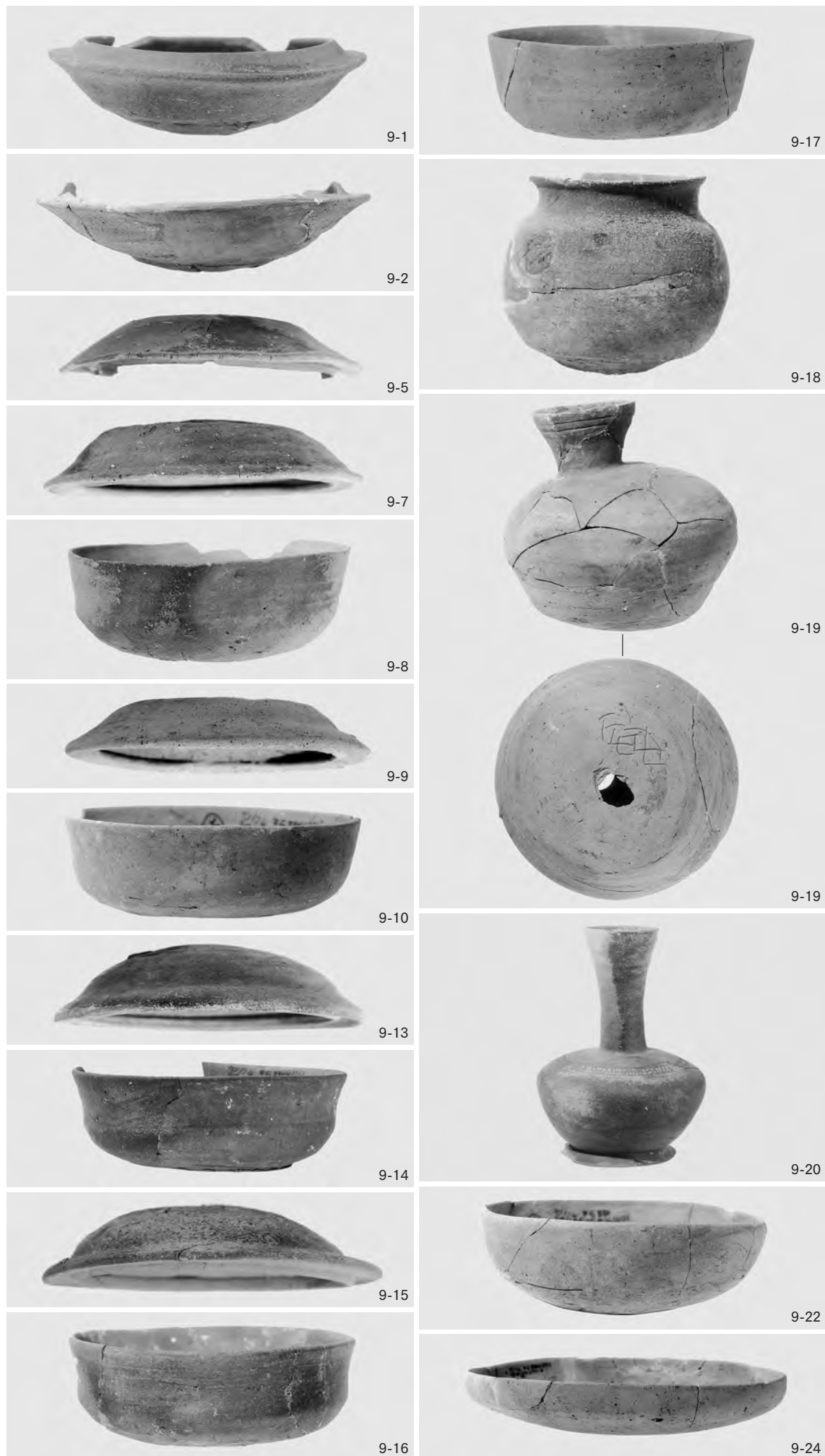
4-12



5-9



出土遺物 10 (5 ~ 7 号墳出土遺物)



出土遺物 11 (9号墳出土遺物)



9-27



9-28



小石室 -3



3号墳墓



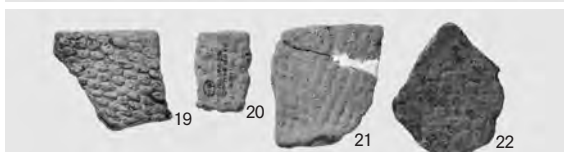
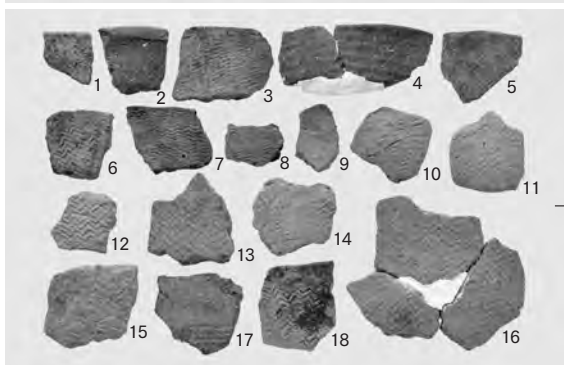
7号墳西小溝 -1



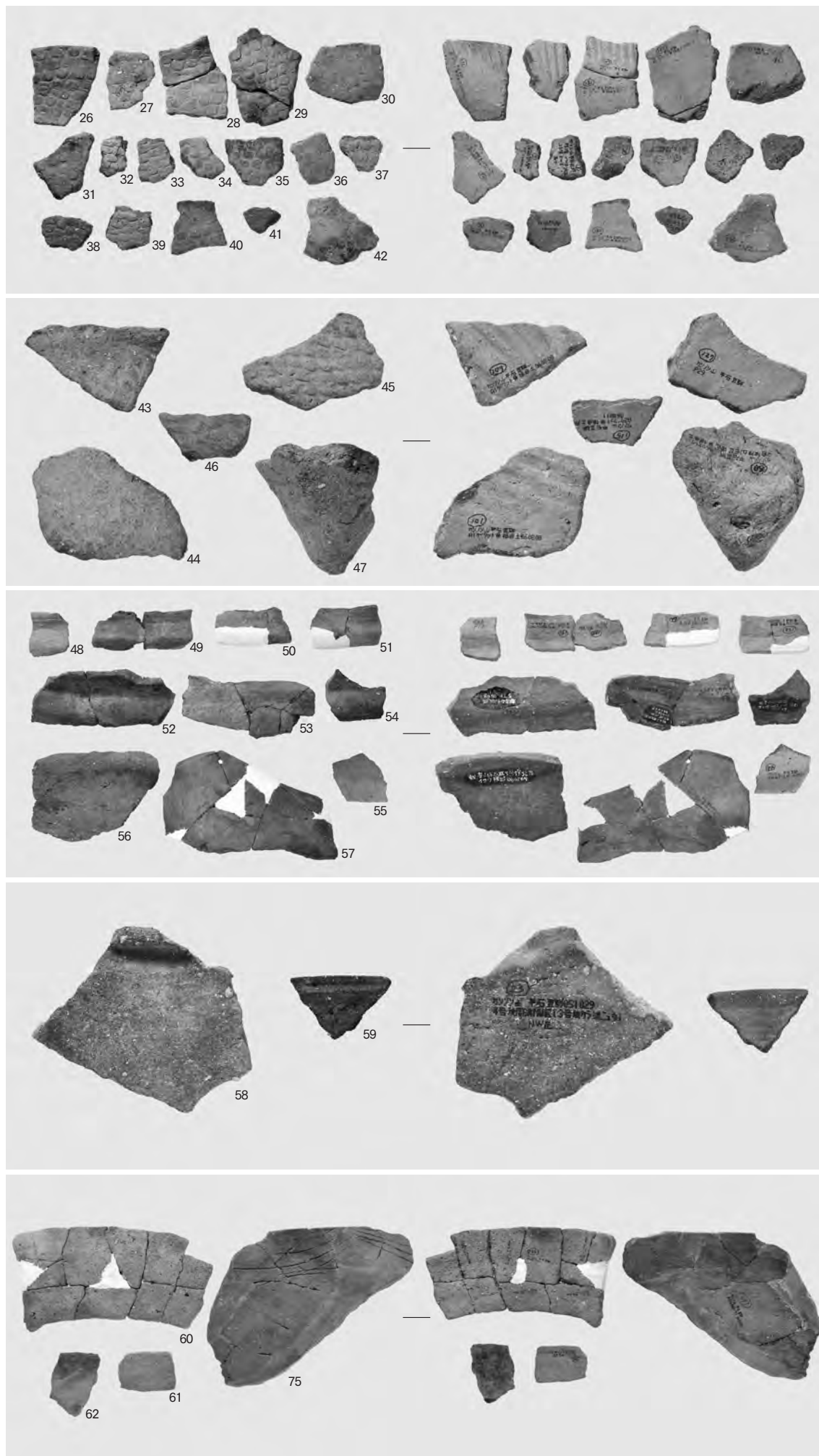
7号墳北小溝



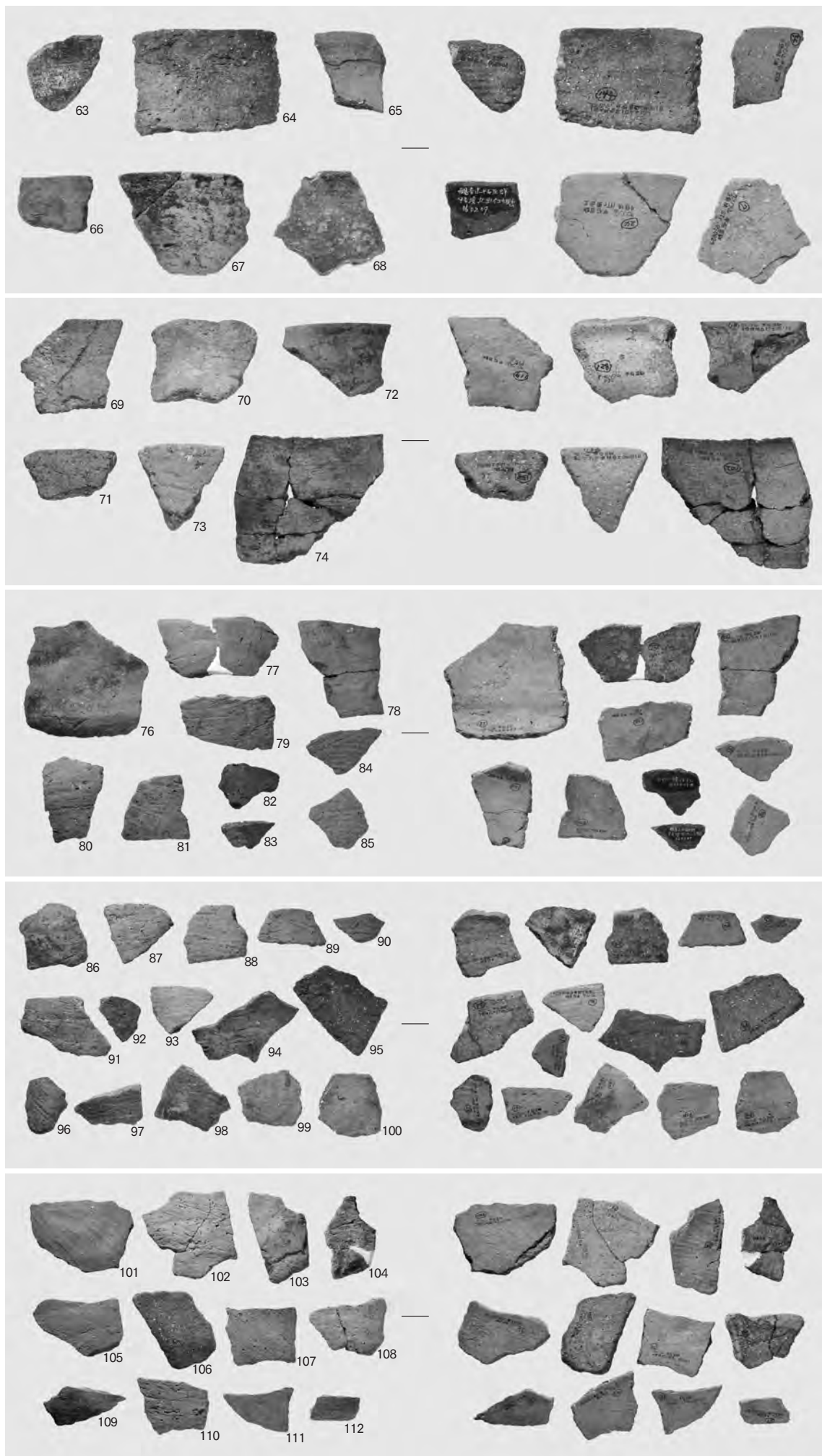
7号墳西小溝 -2

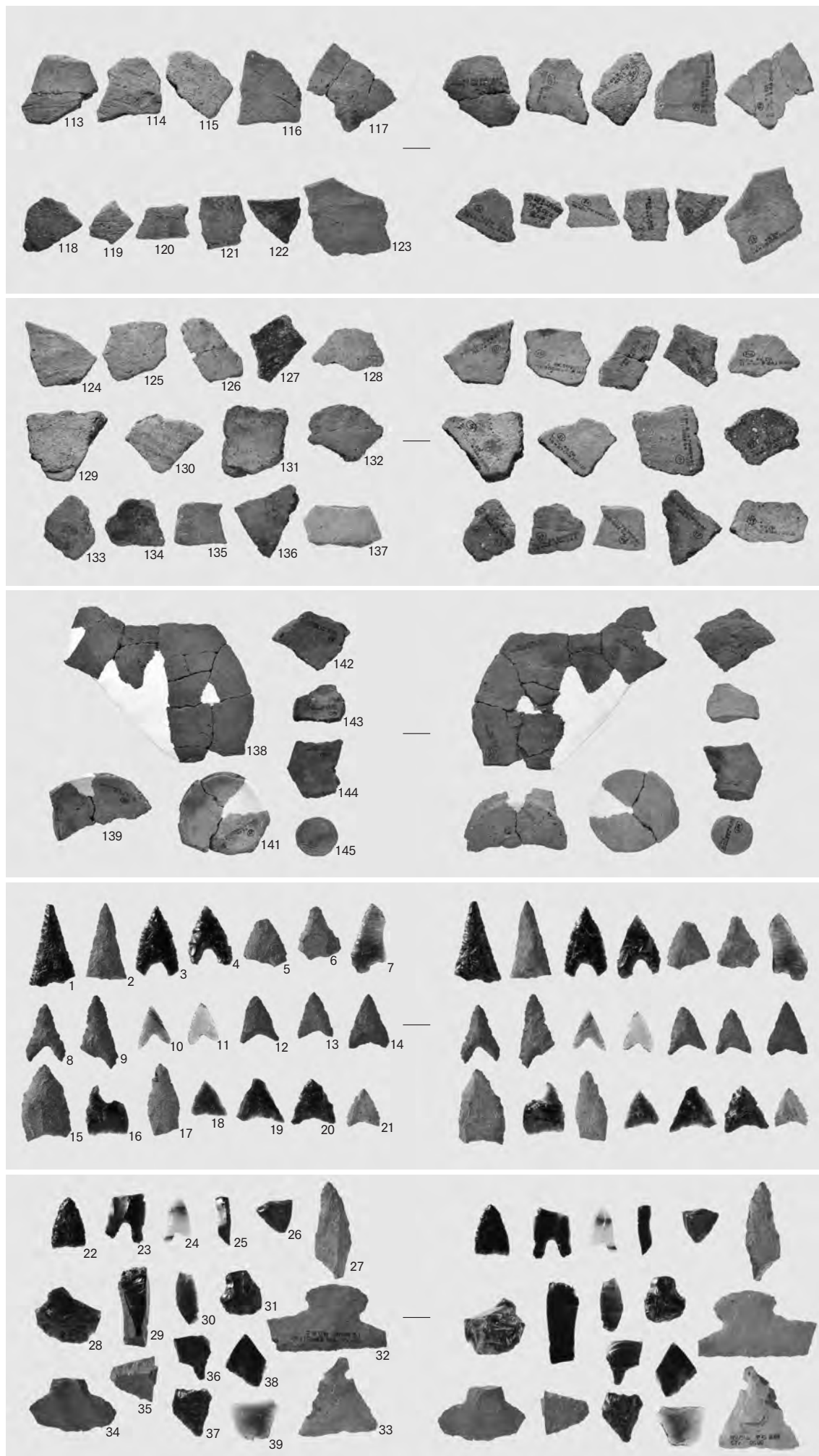


出土遺物 12 (9号墳ほか出土遺物・縄文土器)

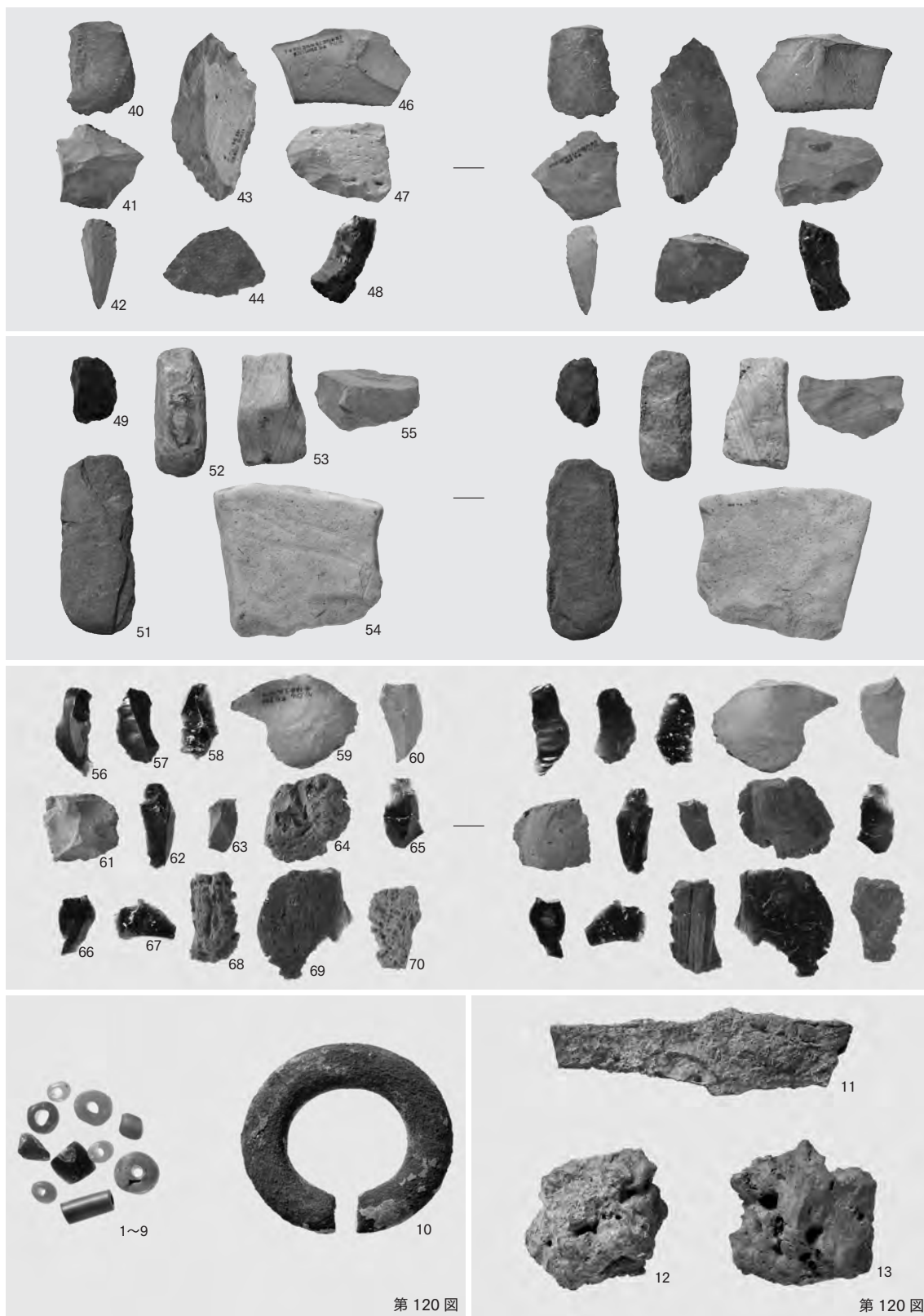


出土遺物 13 (縄文土器)





出土遺物 15 (縄文土器・石器)



報告書抄録

ふりがな	かんのんやまこふんぐんひらいしさんぐん							
書名	観音山古墳群平石Ⅲ群							
副書名								
巻次								
シリーズ名	九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第15集							
編著者名	飛野博文 荻幸二 海出淳平							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園7-7 TEL:092-651-1111							
発行年月日	西暦2010年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かんのんやまこふんぐん 観音山古墳群 ひらいしさんぐん 平石Ⅲ群	ふくおかけんちくしぐん 福岡県筑紫郡 なかがわまちおおあざまつのき 那珂川町大字松木 656-7ほか	305	0125	33° 30' 11"	130° 26' 26"	20050628 ~20060324 20060420 ~20060912	2,700m ²	九州新幹線建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
観音山古墳群 平石Ⅲ群	古墳 墳墓 包含層	古墳 奈良~平安 縄文・弥生	古墳9基、小石室5基 石室墓2、土壙墓1 石組炉1		鉄製品・土器 土器 早期・晩期土器、石器等		周溝を伴う	

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 21	登録番号 5

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第15集

観音山古墳群平石Ⅲ群

平成22年3月31日

発行 福岡県教員委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 有限会社青雲印刷
〒803-0841 北九州市小倉北区清水1丁目8-7
TEL 093-561-3128 FAX 093-592-2873